SSN　0918-1334

考古論叢　神奈河

第9集

岡本　勇先生追悼記念号

岡本　勇君を偲ぶ……江坂　輝彌

【岡本　勇先生の事績】

年譜

著作目録

講演目録

発掘調査歴

【岡本　勇先生再録論文】

労働用具……岡本　勇

縄文時代の集落をめぐって……岡本　勇

埋　　葬……岡本　勇

岡本先生の縄文時代研究について……武井　則道

【論　文】

条痕文土器群後半期の諸段階……野内　秀明
—茅山下層式・茅山上層式土器とその周辺の土器群—

東日本における磨製石剣の意義……中村　勉
—三浦市赤坂遺跡出土の例を中心として—

横浜考古学事始……岡本　孝之
—100年前の歩けオロジスト・小林與三郎のこと—

平成13年(2001)2月

神奈川県考古学会

誌名中の「神奈河」は，鶴岡八幡宮文書のうち，北条時宗が文永3年（1266）5月2日に武蔵目代殿あて発給した下文中の「神奈河」に拠るもので，これが地名神奈川の初出文書である。

考古論叢 神奈河
第9集
岡本　勇先生追悼記念号

平成13年2月

＊目　　次

岡本　勇君を偲ぶ …… 江坂　輝彌　3

【岡本　勇先生の事績】
年譜 …… 5
著作目録 …… 7
講演目録 …… 23
発掘調査歴 …… 25

【岡本　勇先生再録論文】
労働用具 …… 岡本　勇　39
縄文時代の集落をめぐって …… 岡本　勇　53
埋　　葬 …… 岡本　勇　65
岡本先生の縄文時代研究について …… 武井　則道　78

【論　文】
条痕文土器群後半期の諸段階 …… 野内　秀明　79
―茅山下層式・茅山上層式土器とその周辺の土器群―
東日本における磨製石剣の意義 …… 中村　勉　109
―三浦市赤坂遺跡出土の例を中心として―
横浜考古学事始 …… 岡本　孝之　139
―100年前の歩けオロジスト・小林與三郎のこと―

神奈川県考古学会

横須賀市吉井貝塚にて
1961年11月撮影

岡本　勇君を偲ぶ

江　坂　輝　彌

私が岡本君を知ったのは私が上海から復員，慶應義塾大学に復学してからのことである。

岡本君は横須賀の高校を卒業，明治大学専門部歴史科（夜間部）に入学されてからのことであるが，それから約半世紀の歳月が流れている。

岡本君は横須賀市若松町平坂貝塚，青森県下北郡東通村野牛，吹切沢遺跡，横須賀市夏島貝塚，横浜市南区六ツ川町大丸遺跡，青森県三沢市野口貝塚など，縄文文化早期の遺跡を多く手がけられ，いつも層位的観察などには細心の注意をはらい，平坂，夏島，大丸遺跡の調査では従来の想定で，稲荷台―拝島―井草の編年が逆で井草が最も古く，ついで夏島（拝島）―稲荷台の順になることを喝破したのであった。

また，早期から前期への推移については，1966年10月刊の，『物質文化』8号に「尖底土器の終焉」と題する興味ある論考を発表している。また縄文文化前期以降，弥生，古墳，歴史時代古窯址に至るまでの論考もあり，また立教大学博物館講座で行なった青森，新潟，長野，三重，鳥取県下など調査報告を分担執筆されたものもある。

また立教大学史学会発行の『史苑』27巻3号に発表した「弥生時代石製工具の意義」と題する横浜市磯子区三殿台遺跡発見の弥生時代中期の石器に対する小篇も彼らしい考証を加えた論考である。

岡本君が最も注意をそそぎ50有余年，研鑽を深めたのは旧石器時代終末から縄文文化草創期から早期まで，更新世末から完新世初頭の人類文化の研究であったのではなかろうか。彼が後10年，健康で，研究を継続できたら更に私達を驚愕させるような論考ができたのではなかろうか。

彼を追憶するまま，本文を書き綴った。

岡本君の心からの冥福を祈り擱筆する。

岡本　勇先生年譜

1930（昭和５）年３月３日	神奈川県横須賀市坂本町に生まれる
1942（昭和17）年３月	横須賀市立衣笠小学校卒業
1942（昭和17）年４月	神奈川県立横須賀中学校（旧制）入学
1946（昭和21）年３月	神奈川県立横須賀中学校（旧制）卒業
1946（昭和21）年４月	明治大学専門部文科地理歴史科（旧制）入学
1949（昭和24）年３月	明治大学専門部文科地理歴史科（旧制）卒業
1949（昭和24）年４月	明治大学文学部史学地理学科３年編入学
1952（昭和27）年３月	明治大学文学部史学地理学科卒業（文学士）
1952（昭和27）年４月	明治大学大学院文学研究科考古学専攻修士課程入学
1952（昭和27）年10月	明治大学文学部考古学研究室，同考古学陳列館嘱託（～1958年３月）
1954（昭和29）年３月	明治大学大学院文学研究科考古学専攻修士課程修了（文学修士）
1954（昭和29）年９月	横浜市史編纂の委託研究に従事（～1958年３月）
1958（昭和33）年４月	立教大学博物館学講座嘱託
1961（昭和36）年４月	立教大学文学部非常勤講師（考古学，博物館実習担当）
1964（昭和39）年１月	相模原市史執筆委員（～1971年９月）
1964（昭和39）年４月	立教大学文学部専任講師（考古学，日本文化史，博物館学，博物館実習担当）
1964（昭和39）年６月	横須賀市文化財専門審議会会員（～1966年５月）
1965（昭和40）年４月	横浜市立大学文理学部非常勤講師（日本考古学担当）（～1996年９月）
1965（昭和40）年12月	静岡大学教養部非常勤講師（文化人類学担当，集中講義）
1966（昭和41）年４月	立教大学文学部（学校・社会教育講座）助教授（考古学，博物館学，博物館実習担当）（～1974年３月）
1966（昭和41）年４月	神奈川県文化財審議会委員（～1995年）
1966（昭和41）年９月	東京都立大学文学部非常勤講師（考古学担当）（～1969年３月）
1970（昭和45）年10月	横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団団長（～1989年12月）
1971（昭和46）年４月	岡山大学法文学部非常勤講師（考古学特講担当，集中講義）（～1972年３月）
1972（昭和47）年４月	青山学院大学文学部非常勤講師（考古学特講担当）（～1977年３月）
1973（昭和48）年４月	横浜国立大学教育学部非常勤講師（考古学概説担当）（～1991年３月）

1973（昭和48）年4月	明治大学文学部非常勤講師（考古学特説担当）（～1974年3月）
1974（昭和49）年4月	神奈川県史編集委員会委員（～1983年3月31日）
1975（昭和50）年4月	立教大学一般教育部非常勤講師（歴史Ⅰ担当）（～1989年3月）
1975（昭和50）年12月	茅ヶ崎市史編集員（～1988年5月）
1977（昭和52）年4月	横浜市埋蔵文化財調査委員会委員長（～1989年）
1977（昭和52）年6月	神奈川県遺跡調査・研究発表会準備委員会委員（～1991年3月）
1978（昭和53）年5月	茅ヶ崎市文化財保護委員会委員（～1990年5月）
1980（昭和55）年7月	新湘南国道埋蔵文化財調査会理事（～1985年3月）
1983（昭和58）年10月	大和市史編さん委員会委員（～1997年11月）
1985（昭和60）年4月	逗子市文化財保護委員（～1994年3月）
1985（昭和60）年6月	三浦市文化財保護委員会委員（～1997年11月）
1986（昭和61）年7月	茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会理事（～1990年5月）
1987（昭和62）年4月	綾瀬市史総括編集委員（～1997年11月）
1987（昭和62）年12月	海老名市史編集委員（～1997年11月）
1988（昭和63）年3月	海老名市史審議会委員（～1997年11月）
1988（昭和63）年4月	千葉大学文学部非常勤講師（考古学各説担当）（～1988年9月）
1988（昭和63）年5月	茅ヶ崎市文化財保護委員会会長（～1990年5月）
1988（昭和63）年12月	綾瀬市文化財保護委員会委員（～1997年11月）
1989（平成元）年4月	日本考古学協埋蔵文化財保護対策委員会委員長（～1995年5月）
1990（平成2）年3月	相模原市文化財保護委員会委員（～1996年3月）
1991（平成3）年4月	神奈川県考古学会役員（～1995年6月）
1992（平成4）年10月	横浜市ふるさと歴史財団副理事長（～1997年）
1993（平成5）年5月	横須賀考古学会会長（～1997年11月）
1995（平成7）年6月	神奈川県考古学会会長（～1997年6月）
1997（平成9）年6月	神奈川県考古学会顧問（～1997年11月）
1997（平成9）年1月	綾瀬市文化財保護委員会副会長（～1997年11月）
1997（平成9）年11月16日	逝去

岡本　勇先生著作目録

書名・論文名（共著者）	掲載書・誌名　巻・号，ページ	出版学会等	刊行月
1948（昭和23）年			
原始繪画のある紡錘車	考古学集刊　第１冊，25	東京考古学会	９月
1949（昭和24）年			
日本最古の人骨を発見（杉原荘介・芹沢長介）	科学朝日　第９巻第８号，19―22	朝日新聞社	８月
1951（昭和26）年			
最近発見された三浦半島の早期縄文式遺跡	考古学ノート　創刊号，１―３	武蔵野文化協会	６月
神奈川県川崎市中谷遺跡	日本考古学年報　１，53	日本考古学協会	10月
静岡県熱海市桃山遺跡	日本考古学年報　１，62	日本考古学協会	10月
1953（昭和28）年			
土器型式における年代編成の意義	ミクロリス　第４号，１―５	明治大学考古学研究会	２月
相模・平坂貝塚	駿台史学　第３号，58―76	明治大学史学地理学会	３月
南関東に於ける撚糸文土器群の編年について（芹沢長介）	日本考古学協会第11回総会研究発表要旨，６―８	日本考古学協会	４月
死せる神の復活―考古学と政治との対決―（李　進熙・西川　宏）	ミクロリス　第５号，11―25	明治大学考古学研究会	６月
九州における押型文土器の時期	ミクロリス研究発表会要旨，２・３	明治大学考古学研究会	10月
考古学の前進のために―試論―	ミクロリス　第７号，２・３	明治大学考古学研究会	12月
1954（昭和29）年			
神奈川県横須賀市平坂貝塚	日本考古学年報　２，57・58	日本考古学協会	４月
新しい考古学の方向	ミクロリス　第10号，２・３	明治大学考古学研究会	10月
1955（昭和30）年			
愛知県西志賀貝塚の遠賀川式土器（杉原荘介）	第16回総会研究発表要旨　日本考古学協会彙報別編５，８・９	日本考古学協会	10月
縄文文化	『日本考古学講座』２，37―59	河出書房	10月
東京都板橋区栗原遺跡	日本考古学年報　４，47・48	日本考古学協会	12月
静岡県小笠郡大畑遺跡	日本考古学年報　４，87・88	日本考古学協会	12月
1956（昭和31）年			
埋葬	『日本考古学講座』３，21―38	河出書房	２月
1957（昭和32）年			
茅山貝塚（赤星直忠）	横須賀市博物館研究報告（人文科学）第１号，１―30	横須賀市博物館	３月
堀之内貝塚の形状	人類学雑誌第65巻第５号，97―200	日本人類学会	３月
1958（昭和33）年			
横須賀市平根山遺跡（赤星直忠・村越　潔）	横須賀市博物館研究報告（人文科学）第２号，１―21	横須賀市博物館	３月
小河内渓谷における考古学的調査（後藤守一・大塚初重）	東京都文化財調査報告　５　小河内文化財総合調査報告第２分冊，03―38	東京都教育委員会	３月
第一篇　原始時代・古代第一章　縄文時代・第二章　弥生時代（和島誠一）	『横浜市史』第一巻，１―90	横浜市	３月
『日本石器時代綜合文献目録』（麻生　優）	石器時代文化研究会版，総194頁	山岡書店	４月
無文土器の輪郭	貝塚　第76号，１・２		５月
1949年９月11日のこと―岩宿遺跡予備調査の手記―	考古学手帖　２，３・４	塚田　光	６月

三浦半島の地名のついた縄文式土器
かながわ文化財第14号，8—14　神奈川県文化財協会　12月
考古資料解説目録（中川成夫・高橋　護・堀江良雄）　1—60　成田山霊光館　12月
千代遺跡の土器　1—14　横須賀考古学会

1959（昭和34）年

土器型式の現象と本質　考古学手帖　6，1　塚田　光　2月
三浦郡葉山町馬の背山遺跡　横須賀市博物館研究報告（人文科学）第3号，1—13
横須賀市博物館　3月
大浦山遺跡とその土器（赤星直忠）
日本考古学協会第23回総会研究発表要旨，2
日本考古学協会　5月
掘り出された歴史—横浜の原始時代—
郷土よこはま　14，17—22　横浜市図書館郷土資料室　6月
顕聖寺遺跡（中川成夫・小松芳男・秦　繁治）
『浦川原村文化財調査報告』第一，1—69
浦川原村教育委員会　8月
鳥取県岩美町浦富牧谷古墳群について（中川成夫）
日本考古学協会第24回総会研究発表要旨，14・15
日本考古学協会　10月
『三浦市三崎町油壺遺跡調査概要』　1—15　三浦市教育委員会　11月
越後華報寺中世墓址群の調査報告（中川成夫）
『立教大学文学部史学科調査報告』4，1—18
立教大学文学部史学研究室　12月

1960（昭和35）年

三浦半島の貝塚（1）　かながわ文化財　第19号，19—23　神奈川県文化財協会　2月
堤貝塚の調査　郷土茅ヶ崎　改巻第2号，3—12　茅ヶ崎郷土会　3月
三浦市大浦山遺跡　横須賀市博物館研究報告（人文科学）　第4号，1—15
横須賀市博物館　3月
考古資料索引カードの一例（中川成夫）
MOUSEION　No.5，80—86　立教大学博物館学講座　3月
捺型文土器（1）—その文献解題的研究—
考古学手帖　12，5—8　塚田　光　5月
原始時代の埋葬をめぐる二三の問題
考古学研究　25，16・17　考古学研究会　7月
捺型文土器（2）—その文献解題的研究—
考古学手帖　13，7—11　塚田　光　9月
後藤守一先生のことども　考古学手帖　13，12　塚田　光　9月
新刊紹介『石器時代の日本』　考古学研究　26，23・24　考古学研究会　10月
新刊紹介『日本農耕文化の生成　図録編』
考古学研究　26，24　考古学研究会　10月
新刊紹介『立川』市立函館博物館紀要第6
考古学研究　26，25　考古学研究会　10月
新刊紹介『咲畑貝塚』　考古学研究　26，25　考古学研究会　10月
新刊紹介『能登高木森古墳』　考古学研究　26，25・26　考古学研究会　10月
新刊紹介『清水天王山遺跡』　考古学研究　26，26　考古学研究会　10月
長崎県福井洞窟の調査　考古学研究　26，28　考古学研究会　10月
地質学者の土器の発掘　考古学研究　26，30　考古学研究会　10月
横浜市三殿台遺跡第二次発掘　考古学研究　26，30　考古学研究会　10月
神奈川県大山山頂の発掘　考古学研究　26，30　考古学研究会　10月
縄文式土器の地域性—新潟県中頸城郡妙高村蒲生遺跡の場合を中心として—
立教大学史学会研究発表要旨，3・4
立教大学史学会　11月
新刊紹介　鏡山　猛「稲作の起源をさぐる」
考古学研究　27，41　考古学研究会　10月
高稲荷古墳の発掘　考古学研究　27，42・43　考古学研究会　10月
埼玉県五領遺跡第三次調査　考古学研究　27，43　考古学研究会　10月
神奈川県吉井貝塚の発掘　考古学研究　27，44　考古学研究会　10月

新潟県頸城古墳群の調査（中川成夫）
『立教大学文学部史学科調査報告』5，1—18
立教大学文学部史学研究室　12月

1961（昭和36）年

新潟県北蒲原郡豊浦村の考古学的調査予報（中川成夫・倉田芳郎・田村晃一）
古代　第36号，24—29　早稲田大学考古学会　3月

頸城古墳群をめぐる諸問題（中川成夫・倉田芳郎・秦繁治・伊藤正一・杉山荘平）
頸城文化　第16号，1—18　3月

中川成夫編『新潟県考古遺跡要覧Ⅱ　上越古墳編』
新潟県教育委員会　3月

三浦市鵜ガ島台遺跡　横須賀市博物館研究報告（人文科学）　第5号，1—15
横須賀市博物館　3月

小坂遺跡（中川成夫・加藤晋平）『十日町市文化財調査報告』第1，1—42
新潟県十日町市　3月

神奈川県横須賀市平根山遺跡　日本考古学年報　9，82・83　日本考古学協会　3月

愛知県西志賀遺跡（杉原荘介）　日本考古学協会編『日本農耕文化の生成』本文編，355—376
東京堂　3月

新潟県中頸城郡妙高村葎生遺跡の発掘
MOUSEION　No.7，31—34　立教大学博物館学講座　3月

新潟県頸城古墳群の研究（中川成夫）
『立教大学博物館学講座研究報告』1，1—44
立教大学博物館学講座　5月

漁撈　『図説日本庶民生活史』1　原始—奈良，22—27
河出書房新社　6月

戦後考古学研究のあゆみ　地方史研究　51　地方史研究協議会　6月

三殿台集落址の発掘　考古学研究　30，43・44　考古学研究会　10月

横須賀市吉井貝塚調査概報　横須賀考古学会年報6　横須賀考古学会　10月

座談会　三殿台集落遺跡（和島誠一・井上義弘・麻生優・坂詰秀一・小出義治・山内昭二）
科学読売　第13巻第12号，21—32　読売新聞社　11月

1962（昭和37）年

鳥取県牧谷古墳群の研究（中川成夫・久保靖彦）
『立教大学文学部史学科調査報告』6，42—57
立教大学史学研究室　1月

書評「講座　日本文化史①」　日本読書新聞　第1141号（2月5日号），2
日本出版協会　2月

横須賀市吉井城山第一貝塚の土器（1）
横須賀市博物館研究報告（人文科学）　第6号，23—43
横須賀市博物館　3月

新潟県北蒲原郡における二窯址の調査（中川成夫・倉田芳郎・田村晃一）
立教大学文学部史学科調査報告　7，1—31
立教大学文学部史学研究室　3月

住居址解説—弥生時代の住居址　横浜市三殿台遺跡発掘経過概報，35—37
横浜市教育委員会　3月

主要出土遺物解説—弥生時代の遺物
横浜市三殿台遺跡発掘経過概報，49・50

神奈川県三浦市大浦山遺跡　日本考古学年報　11，77・78　日本考古学協会　3月

神奈川県三浦市鵜ケ島台遺跡　日本考古学年報　11，78・79　日本考古学協会　3月

横須賀市吉井貝塚（赤星直忠・神沢勇一）
日本考古学協会第28回総会研究発表要旨，12・13
日本考古学協会　4月

栃木県・藤岡貝塚の調査（塚田　光）
考古学集刊　第4冊，21—37　東京考古学会　6月

神奈川県三浦市大浦山洞穴の調査（赤星直忠）
洞穴遺跡調査会会報2，6・7　洞穴遺跡調査会　8月

山木遺跡の報告書と後藤守一博士（芹沢長介）
後藤守一編『伊豆山木遺跡』，2・3
築地書館　9月

土器　後藤守一編『伊豆山木遺跡』，83—88

あとがき（芹沢長介）　後藤守一編『伊豆山木遺跡』，120

大丸遺跡・平坂貝塚・平坂式土器
『日本考古学辞典』，325・471　東京堂出版　12月

1963（昭和38）年

書評「斎藤忠著　日本の発掘」　日本読書新聞　第1202号（1月5日号），2
日本出版協会　1月

横須賀市吉井城山第一貝塚の土器（2）
横須賀市博物館研究報告（人文科学）　第7号，17―34
横須賀市博物館　3月

新潟県佐渡三宮貝塚の研究（池田次郎・加藤晋平・金子浩昌・椎名仙卓・中川成夫・本間隆平・本間嘉晴）
『立教大学博物館学講座研究報告』2，総55頁
立教大学博物館学講座　3月

遺跡博物館の現状と課題　MOUSEION　No.9，51―57　立教大学博物館学講座　3月

青森県野口貝塚の発掘（加藤晋平）
MOUSEION　No.9，85―88　立教大学博物館学講座　3月

新発田市内に於ける考古学的調査（中川成夫・加藤晋平）
新発田郷土誌　第2号，1―16　新発田市史編纂委員会　3月

茅山貝塚　日本考古学年報　12，34―36（赤星・岡本1957の抄録）
研究論文抄録（著者自抄）
日本考古学協会　3月

堤貝塚　茅ヶ崎市文化財資料集　第2集，1―17
茅ヶ崎市教育委員会　3月

同人言　物質文化　1，1　物質文化研究会　4月

土器の底―愛知県西志賀貝塚の土器に対する実体的研究の一つの試み―
物質文化　1，45―52　物質文化研究会　4月

加曽利貝塚の意義　考古学研究　37，42―46　考古学研究会　6月

埋蔵文化財の危機は考古学の危機である
考古学手帖　19，1　塚田　光　7月

新潟県魚野川流域古墳群の研究（中川成夫・加藤晋平・森川昌和）
『立教大学文学部史学科調査報告』8，35―52
立教大学文学部史学研究室　7月

新潟県笹神村村杉遺跡の調査（池田次郎・中川成夫・加藤晋平）
『立教大学文学部史学科調査報告』9，1―16
立教大学文学部史学研究室　11月

1964（昭和39）年

信濃川流域の遺跡遺物（中川成夫・加藤晋平）
『立教大学文学部史学科調査報告』10，1―19
立教大学文学部史学研究室　1月

ミクロリスに思う　MICROLITH　20，1・2　明治大学考古学研究会　2月

あとがき　MOUSEION　No.10，92　立教大学博物館学講座　3月

新潟県十日町市小坂遺跡　日本考古学年報　12，84　日本考古学協会　3月

佐渡の弥生文化（加藤晋平）　九学会連合佐渡調査委員会編『佐渡』，59―78
平凡社　3月

1963年度の歴史学界　史学雑誌　第73編第5号，7―18　史学会　5月

先史原始時代の相模原　赤土のなかの文化　縄文式土器とその使用者たち　古代の相模原　階級社会の成立と谷原古墳群
『相模原市史』第1巻，179―272　相模原市　11月

土器・石器　大久保雅弘・藤田至則編著『地学ハンドブック』，61・62
築地書館　11月

1965（昭和40）年

横須賀における労働運動史覚え書　よこすか　第1号，21―26　横須賀文化会議　1月

本学の博物館資料をめぐって（中川成夫）
MOUSEION　No.11，37―40　立教大学博物館学講座　3月

新潟県北蒲原郡出湯華報寺における中世墳墓の発掘
MOUSEION　No.11，92―96　立教大学博物館学講座　3月

三浦市大浦山遺跡　日本考古学年報　13，45・46（岡本1960の抄録）
研究論文抄録（著者自抄）
日本考古学協会　3月

新潟県南蒲原郡川船河遺跡　日本考古学年報　13，116―117　日本考古学協会　3月

新潟県中頸城郡葎生遺跡　日本考古学年報　13，117　日本考古学協会　3月

史料編　遺跡遺物先史・原始時代
『日本史学入門』293―297　広文社　4月

同人言　物質文化　5，56　物質文化研究会　4月
多摩丘陵北部地域の考古学的意義―分布調査の成果―　無土器・縄文時代の遺跡
『多摩ニュータウンと埋蔵文化財』，7―9
文化財保護対策協議会　6月
縄文文化の発展と地域性　関東（戸沢充則）
『日本の考古学』Ⅱ　縄文時代，97―132
河出書房新社　7月
労働用具　『日本の考古学』Ⅱ　縄文時代，286-302
神奈川のあけぼの　2　先土器時代
毎日新聞横浜毎日（8月4日号）　毎日新聞社　8月
神奈川のあけぼの　3　縄文時代　毎日新聞横浜毎日（8月5日号），16
毎日新聞社　8月
「埋蔵文化財」の危機によせて　立教，38　立教大学広報課　10月
相模野台地におけるローム層内遺跡群の研究（松沢亜生）
物質文化　6，1―14　物質文化研究会　10月
西伊豆町・松崎町における考古学的調査（中川成夫・市原壽文・堀江良雄）
『伊豆南西海岸』，17―31　地方史研究所　12月

1966（昭和41）年

伊豆宗光寺横穴群の調査（中川成夫）
史苑　第26巻第2・3号，123―135
立教大学史学会　1月
弥生文化の成立　『日本の考古学』Ⅲ　弥生時代，424―441
河出書房新社　1月
大築海貝塚の発掘調査　MOUSEION　No.12，46―50　立教大学博物館学講座　3月
阿津里貝塚の発掘　MOUSEION　No.12，56―59　立教大学博物館学講座　3月
あとがき　MOUSEION　No.12，146　立教大学博物館学講座　3月
五領ヶ台遺跡　小田原・厚木道路埋蔵文化財調査概報，13―16
神奈川県文化財協会　3月
葎生遺跡（中川成夫・加藤晋平）
『頸南―中頸城郡南部学術綜合調査報告書―』新潟県文化財年報
第5，193―216　新潟県教育委員会　3月
三浦市鵜ガ島台遺跡　日本考古学年報　14，50・51　（岡本1961の抄録）
研究論文抄録（著者自抄）　日本考古学協会　3月
新潟県安田町ツベタ遺跡の調査（中川成夫・加藤晋平・森川昌和）
『立教大学文学部史学科調査報告』11，1―31
立教大学文学部史学研究室　3月
あとがき　物質文化　7，62　物質文化研究会　4月
尖底土器の終焉　日本考古学協会昭和41年度大会研究発表要旨，2・3
日本考古学協会　10月
尖底土器の終焉　物質文化　8，43―50　物質文化研究会　10月

1967（昭和42）年

葎生遺跡―新潟県中頸城郡妙高町葎生の縄文時代遺跡発掘調査報告―（中川成夫・加藤晋平）
（1966）の再録　『立教大学博物館学講座調査報告』4，1―23
立教大学博物館学講座　3月
考古資料の整理（中川成夫）　MOUSEION　No.13，33―37　立教大学博物館学講座　3月
三浦市赤坂遺跡の調査　MOUSEION　No.13，38―42　立教大学博物館学講座　3月
弥生時代石製工具の意義　史苑　第27巻第3号，1―7　立教大学史学会　3月
関東地方の洞穴遺跡　概況　日本考古学協会編『日本の洞穴遺跡』，85―91
平凡社　3月
神奈川県茅ヶ崎市堤貝塚　日本考古学年報　15，104　日本考古学協会　3月
1966年の考古学界の動向　縄文時代
考古学ジャーナル　No.7，9―11　ニュー・サイエンス社　4月
コロボックルから騎馬民族まで　科学　Vol.37No.4，211―213　岩波書店　4月
新潟県新井市における考古学的調査―大貝遺跡・石塔類―（加藤晋平）
『立教大学博物館学研究室調査報告』6，1―40
立教大学博物館学講座　9月
新刊書評『二粒の籾』―森本六爾の生涯―
考古学ジャーナルNo.13，27　ニュー・サイエンス社　10月

1968（昭和43）年

下吉井遺跡の調査　横須賀考古学会年報　第12冊，７―10　横須賀考古学会　１月

三浦市三戸遺跡の調査　横須賀考古学会年報　第12冊，11―14　横須賀考古学会　１月

朝光寺原Ａ地区遺跡第１次発掘調査略報　昭和42年度横浜市域北部埋蔵文化財調査報告，１―11　横浜市域北部埋蔵文化財調査委員会　３月

佐渡藤塚貝塚の発掘　MOUSEION　№14，88―95　立教大学校・社会教育学講座　３月

史跡称名寺を守る運動　その経過と現況　連絡紙　№19，18・19　文化財保護対策協議会・関西文化財保存協議会　４月

考古学資料の調査　木村　礎・林　英夫編『地方史の研究法』，291-302　新正社　４月

博物館実習について―委託する側から―　博物館ニュース　Vol.３№３，１　日本博物館協会　４月

関東平野における縄文海進の最高海水準について（和島誠一・松井　健・長谷川康雄・塚田　光・田中義昭・中村嘉男・小宮恒雄・黒部隆・高橋健一・佐藤　孜）　資源科学研究所彙報　第70号，108-129　資源科学研究所　10月

開発と埋蔵文化財　調査季報　19，51―58　横浜市企画調整室　10月

縄文時代の時期区分について　歴史研究　№98，２―５　新人物往来社　11月

夏島貝塚あやうし　連絡紙　№22，13　文化財保護対策協議会・関西文化財保存協議会　12月

1969（昭和44）年

資料室　考古学―最近の問題点―質問　浅岡　力・小泉　功・小林幹夫・宮島秀夫　東書高校通信日本史№53，１―４東京書籍株式会社　３月

『神奈川の文化財めぐり』（赤星直忠・佐藤昭夫・渋江二郎・関口欣也・園田敬男・永田衡吉・貫　達人・見上敬三・三上　進・宮脇　昭）　総112頁　神奈川県教育委員会　３月

堤貝塚　茅ヶ崎市文化財資料集　第２集（再刊），１―17　茅ヶ崎市教育委員会　３月

神奈川県茅ヶ崎市西方貝塚　日本考古学年報　16，97　日本考古学協会　３月

三重県鳥羽市大築海貝塚　日本考古学年報　16，108　日本考古学協会　３月

あとがき　MOUSEION　№15，99　立教大学学校・社会教育講座　３月

朝光寺原式土器について（武井則道）　昭和43年度横浜市埋蔵文化財調査報告書，70―74　横浜市埋蔵文化財調査委員会　３月

同人言　物質文化　13，41　物質文化研究会　４月

縄文後期文化　関東　『新版考古学講座』３　先史文化，217―230　雄山閣　５月

三浦半島の古代文化展（縄文時代の三浦半島）　かながわ文化財57・58，１―39（三浦半島の古代文化，４―５）　神奈川県文化財協会（横須賀考古学会）　５月

主要遺跡の解説六項目　田戸遺跡　榎戸貝塚　深田貝塚　がんだ畑遺跡　雨崎洞穴遺跡　小矢部窯址　三浦半島の古代文化，13・14・17～19・25

あとがき　三浦半島の古代文化，39

「五領台上層式」土器についての覚え書　貝塚　３，６―９　物質文化研究会　７月

佐渡藤塚貝塚　『立教大学博物館学研究室調査報告』７，１―40　立教大学学校・社会教育講座博物館学研究室　８月

日本旧石器時代を開く人々　『岩宿の発見』とマンローのこと　有鄰　第22号，１　有隣堂　９月

1970（昭和45）年

埋蔵文化財の破壊と博物館の任務　第17回全国博物館大会報告書，20―22　日本博物館協会　３月

下吉井遺跡　神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告　１，21―38　神奈川県教育委員会　３月

五領ヶ台貝塚（日野一郎・小川裕久）　平塚市文化財調査報告書　第９集，７―46　平塚市教育委員会　３月

五領ヶ台（西）貝塚の調査（岡本ほか1966の再録）
平塚市文化財調査報告書　第９集，127―132
平塚市教育委員会　３月

「五領台上層式」土器についての覚え書（岡本1969の再録）
平塚市文化財調査報告書　第９集，133―138
平塚市教育委員会　３月

子母口貝塚　神奈川県の文化財　第10集，35・36
神奈川県教育委員会　３月

新刊書評赤星直忠著『穴の考古学』　考古学ジャーナル　№43，27　ニュー・サイエンス社　４月

われわれのなすべきこと　港北のむかし　１，１　港北ニュータウン文化財調査団　５月

佐渡相川町における調査（概報）（加藤晋平・團　ゑみ）
MOUSEION　№16，51―53　立教大学学校・社会教育講座　５月

あとがき　MOUSEION　№16，79　立教大学学校・社会教育講座　５月

座談会「古代の美術と精神―かながわの埴輪展―」（三上次男・甘粕　健・赤星直忠・園田敬男・小川裕久）
有鄰　第33号　有隣堂　８月

座談会「かながわの埴輪古代の美と精神」（赤星直忠・三上次男・園田敬男・甘粕　健・小川裕久）
かながわ文化財　第59・60合併号，15―27
神奈川県文化財協会　10月

一本松遺跡の調査　年輪　第４号，31―39　大楠史談会　12月

1971（昭和46）年

座談会「日本人の祖先」（井尻正二・和歌森太郎　司会米田清一）
読書の友　第406号，６・７　１月

横須賀市博物館建設地内の古瓦発見地点の調査
横須賀市博物館雑報　№16，14・15
横須賀市博物館　３月

はじめに　昭和45年度港北ニュータウン地域内文化財調査報告（Ⅰ），１・２
横浜市埋蔵文化財調査委員会　３月

はじめに　昭和45年度港北ニュータウン地域内文化財調査報告（Ⅱ），１・２
横浜市埋蔵文化財調査委員会　３月

おわりに　昭和45年度港北ニュータウン地域内文化財調査報告（Ⅱ），481―484

考古　『茅ヶ崎市史』４　通史編，61―107
茅ヶ崎市　３月

尖底土器の終焉　日本考古学年報　19，41・42（岡本1966年の抄録）
研究論文抄録（著者自抄）　日本考古学協会　３月

神奈川県三浦市三戸遺跡　日本考古学年報　19，107・108　日本考古学協会　３月

新潟県新井市大貝遺跡　日本考古学年報　19，110　日本考古学協会　３月

神奈川県三浦市赤坂遺跡　日本考古学年報　19，127・128　日本考古学協会　３月

水原郷の遺跡・遺物（中川成夫・加藤晋平）
水原郷　新潟県文化財調査年報　第10，１―37
新潟県育教委員会　３月

同人言　考古学者の社会的責任　物質文化　17，53　物質文化研究会　４月

塩沢町における考古学・民俗学の調査（加藤晋平・岸上興一郎）
『立教大学博物館学研究室調査報告』９，１―59
立教大学学校・社会教育講座　６月

あとがき　MOUSEION　№17，81　立教大学学校・社会教育講座　６月

貝塚受難　読売新聞夕刊（８月20日号），７　読売新聞社　８月

はじめに　文化財保存全国協議会編『文化遺産の危機と保存運動』，１・２
青木書店　10月

随想国民的財産の埋蔵文化財　後代へ伝達する努力を
よこはま庁内報　№85，１　横浜市市民局相談部広報課　11月

現代学問の世界　考古学　文化評論　№124，62―65　日本共産党中央委員会　12月

1972（昭和47）年

横浜の地にかかげた考古学の灯　港北のむかし　21，１・２　港北ニュータウン文化財調査団　１月

横須賀市千代ヶ崎地区の現状と保存運動
歴史学研究月報　№146，４―７　歴史学研究会　２月

弥生時代遺物の発見とその意義　相模原市史　第１巻補遺　相模原市　３月

「開発」に伴う文化財問題　京浜文化　Vol.13№６，１―５　神奈川県立図書館　３月

はじめに　1調査の目的と方法　昭和46年度港北ニュータウン地域内文化財調査報告　Ⅲ，1
横浜市埋蔵文化財調査委員会　3月
なき和島誠一先生に誓う　文化財を守るために　5，1　文化財保存全国協議会　3月
読書ノート　ユ・イ・セミョーノフ著中島寿雄他訳『人類社会の形成』
文化評論　№128，140・141　日本共産党中央委員会　4月
加曽利貝塚　千葉県　ものがたり日本の遺跡　6
赤旗日曜版（5月7日号）　日本共産党中央委員会　5月
吉胡貝塚　愛知県　ものがたり日本の遺跡　7
赤旗日曜版（5月14日号）　日本共産党中央委員会　5月
貴重だった製作実験＜ＮＨＫテレビ＞「銅鐸」
赤旗，12　日本共産党中央委員会　5月
亀ヶ岡遺跡　青森県　ものがたり日本の遺跡　8
赤旗日曜版（5月28日号）　日本共産党中央委員会　5月
あとがき　MOUSEION　№18，94　立教大学学校・社会教育講座　6月
板付遺跡　福岡県　ものがたり日本の遺跡　9
赤旗日曜版（6月4日号）　日本共産党中央委員会　6月
土井ヶ浜遺跡　山口県　ものがたり日本の遺跡　10
赤旗日曜版（6月11日号）　日本共産党中央委員会　6月
田能遺跡　兵庫県　ものがたり日本の遺跡　11
赤旗日曜版（6月25日号）　日本共産党中央委員会　6月
文化財受難　青淵　第280号，18―20　渋沢青淵記念財団竜門社　7月
登呂遺跡　静岡県　ものがたり日本の遺跡　12
赤旗日曜版（7月2日号）　日本共産党中央委員会　7月
毘沙門洞穴　神奈川県　ものがたり日本の遺跡　13
赤旗日曜版（7月16日号）　日本共産党中央委員会　7月
新穂玉造遺跡　新潟県　ものがたり日本の遺跡　14
赤旗日曜版（7月30日号）　日本共産党中央委員会　7月
広田遺跡　鹿児島県種子島　ものがたり日本の遺跡　15
赤旗日曜版（8月6日号）　日本共産党中央委員会　8月
恵山貝塚　北海道　ものがたり日本の遺跡　16
赤旗日曜版（8月13日号）　日本共産党中央委員会　8月
武蔵野が原のむかし　文学の旅　関東Ⅱ，178―180　千趣会　8月
《座談会》日本の原始・古代史について―甘粕健さんと岡本勇さんを囲んで―（甘粕　健・大坪庄吾・滝尾紀子・安井俊夫・佐藤伸雄）
歴史地理教育　№201，34―51　歴史教育者協議会　9月
一本松遺跡の調査　横須賀考古学会年報 №15，1―4　横須賀考古学会　10月
勝力岬遺跡の調査　横須賀考古学会年報 №15，9・10　横須賀考古学会　10月

1973（昭和48）年

郷土の考古展＜3＞　線描きの壁画も家族墓ともいえる横穴
神奈川新聞（1月4日号）　神奈川新聞社　1月
原始古代　夜明けまえの考古学　無土器時代の自然と文化　縄文時代人の生活　農耕民の登場と古代集落　古墳とその時代　『新井市史』上巻，18―84　新潟県新井市　3月
塩沢町における考古学・民俗学の調査　Ⅱ（加藤晋平・土井義夫・土屋憲子）
『立教大学博物館学研究室調査報告』12，1―62
立教大学学校・社会教育講座　3月
持田遺跡　日本考古学年報　24，49　日本考古学協会　3月
同人言　物質文化　21，65　物質文化研究会　4月
討論　よみがえる原始・古代社会　第1回（甘粕　健・石部正志）
学生新聞　第507号（5月23日号），4　5月
討論　よみがえる原始・古代社会　第2回（甘粕　健・石部正志）
学生新聞　第508号（5月30日号），3　5月
討論　よみがえる原始・古代社会　第3回（甘粕　健・石部正志）
学生新聞　第509号（6月6日号），3　6月
討論　よみがえる原始・古代社会　第4回（甘粕　健・石部正志）
学生新聞　第510号，3　6月
点から面へ遺跡群の研究　読売新聞夕刊（9月19日号），7　読売新聞社　9月
文化財保護の意義　ジュリスト　№544，15―17　有斐閣　10月

1974（昭和49）年

読書ノート松本清張著『遊古疑考』
文化評論　№151，166・167　日本共産党中央委員会　2月

狩猟社会の発展と縄文時代　『図説日本の歴史』1　日本のあけぼの，93―124
集英社　2月

西方貝塚の謎　神奈川県史研究　第23号，48―56　神奈川県史編集室　2月

吉井城山第2遺跡　日本考古学年報　25，49・50　日本考古学協会　3月

神奈川県歳勝土遺跡（小宮恒雄）日本考古学年報　25，190・191　日本考古学協会　3月

縄文海進についての素描　西方貝塚の謎（1974年）の一部を再録
横須賀考古学会年報 №17，12―15　横須賀考古学会　6月

横須賀労働運動史素描（一）　米空母母港化に反対する，2　横須賀市民ノ会ニュース　№1
（岡本1965年の前半を再録）　米空母母港化に反対する横須賀市民の会　8月

序言　港北ニュータウン地域内文化財調査報告　Ⅳ，1
横浜市埋蔵文化財調査委員会　10月

Ⅰ　日本歴史のあけぼの　門脇禎二・甘粕　健編『日本民衆の歴史　1　民衆史の起点』，
2―18　三省堂　11月

1975（昭和50）年

編著　持田遺跡発掘調査報告　本文篇
逗子市文化財調査報告書　第6集，総110頁
逗子市教育委員会　3月

Ⅳ　L・U・M・E区の調査報告　調査の経過と各区の概況　竪穴住居址　溝と池状遺構　発見された土器　持田遺跡発掘調査報告，49―75

Ⅵ　成果と問題点　弥生集落と土器　持田遺跡発掘調査報告，105―108

持田遺跡発掘調査報告　図録篇　逗子市文化財調査報告書　第7集，図版66
逗子市教育委員会　3月

島の歴史への意欲　橋口尚武著『三宅島の埋蔵文化財』
赤旗（5月15日号），8　日本共産党中央委員会　5月

国民的財産としての文化財　公明新聞（5月20日号），8　公明党　5月

原始社会の生産と呪術　『岩波講座日本歴史』1，76―112　岩波書店　5月

野尻湖の発掘に参加して　文全協ニュース　№33，8―10　文化財保存全国協議会　6月

夏島の過去と現在　武蔵野文化協会考古学部会ニュース　№6，1
武蔵野文化協会考古学部会　7月

1976（昭和51）年

坪井正五郎―考古学の基礎を築いた碩学―
日本及日本人　第15533号，170―179
日本及日本人社　1月

原始（金子頼貞）　『大月市史』史料編，24―42　大月市　6月

赤土の中の文化　日野一郎編『南関東の考古学諸問題―特講―』，1―15
武相文化協会　7月

書評　末永雅雄著『考古ものがたり』
公明新聞（7月19日号）　公明党　7月

発刊の辞　調査研究集録　第1冊，1・2
港北ニュータウン埋蔵文化財調査団　12月

1977（昭和52）年

赤土の中の文化　1　岩宿遺跡の発見
新かながわ　第546・547号，7　新かながわ社　1月

赤土の中の文化　2　マンローのこと
新かながわ　第548号，4　新かながわ社　1月

赤土の中の文化　3　岩宿以後，野尻湖まで
新かながわ　第549号，4　新かながわ社　1月

赤土の中の文化　4　先土器時代の名称と石器時代の区分
新かながわ　第550号，4　新かながわ社　2月

赤土の中の文化　5　神奈川県下における先土器時代研究の現状
新かながわ　第551号，4　新かながわ社　2月

赤土の中の文化　6　先土器時代の自然と人びとの生活
新かながわ　第552号，4　新かながわ社　2月

遺跡群研究の必要性　甘粕　健編『考古資料の見方《遺跡編》』，22―25
柏書房　3月

学問するよろこび　下　社会科学　学生新聞（3月30日号）　3月
弥生時代の村と墓地　かながわ文化財　第73号，11—21　神奈川県文化財協会　3月
相模野台地の先土器文化—座談会岡本勇氏を囲んで—（日野一郎・伊東秀吉・江藤　昭）
大和市史研究　3，1—16　大和市　3月
調査概要（1）考古資料　横浜の文化財—横浜市文化財総合調査概報（1）—，14
横浜市文化財現況調査団　3月
調査目録　考古資料　横浜の文化財—横浜市文化財総合調査概報（1）—，110
横浜市文化財現況調査団　3月
横須賀市小舞原遺跡の調査—長井地区における天地返しに伴う緊急調査概要—　本文18頁，図版2頁
横須賀市教育委員会　3月
考古学からみた新しい地域史の課題（甘粕　健・石部正志・金井塚良一）
甘粕　健編『考古資料の見方《遺物編》』，1—68
柏書房　4月
三浦市西ノ浜洞穴発掘調査の報告（塚田明治・小川裕久・飯島重一・中村　勉・宇内正成）
横須賀考古学会年報 №24・25，34—45
横須賀考古学会　8月
つくりかえられた日本の自然　食料採集から食料生産へ　米と鉄の登場　弥生文化の北進と社会の変化
湊　正雄監修『日本の自然』，167—173
平凡社　9月
諸磯式土器80年　横須賀考古学会年報 №20，1・2　横須賀考古学会　10月
Ⅰ　遺跡と地域　三浦市赤坂遺跡，1—5　三浦市教育委員会　11月
Ⅱ　いままでにおこなわれた調査　複雑に重なりあった住居址群　三浦市赤坂遺跡，12—16
Ⅴ　発見された遺構　溝　三浦市赤坂遺跡，34—35
Ⅵ　出土遺物　三浦市赤坂遺跡，36—38
Ⅶ　まとめ　三浦市赤坂遺跡，39・40

1978（昭和53）年

史跡名勝篇　概論　『神奈川県文化財図鑑』史跡名勝天然記念物篇，3—7
神奈川県教育委員会　3月
夏島貝塚　『神奈川県文化財図鑑』史跡名勝天然記念物篇，11—13
子母口貝塚　『神奈川県文化財図鑑』史跡名勝天然記念物篇，13・14
吉井貝塚を中心とした遺跡　『神奈川県文化財図鑑』史跡名勝天然記念物篇，17—20
五領ケ台貝塚　『神奈川県文化財図鑑』史跡名勝天然記念物篇，20—22
勝坂遺跡　『神奈川県文化財図鑑』史跡名勝天然記念物篇，22—25
寸沢嵐石器時代遺跡　『神奈川県文化財図鑑』史跡名勝天然記念物篇，25・26
三殿台遺跡　『神奈川県文化財図鑑』史跡名勝天然記念物篇，29—34
調査概要（13）考古資料　横浜の文化財—横浜市文化財総合調査概報（2）—，22—23
横浜市文化財現況調査団　3月
調査目録（13）考古資料（小川裕久・佐藤安平）
横浜の文化財—横浜市文化財総合調査概報（2）—，145—147・164—165
横浜市文化財現況調査団　3月
縄文社会の基礎　『日本史の謎と発見』1　日本人の先祖，225—263
毎日新聞社　8月
七堂伽藍跡を掘る—茅ヶ崎市下寺尾遺跡調査概報—
茅ヶ崎市史研究　第3号，1—9　茅ヶ崎市史編集委員会　10月
原始　赤土のなかの文化　縄文社会と採集経済　古墳の築造と古代集落
『大月市史』通史編，3—27　大月市　12月

1979（昭和54）年

縄文文化の発展—おもいつくままに—
歴史公論　第5巻第2号，98—104　雄山閣出版　2月
鳥浜貝塚の意味するもの—トリハマシンポジウム'79要旨—（藤井昭二・山田　治・安田喜憲・西田正規・山田昌久・網谷克彦他）鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1—，201—216
福井県教育委員会　3月
諸磯遺跡とその周辺（塚田明治・小川裕久・釼持輝久・山田昌久・米山邦男・亀井宏明・飯島重一・大塚眞弘）　三浦市南部地区遺跡詳細分布調査報告書，1—60
三浦市教育委員会　10月
『神奈川県史』資料編20　考古資料（赤星直忠）
図版736　概説74　遺跡解説75—224　文献目録225—297　総297頁
神奈川県　3月

時期区分―縄文時代史へのアプローチ―（上）
考古部会ニュース　No.20，1―3　武蔵野文化協会考古学部会　6月
縄文時代の時期区分―縄文時代史へのアプローチ―（下）
考古部会ニュース　No.21・22，1―3
武蔵野文化協会考古学部会　11月
縄文時代の集落をめぐって　日野一郎編『南関東の縄文文化諸問題―特講―』，20―31
武相文化協会　12月

1980（昭和55）年

考古編　図版解説　茅ヶ崎の遺跡と遺物　考古学的にみた茅ヶ崎
『茅ヶ崎市史』3　考古・民俗編，29―174　茅ヶ崎市　3月
昭和53年度茅ケ崎市遺跡分布調査報告（松林・茅ケ崎地区，小出地区の一部），1―22
茅ケ崎市教育委員会　4月
序　折本西原遺跡　横浜市埋蔵文化財調査委員会　11月
座談会「鎌倉のやぐらと石塔」（赤星直忠・三上次男・大森順雄）
有鄰　第57号，1―3　有隣堂　12月

1981（昭和56）年

歴史探訪　発掘大塚遺跡　『日本歴史展望』1　埋もれた邪馬台国の謎，49―56
旺文社　3月
堤貝塚（岡本1963の再録）　茅ヶ崎市文化財資料集　第8集，5―36
茅ヶ崎市教育委員会　3月
西方貝塚の謎（岡本1974の再録）
茅ヶ崎市文化財資料集　第8集，81―88
茅ヶ崎市教育委員会　3月
原始編　先土器時代の文化と自然　縄文文化とその社会　水稲耕作の開始と発展
『神奈川県史』通史編　1，13―110
神奈川県　3月
吉井貝塚資料目録（釼持輝久・山田昌久・大塚眞弘）　56　横須賀市教育委員会　3月
普及活動をめぐって・まとめ　鴨居上の台遺跡（横須賀市文化財調査報告　第8集），75―77・274
横須賀市教育委員会　3月
現代人のための日本歴史　縄文時代の生活と社会（加藤文三・田中義昭）
文化評論　No.242，222―239　日本共産党中央委員会　6月
原始・古代　先土器時代の武蔵野　縄文文化と池袋貝塚
『豊島区史』通史編1，3―52　豊島区　6月
現代人のための日本歴史　稲作の始まり―縄文から弥生へ（加藤文三・田中義昭）
文化評論　No.243，202―218　日本共産党中央委員会　7月
序　薮根不動原遺跡発掘調査報告　横浜市埋蔵文化財調査委員会　9月
塚田　光君と『考古学手帖』のことなど
貝塚　28，10―13　物質文化研究会　11月
昭和54年度茅ケ崎市遺跡分布調査報告（小出地区・鶴嶺地区），1―22
茅ケ崎市教育委員会　12月

1982（昭和57）年

編『縄文土器大成』1　早・前期
図版7―12　本文113―158　主要遺跡・図版解説159―184
参考図版185―200　講談社　1月
まえがき　『縄文土器大成』1　早・前期，1―3
縄文土器の生成から発展へ　『縄文土器大成』1　早・前期，114―124
関東・中部地方　『縄文土器大成』1　早・前期，132―136
同人言　物質文化　38，62　物質文化研究会　2月
常盤台遺跡―横浜国立大学校内における埋蔵文化財発掘調査の概報―，総26頁
横浜国立大学　3月
縄文時代の集落と水子貝塚　文化財シンポジウムの記録
わたくしたちのくらしと史跡，20―23
富士見市・富士見市教育委員会　5月
うえのだい　うえのだい刊行委員会　8月
三浦市西ノ浜洞穴発掘調査の報告
横須賀考古学会年報　No.24・25，34―45
横須賀考古学会　8月
戦後考古学の原点―登呂遺跡発見40年によせて―
赤旗（10月19日号）　日本共産党中央委員会　10月

1983（昭和58）年

調査の目的と経過（塚田明治）　西ノ浜海蝕洞穴発掘調査団編『三浦市西ノ浜洞穴』，11—12　西ノ浜海蝕洞穴発掘調査団　1月

出土遺物　人骨（塚田明治）　西ノ浜海蝕洞穴発掘調査団編『三浦市西ノ浜洞穴』，17—18

まとめ　西ノ浜海蝕洞穴発掘調査団編『三浦市西ノ浜洞穴』，31

1984（昭和59）年

はじめに　上白根おもて遺跡発掘調査報告　横浜市埋蔵文化財調査委員会　3月

記念講演　茅山上層式とその周辺　神奈川考古　第18号，1—8　神奈川考古同人会　4月

総論　『縄文文化の研究』10，3—20　雄山閣出版　4月

編　海蝕洞穴遺跡にみる祖先の生活—みうらの海蝕洞穴遺跡展—（赤星直忠），総13頁　三浦市教育委員会　5月

海蝕洞穴とはなにか　海蝕洞穴遺跡にみる祖先の生活，2

大浦山洞穴遺跡　海蝕洞穴遺跡にみる祖先の生活，4

雨崎洞穴遺跡　海蝕洞穴遺跡にみる祖先の生活，5・6

海外洞穴遺跡　海蝕洞穴遺跡にみる祖先の生活，6・7

漁る　海蝕洞穴遺跡にみる祖先の生活，8・9

洞穴に住む　海蝕洞穴遺跡にみる祖先の生活，9・10

占う　海蝕洞穴遺跡にみる祖先の生活，10・11

葬むる　海蝕洞穴遺跡にみる祖先の生活，11

あとがき　海蝕洞穴遺跡にみる祖先の生活，13

大浦山洞穴遺跡（岡本1984の再録）　横須賀考古学会編『三浦半島の海蝕洞穴遺跡』，9　横須賀考古学会　5月

雨崎洞穴遺跡（同上）　横須賀考古学会編『三浦半島の海蝕洞穴遺跡』，23

海外洞穴遺跡（同上）　横須賀考古学会編『三浦半島の海蝕洞穴遺跡』，35・36

その他の洞穴遺跡　横須賀考古学会編『三浦半島の海蝕洞穴遺跡』，48

洞穴遺跡調査の成果　横須賀考古学会編『三浦半島の海蝕洞穴遺跡』，51・52

今までにおこなわれた調査（岸上興一郎）　称名寺Ⅰ貝塚発掘調査報告，3—5　横浜市埋蔵文化財調査委員会　10月

土器・石器・化石　『新版・地学ハンドブック』　築地書館　12月

1985（昭和60）年

序　水窪遺跡・茅ケ崎町遺跡群（港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅶ）　横浜市埋蔵文化財調査委員会　3月

弥生文化研究と蒔田鎗次郎　論集日本原始，29—42　吉川弘文館　5月

キャンパス内に縄文時代の遺跡を掘る　文教大学ジャーナル　№184，Ⅳ・Ⅴ　文教大学　9月

明治時代神奈川県下考古学研究の先駆（パイオニア）者たち　神奈川県地域史研究　第2号，1—11　神奈川県地域史研究会　12月

1986（昭和61）年

いまなぜ「文化財」か　1　新かながわ　第978号（1月5日・12日合併号），12　新かながわ社　1月

いまなぜ「文化財」か　2　新かながわ　第980号（1月19日号），4　新かながわ社　1月

いまなぜ「文化財」か　3　新かながわ　第981号（2月2日号），4　新かながわ社　1月

いまなぜ「文化財」か　4　新かながわ　第983号（2月9日号），4　新かながわ社　2月

いまなぜ「文化財」か　5　新かながわ　第984号（2月16日号），4　新かながわ社　2月

いまなぜ「文化財」か　6　新かながわ　第985号（2月23日号），4　新かながわ社　2月

市民とともに貝塚を調べる　教養月報　第426号（2月1日号）　神奈川県庁　2月

先土器・縄文時代の食料生産　『岩波講座日本考古学』3　生産と流通，33—56　岩波書店　3月

序　古代のよこはま，1　港北ニュータウン埋蔵文化財調査団　3月
N．G．マンローと三ッ沢貝塚　古代のよこはま，41—43
海浜部の集落　古代のよこはま，82—85
序文　横浜市緑区十日市場町長光廃寺跡　横浜市埋蔵文化財調査委員会　3月
序言　亀ノ甲山・オオデラ百崩（港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅷ）　横浜市埋蔵文化財調査委員会　3月
高抜横穴群の調査—南下浦中学校校庭拡張工事にともなう緊急調査の概要　三浦市教育委員会　3月
むすび　都留市史編纂委員会編『都留市史』資料編　地史・考古，535—537　都留市　3月
神奈川のあけぼの　赤土のなかの文化　縄文土器とその文化　米と鉄の文化　古墳とその時代　貫　達人監修『図説神奈川県の歴史　上』原始古代中世近世，42—80　有隣堂　6月
図版特集　遠い祖先のまなざし　貫　達人監修『図説神奈川県の歴史　上』原始古代中世近世，81—84

1987（昭和62）年

調査概要　考古・史跡　横浜の文化財6，18　横浜市教育委員会　3月
序　七ッ塚・権田池東遺跡（港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅸ）　横浜市埋蔵文化財調査委員会　3月
縄文時代の漁撈活動　称名寺貝塚　『資料が語る神奈川の歴史60話』，20—23　三省堂　6月
赤土が秘める謎　市史だより　創刊号，1・2　綾瀬市教育委員会　7月
本棚　横須賀市人文博物館「考古資料図録Ⅰ」　横須賀考古学会会報　No.2，7　横須賀考古学会　9月
小橋遺跡（中村　勉・諸橋千鶴子）　総48頁　小橋遺跡調査団　11月
鉈切貝塚の発見—日記のひとこま—　横須賀考古学会会報 No.3，1・2　横須賀考古学会　12月

1988（昭和63）年

序　寺谷戸遺跡発掘調査報告　横浜市埋蔵文化財調査委員会　3月
高抜横穴群の調査（塚田明治・宇内正城・鈴木　隆）　三浦市教育委員会　3月
三浦市三戸・小網代地区遺跡詳細分布調査Ⅰ（剱持輝久・小暮慶明・宇内正城・臼井　敦）　三戸小網代地区遺跡調査団　3月
36年前の思い出　三貫地貝塚　福島県立博物館調査報告　第17集，17・18　福島県立博物館　3月
横須賀考古学会の歴史（プレ・ヒストリー）1　横須賀考古学会会報　No.4，1・2　4・5　横須賀考古学会　3月
序　中村五郎著『弥生文化の曙光』，Ⅲ・Ⅳ　未来社　5月
はじめに　清来寺墓地裏遺跡発掘調査報告　横浜市埋蔵文化財調査委員会　6月
序　市営菅田住宅地内発掘調査報告　横浜市埋蔵文化財調査委員会　6月
市域の考古資料と本巻の編集について　『大和市史』7　考古資料編，Ⅲ—Ⅶ　大和市　7月
南堀貝塚の発掘　『横浜市史』資料編21　考古資料編，1—212　横浜市　7月
三殿台遺跡北側貝塚（今井康博）昭和62年度文化財年報（埋蔵文化財その6），17・18　横浜市教育委員会　7月
杉原荘介論　『弥生文化の研究』10，174—181　雄山閣出版　11月
横須賀考古学会の歴史（プレ・ヒストリー）2　横須賀考古学会会報　No.5，1・2　横須賀考古学会　12月
横須賀考古学会の歴史（プレ・ヒストリー）3　横須賀考古学会会報　No.6，1　横須賀考古学会　12月

1989（平成元）年

書評『橋口尚武　島の考古学』　赤旗（1月23日号）　日本共産党中央委員会　1月
本巻の編集について（阿部征寛）『大和市史』1　通史編　原始・古代・中世，Ⅲ—X　大和市　3月
横須賀市佐原泉遺跡（中村　勉）　泉遺跡調査団　3月

三浦市三戸・小網代地区遺跡詳細分布調査Ⅱ（剱持輝久・小暮慶明・中村勉・臼井敦）
三戸小網代地区遺跡調査団　3月
序　上白根町後谷北遺跡発掘調査報告　横浜市埋蔵文化財調査委員会　3月
序　神明台遺跡Ａ地点発掘調査報告　横浜市埋蔵文化財調査委員会　3月
瀬戸ヶ谷古墳にみる各種の埴輪　『図説横浜の歴史』，54・55
横浜市市民局市民情報室広報センター　4月
鶴川流域の横穴と製鉄　『図説横浜の歴史』，60・61
縄文文化の起源と貝塚　『考古学ゼミナール』縄文文化と貝塚，57―86
六興出版　4月
ミッドウェー母港化反対闘争をたたかって
芳賀武追悼文集をつくる会編『追想・芳賀武』，155―164
芳賀武追悼文集をつくる会　6月
池子の埋蔵文化財　よこはま文化　第45号，1・2　横浜文化団体連絡会議　7月
序　川島町西原遺跡発掘調査報告　横浜市埋蔵文化財調査委員会　7月
池子の森に眠る祖先の文化遺産　赤旗（7月30日号）　日本共産党中央委員会　7月
池子の森と核兵器　赤旗（8月1日号），4　日本共産党中央委員会　8月
勤労人民も含む古代社会像解明できる池子
平和新聞 第1285号（9月15日号）　日本平和委員会　9月
序　綱島古墳　横浜市埋蔵文化財調査委員会　10月
はじめに　観福寺北遺跡・新羽貝塚発掘調査報告
横浜市埋蔵文化財調査委員会　10月
思い出　奥田直栄先生追悼集　68・69　学習院大学輔仁会史学部　12月

1990（平成2）年

弥生時代の環濠集落址を掘る　市史だより　第7号，1―5　綾瀬市教育委員会　2月
海老名市域における考古学研究のあゆみ―沼田頼輔と中山毎吉のこと―
えびなの歴史　海老名史市研究　創刊号，4―7
海老名市企画部市史編さん室　3月
序　山田大塚遺跡（港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告・）
横浜市埋蔵文化財調査委員会　3月
大塚山古墳をめぐる現状保存　横須賀考古学会会報　№13，1　横須賀考古学会　6月
書評「戸沢充則著　縄文時代研究序説」
赤旗（7月2日号）　日本共産党中央委員会　7月
（仮称）称名寺貝塚Ｄ地点北側遺跡（橋本昌幸）
平成元年度文化財年報（埋蔵文化財その8），17・18
横浜市教育委員会　7月
篠山遺跡の弥生土器のもつ意味　『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査10周年記念集』，1―6（湘南考古学同好会1991の一部）　10周年記念集編集委員会　11月

1991（平成3）年

10周年記念講演　神奈川県下における前期古墳成立の基盤について
湘南考古学同好会々報　42，1―13
湘南考古学同好会　3月
まとめ　浜諸磯遺跡―古墳時代後半から奈良・平安時代にかけての砂丘上の集落遺跡―（三浦市埋蔵文化財調査報告書　1），116・117
三浦市教育委員会　3月
赤星直忠先生の研究業績　はじめに
赤星直忠先生著作目録・年譜，25・26
赤星直忠先生の米寿を祝う会　11月
篠山遺跡の弥生土器の持つ意味　足もとに眠る歴史　西相模の三・四世紀，73―76
東海大学文学部・東海大学校地内遺跡調査団　11月

1992（平成4）年

［1］古代の生活と文化　伊豆利彦編『横浜と文学』，4―10　横浜市立大学一般教育委員会　3月
神崎遺跡の意義―あとがきにかえて―
神崎遺跡発掘調査報告書（綾瀬市埋蔵文化財調査報告　2），167―170
綾瀬市教育委員会　3月
まえがき　赤坂遺跡にみる遠い祖先のくらし（三浦市埋蔵文化財調査報告書　2）
三浦市教育委員会　3月
序　上の山遺跡（港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XⅢ）
横浜市埋蔵文化財センター　3月

赤星先生の一周忌を終えて　横須賀考古学会会報　№20，1　横須賀考古学会　4月
かながわの考古学をきずいた人たち　考古論叢　神奈河　第1集，1—16
神奈川県考古学会　5月
僕の心のなかに生きる野口君　野口孝雄君のことども—追悼文集—，16・17
野口孝雄君追悼文集を刊行する会　5月
貝輪あれこれ　利根川　13，1—5　利根川同人　5月
東京都池袋貝塚について　武蔵野の考古学　吉田　格先生古稀記念論文集，155—168
吉田　格先生古稀記念論文集刊行会　11月
仏向遺跡（中島初子・吉田美津子・小松安子・木田英子・海老坂成子）
横浜市埋蔵文化財センター　11月

1993（平成5）年

赤星直忠先生の学問　横須賀考古学会編『赤星直忠の人間と学問—埋もれた歴史を掘りもとめて六十年—』，1—4　横須賀考古学会　3月
矢出川の思い出　草原の狩人刊行会編『草原の狩人　由井茂也日記抄』，261—264
ほおずき書籍　6月
大規模開発の凋落　考古学ジャーナル　№362，1　ニュー・サイエンス社　6月
マンローの人と仕事　赤旗（6月29日号），9　日本共産党中央委員会　6月
岩宿のことども　森　浩一・佐原　真監修『考古学の世界』第2巻　関東・中部，222・223　ぎょうせい　7月

1994（平成6）年

調査概要（6）考古　横浜の文化財（12），12・13　横浜市教育委員会　3月
横浜市内遺跡の分布一覧　横浜の文化財（12），74—95　横浜市教育委員会　3月
あとがき　神奈川県相模原市上中丸遺跡（下），657—659
相模原市当麻下溝遺跡群調査会　12月

1995（平成7）年

弥生時代の巨大な竪穴住居址について
日本考古学協会第61回総会研究発表要旨，8—12
日本考古学協会　5月
山内清男先生と田戸遺跡のことなど
利根川　16，5—8　利根川同人　5月
遺跡群研究序説　郵政考古学会編『平井尚志先生古稀記念考古学論攷』　第Ⅲ集，1—14　郵政考古学会　6月
魅力ある歴史の叙述を！　考古かながわ　第9号，1　神奈川県考古学会　9月
拠点集落としての赤坂遺跡　平成6年度三浦市文化財展　祖先からのメッセージ—赤坂遺跡とその出土遺物展—，2　三浦市教育委員会　12月

1996（平成8）年

縄文時代のタイムカプセル—鳥浜貝塚の発掘—
明治大学考古学博物館編『発見と考古学』市民の考古学3，41—59
名著出版　2月
第4章　弥生時代（小滝　勉）『綾瀬市史』9　別編　考古，551—602
綾瀬市　3月
刊行に当たって　海老名市編『相模国分寺研究の先駆者中山毎吉—その人と業績』
海老名市史叢書1，1・2　海老名市　3月
地域史研究の業績　海老名市編『相模国分寺研究の先駆者中山毎吉—その人と業績』
海老名市史叢書1，26—37
和島誠一先生との出会い　利根川　17，10・11　利根川同人　5月
『かながわの縄文文化の起源を探る』（1996.3.3）講評
かながわの縄文文化の起源を探る　パート2，65・66
神奈川県考古学会　10月

1997（平成9）年

第Ⅱ章　発掘調査の目的　第Ⅴ章　洞穴内の堆積層について　第Ⅸ章　まとめ
大浦山洞穴（三浦市埋蔵文化財調査報告書　第4集），2・8—13・110—112　三浦市教育委員会　3月

1998（平成10）年

茅ケ崎を掘って　文化資料館調査研究報告　6，89—100
茅ケ崎市文化資料館　3月
『縄文と弥生—日本文化の土台にあるもの—』本文280　図版4　未来社　11月
A　縄文文化研究の諸段階　縄文文化（1955年）と総論（1984）の再録，9—60

B　縄文社会の生産と呪術　原始社会の生産と呪術年（1975年）の再録，61―101
C　土器型式の現象と本質　土器型式の現象と本質（1959年）の再録，102―105
D　尖底土器の終焉　尖底土器の終焉（1966年）の再録，105―121
E　歴史の主体者と縄文文化の発展　縄文文化の発展（1979年）の再録，121―132
F　弥生文化研究と蒔田鎗次郎　弥生文化研究と蒔田鎗次郎（1985年）の再録，135―149
G　愛知県西志賀遺跡　愛知県西志賀遺跡（1961年）の再録，150―174
H　土器の底　土器の底（1963年）の再録，174―185
I　弥生文化の成立　弥生文化の成立（1966年）の再録，186―205
J　弥生時代石製工具の意義　弥生時代石製工具の意義（1967年）の再録，205―213
K　環濠集落とその墓地　弥生時代の村と墓地（1977年）の再録，213―223
L　弥生時代の巨大な竪穴住居　勤労人民も――（1989年）を増補改稿，223―232
M　海蝕洞穴遺跡の諸問題　書きおろし，232―238
N　貝のブレスレット　貝輪あれこれ（1992年）を増補改稿，238―247
O　前期古墳成立の基盤　1981年3月（神奈川県史）と1991年3月を元に改稿，247―260

多様な発達を示す縄文文化の姿　日本考古学　第6号，22―26　日本考古学協会　12月

夏島貝塚と野島貝塚，そして金沢の歴史
六浦文化研究　第8号，1―17　六浦文化研究所　12月

＊編集注：本目録は，「岡本　勇先生年譜」とともに武井則道が作成したもの（岡本　勇先生追悼文集刊行会　1999　『岡本　勇　その人と学問』東京堂出版）を基礎としている。表記等，不統一な部分がある。なお遺漏も多いと思われるが，お許し願いたい。

岡本　勇先生講演目録

講　演　名	講演・発表機関	講演月日
1951（昭和26）年		
田戸下層以前の縄文式土器	原始文化研究会４月例会	４月26日
1953（昭和28）年		
南関東に於ける撚糸文土器群の編年について（芹沢長介）	日本考古学協会第11回総会	４月26日
九州における押型文土器の時期	明治大学考古学研究会	10月 1日
1955（昭和30）年		
愛知県西志賀貝塚の遠賀川式土器（杉原荘介）	日本考古学協会第16回総会	10月30日
1958（昭和33）年		
夏島貝塚の古さについて	横須賀市博物館	10月17日
1959（昭和34）年		
大浦山遺跡とその土器（赤星直忠）	日本考古学協会第23回総会	５月 3日
鳥取県岩美町浦富牧谷古墳群について（中川成夫）	日本考古学協会第24回総会	10月24日
1960（昭和35）年		
縄文式土器の地域性－新潟県中頚城郡妙高村葎生遺跡の場合を中心として	立教大学史学会	11月12日
1962（昭和37）年		
横須賀市吉井貝塚（赤星直忠・神沢勇一）	日本考古学協会第28回総会	４月28日
1966（昭和41）年		
尖底土器の終焉	日本考古学協会昭和41年度大会	10月29日
1971（昭和46）年		
市民のための考古学	考える市民の会（逗子市）	２月13日
1974（昭和49）年		
地域研究と文化財群の保存	文化財保存全国協議会	７月
1976（昭和51）年		
赤土の中の文化	武相文化協会特講　南関東の考古学諸問題	12月
1978（昭和53）年		
埋蔵文化財と郷土史の学習	茅ケ崎市文化資料館講座	11月29日
1979（昭和54）年		
神奈川県下における後期弥生土器の分布	横須賀考古学会第８回研究会	７月７日
縄文時代の集落－特に横浜港北ニュータウン遺跡群を中心に－	武相文化協会特講　南関東の縄文文化諸問題	10月28日
1980（昭和55）年		
茅ケ崎の埋蔵文化財について	茅ケ崎市議会議員研修会	２月20日
茅山上層以後の土器について	横須賀考古学会第19回研究会	９月６日
1983（昭和58）年		
縄文時代早期末・前期初頭の諸問題	神奈川考古同人会シンポジウム記念講演	12月３日
1984（昭和59）年		
弥生時代と農耕の始まり	横須賀市人文博物館	７月21日
神奈川の考古学研究の歴史（黎明期の考古学）	神奈川県立埋蔵文化財センター かながわ県民アカデミー「考古学を学ぶ」	11月29日
1985（昭和60）年		
明治時代神奈川県下考古学研究の先駆者（パイオニア）たち	第２回神奈川地域史研究会総会	２月２日
仏教以前の火葬	横須賀考古学会研究会	10月４日
茅ケ崎の遺跡	茅ケ崎市文化資料館特別展講演	10月27日

弥生時代	神奈川県立埋蔵文化財センター かながわ県民アカデミー「考古学を学ぶ」	12月5日
1986（昭和61）年		
考古学の型式とその編年について	神奈川県立埋蔵文化財センター 埋蔵文化財研修会	6月24日
吉井城山と縄文時代	横須賀市人文博物館	8月10日
縄文と弥生の洗骨について	横須賀考古学会研究会	10月31日
1987（昭和62）年		
縄文時代研究の歩み	神奈川県立埋蔵文化財センター かながわ県民アカデミー	3月3日
原始神奈川を掘る	法政第二高等学校 京浜歴史科学研究会公開講座	8月21日
勝坂式土器と縄文文化	神奈川県立埋蔵文化財センター かながわの遺跡展	10月17日
縄文文化の起源と貝塚	明治大学考古学博物館	11月
緑・港北の考古遺跡1　港北ニュータウン地域の考古遺跡の特色	武相文化協会 644例会	12月13日
1989（平成1）年		
縄文時代早期の文化について	神奈川県立埋蔵文化財センター かながわ県民アカデミー	10月17日
1991（平成3）年		
神奈川県下における前期古墳成立の基盤について	湘南考古学同好会10周年記念講演	4月1日
かながわの考古学をきずいた人たち	神奈川県考古学会設立総会記念講演	4月27日
港北ニュータウンの調査と遺跡群研究	第15回神奈川県遺跡調査・研究発表会特別講演	9月29日
1992（平成4）年		
茅ケ崎を掘って	茅ケ崎市文化資料館特別展講演	2月23日
夏島貝塚と野島貝塚，そして金沢の歴史	六浦文化研究所講演会	3月29日
田戸上層から子母口，そして野島へ	横須賀考古学会	6月11日
1995（平成7）年		
弥生時代の巨大な竪穴住居址について	日本考古学協会第61回総会特別講演	5月15日
1996（平成8）年		
原始・古代の生活―遺跡・遺物より環境問題を考える―	武相文化協会 749例会	6月30日

※編集注：岡本先生の講演は，なお多数にのぼると思われる。以上に掲げたものは，平成13年2月10日時点で編集委員会の管見にふれたものである。以下に講演年月日の確認ができていないもの若干を加えておく。

赤星先生を引き継ぐもの	横須賀考古学会	1991以後
貝輪	横須賀考古学会	1992以前
大浦山洞穴の土師器	横須賀考古学会	
縄文時代のタイムカプセル－鳥浜貝塚の発掘－	明治大学考古学博物館	

岡本　勇先生発掘調査歴

1946.4	横須賀市長井の経塚
1947.春	横浜市野島貝塚　発掘　赤星直忠（赤星1948・1951）
1947.4	横浜市野島北貝塚　発掘　國學院大學樋口清之・小出義治・金子量重・永峰光一他（赤星1951）
1947.5ないし6	横浜市称名寺門前の薬王寺境内の貝塚　発掘
1947.7.13～9.3	静岡県静岡市登呂遺跡　第１回発掘（日本考古学協会1949）
1948.3.6	横須賀市佐野町枇杷山山頂遺跡　発掘　川上久夫（川上1948）
1948.4.3～6	島根県簸川郡原山遺跡発掘　杉原荘介・川上久夫（杉原1948）
1948.4.14～5.1	愛知県豊橋市瓜郷遺跡　発掘　和島誠一・市原壽文（豊橋市教育委員会1963）
1948.4.22～25	静岡県静岡市有東第二遺跡の発掘に参加か（後藤1951）
1948.5.16	静岡県熱海市桃山遺跡　発掘　望月薫弘（岡本1951）
1948.6.13～8.19	横須賀市なたぎり遺跡　発掘（赤星1954）
1948.6.20	横須賀市佐野町枇杷山山頂遺跡　発掘（川上1948）
1948.7.21～9.4	静岡県静岡市登呂遺跡　第２回発掘調査（日本考古学協会1954）
1948.11.2～7	愛知県西志賀貝塚　杉原荘介の調査に参加（杉原1949）
1948.11.11・25	川崎市中谷遺跡　発掘　大塚初重・川上久夫（岡本1951）
1948.11～12	茨城県北相馬郡花輪台貝塚　発掘　吉田格・市原壽文・吉崎昌一他（吉田1948）
1948.12.23・24	三浦郡初声村赤坂遺跡　川上久夫（川上1951）
1948.10～翌年春まで	横須賀市猿島　猿島洞窟遺跡　発掘（赤星1952）
1949.2.6	三浦郡南下浦村大浦山遺跡，赤星直忠等と試掘（岡本1960・62）
1949.3.8～11	愛知県豊橋市五貫森遺跡　発掘（杉原・外山1964）
1949.3	三浦郡初声村三戸遺跡，数回の調査を行い，若干の土器片を採集
1949.3	横須賀市高坂遺跡，大塚山遺跡などを赤星直忠と踏査
1949.3.21	横須賀市夏島貝塚の遺物を追浜の伊藤書店で見学する
1949.3.27	横浜市桂台遺跡　第１次調査（杉原・戸沢1963）
1949.4.3	横浜市野島貝塚（第一区）　発掘
1949.4.7・8	静岡県田方郡平井遺跡および向原遺跡　発掘（芹沢1954）
1949.4.16	大楠地畳帯踏査　横須賀市馬ノ背山遺跡発見（岡本1959）
1949.4.17	三浦郡南下浦村大浦山洞穴　発掘（赤星・岡本1962）
1949.4.21～24	静岡県小笠郡菊川町白岩遺跡発掘調査に参加　後藤守一・和島誠一・川上久夫・田中一郎・亀井正道・市原壽文他
1949.4.25～5.5	愛知県豊橋市瓜郷遺跡　発掘（豊橋市教育委員会1963）
1949.5	横須賀市田戸遺跡，数回の調査
1949.5.8	千葉県千葉市園生貝塚　明治大学考古学研究室実習発掘
1949.5.15,6.1・2.5・12	横須賀市平坂貝塚　発掘（杉原・芹沢・岡本1949，岡本1953）
1949.7.10	三浦郡三崎町諸磯遺跡　赤星直忠等
1949.7.20～30	静岡県静岡市登呂遺跡　第一期発掘（日本考古学協会1954）

1949.8.10	静岡県静岡市佐渡遺跡　発掘（杉原1954・1962）
1949.8.11～28	静岡県静岡市登呂遺跡　第二・三期発掘（日本考古学協会1954）
1949.9.10～13	群馬県新田郡笠懸村岩宿遺跡予備調査に参加（岡本1958）
1949.9.18	横須賀市平作窯址（小矢部窯址）　発掘　赤星直忠（赤星1954）
1949.10.1～10	群馬県新田郡笠懸村岩宿遺跡　第１回の本調査（杉原1956）
1949.10.18	三浦郡下浦村大浦山遺跡（岡本1960）
1949.10.29～11.2	愛知県岡崎市村上遺跡
1949.11.3	愛知県碧海郡富士松村築地貝塚
1949.11.4	静岡県田方郡畑毛向原遺跡
1949.11.2～12.3	埼玉県岩槻市真福寺泥炭遺跡　発掘　甲野勇・吉田格・市原壽文・大和久震平（甲野1955）
1949.11.7～11	千葉県香取郡大字木ノ内城ノ台北貝塚　第１次調査　吉田格（吉田1955）
1949.11.13	横浜市桂台遺跡　第２次調査（杉原・戸沢1963）
1950.1.23	三浦郡三戸遺跡　吉田格氏の発掘　確認（吉田1955）
1950.2.18	横須賀市夏島貝塚　第１回発掘（杉原・芹沢1957）
1950.3.17～19	横浜市杉田遺跡　第１次調査（杉原・戸沢1963）
1950.3.21～28	横須賀市夏島貝塚　発掘（杉原・芹沢1957）
1950.4.10～20	群馬県新田郡笠懸村岩宿遺跡　発掘（杉原1956）
1950.6.25	横浜市杉田遺跡　第２次調査（杉原・戸沢1963）
1950.8.1～17	青森県下北郡吹切沢遺跡の発掘調査に参加（江坂1954）
1950.9.1～6	静岡県静岡市登呂遺跡発掘　第４回（日本考古学協会1954）

1950年８月　青森県吹切沢遺跡調査団記念スナップ（野牛沼南岸から北方に遺跡を望む
前列中央左：岡本先生，後列左端：江坂輝彌氏，後列右端：吉崎昌一氏　写真提供：江坂氏）

岡本　勇先生発掘調査歴

1950.10.1～4	静岡県賀茂郡峠遺跡　発掘　吉田格・市原壽文（吉田1951）
1950.10.10～13	千葉県香取郡大字木ノ内城ノ台北貝塚　第２次調査　吉田格・北詰栄男・市川規平・岩月康典（吉田1955）
1950.10.7･8	川崎市津田山遺跡の発掘に参加（吉田1955）
1950.10.20～30	埼玉県南埼玉郡真福寺遺跡の発掘に参加（甲野1955）
1950.11.23～28	群馬県新田郡薮塚にて前期縄文式文化遺跡　４回目発掘　確認（杉原1951・1955）
1950.12.3～22	静岡県田方郡韮山村山木遺跡　発掘（後藤ほか1962）
1951.1.26	静岡県小笠郡笠原村大畑遺跡　発掘（芹沢1960）
1951.2.18～24	横浜市称名寺Ａ・Ｂ貝塚　発掘（吉田1960）
1951.3.13～18	静岡県小笠郡笠原村大畑遺跡　発掘（岡本1955，芹沢1960）
1951.3.25～4.6	愛知県渥美郡吉胡貝塚　発掘（後藤・長谷部ほか1952）
1951.3.31～4.9	愛知県宝飯郡稲荷山遺跡　発掘（杉原・外山1964）
1951.5.13	千葉県千葉郡 犢橋遺跡　発掘（戸沢1979）
1951.6.12	東京都板橋区茂呂遺跡の予備調査（杉原・吉田・芹沢1959）
1951.8.9～22	福岡県糟屋郡夜臼遺跡　発掘（日本考古学協会編1960・1961）
1951.8.20～29	福岡県築紫郡板付遺跡　発掘（日本考古学協会編1960・1961）
1951.8.26～9.1	佐賀県東松浦郡柏崎遺跡　発掘（松尾1955）
1951.10.22･25，11.3･4	東京都板橋区栗原遺跡（岡本1955）
1951.11	東京都国分寺市多喜窪Ａ遺跡の発掘に参加（吉田1952）
1951.12.17･18	横浜市大丸遺跡　発掘（芹沢1956）
1951.12.20～25	栃木県下都賀郡藤岡貝塚　発掘（岡本・塚田1962）
1952.1.12～16	横浜市大丸遺跡　発掘（芹沢1956）
1952.5.7	横須賀市西来寺裏山遺跡　発掘（赤星1957）
1952.5.7･8	中郡大磯町釜口古墳（赤星1974）
1952.7.24～30	横須賀市大塚古墳　発掘（赤星1953）
1952.7.27～8.9	大阪府中河内郡西瓜破・瓜破遺跡　発掘（日本考古学協会編1960・1961）
1952.8.1～10	山口県熊毛郡岩田遺跡　発掘（日本考古学協会編1960・1961）
1952.8.8～12	福岡県遠賀郡城ノ越遺跡　発掘（日本考古学協会編1960・1961）
1952.8.16～28	福岡県築紫郡那珂町・板付遺跡　発掘（日本考古学協会編1960・1961）
1952.10.25･26	三浦郡上宮田砂丘遺跡　発掘（赤星1957）
1952.11.23～12.1	茨城県丸山第１号墳の発掘調査に参加（後藤・大塚1957）
1952.12	横須賀市かろうと山古墳　発掘（赤星1958）
1953.6.6･7	横浜市下組遺跡調査　確認
1953.6.14～24	青森県北津軽郡金木砂礫層調査（杉原1965）
1953.7.11～8.5	愛知県名古屋市西志賀遺跡　発掘（杉原・岡本1955・日本考古学協会編1960・1961）
1953.8.16～30	福岡県築紫郡板付遺跡　発掘（日本考古学協会編1960・1961）
1953.10.18	群馬県勢多郡武井遺跡　予備調査（杉原1954・1977）
1954.1.7～10	群馬県勢多郡武井遺跡　予備調査（杉原1954・1977）

1954.1.19～21・27	逗子市山野根横穴　発掘（赤星1963）
1954.2.14・23	三浦市初声町三戸遺跡　吉田格と発掘（吉田1955）
1954.3.12・13	東京都練馬区武蔵関　発掘
1954.3.15・16	千葉県千葉市犢橋貝塚　発掘（戸沢1979）
1954.5.4～6	千葉県市川市丸山遺跡調査（杉原1957）
1954.5.19～29	群馬県勢多郡武井遺跡　本格調査（杉原1977）
1954.6.12・13	横須賀市茅山貝塚　発掘（赤星・岡本1957）
1954.8.12・13	愛知県西春日井郡朝日貝塚（貝殻山貝塚）発掘
1954.8.17～30	福岡県築紫郡板付遺跡　発掘（日本考古学協会編1960・1961）
1954.10.13～23	千葉県市川市堀之内貝塚の全体測量に従事（岡本1957）
1954.12.20～12.24	千葉県香取郡西之城貝塚　発掘（西村・金子・芹沢・江坂1955）
1955.1.28～3.4	東京都西多摩郡小河内村　第1回発掘調査（後藤・岡本ほか1958）
1955.6.17～23	横須賀市夏島貝塚　第2回発掘調査（杉原・芹沢1957）
1955.7.14～31	横浜市南堀貝塚　発掘（岡本・和島1958・岡本1988）
1955.8.2～10	東京都西多摩郡小河内村　第2回発掘調査（後藤・岡本ほか1958）
1955.8.21～30	佐賀県唐津市桜馬場遺跡発掘調査（日本考古学協会編1960・1961）
1955.9.6～20	山口県豊浦郡土井ヶ浜遺跡の第3次発掘調査（日本考古学協会編1960・1961）
1955.11.16～25	東京都西多摩郡小河内村　第3回発掘調査（後藤・岡本ほか1958）
1956.1.20～24	横浜市寺前貝塚（称名寺貝塚）和島誠一の調査に参加（横浜市教育委員会1984）
1956.9.25	横須賀市横須賀高等学校裏弥生式住居発掘（赤星・岡本1979）
1956.11.10・11	鎌倉市手広遺跡　発掘（赤星1959）
1956.11.17・18	横須賀市千代ヶ崎遺跡　発掘
1956.12.20～26	横須賀市平根山遺跡　発掘（赤星・岡本・村越1958）
1957.8.11～17	横浜市中居丸山横穴群（鵠沼女子高等学校地歴研究部1964）
1957.9.8	東京都国分寺市熊の郷遺跡・殿ヶ谷戸遺跡　発掘（吉田1952）
1957.11.1	三浦郡葉山町馬の背山遺跡の発掘調査（岡本1959）
1957.11.4～10	横須賀市ふくざく谷横穴群　調査（赤星1959）
1958.1.15・16	横須賀市長浜横穴群（赤星1960）
1958.4.1～10	小田原市千代廃寺址（岡本1958，赤星1962）
1958.6.5～8	三浦市大浦山遺跡発掘調査（赤星・岡本1959，岡本1960・1962）
1958.6.26～30	横浜市赤穂原遺跡（芹沢1962）
1958.8.9～12	横浜市宮ノ前横穴群（鵠沼女子高等学校地歴研究部1964）
1958.10.1～5	三浦市鵜ガ島台遺跡の発掘調査（岡本1961・1962）
1958.11.2～11	静岡県磐田市西貝塚の発掘に参加（麻生ほか1961）
1959.1.14～18	東京都千代田区九段上遺跡　発掘（千代田区1960）
1959.3.16～18	静岡県浜名郡長者平遺跡
1959.3.27～28	新潟県新井市観音堂古墳群測量調査（中川編1961）
1959.3.29～31	新潟県新井市天神堂古墳群測量調査（中川編1961）
1959.4.1	新潟県新井市小丸山古墳群測量調査（中川編1961）

1958年夏　三浦市大浦山遺跡記念スナップ（左から塚田明治氏，麻生優氏，村越潔氏，岡本先生，浜田勘太氏，赤星直忠氏，写真提供：横須賀市人文博物館）

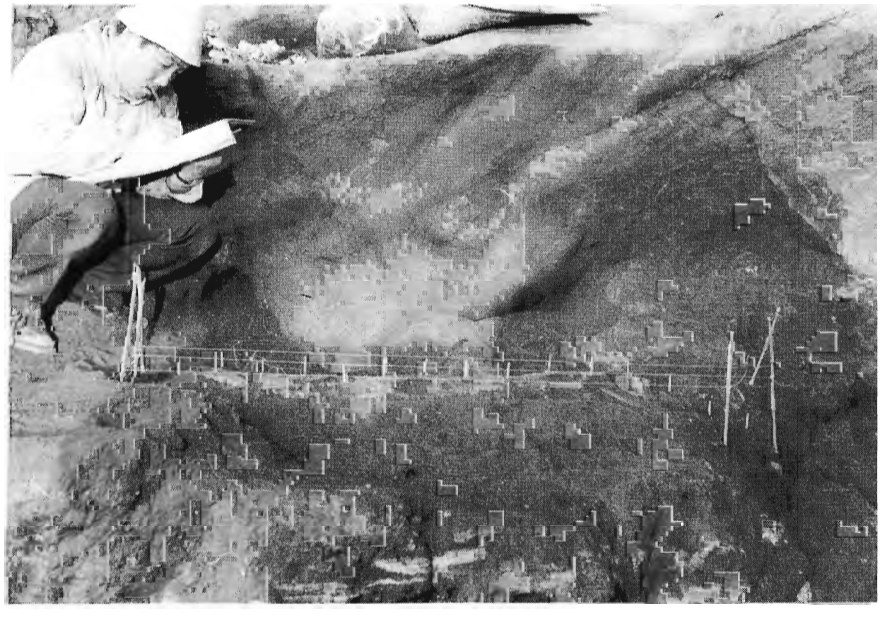
1959.4.2	新潟県新井市原通古墳群測量調査（中川編1961）
1959.4.12•14	三浦市油壺遺跡　発掘（岡本1959）
1959.7.3～5	静岡県賀茂郡西伊豆町調査（中川ほか1965）
1959.7.6•7	静岡県賀茂郡松崎調査（中川ほか1965）
1959.8.1～7	新潟県十日町市小坂遺跡　発掘（岡本1961・1964）
1959.8.12～15	静岡県磐田市西貝塚の地形測量（麻生ほか1961）
1959.8.15～23	横浜市宮ノ前横穴群（鵠沼女子高等学校地歴研究部1964）
1959.8.28～31	静岡県磐田市石原貝塚　発掘
1959.9.5～10	横浜市三殿台遺跡　発掘（和島ほか1962・1965など）
1959.9.29•30	東京都多摩市蓮光寺遺跡　発掘
1959.10.24•25•31•11.1•8	横須賀市長浜横穴　発掘（赤星1961，岡本ほか1962）
1959.11.29,1960.1.17・31・2.1	横浜市（汲沢）大丸遺跡　調査（鎌倉学園考古学部1960）
1959.11.19～22	茅ヶ崎市堤貝塚　発掘（岡本1960・1963・1969・1981）
1960.2.14～3.20	鎌倉市手広遺跡　発掘（赤星1959）
1960.2.21•3.6•13	藤沢市向川名　発掘（赤星1959）
1960.2.27•28	鎌倉市東御門やぐら調査
1960.3.22～24	小田原市千代遺跡　発掘（神沢1961）
1960.3.31	小田原市千代寺院址　発掘（赤星1962）
1960.4.3～7	横浜市矢畑貝塚　発掘（赤星・岡本1979）
1960.4.9～11	中郡伊勢原町大山調査（岡本1960）
1960.4.19～22	中郡大磯（大磯町）横穴　発掘（赤星1964）
1960.6.9	横浜市東白楽貝塚（白幡西貝塚）の発掘（考古学研究会1960・62・63）

岡本　勇先生発掘調査歴

1960.6.19	相模野調査　大和市　松沢亜生（岡本・松沢1965）
1960.6.20	相模野調査　寒川から茅ヶ崎市　松沢亜生（岡本・松沢1965）
1960.6.26•27	小田原市千代永塚遺跡　発掘（赤星1961・1965，赤星・岡本1979）
1960.7.1	相模野調査　座間から相模原市　松沢亜生（岡本・松沢1965）
1960.7.5～11	新潟県中頸城郡妙高村葎生遺跡　発掘（中川ほか1966など）
1960.7.14•15	新潟県十日町市小坂遺跡　発掘（岡本1961・1964）
1960.7.21～31	長崎県北松浦郡福井洞穴　発掘（鎌木・芹沢1965・66）
1960.8.6～12	新潟県南蒲原田上郡船河遺跡　発掘（岡本1965）
1960.8.21～24	中郡伊勢原町大山　発掘（岡本1960，赤星1964）
1960.10.24～26•28～30•11.4～7•25～30•12.30	横須賀市吉井貝塚　発掘（岡本1961・1962・1963）
1961.5.28～31	中郡伊勢原町尾根山古墳（赤星1974）
1961.7.5～12	新潟県佐渡三宮貝塚　発掘（池田ほか1963）
1961.7.22～24	横浜市三殿台遺跡　発掘（和島ほか1965など）
1961.8.24	九学会連合の佐渡調査（桂林遺跡，台ノ鼻古墳）発掘（加藤ほか1964）
1961.11.5～11	新潟県魚沼古墳群　分布調査（中川ほか1963）
1961.12.9•10	新潟県塩沢古墳　調査（中川ほか1963）
1962.2.24～31	茅ケ崎市堤貝塚　発掘（岡本1963・1967・1969）
1962.4.8	三浦市大浦山洞穴　予備調査（岡本1962）
1962.5.2～4	新潟県塩沢，南山古墳調査
1962.5.14•20	横須賀市小矢部米之台　宮ノ台期住居址発掘
1962.5.28•29	中郡伊勢原町尾根山古墳（赤星1974）
1962.7.6～12	青森県三沢市野口貝塚　発掘（岡本・加藤1963）
1962.7.16～20	新潟県新発田市内の考古学的調査（岡本・中川・加藤1963）
1962.25～30	福井県三方郡鳥浜貝塚　発掘（森川1963，森川ほか1979）
1962.8.7～15	三浦市大浦山洞穴　発掘（赤星・岡本1962）
1963.1.20	足柄上郡金子台遺跡　発掘（赤星1974）
1963.3.3	横須賀市小矢部米之台遺跡　発掘
1963.3.29～4.1	相模原市塩田遺跡　発掘（相模原市1964）
1963.7.9～15	青森県追館遺跡　発掘とgeneral suroeg　甲地村，上北町
1963.7.30	三浦市大浦山洞穴　発掘（赤星1967）
1963.8.1～7	福井県三方郡鳥浜貝塚　発掘（森川ほか1979）
1963.11.9～11	静岡県伊豆　西ノ段　松崎町　調査（岡本ほか1965）
1963.11.18•19	茅ケ崎市西方貝塚　発掘（岡本1969・1974・1981）
1963.12.22	横須賀市蛭畑遺跡　発掘（神沢1967）
1964.2.2	茅ケ崎市八ツ口横穴　発掘（赤星1969）
1964.3.18～27	横浜市折本貝塚　発掘（桜井1969）
1964.3.21	横浜市貝殻畑貝塚（北川貝塚）発掘
1964.6.12	横須賀市鴨居45―5　確認？
1964.7.5～9	三重県鳥羽市大築海貝塚　発掘（岡本1966・1969）

岡本　勇先生発掘調査歴

1964.7.31～8.5	茅ケ崎市西方貝塚　発掘（岡本1969・1974・1981）
1964.8.17～21	新潟県小千谷市長浜貝塚　発掘　中世墳墓
1964.8.25～27	新潟県北蒲原郡出湯中世墳墓　発掘（岡本1965）
1965.1	三浦市三戸遺跡（岡本1968）
1965.4.11	横浜市法正寺横穴
1965.7.4～10	三重県志摩郡阿津里貝塚（岡本1966）
1965.7.18～7.23	岩手県平泉調査
1965.8.3・4	平塚市五領ヶ台貝塚調査（神奈川県文化財協会1966，岡本1969，平塚市教育委員会1970）
1965.8.11～18	津久井郡藤野町椚戸中原遺跡発掘（赤星・岡本1979）
1965.10.29～11.3	新潟県新井市大貝遺跡　発掘（岡本・加藤1967）
1965.11.23	横須賀市堂山遺跡　発掘（赤星1965・1966）
1966.2.12～14	三浦市三戸遺跡　発掘（岡本1968）
1966.3.11～20	横浜市上倉田原所在の縄文時代包含地　発掘（横浜市教育委員会1984）
1966.4.4～9	三浦市赤坂遺跡　発掘（岡本1967・1977）
1966.4.17・18	三浦市新井城測量
1966.5.2～5	新潟県新井市大貝遺跡　発掘（岡本・加藤1967）
1966.12.18・25～28	横須賀市下吉井遺跡　発掘（岡本1968）
1967.1.24	横須賀市鳥ヶ崎横穴　調査
1967.2.18～20	三浦市三戸遺跡　発掘（岡本1968）
1967.3.19～21	横須賀市下吉井遺跡　発掘（岡本1968・70）
1967.3.28～4.4	岩手県平泉調査



1968年1月5日　三浦市雨崎洞穴の発掘調査（埋葬遺構測量中の岡本先生）

1967.5.3	三浦市新井城測量
1967.5.5	横須賀市小矢部城測量（赤星1969）
1967.7.27～31	三浦市雨崎洞穴　発掘（岡本1969，赤星1972）
1967.8.1～20	横浜市朝光寺原遺跡A・B地区　発掘（岡本ほか1968）
1967.8.22～28	新潟県佐渡郡真野町藤塚貝塚発掘調査（岡本1968）
1967.8.30～9.2.17,10.1•8	横浜市朝光寺原遺跡発掘調査（岡本ほか1968）
1967.12.24～26•28•29	三浦市雨崎洞穴　発掘（赤星1972など）
1968.1.4～7•9•14•21•22，3.10•17•20	
1968.3.5～27	横浜市神之木台遺跡発掘調査（高橋・吉田1977，神之木台遺跡調査グループ1977）
1968.5.3～6•12•13•17	横浜市小仙塚貝塚　発掘
1968.7.18～22	横浜市寅ヶ谷遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1969）
1968.8.10～9.20	横浜市朝光寺原遺跡C地区　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1969）
1968.10.6•20•27•11.23～25	横浜市宮ノ原東貝塚　発掘
1968.12.22～29	横浜市朝光寺原遺跡C地区　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1969）
1969.3.21～24	平塚市五領ヶ台貝塚　発掘（岡本ほか1970）
1970.3.8～15	横浜市神之木台遺跡　発掘（高橋・吉田1977，神之木台遺跡調査グループ1977）
1970.3.13	横須賀市立博物館建設予定地の古瓦出土地点（深田廃寺）　発掘（岡本1971）
1970.3.20•21	横須賀市勝力岬遺跡　発掘（岡本1972）
1970.5.3～5	横須賀市一本松遺跡　発掘（岡本1970・1972）
1970.8.12•13	千葉県夷隅郡大原町新田野貝塚　発掘（立教大学考古学研究会1975）
1971.4.13～5.9	逗子市持田遺跡　発掘（岡本1973・岡本ほか1975）
1971.7.19～29	新潟県姥島遺跡　発掘
1972.6.13～23	横浜市港北ニュータウンH５遺跡（横浜市埋蔵文化財センター1990）
1972.8.1	横須賀市鴨居小学校校庭二次堆積貝塚　確認調査
1972.12.23～26,1973.1.4	横須賀市吉井貝塚　発掘（岡本1974）
1973.3	横須賀市江戸坂貝塚　発掘
1973.8.19•20	横浜市港北ニュータウン地域内C13遺跡　発掘
	長野県上水内郡野尻湖遺跡（岡本1975）
1974.8.21～28	山梨県大月市子之神古墳（岡本1978）
1974.12～1977.3	横須賀市域埋蔵文化財分布調査
1975.1.8～3.23	三浦市江奈横穴群　発掘（赤星ほか1976）
1975.4.10～17	横浜市東方第１遺跡　発掘（茂木1976）
1975.3.21～4.1	横須賀市宮ケ谷戸遺跡　発掘（長沢・宮ケ谷戸遺跡調査団1977）
1975.8.9～18	横須賀市浜遺跡Ⅰ（赤星1977）
1976.2～3	三浦市内遺跡分布調査
1976.3.8～4.5	横須賀市佐原城址遺跡　発掘
1976.7	相模原市No.174・177　試掘
1976.8～9	横須賀市小舞原遺跡　発掘（岡本ほか1977）

岡本　勇先生発掘調査歴

1976.10.12～25	横浜市常盤台遺跡　発掘（横浜国立大学1982）
1977.1.10～19	横浜市称名寺H貝塚　発掘（横浜市教育委員会1984）
1977.1.23～25	三浦市赤坂遺跡　発掘
1977.2.1～22	横須賀市鴨居上の台遺跡　確認調査（鴨居上ノ台遺跡調査団1981）
1977.2～3	横須賀市茅山貝塚　確認調査
1977.3	横須賀市夏島貝塚　測量調査
1977.5～7	三浦市赤坂遺跡　発掘（赤坂遺跡調査団1977）
1977.6.25～7.25	横浜市権太坂小学校遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1981）
1977.7.25～8.18	横須賀市内原遺跡A地点（横須賀市教育委員会1982）
1977.10.14～1978.9.14	横須賀市鴨居上ノ台遺跡　発掘（鴨居上ノ台遺跡調査団1981）
1978.1～2	横浜市常盤台遺跡　発掘（横浜国立大学1982）
1978.3	横須賀市夏島貝塚　確認調査
1978.5	横須賀市蓼原遺跡　発掘（神明地区埋蔵文化財調査団1987）
1978.7	茅ケ崎市七堂伽藍跡　発掘（岡本1978・1980）
1978.7.1～1979.3.31	横浜市薮根不動原遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1981）
1978.12.18～1979.3.31	横浜市清水ケ丘遺跡　発掘（石井1979）
1978～1979	茅ケ崎市内遺跡分布調査（岡本1980・1981）
1979.2	三浦市諸磯遺跡　発掘（赤星ほか1979）
1979.3	横須賀市吉井貝塚　確認調査Ⅱ
1979.3	三浦市がんだ畑・入道込遺跡（三浦市教育委員会1979）
1979.3.5～7.24，9.10～13・17～22 1980.2.7～4.30	横浜市折本西原遺跡　発掘（石井ほか1980）
1979.6	横須賀市家の入　確認調査（神明地区埋蔵文化調査団1987）
1979.6	横須賀市中台北貝塚　分布調査
1979.6	横須賀市浜遺跡Ⅱ
1979.9.24～1980.2.28	横浜市北八朔町遺跡（横浜市教育委員会1983）
1979.11.1～9	茅ケ崎市堤貝塚　発掘（藤原ほか2000）
1980.2～3	横須賀市神明地区　確認調査Ⅰ（神明地区埋蔵文化財調査団1988）
1980.3.17～26	横浜市常盤台遺跡　発掘（横浜国立大学1982）
1980.5	横須賀市神明町無名塚（神明地区埋蔵文化財調査団1987）
1980.6.27～7.4	横浜市権田原遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財センター1990など）
1980.7～1981.2	横浜市北川貝塚　発掘（横浜市埋蔵文化財センター1990など）
1980.9～12	相模原市橋本線遺跡　発掘
1981.1.9～3.31	横浜市常盤台遺跡　発掘（横浜国立大学1982）
1981.2～3	横須賀市神明地区　確認調査Ⅱ（神明地区埋蔵文化財調査団1988）
1981.2.4～2.21・5.8～6.30	横浜市権田原遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財センター1990など）
1981.5	横須賀市伝福寺裏遺跡Ⅰ（神明地区埋蔵文化財調査団1988）
1981.7	相模原市相模川線遺跡　発掘
1981.7.25～31	横須賀市坂本横穴　発掘（坂本横穴調査団1981）
1981.10～12	横須賀市伝福寺裏遺跡Ⅱ（神明地区埋蔵文化財調査団1988）
1981.10～1982.5	横浜市北川貝塚　発掘（横浜市埋蔵文化財センター1990など）

1981.12	相模原市相模原線遺跡　発掘
1981.12.5～1982.3.13	横浜市折本表根遺跡　発掘（横浜市教育委員会1983）
1982.2～4	横須賀市神明谷戸遺跡Ⅰ
1982.5～7	横須賀市長坂やぐら群　発掘（赤星ほか1982）
1982.6～7	三浦市西ノ浜洞穴（西ノ浜洞穴発掘調査団1982，赤星・岡本1983）
1982.3	横須賀市伝福寺裏遺跡Ⅱ（神明地区埋蔵文化財調査団1988）
1982.6.23～7.5	横浜市港北ニュータウンD４遺跡（横浜市埋蔵文化財センター1990）
1982.6.28～7.24	横浜市林遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1982）
1982.10.18～11.4	横浜市神明下遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1983）
1982.12～1983.3	横浜市長坂谷　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1983）
1982.7.24～8.13	茅ケ崎市堤貝塚　発掘（茅ケ崎市教育委員会1983）
1983.2～5	茅ケ崎市行谷遺跡　発掘（岡本1985）
1983.2.12～1984.2.27	横浜市能見堂遺跡　発掘（横浜市ふるさと歴史財団1997）
1983.3～9	横浜市北川貝塚　発掘（横浜市埋蔵文化財センター1990など）
1983.4.27～6.15	三浦市海外１号洞穴　発掘（海外洞穴調査団1983）
1983.5.27～7.7	横浜市ドウ屋敷遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1983）
1983.7～8	横須賀市丸畑遺跡　発掘
1983.8	横須賀市かがみ田遺跡　確認調査
1983.8～9	横浜市二本木貝塚　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1984）
1983.2.27～8.31	横浜市富士塚遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1985）
1983.8.10～9.19	横浜市長蔵寺裏遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1985）
1984.2.20～8.12	横浜市佐江戸第１遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財センター1990）
1984.3.11～8.10	横浜市鍛冶山遺跡　発掘（横浜市ふるさと歴史財団1998）
1984.4.5～20	横浜市東電北島線No.４遺跡（横浜市埋蔵文化財調査委員会1985）
1984.4.6～8.3	横浜市大塚遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財センター1991・横浜市ふるさと歴史財団1994）
1984.5.1～6.5	横浜市神明台遺跡A～D地点　予備調査（横浜市埋蔵文化財調査委員会1985）
1984.6.23～7.5	横浜市港北ニュータウンD４遺跡（横浜市埋蔵文化財センター1990）
1984.6.25～7.26	横浜市中村遺跡
1984.7～8	三浦市矢作やぐら群・大畑やぐら群・晴海町横穴群　発掘（三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団1984）
1984.7.15～12.3	横浜市大楽谷遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1985）
1984.7.25～1985.3.31	横浜市矢指谷遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1985）
1984.7.19～10.4	横浜市七ッ塚遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1987）
1984.8	三浦市松輪大畑やぐら群（三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団1984）
1984.8.1～1985.3.29	横浜市南堀遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財センター1990）
1984.8.4～9.30	三浦市白須遺跡　発掘（赤星ほか1984）
1984.8.18～1986.7.17	横浜市神隠丸山遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財センター1990など）
1984.8～12	横須賀市神明谷戸遺跡Ⅱ　発掘
1984.9～10	三浦市晴海町横穴群　発掘（三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団1985）
1984.10.15～1985.1.24	横浜市古梅谷遺跡　発掘（横浜市ふるさと歴史財団1995）

岡本　勇先生発掘調査歴

1984.12.20～1985.1.31	横浜市神明台遺跡C地点　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1985）
1985.1.31～5.2	横浜市権田原遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財センター1990など）
1985.3.13～4.26	横浜市東俣野町大塚遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1985）
1985.5.22～6.11	茅ケ崎市行谷遺跡　発掘（茅ケ崎市教育委員会1987）
1985.5.22～8.10	横浜市長光廃寺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1986）
1985.6	三浦市奉行所跡やぐら群（三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団1985）
1985.6.27～7.10	三浦市晴海町第２やぐら群（赤星ほか1987）
1985.7	三浦市赤坂遺跡　第２次発掘（岡本ほか1994）
1985.7.15～11.12	横浜市平台貝塚　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1986）
1985.8.4～1986.3.5	横浜市新羽第６～９遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財センター1990）
1985.8.23～1986.3.31	横浜市殿谷遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1986）
1985.10.16 ～1986.1.23	横浜市和田遺跡
1985.11.1～1986.4.20	横須賀市佐原泉遺跡　発掘（泉遺跡調査団1989）
1985.11.11～1986.5.9	横浜市前高山遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財センター1990）
1986.3.3～3.28	横浜市都筑自然公園No.１・３・４・８地点遺跡　予備調査（横浜市埋蔵文化財調査委員会1988）
1986.4～9	三浦市海外３号洞穴遺跡（三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団1986）
1986.6	三浦市大畑やぐら群　２次調査（三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団1987）
1986.6	三浦市小網代やぐら群（三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団1986）
1986.6.2～28	茅ケ崎市宮ノ腰遺跡　発掘（宮ノ腰遺跡調査団1986，大村1990）
1986.7.2～12.13	相模原市下溝下原西遺跡　試掘
1986.7.4～1987.3.4	横浜市西ノ谷貝塚　発掘（坂本1987など）
1986.7.17～31	三浦市高抜横穴群　発掘（高抜横穴群調査団1988）
1986.7.19～12.2	茅ケ崎市西方A遺跡　発掘（茅ケ崎市埋蔵文化財調査会1988）
1986.9.1～1987.6	横浜市上郷深田遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1988）
1986.9.20～11.30	横浜市港北ニュータウンC５遺跡（横浜市埋蔵文化財センター1990）
1986.9.23～30	茅ケ崎市西方C遺跡　発掘（茅ケ崎市埋蔵文化財調査会1988）
1986.11.1～11.21	横浜市前高山遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財センター1990）
1986.11.1～28	横浜市川和中村遺跡　発掘（横浜市教育委員会1987）
1986.12.1～12.17	横浜市寺谷戸遺跡　試掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1988）
1986.12.13～1987.10.31	相模原市下溝下原西遺跡A・B・E・F地点（相模原市当麻下溝遺跡群調査会1992）
1987.1.16～3.15	茅ケ崎市本村居村遺跡　発掘（茅ケ崎市教育委員会1987）
1987.1.20～3.31	横浜市都筑自然公園No.３・６地点遺跡　予備調査（横浜市埋蔵文化財調査委員会1988）
1987.1.26～6.13	横浜市寺谷戸遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1988）
1987.2.2～1989.4.5	横浜市権田原遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財センター1990ほか）
1987.2.9～13	綾瀬市上土棚No.136　発掘（岡本・中島1987）
1987.3.9～31	横浜市瀬戸神社旧境内地内（五助山）遺跡　試掘（横浜市教育委員会1988）
1987.3.10～21	三浦市晴海第２横穴群　発掘（晴海横穴群文化財調査団1987）

1987.4.20～8.15	横浜市瀬戸神社旧境内地内（五助山）遺跡（横浜市教育委員会1988）
1987.5	三浦市海外やぐら群（三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団1987）
1987.6	三浦市大畑やぐら群（三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団1987）
1987.6	三浦市三崎宮城やぐら群（三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団1987）
1987.6.16・17	綾瀬市丸山遺跡　発掘（岡本・中島1987）
1987.6.30～9.30	横浜市都筑自然公園No.1・4・8地点遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1988）
1987.7.1～8.1	横須賀市小橋遺跡　発掘（小橋遺跡調査団1987）
1987.7.21～9.30	相模原市下溝下中丸遺跡　試掘（相模原市当麻下溝遺跡群調査会1992）
1987.7.24～8.25	三浦市藤ケ崎・がんだ畑遺跡（三戸・小網代地区遺跡調査団1988）
1987.7.24～9.20	三浦市鷺野・旧園芸試験場・十八田・瓜山遺跡（三戸・小網代地区遺跡調査団1988）
1987.9.26～12.29	相模原市当麻東原遺跡　試掘（相模原市当麻下溝遺跡群調査会1992）
1987.10.20～12.7	相模原市下溝下中丸遺跡A～C地点　発掘
1987.10.15～11.14	茅ケ崎市赤羽六図D遺跡　発掘（茅ケ崎市教育委員会1988）
1987.11.11～29	横浜市三殿台遺跡北側貝塚　発掘（横浜市教育委員会1988）
1987.11.18～1988.5.1	茅ケ崎市居村B遺跡　発掘（富永1989）
1987.12	三浦市小網代やぐら群（三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団1987）
1987.12.11～1988.6.18	相模原市下溝下中丸遺跡　発掘（相模原市当麻下溝遺跡群調査会1994）
1988.1.13～18	茅ケ崎市宮ノ腰遺跡　発掘（茅ケ崎市教育委員会1988）
1988.1.14～2.21	三浦市浜諸磯遺跡C地点　発掘（三浦市教育委員会1991）
1988.2	逗子市海前寺西やぐら群　発掘
1988.2.1～11.30	相模原市当麻東原遺跡A・B地点　発掘（相模原市当麻下溝遺跡群調査会1992）
1988.3.1～22	横浜市市営菅田住宅地内遺跡（横浜市埋蔵文化財調査委員会1988）
1988.4.20～1989.9.14	相模原市下溝上中丸遺跡　発掘（相模原市当麻下溝遺跡群調査会1994）
1988.5.6～8.4	茅ケ崎市上ノ町（香川間門）遺跡　発掘（茅ケ崎市教育委員会1989）
1988.5.9～11.21	横浜市観福寺北遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1989）
1988.5.13～9.1	綾瀬市五社神社遺跡　発掘（五社神社遺跡発掘調査団1991）
1988.5.27～6.13	横浜市新羽貝塚　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1989）
1988.6.6～8.3	横浜市神明台遺跡A地点　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1989）
1988.5.5～9.30	三浦市出口南・出口・釜田・不入斗・上の原遺跡（三戸・小網代地区遺跡調査団1989）
1988.8.8～12.10	茅ケ崎市天神原A遺跡　発掘（茅ケ崎市教育委員会1989）
1988.8.9～9.13	茅ケ崎市西ノ谷遺跡　発掘（茅ケ崎市教育委員会1989）
1988.9.22～25	三浦市宮川遺跡　発掘（宮川遺跡調査団1989）
1988.9～1989.2	茅ケ崎市明王ヶ谷遺跡　発掘（茅ケ崎市教育委員会1989）
1988.10	三浦市和田やぐら群　発掘（三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団1989）
1988.10.20～12.7	茅ケ崎市行谷広町遺跡　発掘（茅ケ崎市埋蔵文化財調査会1991）
1988.10.21～24	茅ケ崎市上ノ町遺跡　発掘（茅ケ崎市埋蔵文化財調査会1991）
1988.10.24～11.16	横浜市上白根町後谷北遺跡（横浜市埋蔵文化財調査委員会1989）
1988.11.3～1989.3.31	横浜市仏向遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財センター1992）

岡本　勇先生発掘調査歴

1988.11.28～12.29	横浜市野庭町永作遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1989）
1988.12	三浦市三崎宮城やぐら群（三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団1989）
1988.12.9～1989.2.1	横浜市川島町西原遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1989）
1988.12～1989.2	茅ケ崎市御屋敷A遺跡　発掘（茅ケ崎市教育委員会1989）
1988.12.16～1989.5.15	茅ケ崎市金山遺跡　発掘（富永ほか1990・富永1994）
1989.1.14～2.5	三浦市和田やぐら群　発掘（三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団1989）
1989.1.26～3.31	茅ケ崎市御屋敷B遺跡　発掘（茅ケ崎市教育委員会1989）
1989.2.20～3.30	茅ケ崎市芹沢遺跡　発掘（茅ケ崎市教育委員会1989）
1989.5.19～6.12	横浜市綱島古墳　試堀調査（横浜市埋蔵文化財調査委員会1989）
1989.6.15～7.15	横浜市称名寺貝塚D地点　発掘（横浜市埋蔵文化財調査委員会1990）
1989.6	三浦市二見谷横穴群・西野やぐら群・松輪坪井横穴群（赤星ほか1990）
1989.7	三浦市矢作第２やぐら群（赤星ほか1990）
1989.7.1～7.31	茅ケ崎市御屋敷A遺跡　発掘（富永ほか1990）
1989.7.18～12.6	綾瀬市神崎遺跡　発掘（神崎遺跡発掘調査団1992・綾瀬市1996）
1989.8.1～13	横須賀市高坂貝塚　発掘
1989.8.3～9.1	茅ケ崎市石原B遺跡　発掘（大村1990）
1989.8.12～27	三浦市尾屋敷遺跡　発掘（尾屋敷遺跡調査団1989）
1989.8.16～8.30	茅ケ崎市大島仲ノ谷遺跡　発掘（大島仲ノ谷遺跡調査団1992）
1989.8.25～9.5	横浜市雑色杉本遺跡　発掘（横浜市ふるさと歴史財団1996）
1989.9.5～25	三浦市浜諸磯遺跡D地点　発掘（浜諸磯遺跡調査団1989）
1989.9	三浦市赤坂遺跡　発掘（三浦市教育委員会1989）
1989.9.10～9.30	茅ケ崎市原A遺跡　発掘（富永ほか1990）
1989.10.2～12.8	横浜市都筑自然公園No.６・７地点遺跡　発掘（横浜市埋蔵文化財センター1991）
1989.10.3～11.30	茅ケ崎市居村A遺跡　発掘（大村1990）
1989.12.1～27	茅ケ崎市入定塚　発掘（富永・大村1990）
1989.12.19～1990.2.12	茅ケ崎市西久保広町遺跡　発掘（大村1998）
1990.1.19～4.10	茅ケ崎市巳待田B遺跡　発掘（富永・大村1990）
1990.2.27～6.11	茅ケ崎市石神遺跡　発掘（富永1990）
1990.3.13～29	三浦市屋志倉遺跡　発掘（屋志倉遺跡調査団1990）
1990.3.19～4.19	横浜市都筑自然公園No.５地点遺跡（横浜市埋蔵文化財センター1991）
1990.4.2～6.20	綾瀬市伊勢山遺跡　発掘（伊勢山遺跡調査団1996）
1990.4.12～6.30	三浦市赤坂遺跡　第３次（赤坂遺跡調査団1992）
1990.4.16～6.17	茅ケ崎市石原B遺跡　発掘（大村1992）
1990.7.17～7.30	三浦市矢作第２やぐら群（三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団1990）
1990.8.17～9.15	三浦市赤坂遺跡　第５次（赤坂遺跡調査団1990）
1991.8.19～9.7	三浦市赤坂遺跡　第６次（赤坂遺跡調査団1991）
1992.3.2～14	三浦市赤坂遺跡　第７次（岡本ほか1994）
1992.7.3～8.5・8.17～28	三浦市赤坂遺跡　第８・９次（赤坂遺跡調査団1992）
1993.5.17～7.13・7.22～9.6	三浦市赤坂遺跡　第10・11次（赤坂遺跡調査団1994）
1993.9.16～26	綾瀬市新道遺跡　発掘（綾瀬市教育委員会1995・綾瀬市1996）

1994.5.9～5.16	海老名市産川遺跡（小宮・中島1998）
1994.7.5～8.31	相模原市矢掛久保遺跡　発掘（岡本・三橋1997）
1994.8.6～31・11.21～1995.3.31	三浦市赤坂遺跡　第13・14次（赤坂遺跡調査団1995）
1994.12.19～1995.1.31	相模原市No.141遺跡
1995.2.1～3.15	三浦市油壷遺跡　発掘（油壷遺跡調査団1995）
1995.2.2～10	相模原市No.84遺跡
1995.2.6～3.31	相模原市橋本遺跡
1995.2.21～3.10	相模原市No.118遺跡
1995.3.13～22	相模原市No.156遺跡
1995.3.28～4.3	相模原市No.147遺跡
1995.4.1～5.19	三浦市赤坂遺跡　第14次（赤坂遺跡調査団1995）
1995.9.25～30	相模原市No.156遺跡
1995.10.1～6	相模原市No.137遺跡
1996.2.13～3.12	相模原市No.195遺跡
1996.3.15～4.7	相模原市No.27遺跡
1996.5.7～8.23	三浦市赤坂遺跡　第16次（赤坂遺跡調査団1996）
1997.3.11～14	海老名市上浜田6号墳（國平1998）

＊編集注：・一部，発掘調査のほかに測量調査や踏査などについても集録した。
・神奈川県内の遺跡については，県名の表記を省略した。
・（　　）内は報告文献の主たる執筆者名と西暦刊行年を示す。岡本先生にかかる文献は「著作目録」を参照されたい。その他については省略した。
・横浜市港北ニュータウン地域内遺跡については，その多くを省略した。横浜市埋蔵文化財センター1990（『全遺跡調査概要』）を参照願いたい。

労働用具

岡本　勇

1　一般的狩猟具の種類と機能
2　主要な漁撈具とその役割
3　磨製石斧と打製石斧

人間は労働することによって，他の動物から区別され，その歴史を創造してきた。労働とは，いうまでもなく人間と自然とのあいだの一過程であり，基本的にはつねに労働用具を媒介として展開される。そして，「遺骨の構造が滅亡した動物種属の身体組織の認識に対してもつのとおなじ重要さを，労働手段の遺物は滅亡した経済的社会構造の価値の判断のために有する」（マルクス）といわれるように，労働手段の遺物，つまり（主として）労働用具は，歴史の研究において大きな役割をしめているのである。縄文時代の人間は，労働用具を主要な武器としながら，自然とたたかい，その歴史をゆるやかではあるがすすめてきた。

ながい縄文時代を通じて，その経済と生活をささえたものは，狩猟・漁撈，および植物採集を中心とする労働活動であった。これらの主要な労働活動に使用された道具，すなわち狩猟具・漁撈具および工具などをめぐって，若干の問題にふれることをここでの課題としたい。しかし，一概に狩猟具あるいは漁撈具などといっても，考古学上の数ある遺物のなかには，用途の不明のものが多く，推定の域をでないものも少なくない。

1　一般的狩猟具の種類と機能

狩猟具として，その名をあげることのできる遺物には，石鏃（せきぞく）・石槍（せきそう）などがあり，また副次的な意味で石斧（せきふ）等がもちいられたこともあったろう。さらに家犬が狩猟のうえではたす役割は，きわめて大きかったにちがいない。

木製の弓　弓矢は，狩猟活動のうえで，もっともゆきとどいた一般的な器具であった。各時期・各地域にわたってほぼ普遍的にみとめられる石鏃は，このことを端的にものがたっている。しかし，もとより石鏃は，矢の一部分にすぎないから，これのみをもって弓矢の本来の機能を十分にしることはできない。

弓は，木または竹でつくられたとおもわれるが，このような植物性の遺物は，泥炭層遺跡や低湿地遺跡などのごくかぎられた条件の場所にしかのこされていない。千葉県安房（あわ）郡加茂（かも）遺跡からは，前期の諸磯a式土器にともなって木製の弓が発見されている[1]。イヌガヤ製の丸木弓で，比較的小形（現長33cm，半身を欠く）であるが，弭（はず）の部分には弦（つる）をかけるための切込みがほどこされている。また，青森県八戸（はちのへ）市是川中居（これかわなかい）遺跡は，晩期に属する泥炭層遺跡であり，

多数の木製品や籃胎漆器を出土したことで有名である。ここからは，朱漆塗木太刀・箆状木器・櫛・腕輪などの木製品とともに，断片をもふくめて十数例の弓が発見されている(2)。これらのなかには，一本づくりの丸木弓と，二本以上の木をあわせた合弓の二種があり，それに朱や黒の漆を塗ったものもみられる。さらに桜の皮や糸をまき，弭りや弭の部分には念いりな彫刻をほどこすなど，一本の弓にそそがれた苦心のほどをしることができる。大きさは，計測できるものについていうと，長さ70cm前後のもの，おなじく110cm・140cm，およびそれ以上のものなどがあり，概して小形の弓（短弓）の多いのが注意される。

是川遺跡出土の弓は，かつてこれが石器時代の作かと人びとをうたがわしめたこともあるほど，精巧に入念につくられている。これらは，爛熟をほこったいわゆる亀ガ岡文化の所産である。晩期の時期に東北地方に発達したこの文化は，縄文時代のなかでも特別な位置をしめるものであるから，是川遺跡の弓をもって，縄文時代の弓一般をおしはかることは，もとよりただしいことではない。しかし，亀ガ岡文化が縄文文化のいきついたすがたであるとすれば，是川の弓もまた縄文時代の弓のいきついたすがたであるとかんがえてよいであろう。

縄文時代後・晩期の骨角器のなかに「弭形角製品」(3) とよばれている鹿角製品があり，ふつう弭とかんがえられている。かなり丹念につくられているものが多く，もしこれがうたがいなく弭であるとすれば，それをつけた弓の立派さを推してしることができよう。もちろん，加茂遺跡やその他でみるような，弭などをつけない簡単なつくりの丸木弓も多数つかわれたではあろうが。

石鏃　やじりのなかには，骨やイノシシの牙でつくったもの（骨鏃・牙鏃）もあるが，ふつう一般に製作・使用されたのは石鏃である。石鏃は，時期や地域によって，そのあらわれかたにいちじるしい偏差があるけれども，ながい縄文時代を通じてのもっとも普遍的な遺物であった。

縄文時代の石鏃は，まれに局部をみがいたものもあるが，すべて打製によるものである。石材としては，黒曜石・珪岩・硬質頁岩・粘板岩・安山岩などのかたくて，打ち欠きやすい石がえらばれており，これらは地方的に特色をみせている。北海道では黒曜石が支配的であり，東北地方では硬質頁岩が圧倒的に多い。また，近畿地方や瀬戸内海沿岸では，ほとんどがサヌカイトとよばれる安山岩にかぎられている。各時期を通じて，原料の供給地とその播布範囲には，一定の枠があったものとかんがえられる。

図1　縄文時代の弓　右・黒漆合弓・長さ140cm，左・丸木弓・現長56cm（青森県是川遺跡，芹沢長介による）

石鏃には，石材の差をこえて，さまざまなかたちがしられている。まず，無茎と有茎のものがある。いわゆるなかごをつくりだした有茎石鏃は，無茎のものにくらべると，着柄に効果的であり，道具としては一歩すすんだかたちである。東北地方の北半では，すでに前期にあらわれるが，一般化するのは後期になってからである。無茎の鏃には，二等辺三角形を呈したものがかなり多く，またその底辺にあたる部分を彎曲させたものも少なくない。彎曲のいちじるしいものに鍬形鏃があり，これは，早期の押型文土器にともなう。さらにそれがいっそう極端になったかたちの長脚鏃は，長野県諏訪湖底の曽根遺跡[4]（早期初頭）などから発見されている。また，将棋の駒のようなかたちをした五角形鏃は，関東・東北地方の早期にみられるなど，一般に早期には，前・中・後の時期に比較してかたちのバラエティが目だつ。北海道のある時期にあらわれる石刃鏃や，九州の一部などでみられる有刺鏃は，特殊な技法によってつくられたものであり，その文化的な脈絡が大陸との関連において問題とされている。かたちの大小も注意されてよいだろう。ふつうは長さ2cm前後の大きさのものが多いが，関東・中部地方の早期の古いころには，きわめて小形（1cm未満）の三角形鏃があらわれる。一方，中期にはかなり大形のものがしられている。後・晩期には，いくつかのかたちの石鏃がセットとして出現する。対象とする獲物の種類によって，矢を区別したのかもしれない。

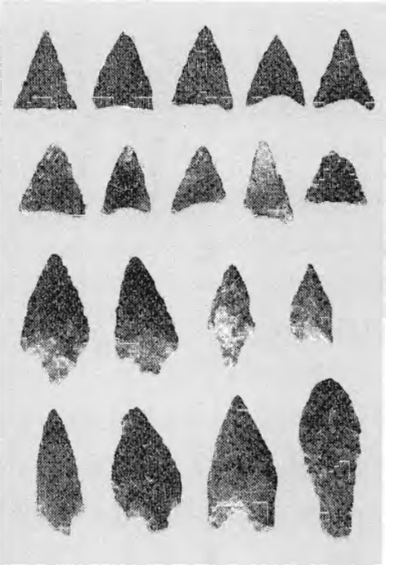


図2　石鏃
上・早期（神奈川県鵜ガ島台遺跡），
下・後期（新潟県上三光遺跡）縮尺1/2

まえにもふれたように，石鏃のあらわれかたには時期や地域による差がいちじるしい。たとえば，関東地方にかぎっていえば，鵜ガ島台式土器・諸磯b式土器・安行ⅢC式土器などの時期には，比較的多量の石鏃がみられる。多量の石鏃の出現を狩猟活動の盛行とのみ速断することはできないが，十分にかんがえてよい問題だろう。また，関東のうちでも，茨城・千葉方面には，石鏃の出土は比較的まれであり，その理由の一つには，石材の供給地からとおいということがかんがえられる。また，骨鏃や竹鏃の使用を考慮にいれなければならないし，さらにその地域での漁撈活動のしめるウェイトを評価すべきであろう。

石鏃は当然のことながら，矢柄に固着するわけであるが，このばあいアスファルトを利用した例が，東北地方を中心にいくつかしられている。アスファルトは油田地帯で採集された天然のものであり，その利用範囲は多岐にわたっている。また，石鏃を着柄するばあい「根ばさみ」と称する骨角器に嵌入し固定させることが，後期以降東北地方や東海地方でしばしばおこなわ

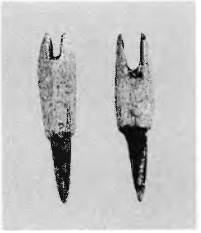


図3 根ばさみ（宮城県沼津貝塚，伊東信雄による）縮尺1/2

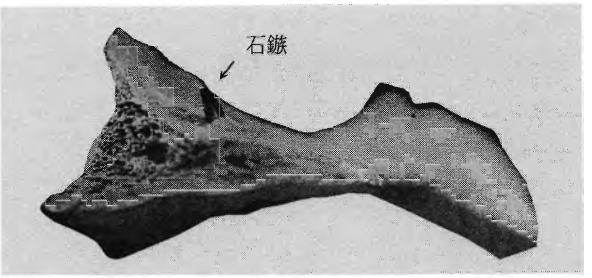


図4 石鏃の射こまれたイノシシの骨（静岡県蜆塚貝塚，内藤晃による）縮尺1/2

れた。なお，宮城県牡鹿郡沼津貝塚[5]などからは，石鏃（無茎）が鹿角製の燕形銛頭（つばめがたもりがしら）の先端についたままで発見されているが，このばあいの石鏃は，矢の部分ではなく，あきらかにモリの部分であり漁撈具の一部であったわけである。

弓矢の機能 弓矢は，狩猟具としてどれほどの機能をもっていたであろうか。かつて，愛知県渥美郡伊川津貝塚から出土した人骨（成人男子）の尺骨には，珪岩製の石鏃が射こまれたままの状態でのこっていた[6]。また近年，浜松市蜆塚（しじみづか）貝塚よりは，イノシシの坐骨の一部におなじく安山岩製の石鏃の突きささった資料が出土した[7]。このほかにも類例が一，二しられている。蜆塚例を報告した内藤晃は，その資料にもとづいて，「石鏃を射出した狩猟者は猪の真横よりほぼ一五度の角度だけ後方に位置し，しかもそれは標的に対してかなり接近していたことが推定される」とのべている。たとえ，いかに至近距離から矢が発射されたとはいえ，皮や肉をつらぬいて骨にまでふかく達するほどの威力を，弓矢がそなえていたのだということを，これらの資料は雄弁にものがたっている。そして，これだけの威力もっておればこそ，弓矢は狩猟具としての――あるいは武器としての――役割を十分にはたすことができたのである。しかし，この矢を射たれたイノシシは，骨にまで達する深手をおいながらも，それは致命傷となることなく，その後かなりの期間生命をたもっていたことが，骨の増殖からうかがわれるという。伊川津貝塚の人骨のばあいも，生前に石鏃が摘出され，その先端部のみが骨内にふかくのこされていた。この事実はまた，弓矢のもつ機能の限界をおしえている。つまり，矢が急所に命中し，致命傷をあたえないかぎりは，獲物を射とめることは困難なわけである。狩猟者たちは，どこが動物の急所であるか，おそらく，伝達された知恵として十分に認識していたであろう。

弓矢は，本来一匹の獲物を対象とする個人的な狩猟具として登場し，その作業は単独または少人数の組によってすすめられたとかんがえられる。早期の段階の集落構成人員は，10－20人前後の規模であったと推定されるが，この集団のうちで狩猟に参加できる技術と資格をもったものは，おそらく数人以下にすぎなかったであろう。この少人数のハンターでは，わなやおとしあなのような計画的な狩猟はむずかしく，また巻狩（まきがり）などの大規模な集団的な狩猟はほとんど不可能である。したがって，弓矢や槍による個人的な狩猟がもっぱらとならざるをえない。早期に属する石鏃には，かたちのバラエティが目だち，また出土数が比較的多いのは，そのよう

な事情と関連があるのではないだろうか。しかし，前期・中期以降にみられる集落の膨張は，その内部により多数のハンターを擁し，さらに計画的なあるいは集団的な狩猟の確立をも可能にしていったと想像される。そして，集落と共同体の膨張は，狩猟活動の多様化による収穫量の増大にささえられながら，両者はいわば車の両輪となって社会の進歩をうながす一つの力となったのである。

槍の存在　一般に槍は，弓矢とならぶ狩猟具・武具であり，とくに弓矢の出現する以前，つまり旧石器時代（後期）にはさかんな発達をとげた。日本においても，先土器時代のある段階に槍さきとかんがえられる尖頭器が盛行し，「尖頭器文化」の名称をうむにいたっている。しかし，弓矢がひろくゆきわたっていた縄文時代には，槍の存在はいたって影のうすいものであった。

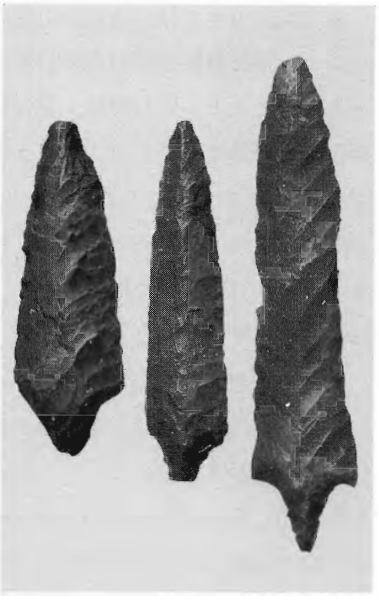


図5　有舌尖頭器（愛知県二本木遺跡，紅村弘による）縮尺2/3

いわゆる石槍の発見例は，北海道・東北地方ではやや目だっているが，関東．中部地方ではまれであり，しかもそれらは主として早・前・中の各期にかぎられている。また西日本では，確実なものはほとんど報告されていない。甲野勇は，「此様な分布状態は，縄文式の時代に北方へ行くほど，石槍の使用が必要とされた事実を示すものである」といっている[8]。槍には，「突き，刺す」という機能があるが，その操作は手持槍のばあいにしろ，投槍のばあいにしろ，身ぢかな範囲に限定される。したがって，比較的うごきのおそい大きな動物――たとえばクマやイノシシなど――に対して，とくに効果があるといえよう。石槍の分布は，あるいは動物相のありかたと関連があるのかもしれない。

縄文時代の石槍は，いずれも両面加工で，かたちは木ノ葉形を呈するものが多い。北海道出土のものには，大きな柄（茎）をつくりだしたものがある。石材には，他の剥片石器一般とおなじく黒曜石（北海道），硬質頁岩（東北）などが利用されている。また，関東・中部地方でまれに発見される中期の石槍には，頁岩・粘板岩がつかわれており，そのつくりは概してあらい。最近，注意されるにいたった有舌尖頭器は，先土器時代の終末期から縄文時代のはじめにかけて出現した石器であり，有茎石鏃の大形化したようなかたちをしているが，これらは槍さきとして役だてられたものとおもわれる。石槍の名でよばれるものが，すべて槍さきであったかどうかは，大いに疑問である。槍さき形の石器が短剣として利用されるばあいも，諸外国の例から推してかんがえられなくはない。

家犬の役割　縄文時代の貝塚からは，イヌの骨格がしばしば発見される。しかも，そのなかには，あさいピットを掘って丁重に埋葬した例がかなり数多くしられている。これは，イヌが他の動物とは異なったあつかいをうけていたためである。ながい縄文時代を通じてイヌは，唯

一の家畜であった。そして，この縄文人にとってよき伴侶であった家犬は，とりわけその資質からみて，狩猟のさいに重要な役割をはたしたとおもわれる。狩猟活動のうえで猟犬のしめる位置を，あらためておもいおこすべきであろう。

縄文時代のイヌは，比較的小形のものがほとんどで，今日の柴犬などはこの血統に属するらしい。日本に独特なこの小形のイヌは，早期のはじめから存在し，かなり普及していたことがあきらかである。昭和26年，愛知県渥美郡吉胡（よしご）貝塚（後・晩期）の発掘が，文化財保護委員会の主催でおこなわれたが，このさい埋葬されたものをふくめて10体分のイヌの骨格が出土した(9)。一方，おなじこの発掘では33体の人骨がえられている。この数字にもとづけば，イヌと人間の割合は，10対33ということになり，きわめて多数のイヌが飼育されていたことになる。もとより，このような単純な比較は，事実をただしくつたえるものとはおもわれないが，一つのバロメーターとはなるだろう。

狩猟の対象　縄文人にとって狩猟の対象となった獲物は，いったいどんな種類の動物だったのだろうか。貝塚には，かれらが食料に供した動物の遺骨がふくまれている。もっとも一般的に，しかも数多くみいだされるのは，イノシシとシカであり，大半の貝塚では約9割以上がこの両者でしめられる。ほかに哺乳動物としては，ウサギ・タヌキ・キツネ・アナグマ・テン・サルなどが目だち，およそ食料となりうるものならば，なんでも捕獲していたような印象をうける。また鳥類としては，アホウドリ・マガモ・キジなどがある(10)。貝塚における遺骨がしめすとおり，狩猟のおもな対象はイノシシとシカであった。この二つの獣は，当時多数棲息していたわけであるが，しかしそれとても，繁殖率をうわまわるほど捕獲すれば，急激に減少せざるをえない。幼獣や雌の骨がわりあい少ないという事実から，意識的に乱獲をさけていたとみるかんがえがあるが，たしかに狩猟技術のすすんだ段階では，そうした統制が必要となってくるだろう。

2　主要な漁撈具とその役割

漁撈は，狩猟につぐ重要な労働活動であるが，周囲を海でかこまれた日本のばあいには，とりわけ大きな役割をになっていた。縄文時代における漁撈，つまり（主として）魚類の捕獲には，およそ三つの大きな方法があった。釣ること・突き刺すこと，網をもちいることの三つである。ほかに，小さな河川などではやな（・・）や，うけ（・・）による漁法もおこなわれたとおもわれるが，それを証明する遺物はいまのところ皆無である。ここでは，三つの漁法に関連ある道具，すなわち釣針，モリ・ヤス，土錘・石錘などを中心に説明をすすめていきたい。

釣針の諸相　釣りは，いうまでもなく釣針を不可欠の道具としておこなわれる。釣針はシカの角を材料としてつくられたが，まれに骨製のものや石製のものがある。鹿角製釣針には，いろいろなかたちのものがしられている(11)。まず，大きくみて，結合式のものと，一本づくり

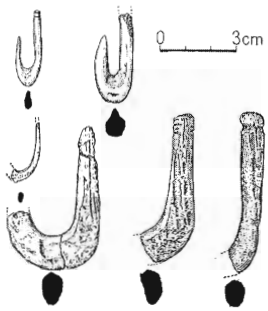


図6　早期末の鹿角製釣針
（神奈川県吉井貝塚，神沢勇一による）

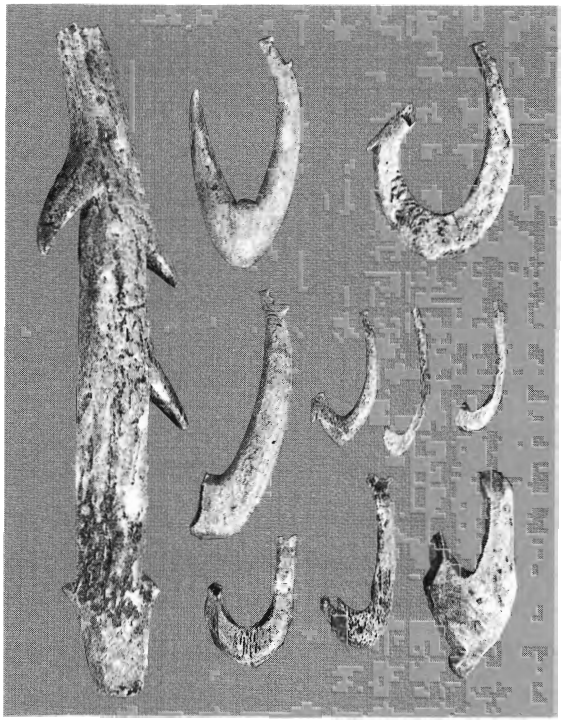


図7　後期の釣針とヤス＝左端
（神奈川県堤貝塚）縮尺1/2

のものがある。前者は，適宜に細工した２本の棒をV字状にむすびあわせたもので，ふつうの釣針より製作は容易であるが，魚を釣りあげにくいという機能上の難点をもっている。青森県八戸市赤御堂（あかみどう）貝塚（早期後半）からは，この型式の釣針が数例出土しており，一般に早・前期に多くみられる。一本づくりの釣針は，鹿角を半截し扁平にしたものから，順次つくりあげていくのであるが，その製作はなみたいていではない[12]。大きさは，４－６cm程度のものがふつうであるが，なかには10cmにもおよぶ大形のものや，２cmにもみたない小形のものもみられる。先端には，かえし（かぎ）のついたものと，つかないものとがあり，一般的にいえば，後者は古い時期のものに多い。かえしは魚を確実に釣りあげるための装置であり，内がわにつけられるのがふつうであるが，なかには外がわにあるものや，またまれに両がわについたものなどもみられる。しかし，かえしの部分が精巧に，しかもより複雑につくられた釣針は，主として後期以降にあらわれるもので，これらは釣糸を結縛する部分（つぶし）にも，念いりな加工をみせている。

このような釣針のかたちや種類のちがいは，一つには年代の差にもよるが，また一つには対象とする魚類の生態とも関係があったとおもわれる。東北地方の太平洋岸や関東地方にはたくさんの貝塚があり，そこからは多数の釣針が発見されている。しかし，貝塚ならばどこからでも釣針が出土するというわけではない。現在の海岸線から，とおくへだたった場所にある内湾性の貝塚からは，釣針はもとより魚骨の発見さえまれである。潮の干満の差のいちじるしい内湾部の遠浅の海には，釣りの対象となるような魚類はあまり棲息していなかったためであろう。釣針が比較的目だって発見されるのは，釣りによる漁法がもっとも効果的な水域の付近にいとなまれた，外湾性の貝塚からである。

近畿地方以西からは，釣針の発見はきわめてまれである。いまのところ，瀬戸内海の児島湾岸の貝塚などから，数例の出土が報告されているにすぎない。一般に西日本には漁撈具の発見がとぼしいが，これは一つには，それらを遺存する貝塚遺跡が少ないためであろう。

モリとヤス　魚を突き刺すためにもちいられた道具には，モリ（銛）とヤス（稽）がある。ふつう獲物に投げつけて突き刺すものをモリとよび，柄をもったまま突き刺すものをヤスとよんで区別しているが，その先端部のみがのこされているにすぎない考古学上の遺物のばあいには，厳密な区別はむずかしい。

しかし，紐をむすぶための突起や孔をもった刺突具は，離頭（りとう）式銛頭とみてよいものであり，獲物に投げつけて命中したさい銛頭は回転してぬけなくなり柄からはなれるが，その銛頭にむすばれた紐は手もとにながくのこっているので，その紐をひきよせることによって，獲物は難なくとらえられる。このような手法のモリが出現するのは，後期以降のことであり，とくに東北地方（三陸沿岸）にいちじるしい発達をみせた。燕形銛頭とよばれるものは，その代表的なもので，尾部がながく反り，燕の尾のようにみえることから，その名がある。この燕形銛頭には，先端に石鏃や牙鏃をつけて，いっそう鋭利な効果をねらったものがある。このような道具の使用によって，大形の魚や海獣の捕獲は，きわめて容易になったにちがいない。

いわゆるヤスには，かぎのたくさんついたもの，一つあるいは二つだけのもの，あるいはそれのまったくないものなど，さまざまなかたちがある。そして，これらのうちには，軸のまっすぐなものと，いくらか反ったものとがあり，後者のばあいには2本ないし3本の組合せがかんがえられる。また，横須賀市吉井貝塚[13]（早期末）で多数出土したヤスは，先端がちょう

図8　石鏃のついた燕形銛頭（宮城県沼津貝塚，伊東信雄による）縮尺1/2

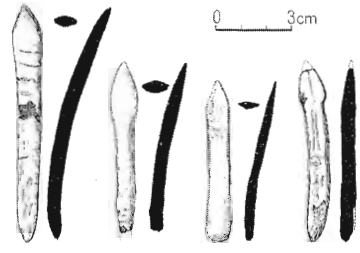


図9　ペンさき形をしたヤス（神奈川県吉井貝塚，神沢勇一による）

図10　ヤスの刺突痕ある魚骨
上・マダイの下顎骨（石川県堀松貝塚），下・スズキの鰓蓋主骨（千葉県南貝塚）金子浩昌による

どにぶいペンさきのようなかたちをしており，扁平な軸はかなり反っているので，おそらく柄にたいして斜めに着柄されたものと推定される。ヤスの多くは鹿角でつくられたが，しかしかぎのない単純なかたちのものには，シカの肢骨などを材料としたものがある。また，エイの尾骨を利用した例がかなりしられているが，これは鋸歯状にならんだ小さなトゲが，かぎにかわる役目をもっていたからであり，さらにそれにふくまれている自然の毒が魚類に有効に作用することをねらったものといわれている。北海道と東北地方北部出土の剥片石器のなかに，石銛とよばれているものがある。一見すると石槍に似ているが，大きな茎をつくりだしており，たしかにモリとみることも可能である。地方的な特色をもった道具といえよう。

一般に，かぎのある立派な刺突具があらわれるのは前期以降であり，とくに後・晩期に盛行する。しかし，内湾性の貝塚から発見されるヤス類は，そのようなことにかかわりなく，ほとんどはかぎのない単純なかたちのものである。これは，内湾に棲息する魚類ががいして小形であることと関係があり，水域環境による漁具の差が，このばあいにもうかがわれるわけである。

網の存在　釣りや，突き漁は，原則として１匹の獲物を対象とし，単独でもおこないうる。いわば個人漁である。これに対し，網による漁撈は，たくさんの魚をいちどきにとることを目的としたもので，その操業は集団的にすすめられる。この意味からも，網の使用は，きわめて能率的な高度の漁法であったといえよう。網そのものの遺存例はしられていないが，それの存在を間接的にしめすものとして，土錘・石錘があり，しかもその発見はきわめて豊富である。また，縄文式土器の縄文の発達からうかがわれるように，繊維技術はかなりすすんでいたことがあきらかであるから，網の普及は当然のこととかんがえられる。漁網には，水域の条件に応じていくつかの種類があったろうし，またその使用法も多岐にわたっていたにちがいない。土錘・石錘のでる遺跡と，付近の地形のありかたとは，きりはなしてかんがえることができない。神奈川県小田原市付近には，石錘の多数発見される遺跡がいくつかあるが，海岸にちかい遺跡ほど大形のおもい石錘を多くだす傾向があるという。水域の条件に応じて，石錘のありかたが異なっていたわけである。

錘（おも）りには，土製のものと石製のものとがある。前者は土器の破片を利用し，両端に糸かけをつくった簡単なもので，早期にもまれにみられるが，漁網用の錘りであるとおもえるようなあらわれかたを

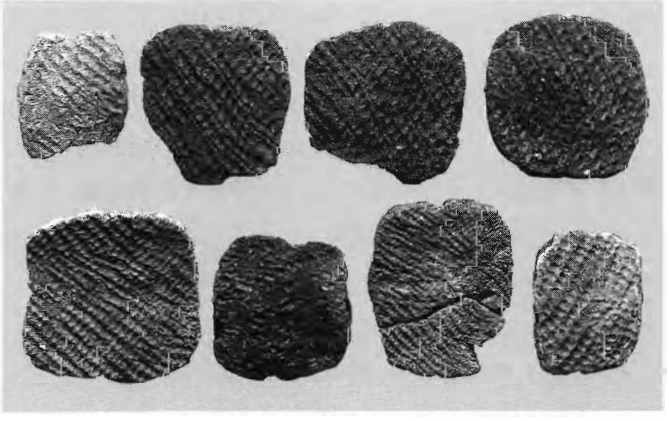


図11　土錘　前期に属する竪穴住居址の一隅からまとまって出土した，うち三個は同一の土器個体でつくられている（神奈川県西方貝塚）縮尺1/3

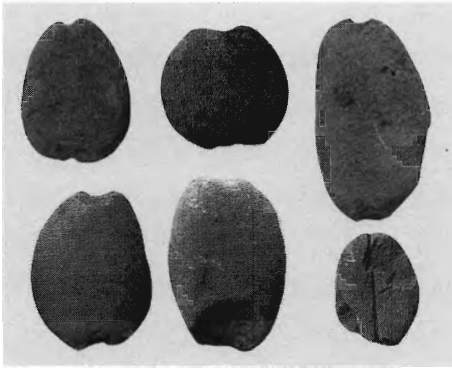


図12　石錘（神奈川県清水原遺跡）縮尺 1/3

するのは，前期以降である。もちろん地域的な偏差は大きい。また，後・晩期には，球状の土錘が一部に出現する。石錘もまた，手ごろな自然礫の両端に打ち欠きをくわえただけのものにすぎない。早期の後半以降一貫してみとめられるが，とくに多量に出現する時期と地域がある。また，山間部の河川にのぞんだ遺跡からも，しばしば発見される。このなかには，すり切りによるほそい溝をつけて糸かけとしたものがある。ながれのはやい山間部の河川で漁網をつかうさいには，おもくて堅牢な石錘が適していたのであろう。

土錘のあらわれかたと魚骨の出土から類推すると，海岸部ではとくに中期の中ごろ以降，漁網の使用がかなりさかんにおこなわれたとおもわれる。漁網を利用しての漁撈活動には，組織的な協業が必要であり，また丸木舟などの重要な労働用具をつかわなければならない。丸木舟は漁網の設置などのさいだけでなく，釣りや突きをおこなうばあいにも，なくてはならないものであったし，またイルカやアシカなどの海獣をいけどるときにも，不可欠の役目をになっていた。

漁撈による獲物　貝塚からは各種の漁具とともに，縄文人によって食料に供された魚類の骨やうろこが多量に発見される。漁撈の対象となった魚類は，じつに数10種の多きにのぼっている。

クロダイ・マダイ・ブダイ・スズキ・コチ・マグロ・ボラ・イワシ・アジなどは，そのうちもっとも多く捕獲されたものである。もちろん，これらは棲息する水域がいくらか異なっているから，どの貝塚からも一様に出土するというわけではない。内湾性の貝塚からは，クロダイ・スズキ・コチ・ボラなどが比較的目だって発見され，また外湾性の貝塚からは，そのほかにマダイ・ブダイ・ブリ・サメ・マグロ・カツオなど，海洋魚をふくむ多くの種類が出土する。また，淡水産の貝よりなる貝塚（主淡貝塚，純淡貝塚）からは，まれにコイやフナなどが発見される。イルカ・アシカ・アザラシ・クジラなどの海棲の獣類も，漁撈の大きな対象であった。とくにイルカはひんぱんに捕獲されたらしく，その遺骨の発見される量はかなり多い。横浜市称名寺（しょうみょうじ）貝塚B地点[14]（後期古）からは，イルカの頭骨が累々とかさなって発見されたことがある。また，クジラのばあいは，直接これを捕獲したのではなく，よくいわれるようにシャチなどにおわれて浅瀬にうちあげられたものを，大ぜいの力でとらえたのであろう。外湾性の貝塚からは，ときおりクジラの骨が出土するが，ほとんどすべては脊椎骨の一部であり，しかも加工されているものが多い。おそらくクジラは，海岸で解体処理され，部分的に各集落にもちこまれたのであろう。

山内清男は，東北地方を中心にさかえたいわゆる亀ガ岡文化の要因として，サケ・マスの豊富な漁獲をかんがえている[15]。東北日本の縄文人は，北アメリカ西海岸の原住民のように，ながいあいだサケ・マスを主食にしていたのではないかというのである。このかんがえは，いまだ確証されていないが，たしかに産卵期に大挙して川をのぼるサケ・マスは，いとも簡単にとらえることができるし，またいろいろな方法でながく貯蔵することも可能である。サケ・マスをめぐる問題は，今後，発展させなければならない課題の一つである。

貝類の採集も，ひろい意味の漁撈といえるだろう。規模の大きな貝塚の貝類は，ふつう砂泥性のものを主体としている。マガキ・アサリ・ハマグリ・シオフキ・ハイガイ・ヤマトシジミ・キシャゴなどは，遠浅の砂泥質の海に棲息し，多量に群棲するのがならわしである。したがって，これらの採集は，いたって容易であり，またほとんど道具らしいものを必要としないから，もっぱら女性や子どもが従事した作業であるとかんがえられる。また，アワビやサザエなどの岩礁性のふかい海にすむ貝類の採集も，今日の海女にみるように，女性でも十分におこないうる労働である。狩猟や漁撈などのはげしい労働を必要とする仕事には，男性があたり，貝類や植物性食料の採集などの軽労働には女性がたずさわるといった自然的分業の形態は，縄文時代の社会をつらぬく法則の一つであった。

3　磨製石斧と打製石斧

縄文時代を通じて，石斧はもっとも一般的な道具であり，いかなる時期，いかなる地域にも普遍的にみとめられる。しかし，いちがいに石斧といっても，まず磨製と打製の別があり，さらに各種の形態にわけられることは，周知の事実である。いったい，石斧にはどんな種類があり，またそれは主として，なににもちいられたのであろうか。

磨製石斧　磨製石斧とよべるものには，アツズ（Adze）またはアックス（Axe）としての機能をもつ一般的なもののほかに，両頭石斧，多頭石斧，環状石斧などの名でよばれるものが

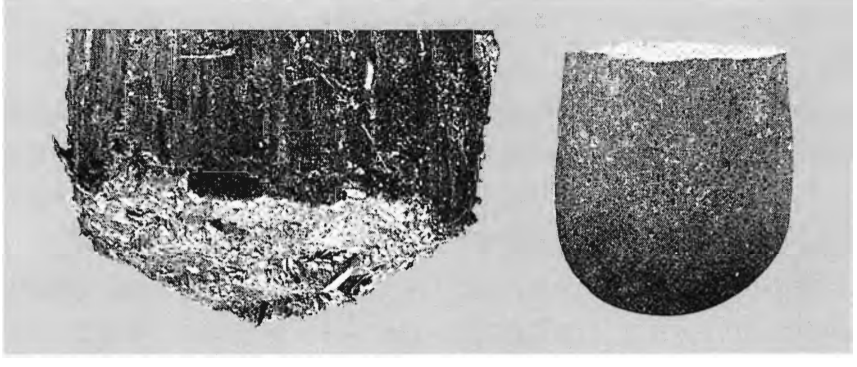


図13　切り口のある木柱と磨製石斧（福井県鳥浜貝塚，立教大学蔵）縮尺1/2

ある。しかし，これらはかなり特殊なもので，その出現する時期・地域もかぎられている。多頭石斧や環状石斧は，中部地方西部に多くみられ，晩期に属するものが大部分である。棍棒の頭に固着し，おもに武器としてもちいられたとかんがえられているが，副次的に狩猟のさいなどにも役だてられたであろう。

一般的な磨製石斧としては，断面が扁楕円形を呈するものや，棒状斧（遠州形），あるいは定角式石斧などがある。断面が扁楕円形を呈するものは，ほとんどが両刃であり，すでに早期からみられる。棒状斧は，関東・中部地方では前・中期に発達するが，東海地方では後・晩期に多く，俗に遠州形石斧の名でよばれている。定角式石斧は，後・晩期の代表的な石斧である。なお，関東地方の早期はじめの撚糸文土器などにともなう礫器のなかには，刃部のみをみがいた石器があり，かつて局部磨製石斧の名称があたえられていた。これらも，機能的には石斧とみてよいだろう。また，いわゆる擦切石斧は，北海道・東北地方に分布し，緑色を呈した比較的やわらかい石が材料としてつかわれている。

ふつう石斧は機能的に，柄と直角に刃のついたもの（Adze）と，柄と平行に刃のついたもの（Axe）にわけられ，さらに一般的には片刃のものはアッズ，両刃のものはアックスと区別されている。もちろん，これですべてを律するわけにはいかない。棒状斧のような断面のまるいものは，今日のつきのみのように着柄されたとするかんがえもある。石斧の機能を一定の形態，ないしは概念からのみみちびきだそうとするのは，ただしいことではない。柄のついたままの状態や，ソケットにはまったままの石斧など，その機能があきらかにわかるばあいは別として，多くは的確な判定をくだしがたい。しかし，いえることは，磨製石斧は主として工具であったということである。石斧は，樹木の伐採からその処理にいたるまでの工程に，なくてはならない道具であった。縄文時代においても，建築物に丸木舟に，その他多くの面で木材を利用することは，きわめていちじるしかった。このばあい，切りたおしたり割ったりするものとしては，Axe（まさかり）がつかわれ，けずったりそいだりするものとしては，Adze（ちょうな）がもちいられたとおもわれる。さらに，仕上げの段階でのこまかい作業には，ナイフとして各種のスクレイパーが利用されたとみるべきである。

磨製石斧は，みがくという関係からあまりかたい石材をつかうわけにはいかない。蛇紋岩・砂岩・閃緑岩などの比較的やわらかい石がえらばれている。したがって，剥片石器にみるようなするどい刃はもたない。しかし，それとても威力は，今日のわれわれの想像以上である。福井県鳥浜貝塚（前期）からは，多数の木柱が発見された[16]が，その先端の切り口はかなり鋭利であり，直径12，3cmの木でもわりあい簡単に切りたおされたらしいことがうかがわれる。

打製石斧　粘板岩や頁岩などの石を打ち欠いて，比較的簡単につくられた打製石斧は，磨製石斧ほど一般的ではないが，その発見はかなり目だっている。とくに，中部・関東地方の中期には，爆発的な増加をみせる。打製石斧のうちには，撥形・短ざく形・分銅形などの形態がしられているが，これらは時期による差でもある。短ざく形は中期に多く，分銅形は後期にかぎ

られる。

打製石斧は，どうみても工具とはかんがえられない。古くからいわれているように，これは土掘り具とみるべきであろう。竪穴住居やおとしあなを掘るさいには，もっとも効果的な道具である。しかし，役割はそれだけではなかったにちがいない。

中部・関東地方の中期に多量に出現する打製石斧をめぐって，農耕用の石鍬というかんがえが展開されたこともあったが，しかし問題は未消化である。おそらく，爆発的に増加した打製石斧は，球根類の採集という食料獲得の方法が，大きなウェイトをもって登場し，展開したことと関連があるのではないかと想像している。

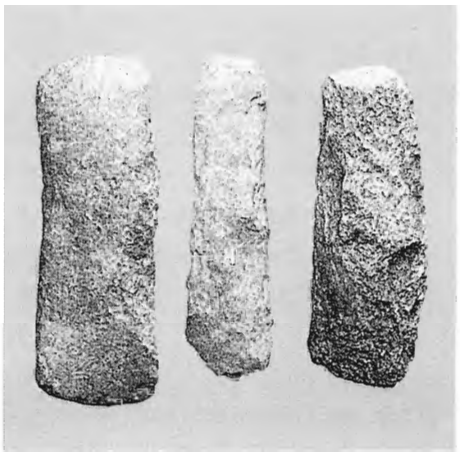


図14　短ざく形打製石斧（神奈川県大正坂遺跡）縮尺1/3

縄文時代の労働用具としては，以上にとりあげたもののほかに，なお数多のものが存在していたであろう。それらの機能と用途をあきらかにし，他の労働用具との諸関係を追求していくことは今後の課題である。また，さらに労働用具の所有形態などの点についても，単純な結論を求めてはならないと思う。労働と生産の全過程のなかに正しく位置づけていくことが必要である。

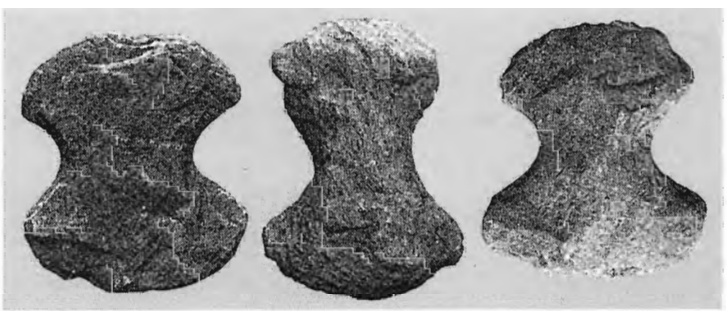


図15　分銅形打製石斧（神奈川県久保谷戸遺跡）縮尺1/3

(1)　松本信広他『加茂遺跡』三田史学会（昭27）

(2)　喜田貞吉・杉山寿栄男『日本石器時代植物性遺物図録』（昭７）

(3)　甲野　勇「弭形角製品に就いて」『考古学雑誌』29―９・10（昭14）

(4)　藤森栄一「諏訪湖曽根の石器について」『日本考古学協会第23回総会研究発表要旨』（昭34）

(5)　伊東信雄『沼津貝塚出土石器時代遺物Ⅰ・Ⅱ』東北大学日本文化研究所（昭37・38）

(6)　鈴木　尚「日本石器時代人骨の利器による損傷について」『人類学雑誌』53―７（昭13）

(7)　後藤守一・内藤　晃他『蜆塚遺跡―その第一次発掘調査―』浜松市教育委員会（昭32）

(8)　甲野　勇『図解先史考古学入門』山岡書店（昭22）

(9)　後藤守一・長谷部言人他『吉胡貝塚』文化財保護委員会（昭27）

(10)　直良信夫『古代人の生活』至文堂（昭38）

(11)　甲野　勇「日本石器時代産釣針」『古代文化』13―3（昭17），江坂輝弥「日本石器時代における骨角製 釣針の研究」『史学』31―1・4合併（昭33）
(12)　金子浩昌「縄文時代における釣鈎の製作」『物質文化』3（昭39）
(13)　神沢勇一「横須賀市城山第一貝塚出土の骨角牙器・貝製品（1）」『横須賀市博物館研究報告』6（昭37）
(14)　吉田　格「横浜市称名寺貝塚」『東京都武蔵野郷土館調査報告書』1（昭35）
(15)　山内清男「日本先史時代概説」『講談社　目本原始美術』1（昭39）
(16)　鳥浜貝塚調査グループ「福井県鳥浜貝塚の調査」『日本考古学協会第27回総会研究発表要旨』（昭38）

（1965年7月　『日本の考古学』Ⅱ　縄文時代　河出書房新社）

＊編集注：初出文献の縦組みを横組みとした。再録にあたっては，漢数字の一部を算用数字に改めた。また，注文献の表記，および挿図の縮率の一部を改めた。

縄文時代の集落をめぐって

岡　本　　勇

1．はじめに
2．集落址研究の回顧
3．集落址研究の視点
4．竪穴住居の復元
5．住居址・住居址群・集落址の研究

1．はじめに

縄文時代の集落について，大きく二つに分けて話しを進めたいと思います。一つは縄文時代の集落ないし集落址研究をめぐる問題。もう一つは，現在私達が携わっております横浜市港北ニュータウン地域内の，縄文時代集落址の発掘例を中心にした問題です。考古学研究の上で集落址のもつ意義についてまず考えてみたいと思います。いうまでもなく考古学は，歴史学の一分野に属します。その考古学のなかで，当時の社会がどんな社会であったか，また社会の仕組みがどうであったかなどの問題は，とうぜんのことながら遺跡，遺物の面から考えていかなければなりません。その遺跡，遺物のなかで，もっとも有効な資料として，まず集落址があげられます。ついで埋葬その他の研究があるでしょう。したがって，縄文時代の集落址の研究は，なによりもまずその時代の社会の仕組み，あるいは当時の人間の集団がどういうものであったかを追求していくための手だてである，といっていいだろうと思います。よく集落を，人文地理学的な観点からとりあげる場合もありますが，これは私たちの研究とは一応別であります。

また近年では，文化人類学，あるいは社会人類学の領域で，未開社会，原始社会の構造がさかんに問題にされており，活発な発言が聞かれもいたします。そこでは，具体的な民族例にもとづき，洗練された理論でのまとめがなされております。私たちに関係のあるものとしては，たとえば，『季刊人類学』という雑誌がありますが，このなかに大林太良氏の，「縄文時代の社会組織」という膨大な論文があります(編注1)。しかし，この文化人類学なり，社会人類学の側からの発言というものは，歴史学ないし考古学の立場で社会構造をあきらかにするということと比べた場合，一定の限界があるのをみとめざるをえません。その限界とは，人類学の場合は，個別的な事例を，ある一定の理論にもとづいて，段階的に配列しているというような傾向をふくんでいることです。したがってそこには，いわゆる歴史性が欠如しています。私たちは，文化人類学や，社会人類学の成果から，多くのことを学ばなければなりませんが，そのさいに，一定の限界のあることをわきまえておくべきだと思います。

いま，私たちにとって必要なことは，縄文時代の社会を歴史的に，発展的にみていくことであります。しかし，そうはいうものの，ここでどれだけその話しを具体的に展開できるか。卒

直にいって，自信はありません。

2．集落址研究の回顧

ところで，縄文時代の集落址研究が，どのようにおこなわれてきたかを，おおまかにふりかえってみたいと思います。

敗戦を境にして考古学研究は大きく変わるわけですが，敗戦前の場合をみますと，集落址研究はまだ，軌道に乗っていたとはいえません。むしろ，集落址の単位をなす個々の住居址の研究が主流であったといって差し支えありません。大正15年に東京大学の人類学教室が，千葉県市川市の姥山貝塚を組織的に発掘し，20数戸の竪穴住居址を掘り出しました(編注2)。これは竪穴住居址が本格的に発掘された最初の例であるとともに，住居址研究の第一ページを飾るにふさわしい仕事でありました。それ以後各地で住居址の発掘があいついでおこなわれ，年代的な差異や，いくつかのタイプのあることなどがわかってきました。

こうしたなかで住居址の研究に大きな足跡を残されたのは，後藤守一氏であります。後藤氏は，『人類学先史学講座』のなかで，「上古時代の住居」(編注3) についてまとめております。そし

第1図　C—16・17遺跡（中期）

て，その時点で発掘された縄文時代の住居址を網羅し，そこから考えられる問題を総ざらいに提起しております。また，その住居址の集合体である集落址にも目を向けておりますが，「塊村」というような言葉が使われていることからもわかるように，まだ人文地理学的な理解の範囲を大きくこえてはおりません。

しかし，後藤氏の，集落址研究にたいする理解には，なみなみならぬものがあり，敗戦後の調査のなかでは，登呂遺跡（静岡市），瓜郷遺跡（豊橋市），蜆塚遺跡（浜松市）などで，つねに集落という観点から遺跡をとらえ，発掘していくという態度が貫かれていました。この点は，とくに声を大にしておきたいと思います。

第二次世界大戦後の集落址研究で大きな位置を占めるものに，和島誠一氏の業績があります。和島氏は今日の考古学上の集落址研究の，いわば基礎を築いた方であります。敗戦後間もないころに発表されました「原始聚落の構成」(編注4) という論文がありますが，これは今日，古典的な意味を一方でもちながらも，依然として光を放っています。縄文時代の集落に限っていいますと，和島氏はそのなかで，埼玉県の水子大応寺貝塚を例にあげて，個々の住居を結合する場としての集落を重視しています。そして，その結合体である，共同体を前面に出して考えています。

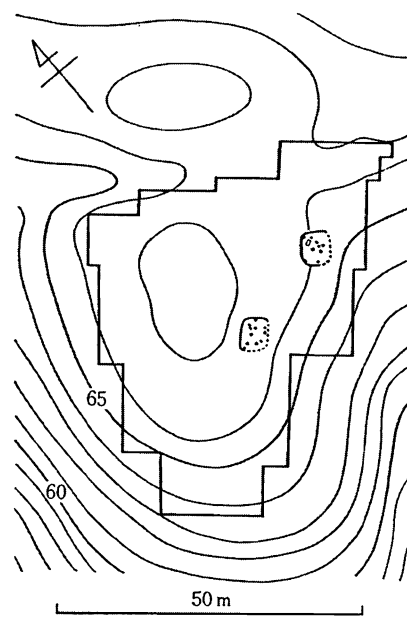
この和島氏の研究は，その後昭和30年横浜市港北区の南堀貝塚において，さらに具体的に展開されます。ここでは，縄文時代前期の集落址を完掘し，そして広場を囲んだ一定の形態の集落があるということを明確にしたわけです。私もその際に調査をともにいたしまして，翌々年には横浜市史の「第一巻」(編注5) に，この調査の成果のあらましをまとめさせていただきました。

その後の集落址研究は多彩ですが，注目すべきものに水野正好氏の仕事があります。昭和44年，水野氏は，「縄文時代集落研究への基礎的操作」(編注6) という論文を『古代文化』誌上に書いております。これは興味深い文献であると思います。その論文を簡単に紹介しますと，一番目に「住まいとしての住居」をとりあげています。そして，その住居の規模，家族員，住居の間取り，「間」とその使用の形というような項目に分けています。二番目に「住まいのうごき」として，住まいの建て直し，住まいの建て替え，住まいの動きという，三つの項目が挙げられています。三番目の「村の歴史」というのは，住まいの流れ，村のあり方，家族のあり方，村の中での家族の動きという四つの項目から成り立っています。四番目は「村の構造と機能」ということで，村の「場」と機能，村の構造と用益の形態。五番目は「村のうごきと領域」，これは村の移住と諸形態，本村と分村，村のテリトリーというような項目にわけられています。これらの項目だけでは中身はおわかりいただけないと思いますが，こういう形で，「住まいとしての住居」「住まいのうごき」「村の歴史」「村の構造と機能」「村のうごきと領域」といったようなタイトルからうかがえるように，ここでは集落の問題を，かなり突っ込んでとりあげているわけです。しかし，この論文が書かれた動機を水野氏は，最後でこういっています。

「私はいまだかつて縄文時代集落址について，フィールドを持ったことはない。おそらくそれだけに，現実に即さない推測がかなり指摘されることとなろう。そうした危惧を持ちながらも，なお，このようにまとめねばならない気持ちに私を駆り立てたのは，りっぱな遺跡が次々と破壊され，失われていく今日，何よりもまず，明確な集落論を配置した調査が行われなければならないからである。発掘範囲，発掘範囲外の遺構の有無，遺構の正確な実測，遺物の詳細な発見状況すら十分に図示されていない現状では，多くの発掘は，生きた歴史に連ならないであろう」と。こういう氏の考え方が根底にあって，この論文は書かれたわけであります。ここでもいっているように，縄文時代の集落址について，フィールドを持ったことはない。また，この論文は，動く手と，働く想念の結合として書かれたものである，というようなことも最初に述べています。さらに，いままでの調査には，想念と問題意識を持った調査が乏しい，ということも言っております。大変鋭い指摘が随所に見出され，また新鮮な問題意識が展開されています。しかし，私なりに結論としていいますと，想念による研究の先取りである，という評価をくださざるをえません。

個々の詳しいことがらは抜きにいたしますが，大変重要な問題提起をしておりながらも，研究の結果としては，想念による先取り的なものである，というふうにいわなければならないのです。しかし水野氏の先取りした想念を，現在の集落址研究は現実の調査のなかで追認しているケースが多いというのが実情ではないかと思います。その意味では水野氏の論文は，今日の研究方向を示している一つの労作であります。

ところで，最近の集落址研究は，どういう動きを示しているかといいますと，私は，二つの動きに分けられるだろうと思います。一つは，分析的な方向であります。この分析というものは，もっぱら集落址を構成する個々の住居址にかんする分析的な方向です。いわゆる「何々パターン」というのはこれに含められるものだと思いますし，また，セツルメント・アーケオロジーの方法論を使った調査というものも，これに関連するものだといってよいでしょう。また，もう一つは，広い視野でとらえる考え方であります。集落を規定しているというか，集落を位置づけている地域を，領域――テリトリーとしてとらえる方向であります。このさいに，生物生態学――エコロジーの知識が活用されているのも一つの特徴だろうと思います。先年，『考古学研究』誌上に発表された林謙作氏の論文(編注7)などは，その一例であります。現在，集落址の研究は，比較的豊富な資料をかかえな



第2図　リー10遺跡（早期，稲荷台期）

がらも，それを方法的にどう整理していくか，分析・総合していくかということで，一つのいわば，岐路に立っているように思えてなりません。私たちは，分析的な方法とより広い視野での把握，さらには文化人類学ないしは社会人類学の成果の活用，いろいろな角度・立場からの，総合的な集落址研究の道を歩んでいく必要があるのではないかと考えます。

3．集落址研究の視点

つぎに，集落址研究の視点といったことで話しをしたいと思います。集落址をみていく場合に，集落（址）自体と，集落（址）相互の二つの視点があるだろうと思います。

はじめの集落（址）自体の問題ですが，ここでは何が必要かといいますと，(1)同時に存在した住居址の確定。(2)集落としての利用期間と形態。つぎに，(3)集落が営まれた当時の生活面，通路，住居以外の施設の確認。それから，(4)住居の構造，使用年数。さらに，(5)住居の居住人員。大きくみて，五つの問題があると思います。一番目の同時存在の住居の確定ということは，集落址研究の基礎をなすものであります。二番目は文字どおり，集落の利用（居住）期間とその形態の問題です。集落の規模も形態も，この事実にもとづいてあきらかにされます。三番目は，現在あまり集落址研究のなかではとりあげられません。当時の生活面を把握する，通路を見つけ出す，あるいは住居以外の施設をあきらかにするといったようなことは，問題意識としてはもちながらも，現実にはなかなか，作業上不可能な課題であります。しかし，これは集落の形態，機能を問題にする上で避けてとおることはできないだろうと思います。四番目の住居の構造，これは，復原した場合にどういう住居になるかということを含めた問題です。それから使用年数，耐用年数といういい方をしてもいいかと思いますが，これは集落の存続期間を問題にする上で，きわめて重要なことがらです。五番目の住居の居住人員，一軒の家にどれだけどれだけの人間が住んでいたかという問題です。これは一定の結論は出しにくいと思いますが，ある程度の見通しは立てなければなりません。この問題は，集落の人口つまり集団の規模を知る上で，これまた不可欠の課題であります。集落址研究においては，集落自体について以上のような問題と取り組んでいく必要があります。

ところで一番目の課題というのは，これは最も基礎的なものです。集落址の調査に携わった方はおわかりだと思いますが，時期的に単純な集落址というものは，ほとんど見当りません。単純な集落址というのは，一つのムラがそのままわかる状態です。ムラがそのままわかる状態の集落址というのものは，きわめて稀だと思います。普通は大体が，ある時間的な幅のなかで，継続的に，あるいは断続的につくられていったものです。したがって個々の住居址は，大部分が重複しているという状態です。したがって，この重複した住居址の分析ということが，どうしても必要になってくるわけです。

ここでちょっと，重複した住居址の分析の問題について考えてみたいと思います。この重複

第3図 池辺第3遺跡（中期末）
（竪穴住居址，土壙群，長方形柱穴列，貯蔵穴などからなる集落址
方形プランの住居址は古墳時代に属する）

した住居址には，結論的にいいますと，まず非連続型といっていいようなものがあります。一軒の家がつくられたのち，それが廃棄され，またその後につくられる。つまり二つのあいだに時間的な断続があるというケース。これに対して連続型，これは二つの住居の間の，時間的な幅がほとんどないか，あるいはわずかであるというケース。この二つが考えられるわけです。

いずれもこれは，使用されてきたものが，どういうような経過をもって建て替えられたり，あるいは建て直されたりしていくかということを考えてみますと，非連続型の場合，移動，老朽，焼失，忌避，その他のケースがあろうかと思います。一方連続型の場合は，非連続型の場

合と同様に，老朽した場合，焼失した場合がありますけれども，そのほかに，移動していたものが，また戻ってくるという回帰。それからもう一つは，住居を拡張するという場合が考えられます。非連続型の場合には，いまあげたような原因で住居が廃棄されるわけですが，廃棄されてから，徐々に埋没していく。それが埋没し切ったこともあるでしょうし，また埋没しきらないで，摺鉢状にくぼんでいた場合もあったと思います。そういうところに新しく住居が建てられる。この場合には，新築ということになるでしょう。

一方，連続型の場合には，いまあげた回帰，老朽，焼失，拡張，その他の理由で，その位置に家を建て替えるもので，いわば改築ということになるでしょう。こういう図式が一応考えられるわけですが，その結果，重複した住居址は，どういうあり方をするのかといいますと，非連続型の場合には，重複の仕方が，概して不規則な複合を露呈します。それにたいして連続型の場合はおおむね規則的な複合を呈するのが普通であります。ですから私たちは，重複した住居址がどんな状態であるのかということを分析し，その住居のもつ意味を考えていく必要があるだろうと思います。

結局のところ，新築というのは非連続な場合にひきおこされるのにたいして，改築の場合は連続的になされるわけです。ところで，その改築の必要性というのはいったいなんなのかということを考えてみる必要があります。一番の理由としてあげられる老朽の場合は，建築材の老朽，腐朽が原因です。屋根，柱，あるいは壁体の腐蝕が最もはやいので，それの取り替えがおこなわれます。焼失した場合には，だいたい全部が取り替えられるわけですから，あまり問題はありません。回帰の場合は，移動して帰ってきたら，大変傷んでいるので取り替えるというケースが一般であろうと思われます。それでは，改築の証拠を実際の資料で，どうとらえることができるでしょうか。これは壁溝や柱穴のあり方から，柱穴がダブっていたり，壁溝がダブっているというようなことを手がかりに，その証拠をつかむことができます。

4．竪穴住居の復原

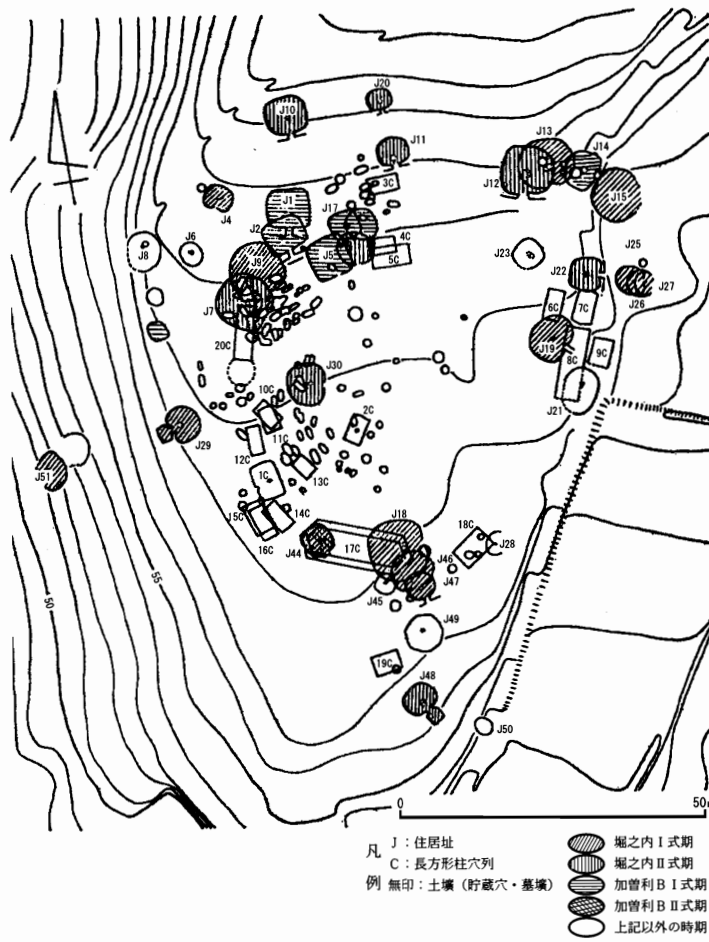
いま，改築の話しをしましたが，この理解を容易にするために，つぎに住居の復原構造に関して，少し説明させていただきたいと思います。

ここでは，縄文時代の住居，弥生時代の住居という枠をはずして，竪穴住居址一般ということで話しをいたします。まず，一番はっきりさせておきたい点は土堤の存在です。竪穴は当時の地表面から赤土まで深く掘り下げるわけですが，この際に掘り出した多量の土は，竪穴の周囲に盛り上げて一種の土堤を構築します。これを私たちは「土堤」と呼んでおりますが，最近，都出比呂志氏などは，「周堤」(編注8)といっています。周堤の存在は弥生時代の住居の場合には，すでに静岡市の登呂遺跡の住居などでわかっておりました。また，特殊な例ですが，静岡県の大畑貝塚(編注9)（後期）などで発掘したこともあります。さらに，和島誠一氏が調査しまし

た，茨城県下の前期の貝塚で発見された竪穴住居址の場合は，覆土中の貝層と，竪穴外の貝層が土堤を境にふり分けるようにして堆積していた(編注10)ということです。

竪穴住居の壁の外側には土堤がめぐり，それはかたく踏みかためられていたであろうという考えは，ほぼ誤りないものと思います。

港北ニュータウンのなかでC8遺跡，別の名を大塚遺跡とよんでいる環濠集落址の竪穴住居の場合にも，この土堤の存在を考えさせるような例に遭遇しております。当時の地表面の上に，さらにかなりの高さの土盛りをしておりますので，床面からその土堤の上面までは，かなりの深さになる。おそらく，1メートル前後，あるいはそれ以上の高さを考えても間違いないと思います。そうなってきますと，出入の際には飛び込むような降り方とか，はい上がるような出方では困るわけでして，昇り降りのはしごが必要になってきます。



第4図　池辺第14遺跡（後期前半）
（竪穴住居址，長方形柱穴列，貯蔵穴，土壙などからなる）

はしごの存在につきましては，「周堤」の用語を提案しました都出比呂志氏なども述べておりますが，私たちもはしごそのものの実例を確認したことがあります。それは大塚遺跡の場合です。住居の床面に規則的に配置された4本の柱穴があります。また周囲には壁溝がめぐっております。中央よりやや一方に偏った位置に炉址があります。この炉址の反対側の壁近くに，浅い穴がありますが，これを「はしご穴」とよんでいます。弥生時代の竪穴住居址は，壁，壁溝，床，柱穴，炉，はしご穴，それから特殊なピットなどから，普通なりたっています。

大塚遺跡のY50号住居址，これは火災に遭った住居址ですが，床面には炭になった木材がか

なり多量に横たわっていました。幸運にも，ちょうどはしご穴の部分から，幅が20センチで厚さが５センチの焼けた板がみつかりました。板といっても，根元の部分だけですが，心もち斜めの状態を呈していました。また，これを断面でみますと，はしご穴というのは，概ね斜めにあけられていますが，はしごがいけられていた状態を示す土層の識別がみとめられました。この斜めの角度を延長していきますと，１メートルちょっとの高さで壁の垂直延長線上にたっするわけでありまして，床面から土堤のトップまでは１メートル以上の高さがあったことになります。またそこに，はしごが斜めにかけられていたことが想定できたわけであります。

ついでにはしごのことにふれておきますが，現在使われているはしごは，２本の棒に横木をわたしたものですが，弥生時代のはしごは，幅20センチ，厚さ５センチほどの１枚の板でつくられています。板に切り込みをつけて，そこにつまさきをかけるという形のものです。それから，壁がきわめて高かったわけですが，この壁に沿って，いわゆる壁体がめぐっていました。

壁体がどういう材料であったかは，よくわかりません。しかし，登呂遺跡(編注11)の場合は，厚さが１センチほどで幅が20センチ位の板をきちんと並べておりました。横浜市神奈川区の神之木台(編注12)という，弥生時代後期の遺跡の場合には，竹を編んだものが，壁に貼るようにめぐっていました。この場合は炭化して残っていたものです。こうした例から推して，板やアンペラといったようなものが壁体に使われていたことが考えられます。縄文時代には，板であったかどうかは，疑問としなければならないと思います。つぎに柱ですが，これはほとんどが丸太であります。細いのは直径10センチ位。太いのは13センチか14センチ位あったようです。意外に細いということがいえるようです。また，弥生時代のものには，丸太でなしに，多少面どりした柱も使われていたことが知られております。

柱や壁体についてですが，柱の場合は，いわゆる掘立柱で根元は地下に埋っている。また，壁体は直接壁に，地肌に密着している。そういうわけで，とりわけ傷みが激しいということが考えられます。一方，屋根の傷みも，おそらく簡単な屋根だっただけに，いちじるしかったろうと思われます。ですから，建築材のうちでも屋根，柱，壁体の腐蝕がとくにはやい。そこで，それらを取替える作業つまり改築がおこなわれるわけです。壁体の場合には，壁体の腐蝕のほかに，壁そのものの崩落も進行しますので，改築のさいには一周り壁を削って，新しいかたい壁をつくり出して，そこに壁体を取り付けるということがおこなわれました。したがって，その結果として，壁溝がいわば，同心円状に外に拡がっていくという結果をまねくわけです。柱の場合には，引き抜くこともあるでしょうし，また，腐蝕した場合にはそのままにしておくこともあったと思いますが，いずれにせよ，新しい柱穴を掘るわけです。ですから，とうぜんそこに柱穴の重複が認められてくることになります。このように壁溝や柱穴の重複は，住居の改築と関連してご理解いただきたいわけであります。

5．住居址・住居址群・集落址の研究

つぎに，集落相互の問題に目をむけてみることにします。集落をみていく場合，個々の住居から始まって，住居の集まりである集落，集落の集まりである集落群，さらには集落群と集落群，そういう関係があるわけです。最小の単位として住居，住居址があります。つぎに，住居の集まりであります住居群，住居址群，これが一般にいわれる集落あるいは集落址であります。つぎに集落址群があります。これはいわば遺跡群ということもできるだろうと思います。それからもう一つ，複数の集落址群。縄文時代の社会の仕組みをみていくとなりますと，たんに個別的な集落だけをとりあげてみても，問題は大きく進展いたしません。その集落址がどうであったかというところまで，目をむけていく必要があるだろうと思います。

地理的な言葉で使い分ければ，住居址群・集落址は地点に相当し，集落址群・遺跡群は地区にあたるわけです。それから，これら複数の集落址は，しいていえば地域ということになる。まさに，一個の住居址から一つの地域までを，集落の問題は含んでいるといわなければなりません。従来の調査研究は，住居址から住居址群・集落址の研究というところまできましたが，集落址群の研究，あるいはそれ以上の複数の集落址群の研究については，まだ手が及んでおりません。したがってここでは，どういう見方が必要なのかということだけを指摘するにとどめて，おきたいと思います。

いうまでもなく，一個の集落だけで社会がつくられていたわけではありません。とうぜん，いくつかの集落があつまって一つの社会をつくっていたと思います。さらに，それのいくつかのあつまりが，他の集落群と相互に関連をもっていたことも，とうぜん考えられます。

いま私たちが，横浜市の港北ニュータウン建設予定地域内の調査で最大の課題としているのは，この遺跡群の研究であります。この問題は，まだ資料蓄積の段階であって，あれこれいうべきほどのものはもちあわせておりません。しかし，一つの方向は私たちなりに見定めているつもりです。

横浜市域の北部を鶴見川が流れております。この鶴見川の支流として早渕川がありますが，この早渕川の流域には多数の遺跡が存在しています。古くから遺跡の密集地として知られており，このなかには有名な遺跡もいくつかあります。この地域の大半が，港北ニュータウンの予定地とされており，近い将来には，人口30万の都市に変貌しようとしております。このニュータウンの予定地域内には四百数十ケ所の考古学上の遺跡があります。さらにそのうち，現在，工事が進んでいる日本住宅公団の施行区域内には，二百数十ケ所の遺跡が数えられます。私たちは，昭和45年以来，この日本住宅公団施行区域内の遺跡の発掘調査に携わってきました。現在までに約200ケ所の遺跡の調査を終えることができました。このうち，縄文時代の遺跡は，弥生時代・古墳時代のものと重複したものを含めますと，約150ケ所以上あります。その150ケ所のうち，集落址として完全に近い形，またはそれに近い形で発掘されたものは，約30ケ所ほ

どあります。それ以外の遺跡は，いわば一時的な居住址であったり，いわゆる落し穴の発見されることから狩猟場と考えられるようなものであります。

その30ケ所の集落址を分析して，同時に存在した住居数を考えてみますと，大きく三つのクラスに分かれます。２軒あるいはその前後からなる小型の集落と呼んでよいものが，まずあります。それから中型といってよい数戸前後の集落址。数戸前後という表現は，大変あいまいですけれども，そのクラスのものが一つあるわけです。それからもう一つは，大型の集落と呼んでいい，およそ10戸前後の規模のものです。約30ケ所の集落址を規模で分けてみますと，およそこんな具合になると思います。もちろん，小型にしようか，中型にしようかと，その分類に迷うようなものもあるし，また，中型か大型か判定しかねるものもありますが，大ざっぱな分け方をしますと，こんなようになるかと思うのです。

こういう三つの形態規模をもつ集落が，時期ごとにどう移り変りをしているかということですが，まず早期の集落についてみますと，いまのところ，撚糸文土器を出す集落址が５ケ所ほど発見されております。このうち，多い例では，５つの竪穴住居址が出土しています。しかしこれは重複したものがありますので，同時存在の住居は２，３戸になることが確実です。それから，僅か一戸だけという例も２ケ所ほどあります。それから早期の中頃の田戸下層式土器を出した竪穴住居址が１戸だけ知られています。また早期末の茅山式土器の時期の住居らしいものが，２ケ所で知られております。早期の集落址というのは，いままで発見されたものは，すべてこれは小型の集落であります。しかし，ではこの小型の集落というのは，早期だけの特徴であるかというと，そうではなしに，これは前期以降にもあります。前期にも中期にも，全域を発掘したにもかかわらず，竪穴住居址は１戸だけ，あるいは２戸だけしかないという例がある。また，後期になってもこの小型の集落は存在します。後期の中頃までは確実にあるようです。晩期の集落址は，いまのところ１ケ所で知られているにすぎません。それは，どちらかといえば，中型の集落です。

一方，中型の集落はどうかといいますと，これは前期の一番古い段階ではちょっとわかりませんが，少なくとも前期の中頃以前の時期から出現するようです。そして，晩期の中頃までいっかんして存続しております。また，大型の集落とよべるものは，やはり前期の中頃から始まり，途中中期の終り頃にちょっととぎれるようですが，また後期になって出現します。これらの意味する問題については，まだ十分な分析が進んでおりませんので，断定的なことは差し控えたいと思います。

早期の段階の集落が小規模であるということは，これは他の地域の例にてらしても，間違いない事実であります。早期の人間集団が，２，３戸前後の住居の人びとからなる小集団であったということは，否定できないと思います。これに対して，前期になって大型，中型の集落がでてくるわけですが，この大型，中型の集落は，一定の形態をもっているところに特徴があります。それは住居の配列が，弧状または半円状を呈することで，その内側に広場をもつ点であ

ります。この広場をもつ定型的な集落が，中型，大型の集落の出現と軌を一にしているわけです。この定型的な集落は，前期から中期にかけまして，やや，ふくらむ傾向をみせております。

ところで，この三つの規模のものが，前・中・後期に重なるわけです。そして，一地域内に混在しているのです。この問題は大変大事であると思うのです。さきほど，孤立した集落というものはないといいましたが，まさに一つの地区ごとに，こういう小・中・大の集落址が組合わさって分布しているのです。私たちが，例えば，荏田遺跡群と呼んでいる集落址群は，後期の時期のいくつかの集落址が比較的せまい地域に密集しておりまして，その地域を離れると，もう後期の遺跡は存在しないという現象を示しております。こうした例は他にもありまして，前期末の十三菩提式土器の時期には，一定の地域に遺跡がかたまっているわけです。ここでは，小型の集落と中型の集落が4ケ所組み合わさって，一つの集落址群を編成しております。また，中期の時期には，古くから有名な三の丸遺跡を中心に，五領ケ台，勝坂，加曽利Eの各時期の集落址群が濃密に集中分布している。その地区を離れますと，比較的稀薄になっているというような傾向が知られております。そういうわけで，このとくに前期・中期・後期にみられる各遺跡群というものは，これは統一してつかまえなければ，意味がないのだということがはっきりいえます。

個々の集落址を，まとまりのある一つの集落址群として，どのようにとらえていくかということについて，私たちはまだその有効な方法を確立しておりません。しかし，いまもちつつある見通しのもとにこの問題に精力的にとりくんでいきたいと思います。

（本稿に使用した港北ニュータウン地域内の集落址略図と写真は，港北ニュータウン埋蔵文化財調査団の調査員各位のご厚情によって掲載することができたものである。深く感謝するしだいである。）

（1979年12月　日野一郎編『南関東の縄文文化諸問題―特講』武相文化協会）

編集注

(1) 大林太良　1971　「縄文時代の社会組織」『季刊人類学』第2巻第2号
(2) 松村　瞭・八幡一郎・小金井良精　1932　『下総姥山二於ケル石器時代遺跡　貝塚ト其ノ層下発見ノ住居址』（東京帝国大学理学部人類学教室研究報告第5編）東京帝国大学
(3) 後藤守一　1940　「上古時代の住居（上）・（中）・（下）」『人類学先史学講座』15～17
(4) 和島誠一　1948　「原始聚落の構成」　東大歴史研究会編『日本歴史学講座』学生書房
(5) 和島誠一・岡本　勇　1958　「南堀貝塚と原始聚落」『横浜市史』第1巻　横浜市
(6) 水野正好　1969　「縄文時代集落研究への基礎的操作」『古代文化』第21巻第3・4号
(7) 林　謙作　1974　「縄文期の集団領域」『考古学研究』第20巻第4号　考古学研究会
(8) 都出比呂志　1975　「竪穴住居の周堤と壁体」『考古学研究』第22巻第2号　考古学研究会
(9) 岡本　勇　1955　「静岡県小笠郡大畑遺跡」『日本考古学年報』4　日本考古学協会
(10) 茨城県猿島郡江川貝塚の発掘調査での所見である。
(11) 日本考古学協会編　1949　『登呂』毎日新聞社
日本考古学協会編　1954　『登呂本編』毎日新聞社
(12) 神之木台遺跡調査グループ編　1978　『神之木台遺跡』

埋　葬

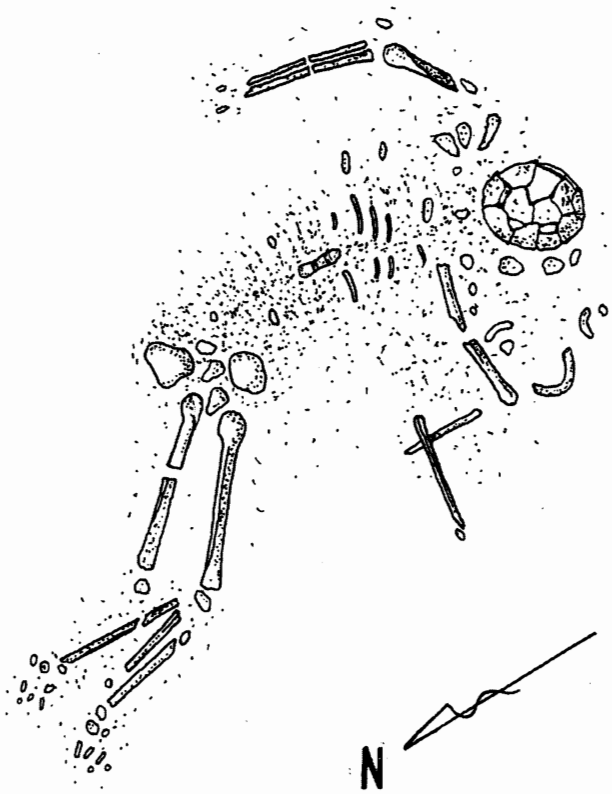
岡本　勇

遺骸を葬る場合には，さまざまな方法があるだろう。しかし，いまわれわれが縄文時代のそれについて認識することができるのは，なんらかの方法において地中に埋められたもの，すなわち「埋葬」だけである。縄文式土器，およびそれとともに使用された各種の労働用具などが，時期と地域によって必ずしも同一でないように，埋葬のあり方もまた，それとひとしくなんらかの相違をもっているであろう。しかし埋葬例は，まだ土器型式によって細分される各時期からみれば，偏在と著しいほどの不足を示しているし，またそのことは地域についても同様である。したがって土器型式の編年の時期に相応して埋葬のあり方を具体的にあとづけようとする考古学にとっての現段階的な試みは，ここではいちおう断念しなければならないであろう。

埋葬のあり方が考古学の問題として意識的にとりあげられたのは，大正年代の中頃以後であった。しかし，その方向はほとんどの場合，解剖学者によって人骨採集とともに進められたので，埋葬のあり方はそれに付随して，あるいはその結果として明らかにされるにすぎなかった。もちろん，そのことは当時の学問の状況からみてやむをえないことであった。だが，やがて縄文文化の研究が土器型式の編年的研究をとおして，一つの体系を確立しはじめていったとき，多くの人骨の発掘はその考古学の成果をふまえて，その上にたつ問題意識を深めることに，必ずしも充分であったとはいえない。埋葬の研究は，そこに大きな盲点を残さざるをえなかった。

埋葬のあり方がまず問題とされるためには，どのような形にせよ直接その遺骸の存在を必要とするであろう。埋葬された遺骸は，貝塚その他のごく限られた条件の場所で，人骨という形において見出されるのが最も一般的な場合である。これらの人骨は，相応に掘られた穴のなかに手足を折りまげた窮屈な姿勢（屈葬）で葬られるのが普通であるが，なかには手足をのばして寝た姿勢（伸葬）のものもある。

さかのぼりうる最古の埋葬例は，神奈川県平坂貝塚で発掘された早期初頭のひとつの人骨である[1]が，それはいわゆる伸葬とも屈葬ともいえない，あたかものたれ死にしたかのような姿勢で貝層下のローム面に横たえられていた。埋葬するために充分な穴が掘られたとはみられず，せいぜい土が薄くかけられたといった感じであった。（このみじめな埋葬のあり方は，その遺骸が生前いくたびかのはげしい飢餓を経験したという，きびしい生活の諸条件と関連して問題とされるべきである）このような特殊な例を除けば，縄文時代の意識的に埋葬された人骨のほとんどすべては，屈葬または伸葬の姿勢で葬られていた。宮城県舟入島貝塚の貝層下から発見された人骨は，早期の終末に属するものであるが，これは上向き（仰臥）の屈葬の姿勢を示していたといわれる[2]。縄文時代の前期の埋葬例は，かなり多く知られている。とくに，



第1図　神奈川県平坂貝塚で発見された人骨

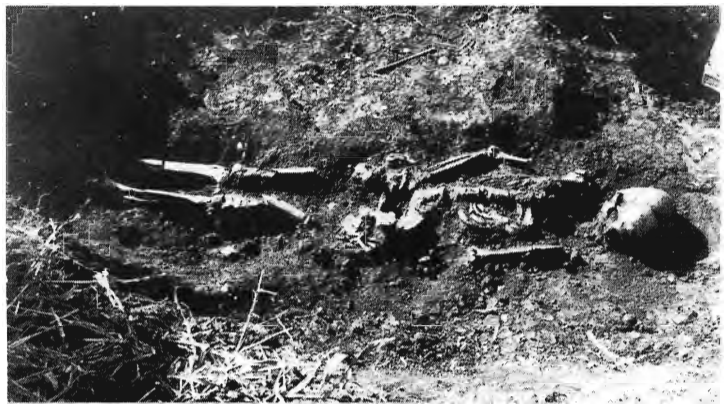
この時期における西日本のいくつかの場所からは，人骨が群集して発見された。大阪府国府遺跡・岡山県太田貝塚・熊本県轟貝塚からは数10体におよぶ夥しく多くの人骨が発見されているが，そのうちの大部分は前期に属するものとみてよいだろう。しかし，これらの各遺跡における遺骸の埋葬姿勢は必ずしも同一ではない。国府遺跡では屈葬がすべてであるのにたいし，太田貝塚では伸葬が圧倒的に多く，また轟貝塚では屈葬以外見出せなかった(3)。東北地方の二，三の例は，この時期に屈葬の行われたことを示しており，またそれは中期以後晩期にいたるまでの多数の埋葬例についても変化なくみとめらる埋葬姿勢であった。関東地方の中期には，伸葬による埋葬の存在したことを，僅かではあるけれど茨城県陸平貝塚で発見された人骨(4)によって知ることができる。しかし中期末に位置づけられる若干の埋葬人骨には，伸葬とともに屈葬の姿勢のものも発見されているし，またそれはひろく後期にもおよんでいる。ひきつづき，後期においてはそのはじめから屈葬とならんで伸葬もより多くみとめられ，関東の狭い地域のなかで土器型式によって細分される時期に，二つの葬法が対蹠的に存在したことを示している。関東以西の後期およびそれにつづく時期に属する埋葬例は，ほとんど屈葬であった。それは，愛知県吉胡貝塚や岡山県津雲貝塚で発見された驚くほど多くの人骨をひきあいにだすことによって，いっそう明らかである。吉胡貝塚出土の人骨総数307体のうち，埋葬姿勢のはっきりしているものは161例であるがこのなかの13例を除き，すべては屈葬であった。また同じく津雲貝塚においては，57例のうち2例だけが伸葬であったといわれる。人骨の発見に乏しい四国でも愛媛県平城貝塚において「竪穴様」の埋葬穴から，「屈葬して居たものではないかと思われる」状態で3体の人骨の発見がつたえられている(5)。屈葬が支配的であったことは確かであろうが，しかしそれは晩期の終りまでは一貫して存続しなかった。愛知県五貫森貝塚は晩期の終末に位置づけられる

第2図　屈葬の人骨（岡山県津雲貝塚発見「京都大学文学部考古学研究報告」第5冊による）腰部の左側に鹿角製腰飾がみられる。

ものであるが，その小さな貝塚から発見された2体の人骨は，伸葬の姿勢で埋葬されていた[6]。また，1951年の吉胡貝塚の発掘のさいにえられた3例の伸葬人骨は，この貝塚において最も新しい土器を出す層との関係において発見された。これらの事実ならびに，渥美湾周辺の晩期の諸貝塚に屈葬の埋葬例とともに比較的多くの伸葬の存在することからみて，少なくとも縄文時代の終り近い頃には――渥美湾周辺の地域はもとより，東北地方の若干の例をも加えて――伸葬を埋葬姿勢とする傾向があったことを指摘することができる。それにもかかわらず，ながい縄文時代をとおして，より普遍的であったと思われる葬法は，伸葬であるよりもむしろ屈葬であった。われわれの知る限りでは屈葬はそのはじめの時期からひろい意味で存続していったが，伸葬はある限られた時期と地域にしかあらわれなかった。これは，もとより意味のあることにちがいない。だが，その意味をはっきりさせるためには，もっと具体的な豊富な資料の蓄積をまたねばならないであろう。

屈葬はひろく世界の各地にみられる葬法であるが，かつて長谷部言人博士は『蹲葬の起源に就て』[7]論じ，諸説を列挙しつつ「蹲葬は身を縮めて屍の安全を冀うに次で，見苦しからざる姿勢を附与するに出でたものであろう」と，蹲葬すなわち屈葬がなぜ行われたかについての見解を述べている。いま，その見解を正しくみとめるとしても，屈葬という行為の精神的な動機についてわれわれの学問が感性的な認識を超え難いものである以上，問題の追求は別の角度から試みられねばならないであろう。

吉胡貝塚における51年度の4号人骨の埋葬状況[8]は，「地山の赤土に切込んだ埋葬穴の底面から貝層中の人骨の周囲にわたって蛹をかこんだ繭のようなぐあいに有機物の薄層がみとめられ」，したがって「埋葬に際して何か有機物で遺骸を巻いたものではなかろうかとも考えられた」のである。一般に屈葬遺骸は，埋葬するために掘られた相応の穴のなかに窮屈な姿勢で葬られたわけであるが，その場合以上のような遺骸処理，すなわちなにかでくるんだというようなことが屈葬との関連において充分問題となってくるであろう。また，かつて清野謙次博士が津雲貝塚を発掘のさい，いくつかの人骨の頭骨の位置が，胴骨と離れて奇妙な位置で発見さ

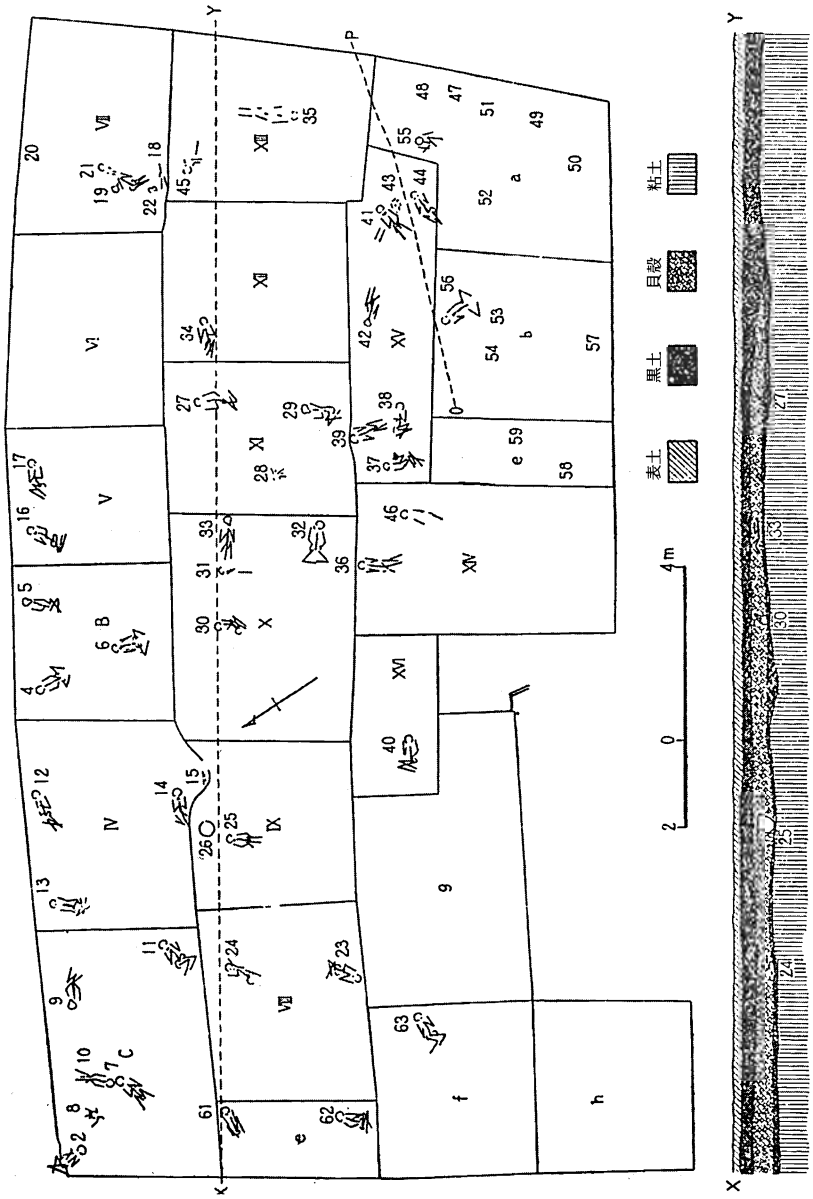


第3図　伸葬の人骨（千葉県曽谷貝塚発見　杉原荘介氏撮影）

れる場合のあることを注意し，「それは首が胴から腐れ落つる時まで遺骸の周囲に多少の空間があったと考えるより外に，理解できない」ことであるとし，「原始的な棺或は槨を造った事があったろう」と推察した(9)ことも，あらためて注意する必要があるだろう。

屈葬の理由をたずねて，よくひきあいにだされるのは，(1)埋葬穴を掘る労力の「節約」，(2)手足をちぢめて寝るのが当時の休息の姿勢であった，(3)胎児の姿勢をとらせた，(4)死者の「再起迷奔」をふせぐ，といったような考えである。しかし，以上の諸説は縄文時代に屈葬とならんで伸葬が行われ，一つの遺跡で一つの時期に二つの葬法が行われたという事実のまえでは，必ずしも充分な説明とならないように，一方伸葬の理由については屈葬と異なる説明の仕方が要求されるであろう。伸葬の遺骸を埋葬する場合には，屈葬のそれとは当然異なる埋葬穴が掘られたであろう。しかし，埋葬人骨に関係した埋葬穴の状態がまったく知られていないのは，おそらく極めて浅く掘られたものにすぎなかったからではなかろうか。そしてむしろ，埼玉県東貝塚(10)から発見されたひとつの人骨のあり方が，はっきり示すように――本来は貝層があるべきその人骨の部分のみに30～40cmの黒土が覆っていたということから――「死体の上に円く盛土して」，遺骸を葬ったとする考えを，あるいは八幡一郎・宮坂光次氏等が千葉県姥山貝塚で発掘した人骨の上には黒土が土饅頭のごとく覆っていたということなど(11)を，とくに注意すべきであると思われる。

屈葬であれ，伸葬であれ，その遺骸が意識的に埋葬された場所を，ひろい意味で墓地とよんでもさしつかえないであろう。墓地に埋葬された遺骸の数は，古い時期に少なく新しい時期に多いという相対的な傾向をもっている。早期の遺跡には，たかだか1体程度の人骨しかみることができないが，――それもごくまれな場合であるのにたいし――後期以降の墓地には，よく数10体あるいはそれ以上の多数の人骨が発見される。このことは，集落構成人員の数，その居住期間の長さ，あるいは集落占地の継起的踏襲といったような諸条件の反映の結果である。いうまでもなく，一つの遺跡＝墓地から発見される何十体，何百体というおびただしい数の人骨は，いちどきにつづけざまに埋葬されたものではない。たとえば極端ではあるけれども，三百余体の人骨を出した吉胡貝塚は，数型式の土器によって示される長い期間かかって形成されたものであるが，それらの人骨もその長い期間にわたって埋葬されたものであることが明らかで



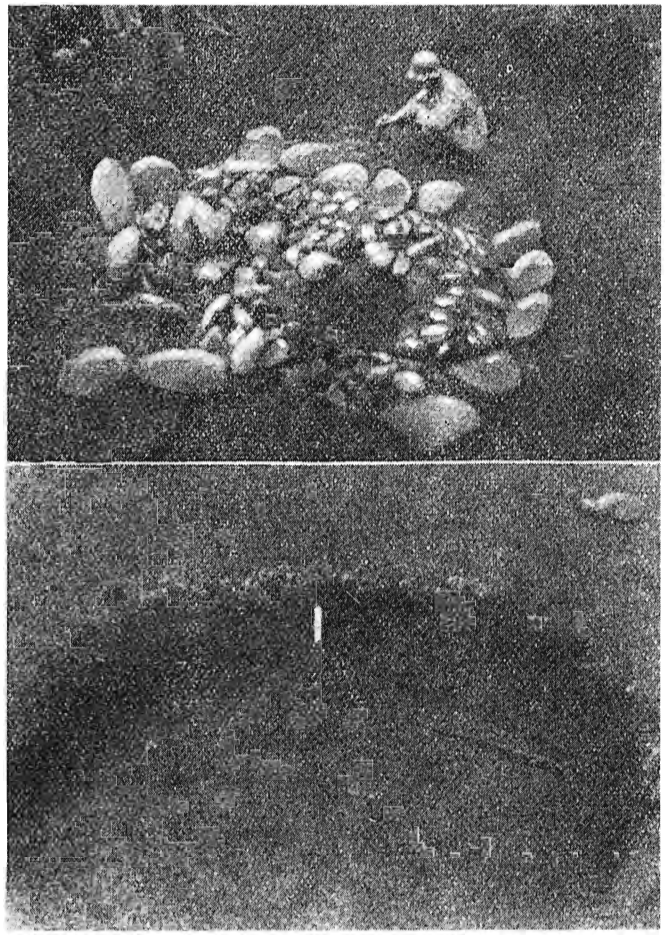
第４図　岡山県津雲貝塚発見人骨分布図（「京都大学文学部考古学研究報告」第５冊による）

ある。このように，群集して発見される埋葬例のほとんどすべては，多かれ少なかれかなりの時間的な幅をもっている。だから，以前に埋葬した場所が忘れ去られて，そこにふたたび他の遺骸が埋められることもあった。この埋葬が重複した場合を重葬とよんでいるが，その特殊な一例として吉胡貝塚で発見された「人骨の盤状集積」(12) をあげることができる。それは，四肢骨を方形にならべて，その四隅や中央に頭骨・骨盤骨・脊椎骨等をつめたものであるが，これは新しい遺骸の埋葬に際して掘り出された古い人骨を雑然とではなく，規則的に配列し処理

したものであるとみられている。重葬とは反対に，2体あるいはまれに3体もの遺骸が同時に埋葬されたこともあった。この，いわゆる合葬は，男女のこともあるし，同性のこともあった。宮城県里浜貝塚で発見された合葬例[13]は，屈葬位の老年男子と小児とがあたかも抱き合ったかのような状態にあったといわれる。合葬された遺骸＝人間のあいだにおける関係は，ほぼ同時に死を迎えたということ以外深く推論する必要はないだろう。小林行雄氏は，「被葬者の血縁とは無関係に，別別に壙を掘る労力の節約ということがまず考えられてのことである」といっている[14]。

のちにふれるある種の埋葬例を除いて以外，われわれは遺骸の埋葬された地表になんらの施設も，また目じるしも見出すことができない。たとえ，木製の墓標程度のものはあったとしても，縄文時代の墓地は簡単であったから，埋葬の重複をひきおこすこともあったのだと考えられる。したがって，かかる墓地に群集して埋葬された人骨は，その頭位すなわち頭を向けた方向が西よりも東に多いという僅かの差を指摘することができても，一般的にいえばまちまちであるし，またその配置は不規則なばらばらなあり方を示している。このことについて，山内清男氏の考えをかりれば「その当時墓地は恐らく森林であり，死体は木々の間に次ぎ次ぎ埋められて行った」[15]からである。しかし，そうしたあり方のなかにも，清野謙次博士がみずからの発掘にもとづいて，津雲貝塚および吉胡貝塚の人骨の一部に多少列をなす傾向のあることを指摘し，また陸前地方においては「中期以降に至れば略同一方向に向い列状をなして群集するを普通とせり」[16]といわれるように，縄文時代の比較的新しい時期の墓地に埋葬された人骨群の一部には，合葬とは別に秩序ある配列のあったことをうかがうことができる。この配列のあり方の意味は，個々にならぶ遺骸の時期的位置を検討し，さらに墓地における他の人骨との関係において問題とされねばならないであろう。モルガンが『古代社会』のなかで，「同一氏族に属する個々人は列をなして墓地に埋葬されている」といった言葉も，そうした操作と問題追求の過程のなかで大きな示唆となるにちがいない。

1915年，青森県天狗岱において一農民によって発見された墳墓[17]は，その特殊な性質のゆえにしばしばひきあいにだされた。どうみても，成人の遺骸の入らない大きさの土器のなかに，成人の人骨が入っていたという不思議を，報告者は洗骨の習俗によって説明した。ところで，その不思議な甕――後期の縄文式土器――の上には，たくさんの河原石が積まれていたことも，また珍しいことだった。その後岩手県細浦貝塚において屈葬人骨のかたわらに，ほぼ環状をなして配列された列石の存在が報告[18]され，また間もなく，静岡県蜆塚貝塚からは，屈葬人骨の上部に三百数十個を数える河原石をあたかもケールンのように積んだ墳墓が発見された[19]。縄文時代の墳墓に積石あるいは配石をもって標識とするようなもののあったことが，少なくとも以上の例によって知られていた。しかし，こうした種類の墳墓の性質がより一層明らかとなり，またそれのもつ問題が生まれてきたのは，比較的最近のことである。北海道静内町の御殿



第５図　北海道栗沢遺跡で発見された「積石墳墓」の積石とその直下の壙
（河野広道「斜里町先史時代史」による）

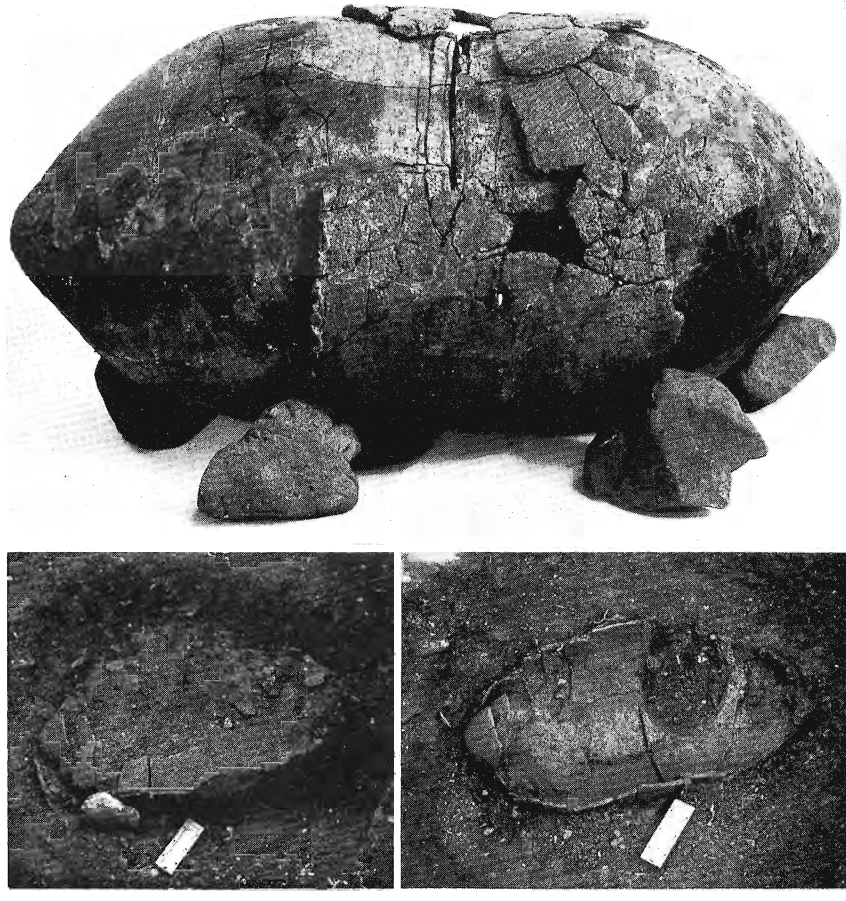
山から５基の「小形ケールン様積石墳墓」――報告者たちは，そうよんでいる――が発見された[20]が，それは比較的大きな礫を外周に並べ，そのなかにより小さな礫をぎっしり配したもので，大きさは直径２m40cmを最大とし，１mを最小とするものであった。この，いわゆる積石の下には，ほぼ楕円形の平面をもつピットがあり，その底にはベニガラの付着したものや，丸石を敷いたものがあった。また，その丸石を敷いたピットからは，赤色漆塗の木櫛片や平玉が発見された。一つのピットの底に，疑いなく頭骨の一部が認められたことからみても，これらが墳墓であることはほぼ確実である。この墳墓のもつ年代を，報告者たちは積石付近から発見される土器の時期，すなわち後期末から晩期初頭に位置づけている。これとすべてにおいてひとしい墳墓が，同じ報告者のひとりである河野広道博士によって，斜里町朱円で調査された[21]。そこでのピットからは，漆器の破片や，またそれと認めることのできるアッシの細片や，あるいは石鏃などの副葬品と考えられるものが発見された。各ピットにおける服飾品ないし副葬品のともない方のちがいは，河野氏に階級の存在を考えせしめたほどであった。いままで北海道において環状石籬あるいはストンサークルという名をもってよばれていたもののうちには，その時代と構造をそれらの墳墓とひとしくするものがあった。かつて，鳥居龍蔵博士によってツングースの墳墓であると指摘された空知郡音江の「環状列石」を調査した駒井和愛博士は，それが「石器時代の墳墓であることを明らかにし」，そして「墓の穴の大きさや，翡翠の出土状況から，想像をたくましく

してみれば西北を枕にした屈葬のもの」であると述べている[22]。さらにこれと似たものはかなり多くの場所で発見され，「殆んど全道にわたって音江の環状列石に似た大小いろいろなものが残っていることになる」といわれている。この言葉をさらに延長すれば，青森県・岩手県・秋田県などの東北地方の北半部に「案外多く」発見されるという一連のストンサークルあるいは組石遺構のなかにも，北海道のそうした墳墓と共通のものがあるとみられる。

たんに――多分そういってよいだろう――埋葬穴のなかへ遺骸を入れ，土をかけた程度の埋葬の一般的方法に比較すれば，この北海道あるいは東北地方の一部に，とくに発達したと思われる埋葬は，それが積石ないし配石という墳墓としての標識をもっている，そのことだけからみてもずいぶんちがっている。そればかりでなく，たとえ僅かでも明らかに副葬品をともなっていることや，特殊な遺物を出すことも，きわめて特徴的である。この埋葬にあらわれたちがいは，また生活のちがいでもあったろう。

採集経済を基礎とする縄文文化が，自然環境のちがいにもかかわらず全体として質的な差異の少ないのを特色とするなかにありながらも，東北日本は相当古い時期から他の地方よりも優れた文化的内容をもっていた。ことに縄文時代の後期以降には，それがいっそうわれわれの眼をひくものになっていった。その由来を結論的にいうならば，原始的な共同体の段階のなかでの生産諸力の相対的な優越性とみることができるであろう。そして，その生産諸力を保証したものは，より改良され，より多量に製作された各種の生産用具と，採集経済の生活により適応した自然的諸条件であったと思われる。東北日本の，この生産力の相対的な優越性が結果的にもたらしたものは，労働生産性のたかまりであり，やがてはひろい意味での剰余労働だった。あのわずらわしいほどに精巧と華麗をきわめた土器がつくられ，いまなお眼をみはる漆器が使われ，硬玉の玉が身を飾った，そうしたゆとりある生活をうんだ背後には，生活の基本的な生産にたずさわる以外の，なんらかの剰余労働がたくわえられていたからにほかならない。死後の世界に日常の道具をそえ，遺骸を埋めた上に遠くから運んだ石を積み，ながくとむらおうとした――なき仲間への思いやりも，結局はかれらの生活をささえた基盤の諸条件の外にでるものではなかった。

遺骸を甕――比較的大きな普通の土器――に入れて葬る風習が発達したのは，縄文時代のうちでも主として晩期の時期であった。おそらくほとんどの場合，甕は棺を目的として意識的につくられたものではなかったから，遺骸をそのまま入れようとすれば，いきおい幼児・乳児・あるいはそれ以下に限られざるをえなかったらしい。このような甕棺葬は，九州から東北地方にかけてかなりの例が発見されている。しかし，これらの甕棺は決して単一な性質のものではない。滋賀県杉沢遺跡や愛知県馬見塚遺跡，あるいは五貫森貝塚等で発見されたものは，二つの土器の口を合せて横たえたいわゆる合口甕棺であり，これが発達した時期はもっぱら晩期の終末であったと思われる。五貫森貝塚の甕棺のなかからは，小児と思われる程度の人骨と，1



第６図　合口甕棺（小林行雄他「近江坂田郡春照村杉沢遺跡」「考古学」９ノ５より）

本の磨製石斧が発見された。かつてこの合口甕棺を弥生文化に発達したものからの影響とみる考えがあったが，いまではそうした考えは成立しないし，むしろ逆に縄文文化のそれが弥生時代のあるものへ影響していったとみるべきであろう。他のほとんどの甕棺は，一つの土器からなるいわゆる単棺である。吉胡貝塚で発見された一つの例は，直立して埋った土器の口縁に接して板状の石による蓋がしてあった[23]。この蓋石の重みに土器が耐えられないものである以上，このことは土器を地表から没する深さにまで埋めて蓋したことを意味している。多くは口縁を上にして立てた位置で発見されるが，まれには横倒しの状態で埋められたものもあったらしい。

東北地方で発見されたものは，おしなべて単棺である。岩手県大洞貝塚，および宮城県沼津貝塚等で発見された10例の甕棺内の人骨を調査した長谷部博士と山内清男氏は，そのうちの９例が早産児または死産児で１例が生後まもない乳児のものであることを明らかにした[24]。清

野博士が発掘された吉胡貝塚の35例の甕棺内の小人骨は，その半数ぐらいが胎児骨であり，なかには3歳から6歳程度の幼児骨をもふくんでいたといわれる[25]。縄文時代の他の時期——中期・後期——や，あるいは東海地方に発達した縄文時代直後の甕棺の場合[26]はともかくとしても，このもっぱら晩期に盛行した甕棺のなかに小児を葬るという傾向が支配的であったことは確実である。いったい，なぜこのような風習がひろく行われたのだろうか。小金井良精博士は，『日本石器時代人の埋葬状態』のなかで「小児甕葬」にふれ，「石器時代に於ては小児を容れる位の甕はあったが，大人を容れるような大きなものを作ることは出来なかったからして，大人にはこれを頭に被せるだけで満足せねばならなかったであろう」と述べている[27]。なるほど，小金井博士のいう「甕被葬」，すなわち成人の人骨の頭に土器をすっぽりかぶせた例が，大阪府国府遺跡，岡山県津雲貝塚，あるいは愛知県稲荷山貝塚などで発見されている。また，長谷部博士は「石器時代人が死産児を甕葬したのは，これを一個の人格として認めず母の部分と信じて居たことを思わせる」と考え，「然らば何が故に甕に入れて葬ったか。この疑問は甕そのものが説明しているように思われる。甕は容器にして，又貯蔵の目的に用いられ，即ち死産児は甕に入れて後日の為に貯蔵されたのであろう」と述べている[28]。小児の遺骸が，成人のそれとは異ったとり扱いをうけたという意味を，われわれはそうした考えの上にたって，さらに思索していく必要があるだろう。

いわゆる小児甕棺と，ある意味で似ているような性質をもつものに，甲野勇氏によってとりあげられた「容器的特徴を有する特殊土偶」がある[29]。それは中部地方と関東地方の一部で発見され，おそらく縄文時代の最終末期に位置づけられると思われるものである。この土偶のなかに，初生児または胎児の骨を入れたということは，甲野氏の説くところであり，またかかる風習は甕棺葬が「変化発展」して行われたというのも氏の見解である。そして，本来土偶が女性を，しかも妊娠した女性をあらわしていることが示すように，土偶と妊娠とは密接な関係をもち，またそれは妊娠と出生との関係にもつながり，したがってさらに初生児または胎児と土偶との浅からざる関係が，「幼くして死せる者の骨を入れる為めに母性的性質を有す土偶型容器を製作使用した」という，甲野氏の「推定」は，この土偶のもつ意味をもっともよく指摘しているといえよう。小児の遺骸が成人のそれとは異ったとり扱いをうけたという意味は，「土偶型容器」の存在によって一つの具体的な想定を与えられるであろう。それは，母性との離れがたい関係であり，みずからの肉体から生まれながらも，生きながらえずしていのちを失ったものにたいする，母親の手をつくした処置であったということを。しかし，それにしては少しく誇張しすぎる処置であるというならば，原始共同体の段階での血縁関係が，母かたの血すじによってうけつがれていったという母系制の，間接的な反映として理解すべきであろうか。

埋葬された人骨には，「抜歯」などのような意識的に加えられた変化のほかに，ときおり外傷の痕跡のみとめられるものがある。清野博士によれば，それは今日の生活にみるよりもはるかに頻発したものであったといわれる。清野博士の生涯の労作『古代人骨の研究に基づく日本

人種論』は，「骨の外傷」[30] をとりあげ，縄文時代人にはとくに肢骨の骨折が顕著であり，わけても「最も頻発したのは前膊骨であり，殊に尺骨である」と指摘している。そして「上肢骨折の全部は右側に生じ易く，右側は左側よりも四倍多く骨折を生じ」，また「男子骨は女子骨よりも五倍多く骨折に罹って居る」という事実にふれている。このことは，かれらの生前の生活において――骨折をまねくような――はげしい労働が，多くの場合右手（上肢）によって行われ，しかもその衝撃ないし荷重が前膊部の外側に集中する性質のものであったことを意味している。そしてさらに，そこに規定される形態の労働にたずさわっていたものが，女性であるよりも男性であったという事実をはっきりと物語っている。狩猟や漁撈などのはげしい労働には，もっぱら男性が従事し，植物採集や家政は女の専門とするところであったというのは，よくだれしもが語ることである。人骨の外傷のあり方は，このことを間接的に裏づけ，縄文時代における男と女のあいだの分業，すなわち自然的分業の発達を立証している。労働が自然的分業のかたちで行われていたと思われる縄文時代には，社会的分業と交換とが発生する必然的な条件は，まだ充分用意されていなかった。したがって，私有が，階級が，生まれることはありえなかった――このテーゼを，われわれは僅かに「骨の外傷」をとおしてうかがうだけでなく，埋葬にかんする他の多くの事象からも教えられるのである。

縄文時代の埋葬された遺骸は，屈葬とか伸葬というような形式的なちがいをもちながらも，副葬品のないという点において，また埋葬施設において，すべては質的な差別をできない状態で葬られていた。東北日本の積石や配石をもつ墳墓は，その大きさのちがいや，副葬品の有無という点において，身分の相違や階級の存在を一部の人に考えさせているが，しかし漆器や硬玉やあるいは石鏃などを所有していた個人が，あるいはより大きな積石をもつ墳墓に葬られた個人が，他のいっそう基本的な生産用具と，多くの労働力を所有しうる権力者であったとは，すなわち支配する「階級」的位置にあったとは，考えられないであろう。むしろそれは，まえに述べた理由と，またそのゆえに複雑性をましたであろう共同体内部の諸関係を反映しての結果であると思う。

この東北日本の例を除けば，他のほとんどすべての遺骸には，まったくといってよいほど副葬品はともなっていない。埋葬された人骨にともなって，しばしば発見されるのは生前かれが身につけていたいたところの服飾品の類である。それは土・石・骨・角・牙および貝等の腐朽しがたい物質でつくられ，髪飾・耳飾・頸飾・腕輪・腰飾などとしての役目をもっていたと判断される諸遺物である。しかし，これらの遺物を，すなわち耳飾と髪飾とそして腰飾をともなったような人骨がある一方には，まったくなにもともなわない人骨が多くある。このことは，東北日本の積石をもつ墳墓の埋葬にみられる差と，ひとしいことではなかろうか。だが，一般的にいって服飾品の佩用は個人的な差よりも，多くの原始人がそうであるように，男女の性別による差があったかのようである。その一つの例を男に腰飾をともなうものが多く，女に腕輪（貝輪）をしたものが多いという事実のなかにみることができる。清野博士の集計した結果に

よれば[31]，腰飾は40例のうち，男28（このうち2例は疑問），女5，不明7であり，一方腕輪は女19（このうち3例は疑問）にたいし，男3，その他性別不明のもの4，小児1，といういずれも両性の間に著しい数的な差をあらわしている。この結果は，さらに戦後発掘された吉胡貝塚をはじめ，他の遺跡におけるいくつかの例を追加することによって，いっそう確かな事実とされる。服飾品が性別によるちがいをもつことを，この腕輪と腰飾のみからでは，充分に納得させることはできないだろう。しかし，全体的に少ない他の服飾品からでは，その差を理解させることは，いっそう困難なようである。

ところで，女性のうちでも腕輪をしていないものと，しているものとがある一方，その腕輪をしているもののうちには，片腕に1個だけしているものや，両腕に1個ずつしているものの他に，まれに左右に数個ずつしているものがある。そのような例は，岡山県津雲貝塚，同中津貝塚[32]，および愛知県吉胡貝塚で発見されている。これらはたくさんの腕輪をしているということだけではなく，津雲貝塚や中津貝塚の人骨が示すように，例の少ない耳飾をもつけている。このような女性の生前の姿を考えてみることは，きわめて興味のあることだろう。中津貝塚の例はよくわからないが，津雲と吉胡の場合はいずれも熟年の女性であると報告されている。たとえ，縄文時代の女性の労働が，植物採集や家政といったような比較的軽いものであったとはいえ，あれほどにたくさんの貝輪[33]を手にはめていては思うように仕事もできなかったろう――とすれば，それらの女性が労働のなかで占める位置は，特殊であったと考えざるをえない。いくつもの腕輪を手につけ，耳飾を佩した女性の姿は，ひときわめだっていたことだろう。氏族共同体のなかで指導的な役割をはたしていた首長は，長い期間女性であったという所説のなかに，そのような埋葬例を考えてみることも，やがては必要な課題となるであろう。

縄文時代の社会をつらぬく基本的な諸法則――とくに生産諸関係――は，埋葬の研究をとおしてよりよく明らかにされるだろう。しかしここでは，そうした問題とその方向を提起すべく試みたにもかかわらず，きわめて素朴なかたちに終ってしまったことを遺憾に思う。それは，埋葬の研究の現状が考古学の現段階的課題にそぐわないという欠陥もさることながら，私の資料整理の不足と理論の貧困に起因していることも否めない。縄文時代における生産の総体のなかで今後埋葬の研究を進めていくことが必要であると，いまとくに感じている。

注

（1）岡本　勇「相模平坂貝塚」（『駿台史学』第3号）　鈴木　尚「相模平坂貝塚出土の人骨に就て」（『人類学雑誌』61巻3号）

（2）斎藤　忠「松島湾内諸島に於ける貝塚調査概報」（『東北文化研究』2―4）

（3）清野謙次「日本石器時代人骨の埋葬状態」（『日本民族生成論』所収，122頁以下）

（4）酒詰仲男「茨城県陸平貝塚」（『日本考古学年報』1）

（5）長山源雄「平城貝塚調査報告」（『考古学雑誌』14巻11号）

（6）杉原荘介「愛知県豊橋市五貫森遺跡」（『日本考古学年報』2）
（7）長谷部言人「蹲葬の起源に就て」（『考古学雑誌』15巻5号）
（8）久永春男他『吉胡貝塚』（「埋蔵文化財発掘調査報告」第1，56頁）および久永春男「野外調査，墳墓」（『日本考古学講座』第1巻，77頁）
（9）清野謙次他『備中津雲貝塚発掘報告』（「京大文学部考古学研究報告」第5冊，35頁以下）
（10）鈴木　尚「武蔵新郷村東貝塚発掘調査概報」（『人類学雑誌』48巻11号）
（11）清野謙次博士の著書の記事（『日本民族生成論』117頁）を引用した。
（12）清野謙次「日本石器時代人骨の埋葬状態」（『日本民族生成論』130頁以下）
（13）松本彦七郎「宮古島里浜貝塚人骨の埋葬状態」（『現代之科学』7巻2号）
（14）小林行雄「縄文式時代の葬制」（『日本考古学概説』78頁）
（15）山内清男「石器時代人の寿命」（『ミネルヴァ』昭和11年3月号）
（16）小田島禄郎『岩手考古図集』（23頁）
（17）笠井新也「陸奥国発見の石器時代墳墓に就て」（『考古学雑誌』9巻2号）
（18）長谷部言人「陸前国細浦上ノ山貝塚の環状列石」（『人類学雑誌』34巻5号）
（19）榊原政職「遠江蜆塚に就いて」（『人類学雑誌』36巻4・5・6・7合併号）
（20）河野広道・藤原敏郎・藤本英夫『静内町先史時代遺跡調査報告』
（21）河野広道『斜里町先史時代史』
（22）駒井和愛「北海道音江の環状列石」（『考古学雑誌』41巻1号）
（23）久永春男他『吉胡貝塚』（「埋蔵文化財発掘調査報告」51頁）
（24）長谷部言人「石器時代の死産児甕葬」（『人類学雑誌』42巻8号）
（25）真岡亀四郎「三河国吉胡貝塚にて発掘せられたる甕棺内の小児骨」（『京都医学雑誌』3巻6号）
（26）久永春男「各地域の弥生式土器，東海」（『日本考古学講座』第4巻）参照
（27）小金井良精『日本石器時代人の埋葬状態』（『人類学雑誌』38巻1号）
（28）長谷部言人「石器時代の死産児甕葬」（『人類学雑誌』42巻8号）
（29）甲野　勇「容器的特徴を有する特殊土偶に就いて」（『人類学雑誌』54巻12号）および「土偶型容器に関する一，二の考察」（『人類学雑誌』55巻1号）
（30）清野謙次『古代人骨の研究に基づく日本人種論』（1949年，238頁以下）
（31）（30）におなじ（184頁以下）
（32）鎌木義昌「縄文時代における埋葬施設の一例」（『石器時代』第1号）
（33）甲野　勇「生活用具」（『日本考古学講座』3 縄文文化）第6図を参照

（1956年2月　『日本考古学講座』3　縄文文化　河出書房）

＊編集注：初出文献の縦組みを横組みとした。再録にあたっては，漢数字の一部を算用数字に改めた。また，注（33）の表現を改めた。

岡本先生の縄文時代研究について

武　井　則　道

この三編の論文は，必ずしも十分ではないが，岡本先生の縄文時代研究の方法論がわかるものである。

岡本勇先生は，1945年8月15日の日本の敗戦を契機に自己存在の理由を問う旅をはじめたのである。一つは自己存在を確かめるための過去の歴史への旅，すなわち考古学を学ぶ道である。1946年4月に明治大学専門部文科地理歴史科（旧制）に入学された。もう一つは人間としていかに生きるべきかという魂の彷徨である。ランケ，ドロイゼン，マイネッケ，ディルタイ，そしてニコライ・ハルトマンと遍歴していったのちに，史的唯物論にいきつかれたのである。それは学問のための学問から脱したいがためとのべられている。1953年の西川宏・李進熙両氏と書かれた「死せる神の復活」でその決意をはっきり示された。そして，それまでの全てのしがらみを断ち切って，和島誠一先生と共に歩む道を選ばれたのである。1953年11月に市原壽文氏とはかり，史的唯物論の立場で考古学を研究する会を組織した。これがのちの武蔵地方史研究会になる母体であった。こうした経緯からわかるように，岡本先生は日本の原始社会の発展の歴史を史的唯物論の立場から研究していこうとしたのである。

「労働用具」はいわば縄文時代の生産論の一部である。狩猟具，漁撈具，磨製石斧・打製石斧を取り上げている。具体的な使用法と機能についてのべ，どのような獲物（労働対象）であったかまで論じている。ただ資料的制約からどのような人間集団（労働主体）によって労働が行われたかについては十分述べられていない。先生は生産にかかわる問題についてはかなり関心を抱かれておられた。金子浩昌氏の骨角製漁具研究，松沢亜生氏の石器製作の研究などに理解をしめされ，協力を惜しまれなかった。

つぎの「縄文時代の集落をめぐって」は，1979年の秋に行われた武相文化協会主催の「南関東の縄文文化諸問題」の講演の記録である。そのために他の二編と違いすこし表現が冗長になっている。内容は集落の研究史，集落址自体の分析視点，そのための竪穴住居の復元，そして集落址相互の分析視点などについて述べられている。ただ先生が中心となって進められていた横浜市港北ニュータウン建設地域内の遺跡調査の途次であったために，集落址相互の関係や集落址と共同体の関係などについては十分に論じられていない。

「埋葬」は，1955年の時点でまとめたものである。縄文時代の埋葬遺骸は質的な差別が認められない状態で葬られており，東北日本の積石や配石をもつ墳墓について身分の相違や階級の存在を一部の人が考えているが，基本的な生産用具や多くの労働力を所有しうる権力者，すなわち支配する階級的位置にあったとはみられないと結論づけている。埋葬の研究といえども縄文時代の生産のあり方などを踏まえて考察しなければならないことを示された論文である。

条痕文土器群後半期の諸段階
―茅山下層式・茅山上層式土器とその周辺の土器群―

野　内　秀　明

1．はじめに
2．茅山式土器の設定と型式内容
3．戦後の茅山式土器細分研究と茅山貝塚の層位の問題
4．茅山下層式土器の型式認識とその変化
5．茅山上層式土器の型式認識とその変化
6．最近の研究者の立場と新たな指摘
7．鵜ガ島台式土器後半期の様相
8．いわゆる「凹線文」とその成立
9．茅山下層式土器の諸段階
10．茅山上層式土器の諸段階
11．茅山下層式・茅山上層式土器と周辺の土器群について
12．さいごに

1．はじめに

戦後の茅山式土器の細分研究は，ＧＨＱによる占領政策の続く中，昭和22（1947）年に行われた野島貝塚の発掘調査を契機に，茅山貝塚，鵜ガ島台遺跡，吉井貝塚という系統的な発掘調査において確固としたものとなっていったことは改めて語るべきもない。また，昭和29（1954）年に行われた茅山貝塚以降の一連の調査が，文化財保護法が施行されて間もない時期に地方の民間研究団体に過ぎない横須賀考古学会によって行われたことは，研究史上の一側面として特筆されるべきものであろう。そして，これらの細分研究の前提に，赤星直忠や岡本勇らの提起した地域史を研究する上での課題があったことは忘れてはいけないことだと思う。

かつて，赤星が地理的に近接して存在する茅山貝塚と吉井貝塚の比較研究の重要性を指摘したこと（赤星1937）は，岡本によって遺跡群研究として継承された考古学上の有効な方法論であったし，また，岡本は茅山貝塚の調査の成果を踏まえて，「ゆるやかな発展という言葉によって表現される縄文文化の，その数千年におよぶ長い時代のなかで，いわゆる茅山式土器によって反映される時期は，いくつかの興味深い問題点をはらんでいる。われわれがそれらのいくつかの問題の解決にたち向かおうとする場合，まず必要な操作はそれぞれの地域において茅山式土器の型式的な細分を確立し，より精緻な編年の骨組をつくることである」（赤星・岡本1957）と，これから行う調査と研究が細分研究だけを目的としたものではなく，歴史上の幾つかの課題を解決するためであることを述べている。それは「型式群の中に住居址，石器，骨角器，土製品など土器型式との関連においてとらえられるいっさいの資料を方法論的に正しく位置づけ，その実体をいきいきとえがきださなければならない」（岡本1966）という問題意識にもとづいた考古学の方法をもって歴史事象を記述することを目的としたものであった。

平成４（1992）年に吉井貝塚の史跡整備事業の一環として，初めて第２貝塚に対して本格的な発掘調査が行われたが，この調査では赤星と岡本によって指摘されていた条痕文土器の時期

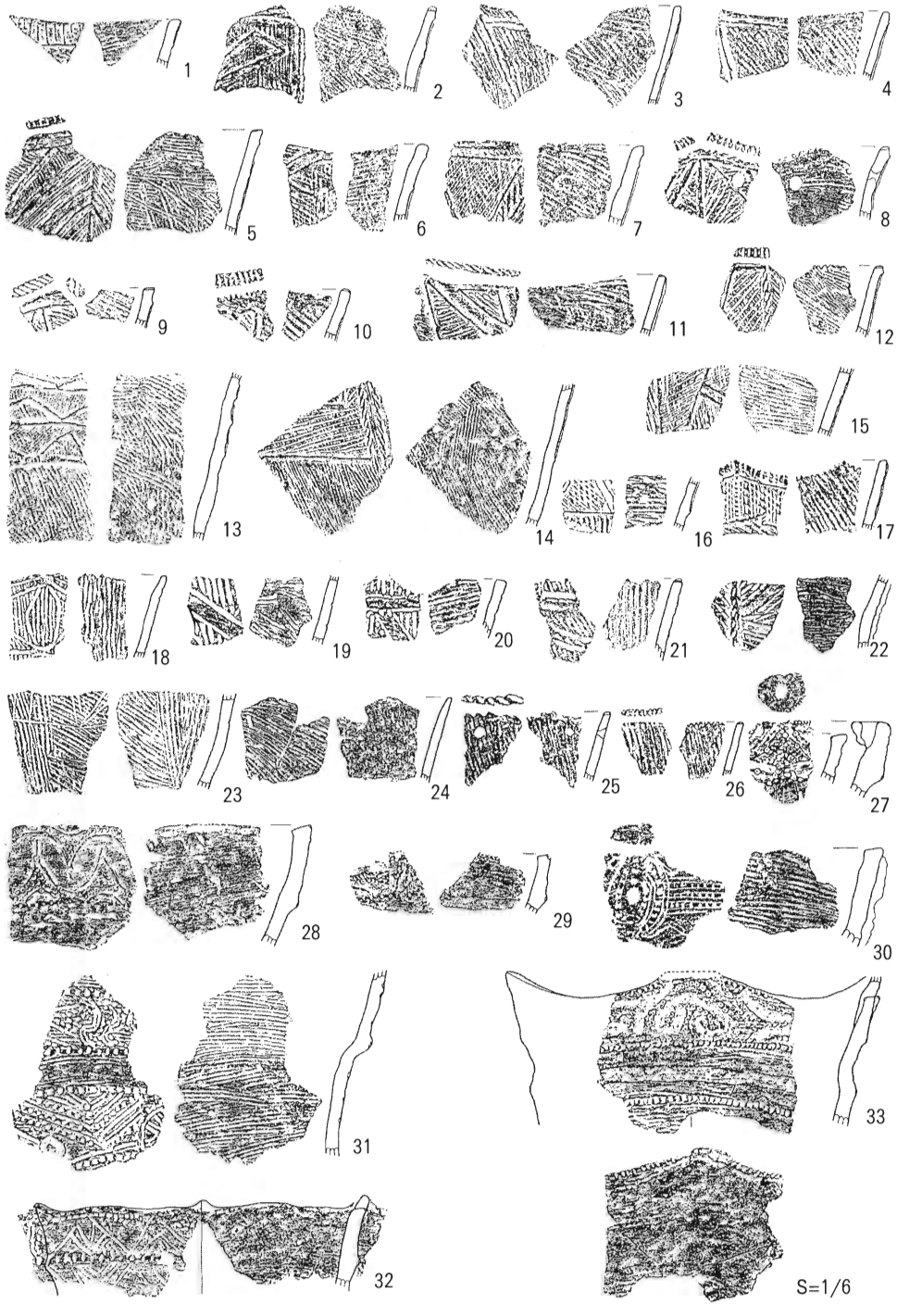
に伴う石材の問題など幾つかの課題を解決するための新たな資料を得たいと考えた。また，第2貝塚下部貝層の分析から第1貝塚下部貝層と貝類組成・混土率，魚相などの変化が認められ，茅山上層式の細分の可能性についても新たな課題が提起された。このように新たに提起された課題とともに，この時期の歴史事象を把握するために条痕文土器群の細分について改めて考えなければならない。本稿では，条痕文土器群後半期の茅山下層式，茅山上層式土器について研究史を振り返りながら，細分研究について基礎的な検討を行いたい。

2．茅山式土器の設定と型式内容

大正14（1925）年以降，山内清男は繊維土器が他の型式の縄文土器より下層から出土するという関東地方以北の層位学的な発掘事例にもとづき，縄文土器の中でも繊維土器が最も古いという見通しのもと調査を続けていた。茅山式土器が設定された契機のひとつには，山内がその研究過程で奥羽史料調査部に所蔵されていた「相模三浦郡久比里村カヤマ貝塚」の土器に注目したことがある（山内1929)。ほぼ時を同じくして，三浦半島では赤星によって後に茅山式土器の標識資料となる茅山貝塚の採集資料（第1～3図）が充実したものとなり，それらの土器が既知の型式と異なることは，既に赤星と大場磐雄とによって認識されていた（大場1930)。昭和4（1929）年に山内によって「関東北に於ける繊維土器」が史前学雑誌第1巻第2号に発表されると，赤星は山内に書簡を送り，自らの採集した茅山貝塚の資料の存在を知らせた。

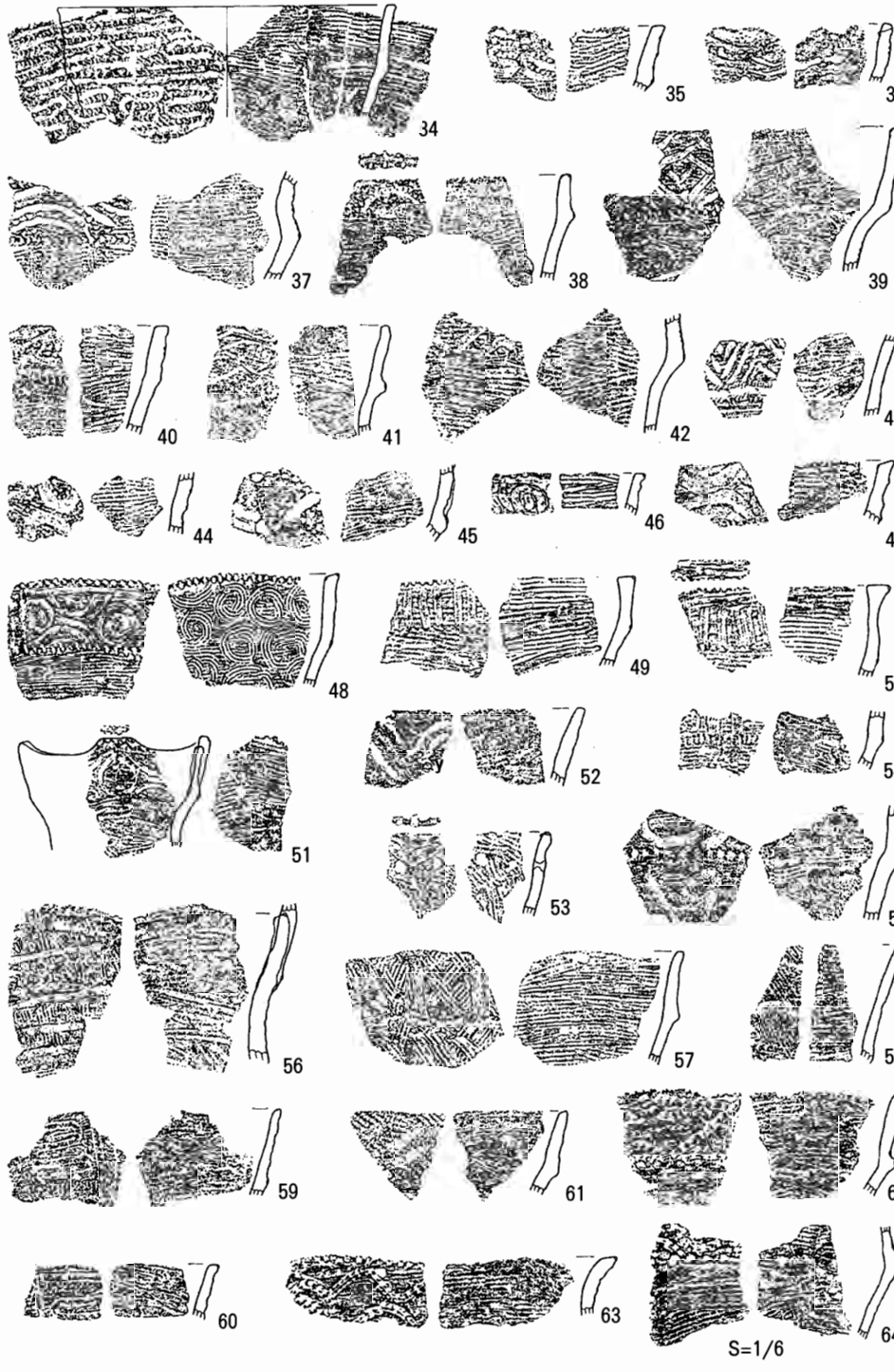
このひとつの論稿と一通の書簡によって，現在とは異なり，依然として空間的な距離がそのまま時間的な距離として存在する時代に，異なる空間で同じ土器型式に注意していたふたりの研究者の時間の流れが絡み合ったのである。翌年，山内は横須賀に赤星を訪ねてその採集資料を実見し，赤星と相談して茅山式を提唱するに至った（山内1930)。このような茅山式土器の設定の事情とそれにかかわる研究者については，江坂輝彌によって「茅山式土器の明確な編年的位置を最初に気付かれたのは山内氏であり，茅山式土器が他のものと異なり，一形式をなすものであることに気付かれたのは赤星氏と大場氏で，茅山式土器の命名者は赤星氏と大場氏である」と総括されている（江坂1955)。

茅山式土器の型式内容は，昭和5（1930）年に赤星によって詳細に紹介され，その型式表象が9項目にわたって列記された（赤星1930)。最初に記述されたことは「器面内面，または外面にアカガイ属による条痕のあること」と「繊維を多量に含むこと」で，これは山内の示した「内面に条痕のある型式」という古式縄文土器の最も大きな特徴に従って，赤星が茅山式の説明の冒頭に持ってきたことは想像に難くない。続いて，文様要素や文様モチーフ，整形技法，口縁部・胴部・底部形態など器形について概括的に記載されているが，報文中の具体的な土器に関する記述の中にも重要な指摘がある。器形上の特徴として腹部隆起帯の有無が指摘され，文様との関係から，これを欠くものとして細隆線文と条痕文のみの土器の一部が上げられ，腹



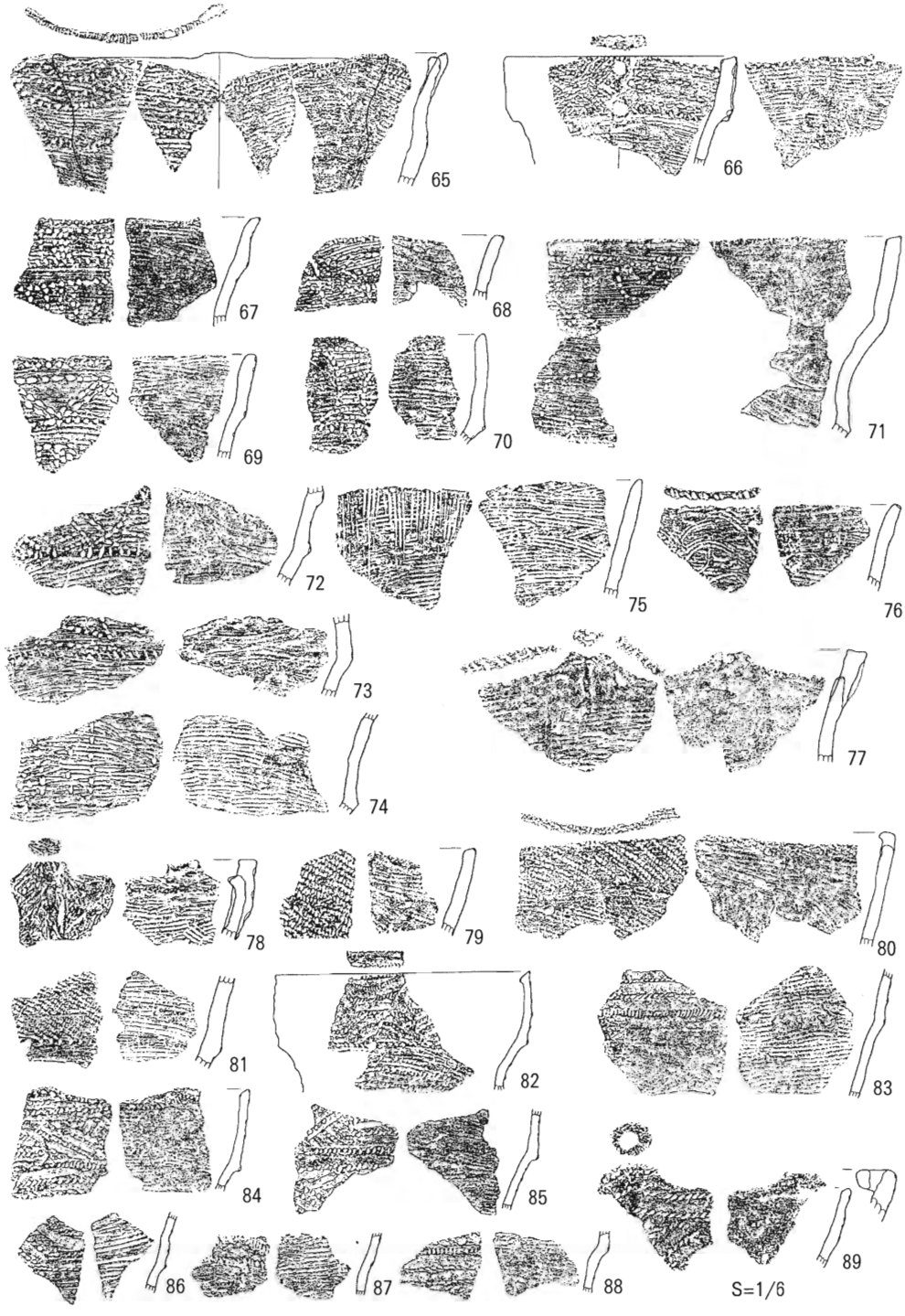
野島式(1～26)　鵜ガ島台式(27～29)　茅山下層式：竹管文・沈線文系(30～32)　刺突文・凹線文系(33)

第１図　茅山式土器標識資料（１）



刺突文・凹線文系(34～37)　凹線文・充填文系(38～45)　疑似細隆起線文系(46～48)　凹線文系(49～55)　条痕文・凹線文系(56・57)　縄文・凹線文系(58～61)　結節沈線文系(62～64)

第2図　茅山式土器標識資料（2）



刺突文系(65～74)　茅山上層式：条痕文系(75～77)　縄文系(78～81)　連続刺突文系(82～89)

第３図　茅山式土器標識資料（３）

部隆起帯を持つ土器と区別されている。「腹部には器体をめぐって2本，または1本の腹部隆起帯がある」ものは，現在でいう鵜ガ島台式・茅山下層式，「腹部隆起帯を欠くもの」は野島式・茅山上層式に対応する型式上の相違である。また，平底，尖底がどの「形式」に存在するかに注意をはらっているが，良好な資料にめぐまれずに確認できていない。だが，尖底は野島式に多いもので，他の型式表象で分類されたどれに対応するのかという視点は重要であった。口縁部形態についても，「細隆線文のものにては，突起はすべて三角突起のみである」とし，野島式に特徴的な波頂部，「中凹突起は腹部隆起帯と一隆線をもって結ばれ」，「有孔式（突起）のものは特にその部で口縁部が器の外へ腹部隆起帯のあたりからでている」など鵜ガ島台式，茅山下層式の環状把手にも的確な指摘がなされている。

総じれば，細隆線文を主体的な文様要素とし，胴部に括れや隆起帯をもたない土器群（第1図1～22），腹部に隆起帯を2本ないしは1本を有し，点列文，点列沈線文，沈線文などの文様をもつ土器群（第1図30～第3図74），条痕文のみで胴部に括れや隆起帯をもたない土器群（第3図75～77）といった，将来，野島式，茅山下層式，茅山上層式と細分される基本的な分類が型式として抽象化される以前の説明段階では正しく認識されていたと評価される。この赤星の「茅山式土器」に対する理解が，後に野島貝塚にはじまり，茅山貝塚，鵜ガ島台遺跡，吉井貝塚という一連の発掘調査で明らかにされていった諸型式概念化の基礎となっていった。しかし，研究史に明らかなように，鵜ガ島台式（第1図27～29），茅山上層式についてはその資料がきわめて少量であったり，型式表象が乏しいことによって，この時点での茅山式土器の内容は，野島式と茅山下層式を中心としたものであった。

3．戦後の茅山式土器細分研究と茅山貝塚の層位の問題

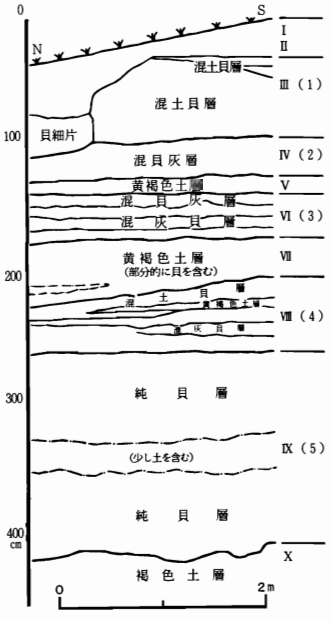
終戦後間もなく発掘調査が行われた野島貝塚の貝層から出土した土器群は，「低隆線と平行沈線とが複合したものが大部分を占めており，茅山式土器に比定されるべきものであるが，茅山および吉井貝塚にみられた渦文・流水文・同心円文などの文様構成が見られず，ただ平行線の羽状配列が目立っている」という観察から，茅山式の一部の要素に限られると認識された。この認識の前提には，戦前までの赤星の茅山式土器に関する詳細な観察に基づいた理解があった。こうして，戦後の茅山式土器の細分研究は，野島貝塚の土器が「田戸式と茅山式との中間に位置する」（赤星1948）と編年的に位置づけられ，「野島式」として茅山式土器から型式的に分離された（赤星1951）ことに始まった。

また，吉田格も野島貝塚の資料に注目し，茅山貝塚で提示されていた資料と飛ノ台貝塚出土の茅山式との比較から，「野島貝塚は茅山式の古い時期の貝塚」と位置づけ（吉田1948），三日月山貝塚出土資料との検討で，茅山式土器が時間的に野島貝塚―茅山貝塚―三日月山貝塚出土土器へ変遷することを想定した（吉田1957）。このような型式学的検討にもとづいた戦後の茅

山式土器の細分研究の見通しのもとで，茅山式土器の標識遺跡である茅山貝塚に対し，その包含される土器群を層位的に把握することを目的とした発掘調査が実施されたのは考古学の研究として的確な方法であった。

初めて本格的な発掘調査が行われた茅山貝塚の層位は，表土層から貝層下堆積層まで10層に分層されたが，これらの堆積層は複数の貝層群（Ⅲ～Ⅸ層）をはさんで，貝層上堆積層（Ⅰ・Ⅱ層）と貝層下堆積層（Ⅹ層）からなっていた（第４図)。貝層上堆積層では茅山式を中心に関山式，諸磯式，土師器，須恵器などが混在し，貝層下土層からは野島式土器が出土した。この層位的な事実から，野島式土器と貝層中の土器群が分離され，その編年的位置が確認された。貝層群は混土貝層（Ⅱ・Ⅷ層)，貝層と灰層の互層からなるもの（Ⅳ・Ⅵ層)，純貝層に近いもの（Ⅸ層）と層相を異ならせ，その間に貝が混じらない黄褐色土層（Ⅴ・Ⅶ層）が存在した。この２つの間層が鍵層と認識され，特に「第２貝層（第４層）と第３貝層（第６層）とにおいて土器に相違を認め，その間に挟まれた薄い土層を境にして上下に分ける必要を感じた」(赤星1954）とされ，Ⅴ層を基準として「従来茅山式土器と呼ばれていたものは下層において検出され，上層においては条痕のみのものが主で，稀に不明瞭な縄文をその上に施文するものがあった。―中略―よって，従来の茅山式を茅山下層式と呼び，今回上層から検出したものを茅山上層式と呼ぶことが適当」(赤星1954）とされた。

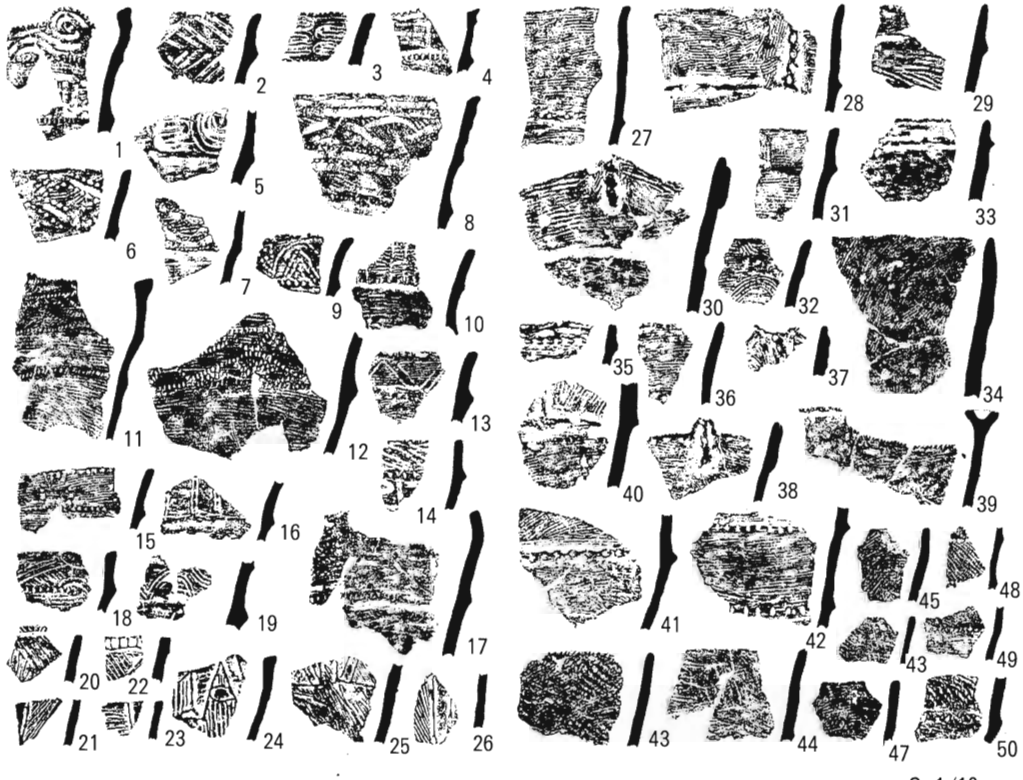
これまでの茅山式土器に関する論考のなかで，鍵層をⅦ層とする認識がある（関野1985・金子1991）が，報告中の記述から判断すると，茅山上層式と茅山下層式の変化が認められたのはⅤ層である。Ⅶ層が鍵層と誤解された原因は，報告（赤星・岡本1954）第４図のキャプションに茅山上層式の出土層位がⅥ層とされたことにあると思われる。このⅥ層という記載は，報告中の「殆んど文様をもたない条痕におおわれただけの一群の土器がある。これらは上部貝層（三層）から純粋に出土し，またそれに接する上下の層（二層・四層）からも見いだされる」という記述と矛盾し，これらの記載から読み取ればⅥ層はⅣ層の誤記と思われる。このような層位的な様相にもとづいて再考すれば，茅山貝塚の貝層群（Ⅲ～Ⅸ層）は，Ⅴ層を鍵層として茅山上層式を包含する上部貝層群（Ⅲ・Ⅳ層）と茅山下層式を包含する下部貝層群（Ⅵ～Ⅸ層）からなり，下部貝層群は層厚40cmほどの土層（Ⅶ層）をはさむことから，茅山下層式の時期においても時間的断絶が存在していたと考えられる。この層位の様相は，「従来の茅山式」としてかつて提示された土器群とⅧ・Ⅸ層を中心に出土した土器群との型式学的な検討の必要性を示すものであろう。



第４図　茅山貝塚の堆積層

４．茅山下層式土器の型式認識とその変化

岡本は茅山貝塚出土土器をＡ．細隆起線を主な文様要素とするもの（第５図20～26），Ｂ．凹線文あるいは刺突文等によって文様構成されるもの（第５図１～19），Ｃ．条痕以外に文様をもたないもの（第５図27～42），Ｄ．斜行縄文をゆうするもの（第５図43～50）に分類し，「あたかも指頭によってかかれたかのような凹線文，連続した刺突文，これらは茅山貝塚の土器の，したがって茅山式土器の主体的な文様要素である。この文様によって特徴づけられる一群の土器は，殆ど全て下部貝層から発見された」層位的事実にもとづき，「ここに茅山下層式と仮称する土器は，いままで漠然と茅山式土器とよばれていたものの主体をなす一群であった」とし，《Ｂ》の土器を茅山下層式土器と呼んだ（赤星・岡本1954）。一方，《Ｃ》の土器は茅山上層式とされたが，出土資料の少なさと型式表象の乏しさから，具体的な内容は後に行われる吉井第１貝塚の発掘調査まで待たなければならなかった。この茅山下層式土器に関する認識は，戦前に赤星が提示した茅山貝塚採集資料を前提とし，野島貝塚の調査所見から型式学的に分離され，茅山貝塚の層位学的事実にもとづいて，その編年的位置が追認された野島式，そして茅山上層式の型式内容を除いたものに立脚している点は注意を要する。



茅山下層式(1～19)　野島式(20～26)　茅山上層式(27～50)　S=1/10

第５図　茅山貝塚出土土器

その後，岡本は鵜ガ島台遺跡出土の茅山下層式土器（第６図）の説明で「文様は列点文，凹線文などを主な文様としている。これらのうちには，列点文のみのもの，列点文と凹線文の併用されたもの，凹線文のみのものなどの区別がある」（岡本1961）と述べ，凹線文と列点文が併用された文様要素（第６図22～25）を追加指摘した。また，「斜行縄文のある土器が若干発見されたが，これらは茅山下層式土器に含められる」とし，茅山貝塚では斜行縄文の土器は主として茅山上層式との関連で考えられたが，茅山下層式の型式組成に縄文施文の土器（第６図12～17）が存在することを再確認した。また，注意されるのは，凹線文による文様が描かれ，刺突による充填文が認められる土器の存在である（第６図26・29・32）。これらの土器は茅山貝塚下部貝層に見られず，茅山式の標識資料の中に類例が求められるものである。

昭和35（1960）年から翌36（1961）年にかけて吉井第１貝塚の発掘調査が行われ，不明確であった茅山上層式の内容が明らかにされ，同時に茅山下層式土器についても重要な指摘がなされた。下部貝層直下から出土した土器群（第７図56～61）は，「文様の変化にとみ，胴上半に稜をかたちづくる器形の土器は，まず文様の上でいえば，縄文・隆線文・刺突文・凹線文などを主な文様としている。―中略―これらを茅山貝塚の典型的な茅山下層式土器に比較すると，凹線文・列点文のきわめて少ない点で，また稜とくびれの屈曲度が弱いことなどで異なっている。このちがいは，もとより相対的な差であり，茅山下層式土器のより退化した現象である」（岡本1962）と茅山下層式の時間差として理解された。これは，茅山貝塚で「茅山下層式土器をいくつかに分けられた層の，下から上へと順次に観察してくると，上層へ近づくにしたがって主としてその文様の萎縮する傾向が感じられる。―中略―この傾向は，上層において―にわかに―積極化し，文様を喪失し，器形の上にも変化を招き，茅山下層式とは異なった土器，すなわち茅山上層式土器を出現させることとなる」（赤星・岡本1957）という認識を前提に述べられたもので，すでに幾らかの人々によって指摘されているが（関野1985・金子1990），茅山下層式の時間差についての新たな指摘であった。このように，茅山下層式の型式内容は戦前に赤星が提示した茅山式土器を前提とし，昭和29(1954)年に発掘調査が行われた茅山貝塚下部貝層，鵜ガ島台遺跡，吉井第１貝塚出土資料の脈絡の中で理解がなされるべきものと思われる。

第６図　鵜ガ島台遺跡出土茅山下層式土器

5．茅山上層式土器の型式認識とその変化

一方，茅山上層式土器については，茅山貝塚上部貝層出土資料から，箍状の隆帯や凹線文が器面に水平にめぐるだけの「殆ど文様をもたない条痕におおわれただけの一群」で，器形上は段もくびれもなく，なんら屈曲を示さない平底の土器と認識された（赤星・岡本1957)。しかし，「茅山上層式土器とよんだ土器は，はじめ茅山貝塚のⅣ層から表土にかけて発見されたものであるが，資料的には十分でなかった」(岡本1962）とされ，その型式表象の乏しさと出土量の少なさから型式としての概念化に課題を残していた。

吉井第1貝塚の調査はこれらの課題の解決を目的として行われたもので，その豊富な出土資料から，茅山上層式土器の器形は何ら屈曲も示さない平底の深鉢形が唯一のものであることが再確認され，文様については茅山貝塚上部貝層出土土器が器面を水平にめぐる凹線文と箍状隆帯以外文様を持たなかったのに対して，「約三分の一程度の土器の口辺部にのみ文様が残され」，条痕以外の文様が施されるもの（有文系土器）と条痕文だけの土器（無文系土器）が約1：3の割合で型式組成をなすことが指摘された。有文系土器は，文様要素から条痕を文様化したもの（第7図4～6），隆帯文（第7図7～10)，凹線文（第7図11・26)，刺突文・列点文（第7図13～26)，沈線による文様（第7図27～31)，貝殻文をもつもの（第7図36～38)，縄文を有するもの（第7図39～47）に分類され，その文様モチーフは格子目文（第7図5・31・32・33)，重弧文（第7図4・6・27)，重円文（第7図4)，連続山形文（第7図24～26・29・30)，垂下文（第7図17・18・21・34・38)，矢羽根状文（第7図35）などが存在することが示された。

ここで提示された茅山上層式土器の型式内容は，単に有文系土器の存在が追加され，茅山上層式の型式認識の変化が認められただけではなく，茅山貝塚出土土器と相違が存在することを示したものであった。箍状の隆帯が施された土器（第7図8・9）については，型式学的に「先行する型式の土器にみられた『稜』の変形」と考えられ，「層位的には下部に属する」ことが指摘された。これは茅山貝塚の上部貝層から出土した土器の多くが，吉井第1貝塚下部貝層で提示された茅山上層式の一部で，同じ型式の中で時間的に古い段階に位置することを示したもので，茅山上層式土器の細分についての可能性が指摘されたのである。しかし，箍状の隆帯文をもつ土器は「沈線・縄文・刺突文などによる二次的な文様がほとんどみあたらない」とされ，これらの土器と同じ段階で型式組成する有文系土器については不明であった。

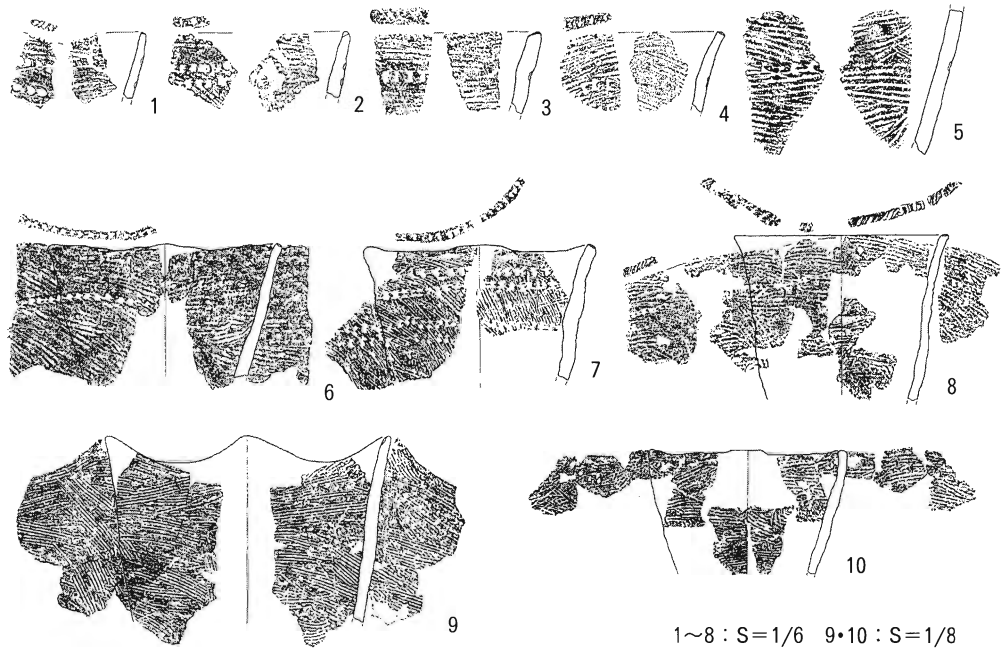
平成4（1992）年に行われた史跡整備事業に伴う確認調査によって，はじめて第2貝塚の堆積層の様相が把握された（野内他1999)。第2貝塚は第1貝塚とよく似た堆積状況を示し，混貝土層をなす間層（2層）をはさんで上部貝層（1層）と下部貝層（5層）が存在した。早期の堆積層は下部貝層（5層）を中心として，貝層下土層であるXⅡ層，貝層の崩壊堆積層（4層)，これらを断続的に覆っていた黒褐色土層（3層）であった。XⅡ層から出土した土器片は小破片で，その出土量も少なかったが，器形上の屈曲・低隆帯を持つものが多く，第1貝塚

1～55：下部貝層出土土器　56～64：下部貝層直下出土土器

第７図　吉井第１貝塚出土土器

の下部貝層直下出土土器にその様相を近似させていた。第２貝塚下部貝層出土土器は，器形上の屈曲を見せない有文系土器と無文系土器によって組成されていたが，第１貝塚下部貝層出土土器に見られた幅広の文様帯をもつものは少なく，また沈線文よりも刺突文列の多用が目立っていた。また，貝層上堆積層である３層から出土した有文系土器は細い劣截竹管を共通の施文具とした刺突文列（第８図１～３），竹管の押し引きによる短沈線（第８図４～６），結節沈線文（第８図７・８）を特徴としたもので，条痕文だけが施された無文系土器（第８図９・10）とともに検出された。これらの３層出土の結節沈線文の土器は第１貝塚出土土器の一部に類例（第７図17）が求められるが，その一部の様相だけが示されたものと考えられた。

このように，第２貝塚の下部貝層および貝層上堆積層である３層に帰属する土器は，伴出した東海系の土器が粕畑式土器としてとらえられたことと考え合わせて，茅山上層式の範疇でとらえられるべきことと判断されたが，下部貝層と貝層上堆積層（３層）での土器様相の変化，第１貝塚下部貝層出土の茅山上層式との相違が認められ，第１貝塚と第２貝塚の貝層の形成時期の問題とともに茅山上層式の細分の可能性が考えられた（野内1999）。また，第２貝塚下部貝層下から器形上の屈曲ないしは低隆帯をもつ土器が出土したことは，第１貝塚での層位的事実を追認したものである。



有文系：刺突文(1～3)　短沈線文(4～6)　結節沈線文(7•8)　無文系(9•10)

第８図　吉井第２貝塚下部貝層上堆積層（３層）出土土器

6．最近の研究者の立場と新たな指摘

このような型式設定までの研究史と標識遺跡での新たな調査結果を踏まえ，その後の研究者の茅山下層式，茅山上層式土器を論じる上での立脚点と研究成果について触れておきたいが，条痕文土器群前半期の野島式，鵜ガ島台式土器に比べて，その論考は多くはないのが現状である。そのような現状において，関野哲夫は早くから積極的に該期の土器論を進めてきた。関野は「茅山貝塚・鵜ガ島台遺跡の土器を基本に茅山下層式土器として認定する」（関野1985）とする立場をとり，茅山下層式土器の標識資料を昭和29（1954）年の茅山貝塚下部貝層出土土器（第５図）におき，鵜ガ島台遺跡出土の土器（第６図）による型式内容の充実として論を進め，その認識の上で「茅山下層式土器の刺突文の系統から区画状文に充填がみられるもの（三村貝塚，金谷原遺跡例）を古い段階に，充填しないもの（茅山貝塚）を中段階に，凹線文・刺突文を組み合わせたもの（西大曲遺跡）を新段階と考えることができる」と茅山下層式土器の諸段階を設定している。また，茅山貝塚下部貝層出土土器を型式学的に批判し，時間的に逆上る土器（第５図９）の混在を指摘したが，この指摘は後の研究者にも支持されている。しかし，赤星・岡本らの型式認識が戦前の茅山貝塚出土資料から出発していることで，その認識にずれが生じていると思われる。

金子直行は昭和５（1930）年の赤星報告以降の資料を型式認定の対象とする立場で，赤星・大場の示した資料と昭和29（1954）年に行われた発掘調査の層位的出土資料を対象として「茅山下層式」（金子1991）と認定しており，関野の立場と異なっている。金子は茅山貝塚の発掘調査出土土器の層位学的・型式学的検討にもとづいて下部貝層出土土器に関する関野の指摘を支持する一方で，上部貝層出土土器にも時期的に古い型式表象を示す土器（第５図31・48）の混在を指摘し，茅山下層式から茅山上層式に至る編年観を提示した。金子の編年観は，関野が駿豆地方の資料を中心に編年観を提示したのに対し，関野の示した連続刺突文系土器の編年観を一方の軸として，主として関東地方の資料にもとづくものである。

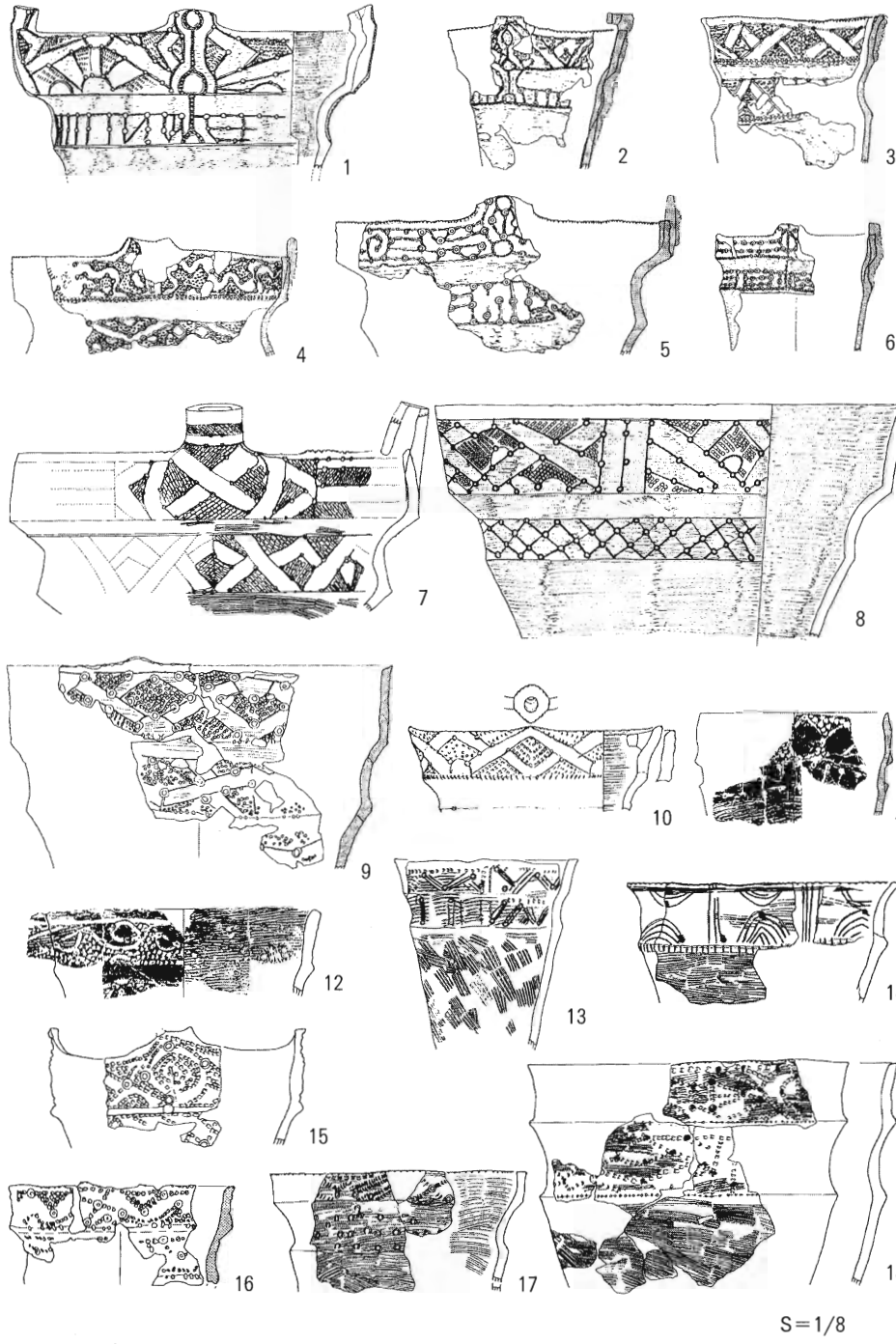
関野や金子らが標識資料に対する型式学的検討に基づく論考を提示したの対し，阿部芳郎は条痕文土器群総体での文様帯変遷から各階程を把握しようとする立場である（阿部1990）。阿部の論考は野島式から鵜ガ島台式・茅山下層式を経て茅山上層式までの文様帯，文様の連続性に関する概略的な記述はあるが，その具体的記述に欠け，基準資料に対する言及がなされていないことから各型式の理解について不明である。しかし，阿部は「凹線文といわれる文様も幅広の箆状工具によるものが圧倒的に多く，中には関東西南部や東海地方のものとかなり異なるものがある。指頭による凹線文は山崎貝塚ではわずか１点のみである。また，茅山下層式に一定量存在するという縄文施文の土器も当地域では未見であり，こうした文様表出技法の違いに茅山下層式土器の地域的特徴が内在するものと推測される」と凹線文の施文具について，あるいは凹線文・縄文といった文様要素の地域的偏在性など重要な指摘をしている。

7．鵜ガ島台式土器後半期の様相

茅山下層式土器の諸階程を考える前に，鵜ガ島台式土器後半期の様相について概観しておきたいと思う。鵜ガ島台式の細分については，関野の論考（関野1980）以来，幾らかの人によって論じられてきたが（佐々木1982・野口1984），ここでは鈴木啓介によってⅢ・Ⅳ段階として提示された土器（鈴木1998）を中心として概観する。鵜ガ島台式前半期の文様帯が口縁部から胴中位ないしは下位まで展開するのに対し，後半期では胴下位まで展開するものはなくなり，口縁部から胴中位までの間に凝縮する。この文様帯の胴上位への凝縮化は同時に，器形の上でも屈曲部の強調といった変化を伴っている。また，文様帯が胴上位に凝縮することに比例し，文様帯の横長化，縦分割による文様帯の多面分割が引き起こされ，分割面内での文様の横位展開が進行する。そして，多面分割の起点として，鵜ガ島台式後半期に見られる上端に凹部をもつ把手（第9図1）・環状把手（第9図2・7・10）・台形把手（第9図4～6・15）の成立・発展を促すことと思われる。このような器形・文様帯構成の変化に伴い，伝統的な襷状文に固執した文様モチーフにも変化が見られる。

それは把手下文様の成立・発展と分割面内文様の変化というふたつの方向性をもっている。これは特にⅠ帯において顕著な現象で，Ⅱ帯は把手の影響を受けることが少ないため，Ⅰ帯とは異なった文様変化（第9図1・2・5・6・8・17）をする。狭間貝塚（第9図1）・大稲塚遺跡（第9図2）例などⅡ帯まで把手下の文様分割の影響を受ける土器は，鵜ガ島台式後半期においても古い様相であると思われる。また，無把手土器も存在するが，分割部に垂下隆帯をもつなど有把手土器と同様に文様帯が多面分割され，有把手土器と同様の文様展開するもの（第9図3）も存在する。把手下文様には，把手中央部を挟んでX字文（第9図7），対三角文（第9図1），対弧文（第9図6・15），上下の円文を垂下文で連結したもの（第9図1・2・5），さらに前半期から継承・発展したものと考えられる垂下文（第9図3・4）などが存在している。また，分割面内の文様は伝統的な襷状文を継承したもの（第9図1～3・7～10）と既に襷状文の面影が認められないものがある。前者においては分割面が横長となったことに起因するものと思われるが，斜行区画文の施文起点として弧線文が採用されている（第9図1・8～10）ことが特徴である。後者においては，既に襷状文は崩れ，弧線文から発達したものと考えられる曲線文の発達（第9図4・12・16）が目立つと同時に襷状文から発達したと考えられる横位の山形文（第9図13・17）など直線的文様が存在し，また，弧状文の発達により，分割面内での直線文と弧状文から発達した曲線文が対等施文化し，これらが単独（第9図14）ないしは複合した文様（第10図16・18）が描出される。

このような鵜ガ島台式後半期において，区画状文と弧状文融合と同時に小区画化（第9図5）が進行し，襷状文の崩壊と文様帯多面分割面内で文様の横位連結による自由展開が現れるものと思われる。弧状文は文様帯分割面内の文様割り付けの起点としての機能をもって成立したと



狭間貝塚(1・8)　大稲塚遺跡(2～6・11)　新東京国際空港No.14遺跡(7)　間野台貝塚(9・16)
神谷原遺跡(10)　地蔵山遺跡(12・13・15・17・18)　山崎貝塚(14)

第９図　鵜ガ島台式土器後半期の土器群

思われることから，他の文様に対して先行施文されるが，茅山下層式の場合，起点文ではなく，文様モチーフ化しているため先行施文はない。このように，茅山下層式の成立は，鵜ガ島台式後半期の把手下文様と多面分割面内文様の変化の方向性上で考えられる。

８．いわゆる「凹線文」とその成立

凹線文は茅山下層式土器の最も特徴的な文様要素としてとらえられるが，凹線文という用語を茅山下層式の文様要素の記述用語として最初に使用したのは岡本である。赤星は「竹端指頭等に以て沈線を描いたもの」（赤星1930），「太沈線による流水文」（赤星・岡本1957）などと表現し，凹線文という言葉は使用していない。また，岡本に先行する研究者たちも「太い浅い沈線」（江坂1955），「幅広の沈線文」（西村1950），「竹箆や尖った竹木の先端で平行線，斜行文，曲線，ディザクを描いている」（大場1930）などと表現している。本来，凹線文は畿内の弥生土器第Ⅳ様式に盛行する口縁部文様（正岡1986），あるいは縄文晩期の土器に使われていた用語だが，岡本は茅山下層式に最も特徴的なメルクマールとなる文様に対して，あえて幅広の沈線文という表現を使わずにこれらの用語を援用し，具体的には「あたかも指頭によってかかれたような凹線文」と記載した。また，後に鵜ガ島台遺跡の報文では，「凹線文には，指頭でかかれたものと，そうでないものとがある」とも述べている。茅山下層式の土器面に観察される凹線文には軟質工具（第10図ａ種）と箆ないし多裁竹管などによる硬質工具（第10図ｂ種）の存在が想定される。軟質工具によるものは断面Ｕ字状だが，凹部内面が波状にうねるなどして硬質工具によるものほど整然としていない。また，硬質工具によるものは凹部内面はうねりがなく整然とし，かつ施文具の引きずり痕が認められる。

これら凹線文の成立は，大稲塚遺跡例に見られる細隆起線文系の希（非）充填文土器（第９図５・６）に系譜を求めることができる。既に関野が指摘しているように（関野1980），これらの土器に見られる細隆起線文間はナデられ，条痕文が磨り消されている。この手法は，指頭などの断面U字状の施文原体を採用して凹線文を描き，先行して描いた凹線文に沿って密接施文することによって，その隣り合う凹部端が疑似的な隆起線となり，粘土紐の貼付けによる細隆起線と同じ文様効果を得られることにある。これは，２条１対の粘土紐を貼付けて得られる細隆起線文によ

上：凹線文ａ種（軟質工具：第２図47）
下：凹線文ｂ種（硬質工具：第５図５）
Ｓ＝2/3

第10図　凹線文a・b種

る区画状文の無文部を１条の凹線文で描くという，手抜きの手法の採用と考えられる。細沈線文も細隆起線文とネガとポジの関係であることから，細沈線文による区画状文にも幅広の篦状工具ないしは竹管を施文具とした同様の手抜き手法が採用されたもので，１回の施文で区画状文と同様の幅の無文帯をもつ沈線を描くことは，以前の２回に分けて無文部を描くという行為に対して，区画状文としての意識が希薄となり，それ自身が独立した文様モチーフ化していくものと考えられる。これは鵜ガ島台式後半期の襷状文の崩壊現象，弧状文の発達，両者の融合など文様の複雑化により，区画状文間の無文部の役割が区画するという意識から文様の描出手法へと変貌し，ここで凹線文・平行沈線文などの１条施文という手抜き手法が採用されたもので，区画状文の意識の消失は，当然ながら鵜ガ島台式の最も特徴的な型式表象である区画状文交差部への竹管文施文の消失を伴ったものと思われる。

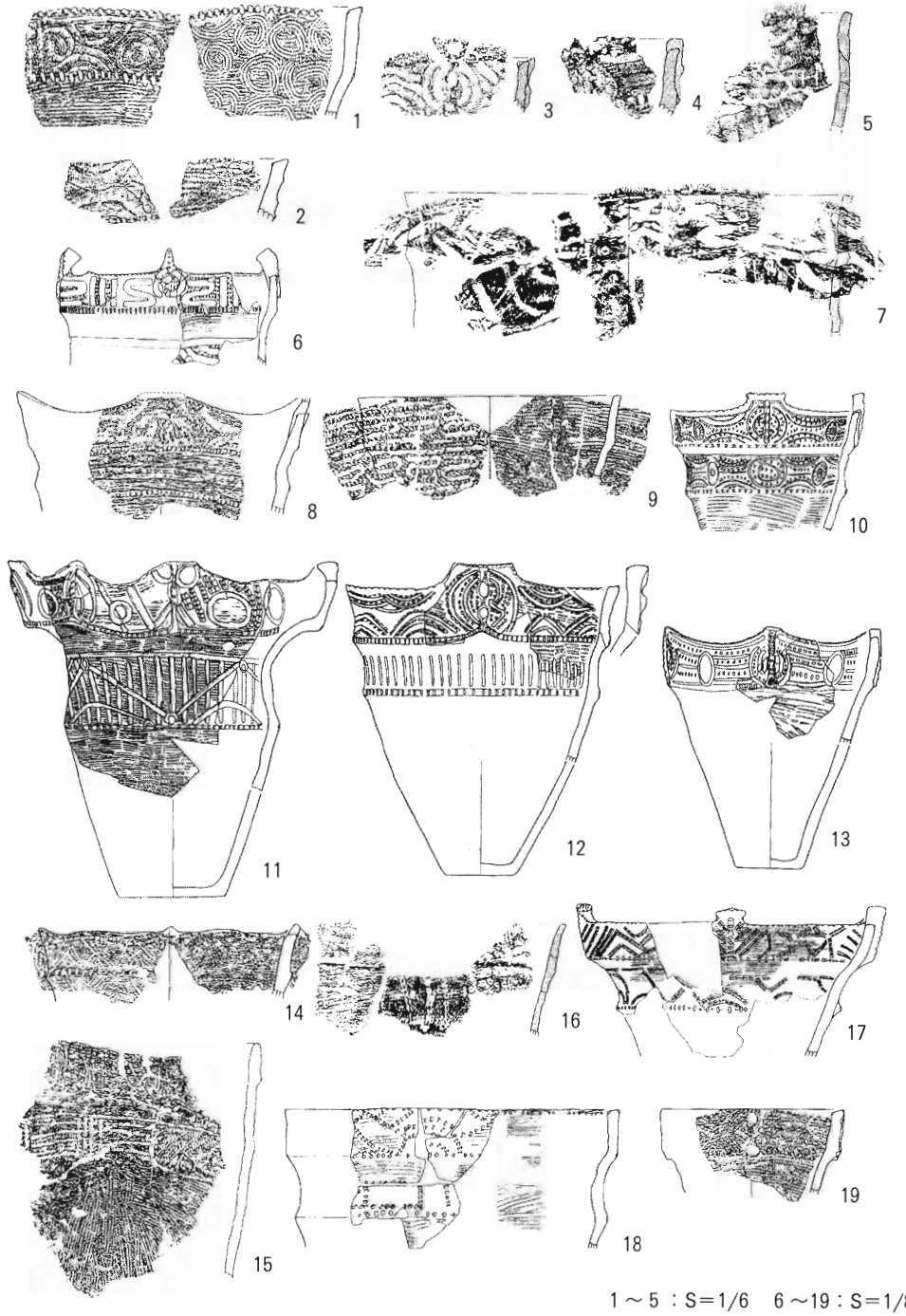
幅の狭い劣截竹管を用いた沈線文は野島式から茅山上層式まで条痕文土器群を通して認められるが，凹線文は区画状文の幅広の無文帯を凹線化したもので，この施文手法の採用により，細隆起線文・細沈線文などによる伝統的文様描出手法が放棄され，その採用と放棄は表裏のものと考えられる。鵜ガ島台式から茅山下層式への型式変容は，凹線文による文様描出の成立と鵜ガ島台式後半期に区画状文に新たに採用された刺突文列による文様描出の継承と考えられ，この点において凹線文という用語は前後型式である鵜ガ島台式，茅山上層式の近接する時期については検討を要するが，茅山下層式土器固有の文様要素を記述する用語として条痕文土器前半期の竹管文とは区別して使用されるべきものと思われる。

９．茅山下層式土器の諸段階

先に概観した鵜ガ島台式後半期の様相を前提として，凹線文の成立事情，更に茅山貝塚，鵜ガ島台遺跡，吉井貝塚での茅山下層式の時間差を考慮し，その諸段階について見ていきたい。茅山下層式土器は，総じれば主体的な文様要素から，主として凹線文系（第11図１～９・第12図１～９），竹管文・沈線文系（第11図10～14・第12図10・11），刺突文系（第11図15～19・第12図12～18），縄文系（第12図22・第13図６）に大別され，さらにそれぞれ鵜ガ島台式土器後半期から引き継がれた稀（非）充填文系と充填文系が存在する。充填文系には刺突文充填と結節沈線文充填（第11図11）など変化が認められる。また，中段階以降，条痕文を文様化したものを地文として凹線文と組合わさったもの（第12図19・20）とともに，条痕文を文様化した条痕文系（第12図21）など新たな系列が出現する。これらのうち，竹管文・沈線文系，刺突文系は鵜ガ島台式から継承されたもので，凹線文系は新たな文様要素を採用して茅山下層式に出現した系列である。また，縄文系は茅山下層式の型式組成をなすが，鵜ガ島台式では明確ではない。そして，これら有文系土器と条痕文だけが施される無文系土器によって型式組成がなされる。

茅山下層式土器の成立期は茅山式土器の標識資料である赤星採集資料（第1～3図30～74・78・81）から昭和29（1954）年の発掘調査によってⅧ・Ⅸ層から出土した土器を除いたもので，鵜ガ島台遺跡で提示された資料（第6図）の多くの部分に代表される。成立期の茅山下層式は，鵜ガ島台式後半期の有段部の屈曲の強まりといった器形上の特徴，文様帯の胴上半部への凝縮化，および鵜ガ島台式土器の諸文様モチーフを継承すると同時に凹線文という新たな文様要素が採用された段階である。文様モチーフの系譜は鵜ガ島台式後半期に出現した波頂部下の文様あるいは起点文から発達した重円文などの曲線文，文様帯分割面内の展開文から発達した山形文などの直線文といったふたつが存在し，曲線文と直線文が単独で，あるいは交互に横位展開するのが特徴である。把手下文様では依然として垂下隆帯などが残存するが（第11図10・13・17），上下の円文を隆帯による垂下文で連結したものは円形陰刻によって表現されるなど退化し（第11図3・12・19），把手下対弧文は重弧化（第11図3・10・13），あるいは流水文を取り込む（第11図12）など新たな変容が認められる。無把手土器も垂下文（第11図1）・弧状文（第11図18）などで文様帯内が分割される。文様帯分割面内の文様モチーフは重円文（第11図1）・対弧文（第11図1・2・8・10・12）・S字文ないしは流水文（第11図6・7・9）・渦巻文（第11図8）・重山形文（第11図17）・重斜行文（第11図15・17）・垂下文（第11図15・16）・横走文（第11図13・19）などが存在し，またこれらが複合して施文されるが，隣り合う文様モチーフが器面を区画し，横位に複合せず，独立していることが該期の特徴と考えられる。

これらの文様は施文具との関係から，凹線文系では曲線文的文様が，刺突文列系では直線文的文様が多く採用されたものと思われる。凹線文系の土器は，鵜ガ島台式後半期に出現した稀（非）充填文系の細隆起線文系土器から発達したと考えられる疑似細隆起線文土器（第11図1～5）と区画文を凹線文に置き換えた土器（第11図6・8・9）が存在する。後者においては，凹線文で描いた文様モチーフ以外の器面を刺突文で充填するもので，充填文系の延長上に位置づけられる。凹線文系土器の渦巻文や重円文間を上下の重弧文で埋める文様構成は，稀（非）充填文系（第11図1・2），充填文系（第11図8）ともに存在しており，上下の重弧文を横位展開する文様構成（第11図12）とともに該期に安定した文様構成である。また，流水文と垂下文が横位に交互に展開するなどの文様構成（第11図6）が存在する。刺突文系の土器においても充填文系（第11図15）と稀（非）充填文系（第11図16～19）が存在するが，直線的文様の採用が顕著である。充填文系として，斜行文・垂下文を充填した円文と垂下文・斜行文・横走文を横位に展開する（第11図15）文様構成に見られるように，刺突文列で器面を埋める手法は該期に特徴的な文様構成のひとつと思われる。しかし，刺突文系の土器には鵜ガ島台式後半期の区画状文と文様モチーフを色濃く残しているものも存在し（第11図18），交差部の刺突文の有無以外に表象差のないものが存在する。また，稀（非）充填文系では弧状文とともに斜行文，垂下文，横走文などが横位に展開する文様構成が存在するが，円形竹管文が鵜ガ島台式に見られた交差部押捺ではなく，刺突文列として採用されている（第11図16）。円形竹管文は凹線文



1～5：S＝1/6　6～19：S＝1/8

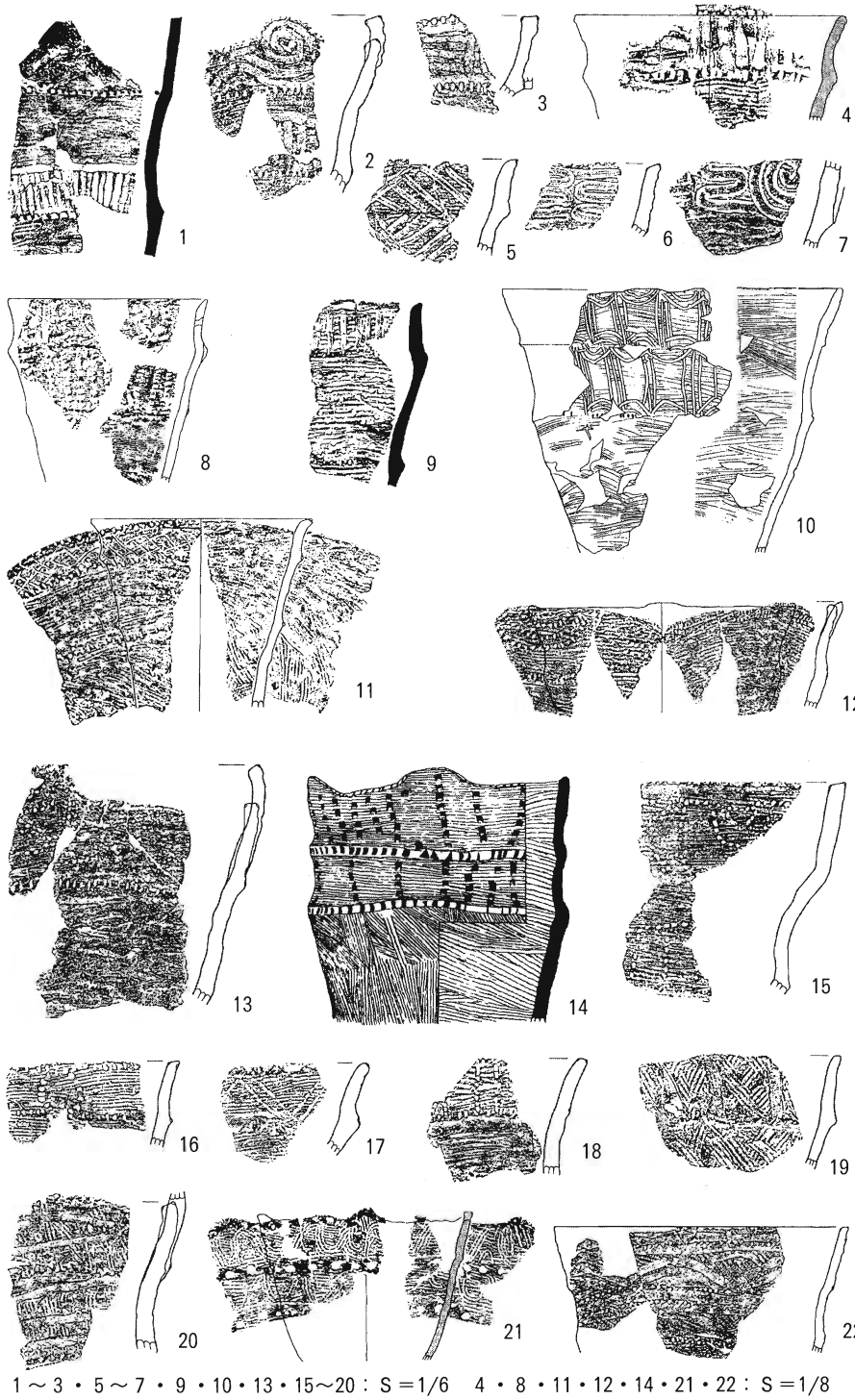
茅山貝塚(1・2・8・9・14・19)　間野台貝塚(3・4)　トケ前遺跡B地点(5・7・16)
地蔵山遺跡(6・17・18)　神谷原遺跡(10)　山崎貝塚(11～13)　奉免上原台遺跡(15)

第11図　茅山下層式土器成立期の土器群

とも組み合わされるものも存在し（第11図5・7・8），成立期の茅山下層式に鵜ガ島台式の文様要素が残存したものと思われる。成立期の茅山下層式土器は，型式学的には更に2段階の階程の存在が想定される。第1段階は凹線文系では疑似細隆起線文，区画状文が凹線文化されたもので鵜ガ島台式の充填文系に直接的に系譜が求められるもの，刺突文系では充填文系・稀（非）充填文系で鵜ガ島台式の文様モチーフを色濃く残している土器，第2段階は区画状文の継承という制限に縛られない新たなモチーフの成立と器形上の屈曲の弱まりと文様帯の胴中位～下部への拡大化など（第11図9・14）が予想される。この成立期の2段階については，資料の増加を待って再考したいが，後述するように西大曲遺跡で提示された連続刺突文系土器群の成立にかかわるものと思われる。

第3段階は茅山貝塚Ⅷ・Ⅸ層出土土器に代表される段階で（第12図），把手の退化が始まり，器形の屈曲が更に弱まると同時に胴上半部に凝縮されていた文様帯が胴下半部へ拡大する。文様帯の拡大は，特にⅡ帯において顕著である。この段階では，Ⅱ帯の文様描出が行われない土器が出現する（第12図11・13）。凹線文，刺突文などの各文様要素はⅠ帯・Ⅱ帯各文様帯において複合して施文されることはなく単独施文され，同時に充填文系がわずかに残るだけで（第12図15），稀（非）充填文系によって占められるようになる。波頂部下文様は，前段階にみられたように独立したものではなく，前段階の分割面内文様と融合して渦巻文化し（第12図2），あるいは対等な文様として残る（第12図3）か融合して消失する。凹線文系での施文具は軟質工具も存在するが，硬質工具が多く採用され，文様モチーフは前段階では上下に対照的位置に描出されていた弧線文が横位にずれることによって重層する波状文化し（第12図2），他に単純な垂下文と横走文の組み合わせ（第12図4），重層連続山形文（第12図5）・流水文・渦巻文の対等施文による横位展開（第12図6・7）などが認められる。沈線文・竹管文系では，弧線文と垂下文を横位展開したもの（第12図10），格子目文（第12図11）などが存在する。刺突文系では充填文も部分的に見られるだけで（第12図15），基本的には充填描出は消失する。文様モチーフとしては，他系列と共通する重弧文（第12図12・15）・円文（第12図16）・連続山形文（第12図17）・垂下文（第12図14・18）が認められる。また，以前の段階の刺突文が小型で竹管外皮を器面にあてるものであったのに対し，竹管が大型化し竹管内皮側を器面にあてた刺突文が出現する（第12図14）ことは次段階へ受け継がれる変化である。この段階での新たな変容として，条痕文による文様効果を意識したものを地文に凹線文が描かれる土器（第12図19・20），ないしは条痕文で文様を描く土器（第12図22）が出現するが，重層する弧線文などに見られるように，沈線文による文様描出の手抜き手法として貝殻条痕文が採用されたもので，次段階の条痕文系と無文系土器の増加へ引き継がれる要素と考えられる。

第4段階は前段階の器形上の屈曲の弱まりとⅡ帯の無文化などの型式変容の延長上で考えられ，Ⅱ帯を喪失した吉井第1貝層直下の土器群を中心とした段階である（第13図1～8）。把手の退化が進み，環状把手は減少するようである。同時に把手下文様も垂下隆帯（第13図3・



1～3・5～7・9・10・13・15～20：S＝1/6　4・8・11・12・14・21・22：S＝1/8

夏島貝塚(1・9)　茅山貝塚(2・3・5～7・12・13・15～20・22)　トケ前遺跡B地点(4)
大古里遺跡(8)　地蔵山遺跡(10)　上座貝塚(11)　クズレ遺跡(14)　綱原遺跡(21)

第12図　茅山下層式土器中段階の土器群

４・７・８），垂下刺突文列（第13図１）に見られるように著しく退化し，口縁部と融合して小波状を呈する口縁部形態が出現する（第13図６）。Ⅱ帯の消失により，Ⅰ帯は口縁部文様帯として位置づけられ，器面に対して水平な器形上の屈曲と低隆帯とにより文様帯を構成する。刺突文系の土器に使用される施文原体は前段階で採用された大型の竹管文を主体とし，文様モチーフは山形文（第13図１）・U字文（第13図２）などが存在し，沈線文・竹管文系では格子目文（第13図３・５）・集合沈線による鋸歯状（第13図４）などが盛行する。凹線文系は単独で描かれるものは少なくなるようで，前段階でみられた条痕文を文様化したもの，あるい縄文を地文とした土器（第13図６）に見られるだけである。また，この段階では条痕文だけが施される無文系土器の増加が認められる（第13図７・８）。

１０．茅山上層式土器の諸段階

茅山上層式土器の器形は，茅山貝塚上部貝層，吉井第１貝塚下部貝層で示されたようになんら屈曲を持たない単純な深鉢形である。その文様構成上の特徴は先行型式の茅山下層式の諸文様要素を継承しながらも，口縁部文様帯の区画文（１次的文様）と区画内に文様を展開する２次的文様からなるものと口縁部文様帯を構成しないものが存在する。これは後述するように，型式内での時間差と考えられるが，前者において１次的文様と２次的文様に用いられる文様要素の多くが両者で明確に区別されて使用されることがないのが特徴である。また，これらの土器群は有文系土器と無文系土器からなり，有文系土器は文様帯内を充填する文様要素から，凹線文系，竹管文・沈線文系，刺突文系，条痕文系，（貝殻）腹縁文系，縄文系などに大別される。そして，有文系土器に対して，条痕文だけからなる無文系土器が増加することが茅山上層式の大きな特徴である。

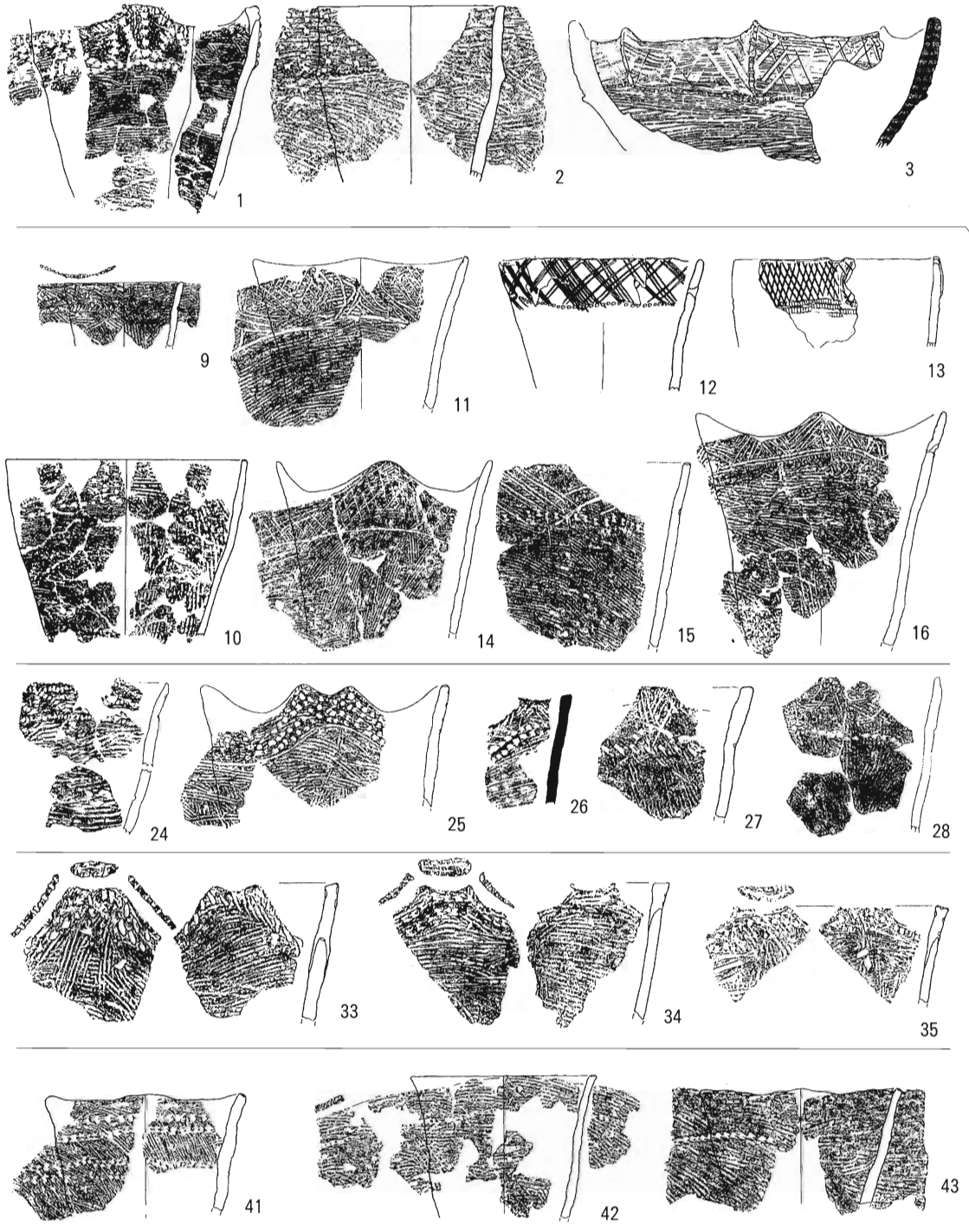
第１段階は茅山貝塚上部貝層と吉井第１貝塚下部貝層で示された土器の一部からなり，茅山下層式第４段階の器形上の屈曲と低隆帯からなる口縁部文様帯を継承した段階（第13図９～23）で，器形上の屈曲は消滅するが，器面に対して水平に区画された幅広の口縁部文様帯が形成される。これは，前段階の口縁部文様帯区画が器形上の屈曲に支配された水平区画であったことを継承したものである。文様帯の縦区画は低い垂下隆帯（第13図13），垂下刺突文列（第13図10）などがわずかに残るだけで消滅する。波状口縁が本格的に発達することによって，環状把手は著しく退化し，退化形式として頂部に凹部を持つものなどが出現する（第７図43・第13図19）。また，波状口縁に沿った器面内面施文が成立する（第13図９）。有文系土器は茅山下層式から引き継がれた凹線文系（第13図９），竹管文・沈線文系（第13図11～16），刺突文系（第13図10）とともに，茅山下層式第４段階に出現した条痕文系（第13図17・18），新たな系列として加わった腹縁文系（第13図19・20）によって組成される。刺突文系と沈線・竹管文系が組成の主体を占め，文様モチーフとして格子目文（第13図11～14）・重層する連続山形文（第13図

15・16）などが多く採用され，他の文様モチーフとして，重弧文（第13図17・21）などが存在する。凹線文と隆起線文は少なくなり，１次的文様にのみ用いられるか（第７図５・８・９・11・47），他の文様と併用される（第13図９）。

第２段階は次段階とともに吉井第１貝塚下部貝層の土器群で代表され（第13図24～32），波状口縁がさらに発達することによって，口縁部文様帯が器面に水平な横位構成から波状をなす口縁に沿ったものへと変化し，その結果，文様帯の縮小化が進む。平縁の土器も，この影響下に口縁部文様帯の縮小化が進むものと思われる。波状口縁の発達に伴い，双頭把手（第13図25）や頂部が肥厚する台形把手（第13図26）が出現し，環状把手の系譜を持つものはこの段階で消滅する。文様要素は前段階の諸要素を継承しながらも，前段階で１次的文様として存在した凹線文，隆起線文などはこの段階までは残存しない。２次的文様は刺突文系，沈線文・竹管文系，条痕文系，腹縁文系などで組成され，矢羽根状文（第13図26）・山形文（第13図27）・重弧文（第13図28）・多段の刺突文列（第13図25）など，より簡略化した文様モチーフへ変化する。前段階では１次的文様として多用されていた刺突文列が，２次的文様である文様帯内においても充填刺突文として採用されるようになる（第13図25）。また，刺突文や刺突文の代用として竹管文による短沈線（第13図27）などの口縁部内面施文が発達する。

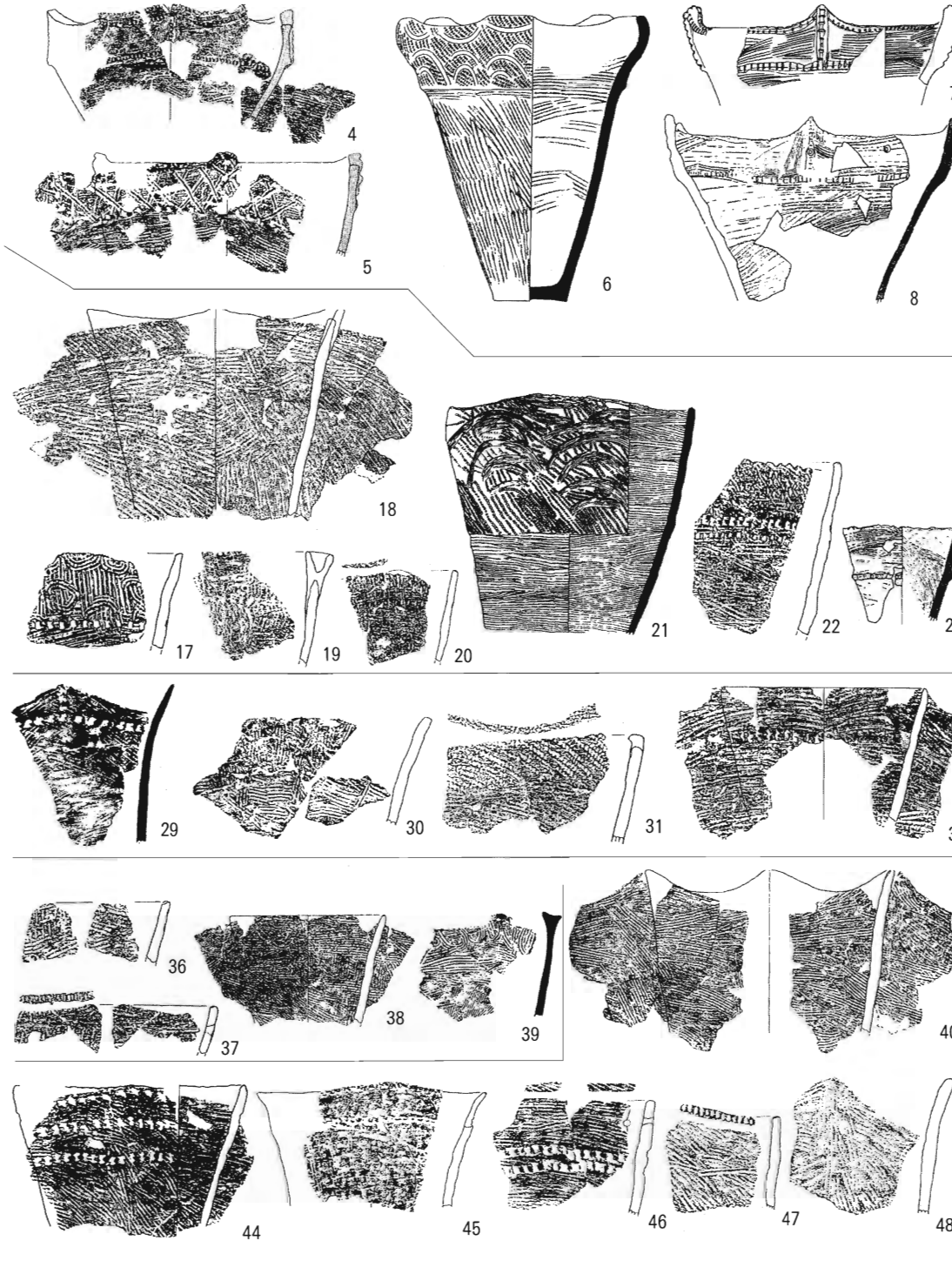
第３段階は波状口縁が盛行し，文様の施文位置がより口縁部付近に集中し，文様が口縁部に凝縮され（第13図33～39），口縁部文様帯区画が消失する。この段階では，口縁部内面施文が継続するとともに文様要素は刺突文列が多く採用され（第13図35），竹管を押し引いた短沈線列が出現する（第13図33・34）。刺突文や短沈線文の描出に用いられる施文原体は，依然として大型の竹管が多用されている。他に竹管文・沈線文系（第13図38），条痕文系（第13図39），腹縁文系（第13図37）が型式組成の一部をなすと思われ，特に短沈線文（第13図36）や腹縁文（第13図37）による刺突文列と同様の列状施文が行われる。

第４段階は吉井第２貝塚下部貝層上堆積層出土土器に代表され，前段階に顕在化した刺突文列の多用化を継承しながらも，施文具において小型の竹管を採用し，刺突文列・短沈線文・結節沈線文を主な文様要素とした新たな型式表象を持った土器群の成立した段階である（第13図41～48）。波状口縁の退化が始まり，口縁部に凝縮されていた文様はその意識が薄れ，器面上半部に展開するようになる。口縁部内面施文が少なくなり，代わって口唇部上端への刺突文・短沈線の施文が行われる。文様モチーフは単純であり，前段階から継承した刺突文列（第８図１～３・第13図41・44）と押し引きによる短沈線文列（第８図４・５・第13図43），短沈線文を横位に展開した結節沈線文（第13図41・42・45・46）が発達する。また，竹管による平行沈線文を一定の長さで描き，横位に展開する手法も認められる（第13図47）。これら以外の文様要素については詳細が不明だが，条痕文だけが施される無文系の土器とともに前段階に出現した貝殻腹縁文などが併存する可能性が高いと思われる。



高沢遺跡(1・10・44)　茅山貝塚(2・31)　館山遺跡(3・8・23)　風早遺跡(7)　上黒岩遺跡(12)
下段遺跡(13)　吉井第2貝塚(18・19・36・37・40～43)　大古里遺跡(45)　師岡打越遺跡(46～48)

第13図　茅山下層式後半期から茅山上層式諸段階の土器群



クズレ遺跡(21・28)　吉井第１貝塚(6・9・11・14・～17・20・22・25～27・29・31～34・38・39)　北袋遺跡(24・30)

1・3～5・7・8・10～16・18・20・21・23～26・28～30・32・38～40・44・45：S＝1/8
6：S＝1/10　2・9・17・19・22・27・31・33～37・41～43・46～48：S＝1/6

11. 茅山下層式・茅山上層式土器と周辺の土器群について

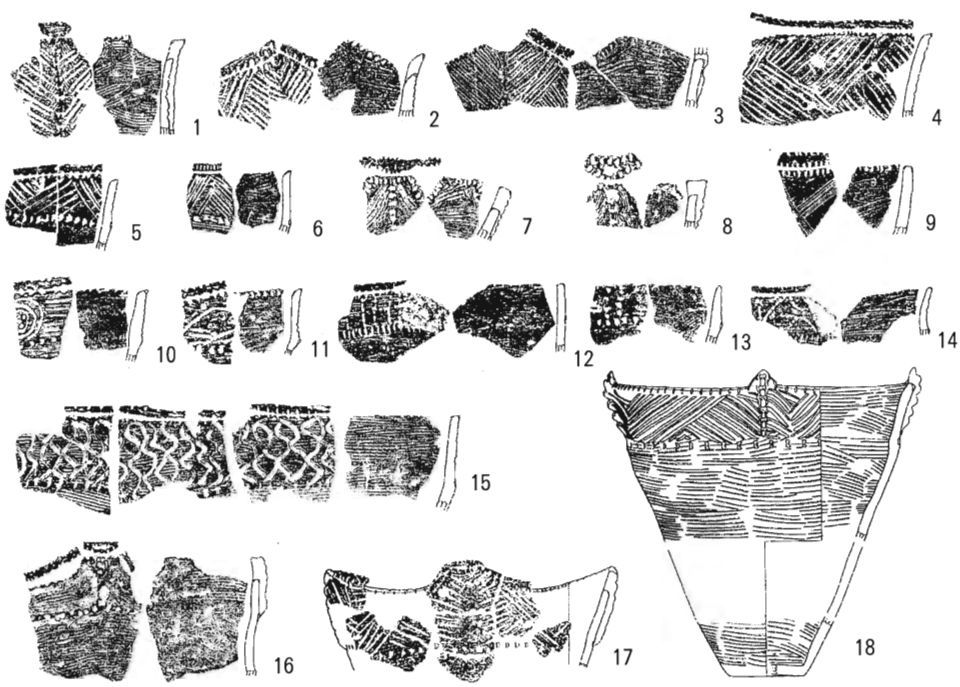
茅山下層式の成立期から茅山上層式終末期までの諸段階を概観してきたが，これらの土器群は金子が指摘しているように（金子1991），原則的には型式に内在する各文様要素の漸移的な変容でとらえられる土器系列である。しかし，これらの土器群の変容に係わってきた他の土器群が周辺地域に存在している。ひとつは駿豆地方以西に分布する一群の土器で，関野によって茅山下層式の新段階とされた西大曲遺跡出土土器から元野遺跡（関野他1975），形原貝塚（渡辺・小笠原1982），八ツ崎貝塚2類，粕畑式と変移するとされた土器群である（関野1985）。これらの土器群は金子によって「連続刺突文系土器群」と呼称され，一系列上の土器群として茅山下層式から茅山上層式にかけて併行する土器系列に位置づけられた（金子1991）。

これらの特徴を持つ土器は茅山貝塚（第3図82～89・第5図11），鵜ガ島台遺跡（第6図24・25），夏島貝塚，吉井貝塚などから，いずれも茅山下層式，茅山上層式土器に伴って客体的に出土しているもので，概して器壁が薄手で，焼成が良く，胎土に白色不透明な石英粒を多く含むなど共通の特徴を示す土器群である。茅山貝塚（第3図82・84・85），夏島貝塚出土例などは，西大曲遺跡出土土器に近似している。西大曲遺跡出土土器には凹線文による疑似細隆起線文土器が存在し，疑似細隆起線文によって描出された渦巻文，弧状文の一部に刺突文列が施されており，また，凹線文によって流水文，重山形文，上下に配した弧状文を横位に展開した文様モチーフなどが存在し，茅山下層式成立期に共通する文様モチーフが認められる。しかし，凹線文に沿って1条の刺突文が施される土器は，その文様モチーフは疑似細隆起線文初期のモチーフ（第2図48）の系譜の上でとらえられ，安定した文様構成をとっていることなどから，成立段階でも後半期に位置づけられると思われる。また，鵜ガ島台遺跡出土土器の中には西大曲遺跡出土土器と近似した土器も存在するが，それ以外に凹線文が幅広化した土器（第6図24・25）が出土しており，清水柳北遺跡出土土器に近似している。これらは茅山下層式第2段階において独自の型式表象を確立し（西大曲遺跡段階），清水柳北遺跡の段階，そして関野が示した段階（関野1985）を経て粕畑式へ変容する一系列の連続刺突文列・爪形文系土器として茅山下層式・茅山上層式に併行して存在するものと思われるが，爪形文が顕在化する粕畑式に至って，にわかに茅山上層式の変容に影響を及ぼすようになる。茅山上層式の第1段階以降に見られる波状口縁の採用・盛行，口縁部文様帯の縮小・消滅，口縁部内面直下の刺突文施文，刺突文の多用化などの変容はその多くが粕畑式土器の影響下にあったものと考えられる。

また，茅山下層式第4段階から茅山上層式第1段階において，竹管文・沈線文系土器に顕在化する格子目文・集合した斜行沈線を組み合わせた山形文・鋸歯状文などの文様の系譜については内在的発展要素として前段階に見いだすこともできるが，常陸伏見遺跡（小野他1980）・館山遺跡・大稲塚遺跡など房総半島東部から以北の地域で採用が顕著で，阿部が指摘した（阿部1990）凹線文・縄文施文の土器の偏在に関連し，地域的に偏在する文様要素の可能性がある。

これらの特徴を持つ土器群は，松本茂によって阿武隈高地に所在する小滝遺跡出土土器の検討から「集合斜線充填土器」と呼ばれ（松本他1993），東北地方南部にその分布が確認されつつある土器群との関係が注意される（第14図１～９）。小滝遺跡では茅山下層式（第14図10～16）との関連でとれられたが，茅山下層式第４段階から茅山上層式第１段階併行と考えられる差塩Ｃ遺跡（第14図18），差塩Ｄ遺跡（第14図17）出土例（猪狩・梛良1995）などの存在から，松本が「広義の茅山式土器の中で一つの地方形式を構成する可能性の高いことを指摘」したように，ある一定の時間の中に存在した一系列の土器群であると思われ，茅山下層式土器のどの段階において独自の型式表象を獲得して成立したのかなど，茅山下層式，茅山上層式の周辺型式を把握する上で興味深い土器群である。

総じて，茅山下層式土器が併行の予想される連続刺突文系土器の影響を受けながらも，主として内在的な型式要素の変化によって変遷していった土器と考えられるのに対して，その終末期から他地方の影響を受け，特に茅山上層式はその初段階において茅山下層式の型式内容を継承しながらも，連続刺突文系土器を母胎として成立した粕畑式土器の大きな影響下に，以前の時期には見られなかったように急速に変容していった土器としてとらえられる。このような茅山上層式土器に見られる急激な型式変容は，子母口式ないしは野島式土器に始まる条痕文土器群といった一系列の土器型式群の終末期の様相を現しているものと思われる。



小滝遺跡(1～16)　差塩Ｄ遺跡(17)　差塩Ｃ遺跡(18)　　Ｓ＝1/8

第14図　東北地方南部の土器群

12. さいごに

条痕文土器群前半期の土器群は，その成立期の様相は未だに明らかではないが，先行する田戸上層式土器に系譜が求められる沈線文と細隆起線文に加え，絡状体圧痕文などの文様要素の採用に地域性が顕著で，徐々に斉一性を強め，野島式土器を経て鵜ガ島台式土器へ変容するものと思われる。これは茅山下層式土器がきわめて斉一性の強い鵜ガ島台式土器を母胎として成立し，主として内因的な要素から茅山上層式土器へと変容し，同時に周辺地域に固有の型式表象を持つ土器群が成立・展開し，茅山上層式に影響を与えるようになっていった後半期の土器変容と対照的な現象である。これら条痕文土器群後半期における地域性の確立は各々の土器分布圏における固有の文化の定着・成熟したもので，後続する擦痕文土器群を経て前期文化の成立に深く関わっていったものと考えられる。

冒頭に岡本の土器研究の立脚点を引用したように，系統的に一連の土器型式群として包括される個々の土器型式の時系列に対応した文化事象を位置づけ，空間的に併存する他型式群との関係を検討し，その総体的な文化内容を把握することは，ひとつの土器型式群固有の文化を明らかにすることに他ならない。そして，そのような固有の文化を背景に現出した土器型式群の空間的変動と時間的重層性，その系統的な変容は縄文文化の本質を語っているものと思われる。

また，一方で考古学が過去の人間の諸活動の痕跡を対象とした学問である以上，地域的な，そして具体的な課題が存在する。茅山貝塚と吉井貝塚は近接した土地に形成された貝塚群で，これらの貝層の形成時期は茅山貝塚下部貝層群（茅山下層式第2～3段階），同上部貝層群（茅山上層式第1段階），吉井第1貝塚下部貝層（茅山上層式第1～3段階），吉井第2貝塚下部貝層（茅山上層式第3段階）と変遷する。この時系列で整理された貝層群から得られる漁労具を中心とした生産用具，生産対象である軟体動物相・脊椎動物相には少なからず変化が認められ（釼持1995，野内1995），石材の問題などとともにこれら具体的な事象の検証を行いたい。

謝　辞

本稿は横須賀考古学会縄文研究部会で発表した内容をまとめたもので，参加者の方々には多くのご教示を受けました。そして，吉井貝塚整備協議会委員であった故岡本勇先生には横須賀市汐入にある整理室に幾度もご足労ねがい，第2貝塚出土土器について有益なご助言を頂きました。また，次の方々には助言や資料調査・文献検索などで便宜をはかっていただきました。改めて，感謝いたします。

秋本真澄・石橋宏克・稲村　繁・大塚眞弘・小倉　均・片平雅俊・金子直行・金子浩之・川口徳治朗・小島奈々子・高橋雄三・高村公之・武井則道・田村良照・西川博孝・宮崎朝雄・諸橋千鶴子・柳田博之・横山太郎・吉田哲夫（敬称略）

引用・参考文献

青木義脩・高野博光他　1976 「大古里遺跡発掘調査報告書」 浦和市大古里遺跡調査会
赤星直忠　1930 「茅山貝塚と其の土器」『史前学雑誌』第２巻第６号　史前学会
赤星直忠　1937 「茅山貝塚及吉井貝塚」『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第５輯　神奈川県
赤星直忠　1948 「神奈川縣野島貝塚」『考古学集刊』第１冊　東京考古学会
赤星直忠　1951 「横浜市野島北貝塚」『日本考古学年報』１　日本考古学協会
赤星直忠　1954 「神奈川県横須賀市茅山貝塚」『日本考古学年報』１　日本考古学協会
赤星直忠　1962 「横須賀市吉井城山第一貝塚調査概報（一）」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』第６号　横須賀市博物館
赤星直忠・岡本　勇　1957 「茅山貝塚」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』第１号　横須賀市博物館
赤星直忠・岡本　勇・村越　潔　1958 「横須賀市平根山遺跡」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』第２号　横須賀市博物館
秋本真澄・小野真一　1992 「東大室クズレ遺跡」『研究報告』14　加藤学園考古学研究所
阿部芳郎　1990 「千葉県佐倉市山崎貝塚とその土器―印旛沼周辺における条痕文土器群の変遷―」『貝塚博物館紀要』第17号　千葉市加曽利貝塚博物館
新井和之　1978 「千葉県佐倉市上座貝塚出土土器群について」『奈和』第16号　奈和同人会
猪狩忠雄・椰良幸広　1995 『差塩Ｂ遺跡―東北横断自動車道関連遺跡Ⅱ』（いわき市埋蔵文化財調査報告第40冊 ）いわき市教育委員会・日本道路公団・財団法人いわき市教育文化事業団
江坂輝彌　1955 「條痕文土器文化の展開」『史想』第２号　京都教育大学考古学研究会
石橋宏克・栗田則久他　1991 「第１章　大稲塚遺跡(No.38、38-1) ・棒木台遺跡（No.39)」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅵ（佐原地区３）』（千葉県文化財センター調査報告書第191集）財団法人千葉県文化財センター
石橋宏克・栗田則久他　1991 「第３章　綱原遺跡(No.41) 」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅵ（佐原地区３）』（千葉県文化財センター調査報告書第191集）財団法人千葉県文化財センター
岡本　勇　1961 「三浦市鵜ガ島台遺跡」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』第５号　横須賀市博物館
岡本　勇　1962 「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器（１）」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』第６号　横須賀市博物館
岡本　勇　1966 「尖底土器の終焉」『物質文化』８　物質文化研究会
大場磐雄　1930 「繊維土器出土の遺跡に就いて」『史前学雑誌』第２巻第２号　史前学会
小川和博　1995 「十王町風早遺跡発掘調査報告書」『茨城県多賀郡十王町文化財調査報告書』第３集　十王町風早遺跡調査会・十王町教育委員会
小野真一他　1980 『常陸伏見』伏見遺跡調査会・鹿島考古学資料刊行会
金子直行　1991 「茅山上層式土器の再検討」『埼玉考古学論集―設立10周年記念論文集―』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
喜多裕明・飯島伸一　1992 「千葉県印旛郡印旛村トケ前遺跡発掘調査報告書」『財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第72集』住友不動産販売株式会社・財団法人印旛郡市文化財センター
喜多裕明　1996 『千葉県佐倉市間野台貝塚―不特定遺跡（間野台貝塚）発掘調査―』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第120集）財団法人印旛郡市文化財センター
釼持輝久　1995 「第７節　吉井貝塚を中心とした遺跡出土の脊椎動物について」『神奈川県指定史跡吉井貝塚を中心とした遺跡史跡整備報告書』横須賀市教育委員会
小玉秀成・本田信之　1999 『館山遺跡発掘調査報告書―旧石器・縄文・弥生時代編―　玉里村総合文化センター建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』玉里村教育委員会
佐久間豊・出口雅人他　1990 「高沢遺跡」『千葉東南部ニュータウン』17　住宅・都市整備公団・財団法人千葉県文化財センター

佐々木克典　1982 「第１章　縄文時代早期の遺構と遺物」『神谷原』Ⅱ　八王子資料刊行会
杉原荘介・芹沢長介　1981 「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」『明治大学文学部研究報告―考古学―』第２冊　明治大学文学研究所
鈴木啓介　1998 「鵜ガ島台式土器の変遷」『法政考古学』第24集　法政大学考古学研究会
鈴木裕篤・小野信義・袴田　稔　1980 『西大曲遺跡発掘調査概報』（沼津市文化財調査報告書第20集）沼津市教育委員会
瀬川裕市郎・関野哲夫他　1975 『元野遺跡発掘調査報告書』（沼津市文化財調査報告第８集）沼津市教育委員会
関野哲夫　1980 「鵜ガ島台式土器細分への覚書」『古代探叢―滝口宏先生古希記念考古学論集―』早稲田大学出版局
関野哲夫　1985 「茅山下層式土器について」『古代―西村正衛先生古希記念石器時代論集』第80号　早稲田大学考古学会
関野哲夫他　1989 『清水柳北遺跡発掘調査報告書』（沼津市文化財調査報告第47集）沼津市教育委員会
立木新一郎・山形洋一・田代　治他　1987 『北袋遺跡』（大宮市遺跡調査会報告第19集）大宮市遺跡調査会
田中清美・忍澤成視　1992 『千葉県千葉市奉免上原台遺跡』（財団法人市原市文化財センター調査報告書第43集 ）サンヨー食品株式会社・財団法人市原市文化財センター
戸田哲也・呉地英夫・秋山重美他　1990 『横浜市港北区師岡打越遺跡発掘調査報告書』（仮称）大倉山マンション建設用地内遺跡発掘調査団
西井幸雄・金子直行　1989 『荒川村下段遺跡』（埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第87集）財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
西村正衛　1950 「神奈川県横須賀市佐原茅山貝塚の発掘調査概報」『史観』33　早稲田大学文学部史学会
西山太郎・山口直樹・野口行雄　1983 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－No.14遺跡－』財団法人千葉県文化財センター
野口行雄　1983 「第１節　Ｂ地点出土の第２群土器について―鵜ガ島台式土器の細分―」『新東京国際空港　埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－No.14 遺跡』 財団法人千葉県文化財センター
正岡睦夫　1986 「３．凹線文・疑凹線文」『弥生文化の研究』３―弥生土器Ⅰ―　雄山閣出版
松本茂他　1993 「第１編　小滝遺跡―東北横断自動車道遺跡調査報告21」『福島県文化財調査報告書』第292集　福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・日本道路公団
向坂鋼二　1992 「第２章　縄文時代」『静岡県史―資料編３　考古３』静岡県
野内秀明　1995 「第５節　吉井貝塚を中心とした遺跡出土の軟体動物」『神奈川県指定史跡吉井貝塚を中心とした遺跡史跡整備報告書』横須賀市教育委員会
野内秀明他　1999 「吉井城山―神奈川県指定史跡『吉井貝塚を中心とした遺跡』史跡整備事業に伴う確認調査の記録」『横須賀市文化財調査報告書』第34集　横須賀市教育委員会
山形洋一・田代　治・渡辺正人　1989 「篠山遺跡―Ⅱ―」『大宮市遺跡調査会報告』別冊５　大宮市遺跡調査会
山内清男　1929 「関東北に於ける繊維土器」『史前学雑誌』第１巻第２号　史前学会
山内清男　1930 「繊維土器について　追加第三」『史前学雑誌』第２巻第３号　史前学会
山本恵一他　1995 「土手上遺跡（ｂ・ｃ区）発掘調査報告書」『沼津市文化財調査報告書』第56集　沼津市教育委員会
吉田　格　1950 「野島貝塚」『遺跡』３号　鎌倉考古学同好会
吉田　格　1957 「各地域の縄文土器―関東」『考古学ノート２―先史時代（Ⅱ）』日本評論社
渡辺修一・小林清隆　1993 『千葉市地蔵山遺跡（２）』（千葉県文化財センター調査報告書第224集）財団法人千葉県文化財センター
渡辺　誠・小笠原久和　1982 「愛知県蒲郡市　形原遺跡発掘調査報告書」蒲郡市教育委員会

東日本における磨製石剣の意義
―三浦市赤坂遺跡出土の例を中心として―

中　村　　勉

1．はじめに
2．研究史―東日本を中心とした―
3．赤坂遺跡出土の磨製石剣
4．関東地方およびその近県の磨製石剣
5．東日本における磨製石剣の分類
6．機能と用途
7．磨製石剣の性格とその使用
8．まとめ

1．はじめに

赤坂遺跡は三浦半島南部に位置する三浦市に所在し，標高50～40mの海蝕台地およびその周囲に発達する溺れ谷を含めた約7万㎡の規模をもつ弥生時代中期後半から後期にかけての集落遺跡である。現在までに2割の範囲を散発的に調査したものの，遺跡の全貌を明らかにするには至っていない。しかし19次に及ぶ調査の過程で，この遺跡の持つ特異な性格を窺い知ることのできる遺構や遺物を検出し発見してもいる。とりわけ第1次調査および第6次調査によって検出された長軸15～14m・短軸12mをこえる巨大住居址2軒の在り様は，赤坂遺跡の三浦半島における他の弥生遺跡との隔絶性を示す遺構として特筆すべきものがある。さらに有角石器や有孔磨製石鏃などの石器，鉄製斧や青銅製の釧や指輪などの金属器も発見されており，遺物の面でも三浦半島の弥生集落の中核を担う遺跡として評価されている。

現在までに赤坂遺跡では，5例の磨製石剣が出土している。磨製石剣は南関東地域では出土例の少ない遺物の一つであり，また一つの遺跡で複数検出された例としても数少ない遺跡と言える。このような遺物がどうして赤坂遺跡において出土するのかを考えることは，必然的に赤坂遺跡の特殊性を明らかにすることにもなる。最近神奈川県内および関東地方においてわずかではあるが出土例が増加し，ある程度の分布および分類も可能となってきた。また茨城県を中心として展開する有角石器の分布と系譜における研究の成果が提示され，磨製石剣と有角石器との関係が注目されるようになった。そこでここでは赤坂遺跡出土の磨製石剣を紹介し，あわせて関東およびその近隣の地域における磨製石剣の例をあげ，その性格や意義について考察を試みることにした。

2．研究史 ―東日本を中心とした―

磨製石剣とは，銅剣および鉄剣を石を用いて模したものである。北部九州ではすでに縄文時代晩期において出現し，やがて畿内においても弥生時代前期には製作されてもいる。関東地方

でも弥生時代中期という幅のなかで出現し，現在までに確認された範囲は，分布の粗密はあるものの九州から東北地方にまでおよんでいる。

この石製品の研究は1910～1920年代（大正時代）における，時代認定とそれを裏付ける青銅器との対比のための分類作業から始まった。すなわち鳥居龍蔵の「石器時代」説に対し，中山平次郎は銅剣との類似性から金属器を模したものととらえ，弥生時代の時代的特質に「金属器初期時代」という位置付けを主張した。銅剣や銅鉾および銅戈などの金属製武器が，中国や朝鮮半島から伝来したものであることはすでに周知されており，これらをかの地の資料と比較することで，弥生時代の年代観を把握できるものと考えた梅原末治や高橋健自の研究が進められたのもこの時期である。梅原末治や高橋健自は，これらの金属製武器を分類する中で，類似する形態をもつ磨製石剣を金属器の模倣とする中山の説を支持し，その形態的特徴を幾つかに分類した。とりわけ高橋健自の研究は，この時期において発見されていた磨製石剣を集成し，全国的視野での分類とその分布，さらに出土状況および金属製武器との比較を通じて磨製石剣の時期を実証的に解明し，鉄剣形・有柄式・有樋式・クリス形の4形態に分類したものが地域的な傾向をもつこと，さらに金属製武器の使用者と磨製石剣を持つ者との間には階層的差が存在するという，遺物を通じての社会的考察にいたる見解を示していることは，大正時代の遺物研究の一つの到達点として評価されるものがある。

昭和に入ると，縄文土器の編年的研究にみられるような地域ごとの考古学的研究の深まりのなかで，各地での個性的な石製武器についての発見や考察がなされるようになってきた。とりわけ関東地方や中部地方周辺では，中谷治宇二郎により紹介された「有角石斧」や，鳥居龍蔵により命名された「有孔石剣」の資料が増加し，金属製武器の分布圏から外れた地域での独特の石製武器について，その年代的研究と地域的評価をめぐり，森本六爾や八幡一郎らが精力的にそれらの課題に取り組むようになった。

森本は石剣を3期に編年し，1期は銅剣銅鉾を忠実に模したもの，2期は丸みを帯びた鈍重な変形型式（有孔石剣を森本は変形鉄剣式と分類している），3期を石斧と石剣の中間形で左右に角状突起をもつもの（有角石剣とよび，平形銅剣の関にみられる刺状突起に類似する突起をもつ磨製石器）にわけた。森本の3期区分の考え方の背景には，青銅器の波及の粗密と材の金属から石への変換を，「弥生式文化が西から東へ伝播するにつれて歪められ形を変えていった」ものとし，列島における異なる文化圏の存在に由来するものと考えた。そこから読み取れることは，金属器を持つ地域と持たない地域の存在，それは「西日本」と「東日本」と呼んでもよい二大地域の存在であり，金属器の普及の進む西日本と石器を代用とする東日本という質の違う社会のイメージである。

この森本の文化圏認識に対し，八幡一郎は「有孔石剣」の収集とその研究を通じ，森本とは異なる認識に立ち至っている。1933年の『有孔石剣の新資料』で彼は土器のもつ時間差と地域差という性格が，土器以外の遺物にも反映されているとして，その具体例として「有孔石剣」

と「有角石器」の分布の問題を取り上げ次のようにのべている。「弥生式土器には種々なる地方差が存し，且つ一地方にありても亦若干の型式別が行ひ得る。……さらに土器以外の諸遺物に於いても同様である。されば単なる分布論，粗笨な編年観は解消せしめねばならぬ。」とし，遺物における精緻な観察とそれを時間的・空間的に配置し，他の遺物との関連を含めて地域のなかでのさらなる編年の可能性と，他の地域との編年的同時性を遺物を総合的にみるなかで検証しようとして努力した。しかし「有孔石剣」が中部地方を中心に分布することの意味や，森本の「有角石剣」との関係さらにはその使用法などの遺物についての考察はなく，「有孔石剣」の概念は鳥居龍蔵や高橋健自の見解にそったものに終始し，資料紹介の域を脱しなかったことは残念な点である。

「有孔石剣」や「有角石器」などのきわめて地域性をもつ石製武器とは別に，畿内出土の所謂鉄剣形の部類に入る石剣の資料検出の例も，この時期大場磐雄や後藤守一によって紹介されている。とりわけ後藤守一の『上古時代に於ける上越地方』で紹介された，新潟県潟町出土の石剣について，石剣とともに検出された柄に藤蔓がまかれていたことに注目し，石剣の使用法が短剣としてではなく石槍としての用いられ方もあると解釈したことは，使用という観点をもって石剣を観察した点で，新たな石剣研究の方向を示したと言える。しかしその後新たな石剣の資料の掘り起こしはなく，昭和10年代を境に石剣の問題は太平洋戦争という戦時下の状況とも重なり，研究の進展をみることはなかった。

戦後における研究の開始は，伊東信雄の宮城県丸森町河原囲遺跡で発見された磨製石剣の紹介からである。森本が弥生文化圏外とした東北地方からの発見は，弥生時代の所謂「西日本」と「東日本」という境界の存在を無意味にする意義をもつ発見と言えた。しかし，発見の状況のあいまいさもあり，磨製石剣の分布的な資料として用いられながら，その意義についてはあまりかえりみられることはなかった。

清水潤三による1967年の『千葉県横芝町発見の磨製石剣』の紹介や翌年の及川　洵の『岩手県大船渡市発見の石剣』は，この状況を顕著に示している。清水の結論の一節に「金属器使用の悲願ともいえる一種の石製模造品が，この地方にも出現したのであり，それが特異な形をとるに至ったことが確かめられ」たとする見解は，明らかに森本の認識と同一線上にあることは明らかである。

一方戦前森本六爾によって平形銅剣の変形として紹介された「有角石器」は，戦後の資料の増加をうけて坪井清足や小林行雄により，銅鉾・銅鐸文化圏に対する東日本の文化圏を代表する遺物として取り上げられるようになった。しかしここでも基本的には金属器対石器という対立的図式を象徴する意味で「有角石器」が取り上げられたにすぎず，森本の文化圏認識の継承をみるにすぎなかった。

桐原　健は1963年に「有孔石剣」の時期，分布，使用法を遺物にそくして総合的に考察し，「有孔石剣」を弥生時代中期の遺物とし，「変形鉄剣形石剣」と読み替え「重量ある，短小な刃

部をもつ石器」の機能として「戈」を想定し，従来の青銅製武器の模倣という枠をはずし実用の武器としての可能性を指摘した。

1980年に新田栄治は『東日本の武器形石製品』と題し東日本における石製武器の総合的考察を行った。新田は「日常生活址から日常生活用具と同じ状況で出土していることが武器形石製品に共通していえる現象である。」とし，近畿地方中部から以東においては武器形石製品の非埋納形態がごく普通のあり方であることから，「東日本は西日本から没交渉で存在したのではなく，武器形石製品のあり方からみても畿内における社会状況を伝えているものがある。」と指摘したことは，従来石製武器を単なる青銅製武器の模倣としてとらえ，その遺物本来の出自と社会的位置付けにたいする研究がなされてはいなかった点を反省させるうえで評価すべきものがある。しかし新田の関心は主に「有孔石剣」と「有角石器」の関係であり，それを結び付ける「小形有樋式石戈」である。この中で鉄剣形の磨製石剣についても7例紹介しているが，『いずれも個体差の大きいもの』で『非定型形の磨製石剣』とよび，『無樋・有茎，茎部や関部に穿孔されたものがある』ことに特徴をもつと，この種の磨製石剣についての説明を加えているにすぎない。

1992年には石川日出志も「有孔石剣」と「有角石器」の関係について，新たに発見された資料をもとに考察を行っている。石川も桐原同様にこの遺物の性格を「戈」と認め，弥生時代中期後半の栗林式土器の分布圏を中心として展開し，信濃以外の地域での検出例のある理由としてこの土器分布の拡大とその影響を指摘している。石川はさらに茨城県内の発見例をもとに，「有角石器」の誕生は「有孔石剣」の影響をうけてのものであるとし，「有角石器」の機能も「戈」であったことを示唆している。

八幡は「有孔石剣」の起源を銅剣に求めたのに対し，桐原や石川は石戈からの転化としてとらえた。そして新田は「有孔石剣」にともなう「小形有樋式石戈」が栗林式土器の分布拡大にともなって霞ヶ浦にまで影響を及ぼし「有角石器」出現の契機となったという。そして石川は「有孔石剣」自体が「石戈」であるとする。新田や石川らの研究は，弥生時代の東日本内部における文化の傾斜という視点を導入し，長野県を中心に複雑な東日本の地域間の動きを認識しようとする態度として評価することができる。しかし，「有孔石剣」や「有角石器」が「戈」からどのようにして転化していったのか，さらには同時期に出現する「畿内形石戈」や鉄剣形の磨製石剣との関係についての問題を残してもいる。

岡本孝之は，「有角石器」それ自体の出自を問題とする。新田や石川らがあいまいとする，同時期に出現する「畿内形石戈」や鉄剣形の磨製石剣との関係についての問題をつき，「有角石器」を縄文時代の遺物からの延長線におき，他の石製武器に対峙する遺物と位置付け，「有角石器」分布圏の意義を西日本弥生時代文化の外においた。岡本の弥生時代認識は，ある意味で森本六爾の弥生時代認識の「逆像」であり，賛成しかねるものがあるが，「有角石器」の出自を東日本のなかから見出だそうとする姿勢は評価すべきものがある。しかし，それと同時に

やはり「有角石器」分布圏内における畿内形石製武器のあり方や，「有角石器」の発生とその終息が畿内形石製武器の登場と消滅の時期とほぼ一致していることは，この分布圏が単に西日本弥生時代文化と対立的関係として存在していたものであるのか，疑問を抱えている部分である。

東日本の磨製石剣の研究史をふりかえってみれば，その大部分は「有孔石剣」と「有角石器」の出自と分布さらにその用途の研究であった。これは東日本独自の遺物であることにその意義を見出だすと同時に，この二つの遺物が研究の当初から金属製武器と同一線上におかれてしまったことにもよる。このことが，東西弥生文化という対立的視点を作り上げてしまった原因でもあろう。そしてなによりも「有孔石剣」と「有角石器」以外の所謂畿内形石製武器の遺物としての数の少なさが，東西弥生文化を固定化させていったもう一つの原因ともなったことは明らかである。しかし，「有孔石剣」や「有角石器」以外の鉄剣形石剣の出土例が，最近関東地方でも増加しつつある。従来あまり顧みられることのなかった鉄剣形石剣を通じて東西弥生文化の意義を考えることは，ある意味で東日本独自の石製品である「有孔石剣」と「有角石器」の問題に何らかの寄与をもたらすものと考えられる。ここでは最近明らかとなった鉄剣形石剣を集成し，その形態と分布さらには系譜を明らかにしていきながら，東日本と西日本の弥生文化の動きについて考えていくことにする。

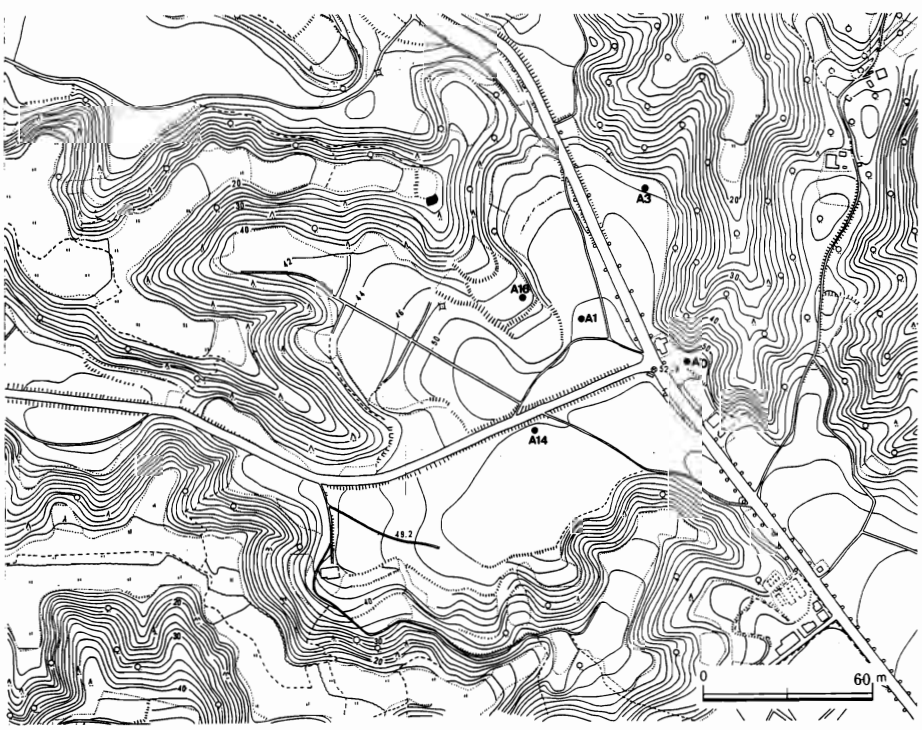


図１　赤坂遺跡の磨製石剣出土位置

3．赤坂遺跡出土の磨製石剣

赤坂遺跡から出土した磨製石剣は，第1・3・10・14・16次のつごう5地点より発見されたものである。以下，その特徴について説明していく。

(1)本例は1990年に調査された第3次調査地点より出土したもので，報告書に以前記載したもの。繰り返しとなるが，その特徴について報告書より再掲してみよう。

1A号住居址より出土したもの。現在長は16.5cm，最大幅5.5cm，厚みは0.7cmを計測する。先端部を欠損し，関の付近および柄の下端部も大きく剥離している。当初，柄の部分が覆土上部より検出され，さらに身部が床面より出土し，石質の類似から接合を試みたところ関付近で接合し，石剣と判明したもの。石材は珪質片岩を用い，身部の側縁部に形成されている刃部は表裏から磨きを加えられ，鋭く研ぎだされている。身部の体部は平坦に研ぎだされ，したがって断面の形状は六角形を呈する。一方柄部の側縁部および体部は平坦に加工され，断面の形状は長方形をなす。柄部中央下端部には，直径0.7cm程の孔が表裏両方向より穿孔されている。推定される長さはおよそ20.5cmとすると，身部と柄部との比率は1：0.52となり，身部に対し柄部が比較的長いことがわかる。

本例を出土した1A号住居址は，長軸8.4m，短軸7.2mの中規模のもので，1B号住居址および3号住居址の2軒に切られた宮ノ台式土器を出土する住居址であった。本住居址の特徴は，床面および覆土から扁平片刃石斧やその未成品と思われるもの，砂岩製の砥石，軽石，石英の断片が数多く検出されていることである。さらに遺構の面では，炉の周囲および奥壁にかけて10数個の小ピットが認められた。このような小ピットの在り方がどのような意味を持つものなのかは不明であるが，他の住居址にはみられないものであることから，本住居址の性格を考える上で一つの特徴的な要素といえよう。

(2)本例は1993年に調査された第10次調査地点の，1B号住居址の柱穴中より検出されたもの。現在長7.7cm，最大幅3.4cm，厚み0.75cmを計測する。先端部および下端部を，それぞれ欠損している。さらに刃部も剥離しており，二次的な加工を施しているのではないかと推測している。これが磨製石剣であったろうと想定するのは，(1)と同様の石材を用いていることと，体部に認められる研ぎ出しの方向が両側縁部にかけては横方向に移動しており，断面にみられるように表裏からの研ぎ出しの結果，レンズ状の形状が形成されている。これにより明らかに刃部を作り出そうとしている意図が認められ，断欠ではあるがこの石片が両側縁部に刃部をもった磨製石剣であったことを知ることが出来るのである。

本例を出土した1B号住居址は，その大半を1A号住居址により破壊されていた。1A号住居址は後期の久ケ原式土器をもつ住居址で，ここからは銅環の検出もあった。本例は，この1A住居址の床面を精査している時に発見されたもので，当初は1A号住居址に伴うものと考えていたが，1A号住居址の発見とそのプランからみて1B号住居址の柱穴に相当する位置にあ

るものと推測されるようになったものである。１Ｂ号住居址からは，わずかであるが宮ノ台式土器が出土しており，本例もその時期のものといえよう。

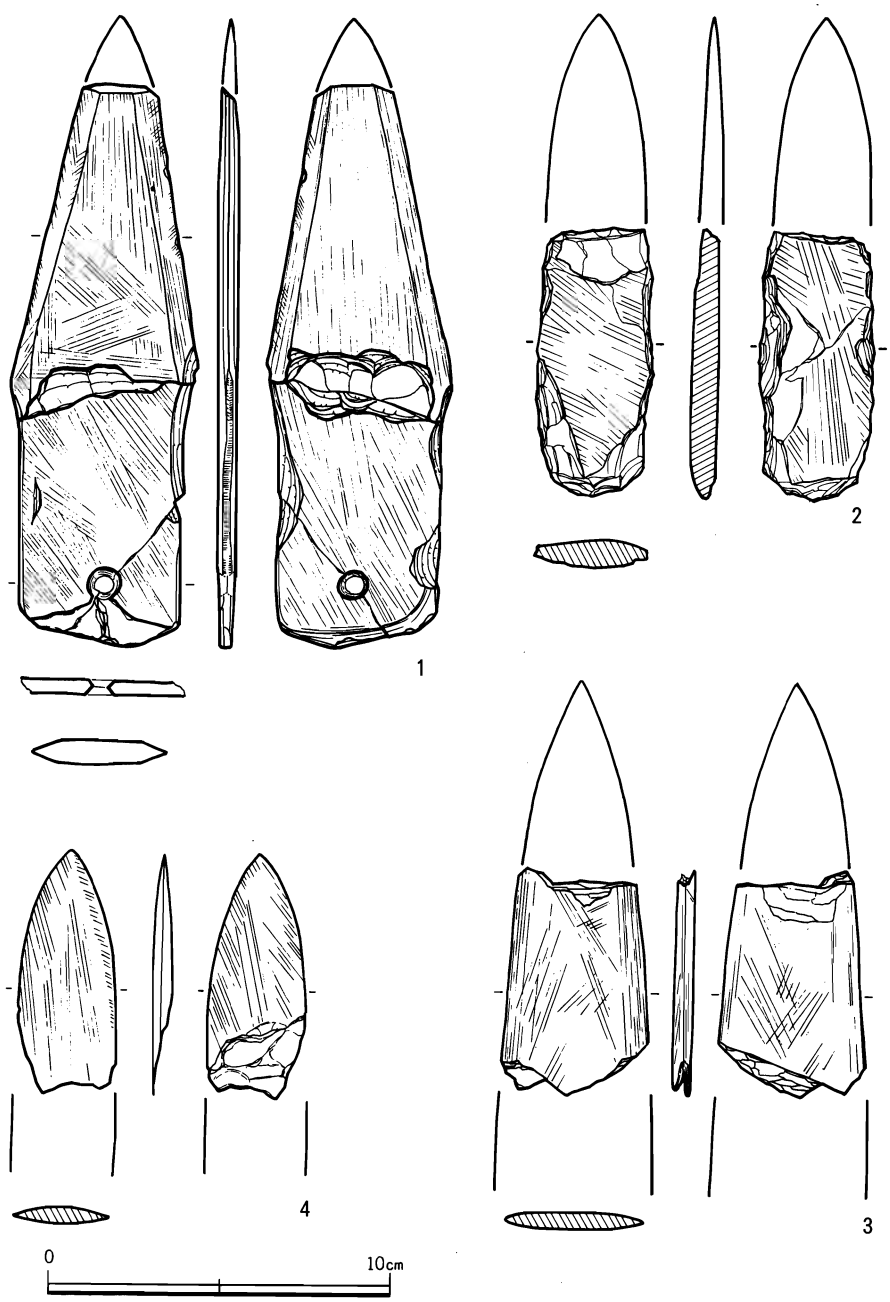


図２　赤坂遺跡出土の磨製石剣

(3)この例は1995年に調査された，第14Ｂ調査地点より発見されたもの。この地点は赤坂遺跡では第12次調査地点に次いで，方形周溝墓が検出された地点である。本例も２号方形周溝墓の覆土中より出土したものである。この方形周溝墓からは，溝底より宮ノ台式土器の完形の壷形土器５点が発見され，それ以外にも多くの土器片が出土している。方形周溝墓の規模は不明であるが，溝幅は推定でも2.5mはこえると思われることから，かなり大型であったろうことが想定される。

本例は現在長6.6cm，最大幅4.2cm，厚さは0.5cmを計測する。本例が磨製石剣であろうとする点は，両側縁部にみられる鋭い刃部の研ぎ出しと，用いられる石材からである。表裏にみられる刃部の研ぎ出しはいずれも刃部と平行であり，体部にみられる斜めあるいは横方向の研ぎ出しとは明らかに異なる。その結果身部断面の形状は，六角形に近いものとなるが(1)の例よりは刃部と体部とを分ける稜のあり方は鮮明ではない。本例は(2)の例と同様に切っ先および柄の部分を欠損しており，いかなる形状を持つものかは不明である。しかし，平面形および研ぎ出しの方法は(1)の例に類似し，さらに珪質片岩での例(2)が黒色であるのに対し，本例は(1)同様灰茶褐色を呈する点で(1)の例との関連の深い要素を見出だすことが出来るものである。

(4)本例は1996年の第16次調査地点，１号住居址覆土上部より出土したもの。石材は黒色の色調を持つ珪質片岩で，身部上部から切っ先にかけての破片である。現在長は7.1cm，最大幅３cm，厚さは最大で0.6cmを計測する。切っ先から身部にかけ，両側縁部には鋭い刃部が形成されている。断面の形状は薄いレンズ状をなす。切っ先の先端部には，わずかに刃こぼれの痕跡を認めることが出来る。刃部の研ぎ出しは，表裏とも左から右に傾斜する細かな研ぎ跡が観察され，体部には長めの縦方向の研ぎ跡がそれぞれ認められる。本例は先に紹介した例と違い，体部の幅が狭く刃部の鋭い点を特徴としている。その点では(2)の例に類似する要素をもつといえよう。

本例を出土した１号住居址は，赤坂遺跡の範囲内にある谷間に作られた住居址で，覆土より赤坂遺跡では唯一の鳥形をしたミニチュア土器が発見されている。そして床面からは大型の深鉢形土器と，完形の二次的加熱をうけた壺形土器に混じって，イノシシの臼歯が発見されている。出土した土器はいずれも宮ノ台式土器であることから，本住居址の時期も弥生時代中期後半に位置づけることが出来よう。

赤坂遺跡出土の磨製石剣４例について，その出土状況および伴出遺物の説明をおこなった。なお本遺跡からはもう１点の検出例がある。第１次調査の５号住居址より出土したもので，切っ先部のみそれも片側が剥離している小さな破片である。この５号住居址は長軸15m，短軸12.2mの巨大住居址で，やはり宮ノ台式土器の時期のものであった。これをＸ例とよぶ。

赤坂遺跡の磨製石剣を概観した結果，幾つかの共通する要素を指摘できる。以下にその要素を列記してみよう。

１．時期　本遺跡の磨製石剣に伴って出土した土器は，いずれも宮ノ台式土器であった。した

がって本遺物の年代は，弥生時代中期後半の時期に比定できる。

2．石材　使用された石材は，すべて珪質片岩であった。片岩の特徴である板状剥離を利用して，岩塊ではなく剥離した石材を加工して製品化したものと考えられる。

3．遺構　5例とも何らかの遺構に伴うものであった。4例が住居址内からであり，1例が方形周溝墓に伴うものであった。したがって本遺跡の場合については，磨製石剣と住居址との関係の深さを指摘することができる。注目すべきは，磨製石剣を出土した住居址の内容である。(1)・(3)・Xとも規模あるいは伴出した遺物に他の住居址とは異なる内容のものを含んでいるからである。とりわけ(1)・Xの住居址からは，イノシシの臼歯や獣骨が検出されていることは，注目すべきことといえる。さらにこの2軒の住居址の奥壁には小ピットが配置されており，このような小ピットを他の住居址でみないことは，これらの住居址の性格を考える上で無視できない構造といえよう。さらに(4)を出土した方形周溝墓の規模は，神奈川県内のものと比較しても，その溝幅からみて大形と推定してもよいものである。したがって，磨製石剣を出土した住居址ならびに方形周溝墓は，きわめて特徴のある遺構といえるのである。

4．出土状況　5例とも破片の状態で発見されている。さらに(3)の例のように，二次的な加工をもつものもある。磨製石剣の使用と廃棄の関係を考える上で，この出土状況には注目しておく必要があろう。

以上5点について，赤坂遺跡から出土した磨製石剣から得られた所見をまとめてみた。この赤坂遺跡での知見が，他の遺跡例とどう関連するのかを次に考えてみたい。

4．関東地方およびその近県の磨製石剣

関東地方およびその近県における磨製石剣の出土遺跡をみると，神奈川県では赤坂遺跡を含め8遺跡12例が確認されている。その他の都県をみてみると，千葉県・埼玉県・茨城県が2遺跡2例，群馬県が1遺跡1例あり，関東地方では今のところ東京都と栃木県での例はない。一方茨城県に隣接する東北地方の福島県では2遺跡2例が，隣接する宮城県では1遺跡1例が確認されている。また埼玉県や群馬県と接する中部地方の長野県では，有孔石剣を加えて12遺跡12例をみることができる。現在，関東地方のみでみれば15遺跡20例を数えることができ，この数はかつて1967年に清水潤三が東北地方の例を含め4遺跡4例をあげ，1980年に新田栄治が7遺跡7例をあげたのに対し，この20年間に遺跡および遺物の数は約3倍に急増したことがわかる。そのことは今後，東京都および栃木県における未発見の地域を含め，各県内での新たな発見も当然予想されるものがある。東日本の磨製石剣の発見例をみれば，関東地方において神奈川県の件数のきわめて多いことがわかる。この数が本来的なものかは予断を許さないが，東日本というスケールでみた場合，中部地方の長野県と匹敵する発見例であることには違いない。このことが，何を語るものかは考察において後述することにして，ここでは現在発表されてい

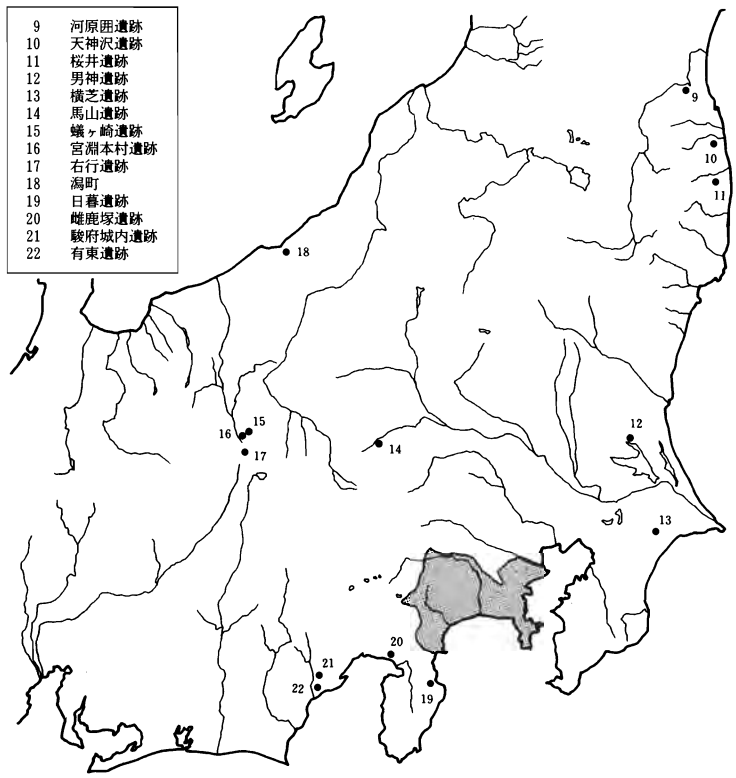


図3　東日本各地の磨製石剣出土分布

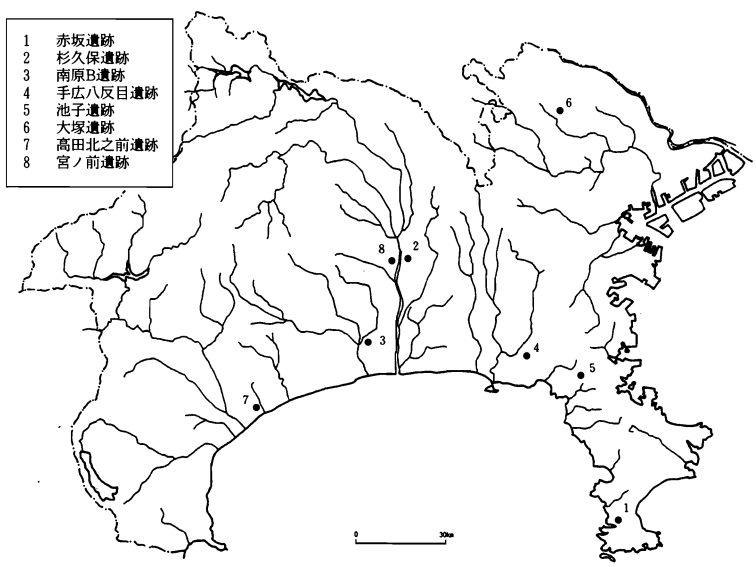


図4　神奈川県の磨製石剣出土分布

る資料を概観し，その特徴と時期および遺構について，記述していくことにしよう。

神奈川県　(5)〜(9)・(23)

(5)海老名市杉久保遺跡のもので，所謂有孔磨製石剣と呼ばれるものである。県道工事中に偶然発見したもので，伴出遺物はない。したがって，時期を明らかにすることができなかったが，1995年に採集地からわずか100m程の位置から，中期後半の土器を伴う方形周溝墓が検出され，本資料の時期決定に示唆を与えるものとなった。石材は斑糲岩を用い，現在長13.8cm，最大幅5.4cm，厚さは最大2.1cmを計測する。刃部は身部中央から左右側沿縁部に向かって研ぎだされており，その結果切っ先から関にかけて中央に鎬をもち，その結果断面形態は菱形状となる。

(6)本例は平塚市南原Ｂ遺跡のもの。切っ先部分のみのもので，全体の形状は不明である。本例はその出土状況に特徴を持つ。すなわち，土坑内から焼けたイノシシの下顎と頭骨などの骨が検出されており，それらに混じって磨製石斧の未成品や砥石および管玉などと一緒に，本例が共伴して出土しているからである。さらに坑底には朱のような赤色物の堆積が認められており，この土坑が何らかの祭祀的行為に用いられたものであることが想定されるものであるからである。現在長は6.5cm，幅3.1cm，身の厚さ0.6cmを計測する。身部の作りは(4)の例に類似し，薄手の鋭い刃部が切っ先から側縁部につづいている。断面の形状は，レンズ状となっている。切っ先から続く左部分の刃部を欠損している。石材は，粘板岩を用いている。本遺構の時期は，磨製石斧などの石製品から弥生時代中期のものと考えられている。

(7)この例は鎌倉市手広八反目遺跡から出土したもので，遺構に伴うものではない。しかし，本遺跡の主体が弥生時代の宮ノ台式土器から久ケ原式土器であることから，この間の時期に比定されよう。現在長は3.0cm，幅3.5cm，厚みは0.5cmを計測する。

本例は欠損品を二次的に加工しており，切っ先部の下の部分に擦り切りの痕跡を認めることができる。しかし，体部に観察される研ぎ出しのあり方は赤坂遺跡の例で(1)•(3)に認められたものに類似し，体部を平坦にそして側縁部の刃部を表裏から研ぎだしているもので，したがって断面の形状が六角形を呈するものである。この研ぎ出しのあり方から，本例が磨製石剣の破片であることが推定されるのである。そして，擦り切りの加工技法は長野県で多く見られる有孔磨製石鏃を作る際に用いられるもので，技法的にも注目すべき内容である。石材は粘板岩である。

(8)本例は逗子市池子遺跡No１—Ａ地点の旧河道からの出土物。この河道からは多量の宮ノ台式土器をはじめ，各種木器類や骨角器などが検出されている。本例の特徴は，基部の形成が丸みをおびたもので，体部を比較的平坦に仕上げるタイプのものとは異質な作りをしている。切っ先の部分は欠損しているが，身部上部は表裏から研ぎだされ偏平に加工され，断面楕円形の身部断面とは厚みの点で大きく異なりをもつ。現在長は14.8cm，幅3.4cm，厚さは1.8cmを計測する。今まで紹介した磨製石剣とはいささか趣を異にした作りで，縄文時代の石剣の転用という所見もある。

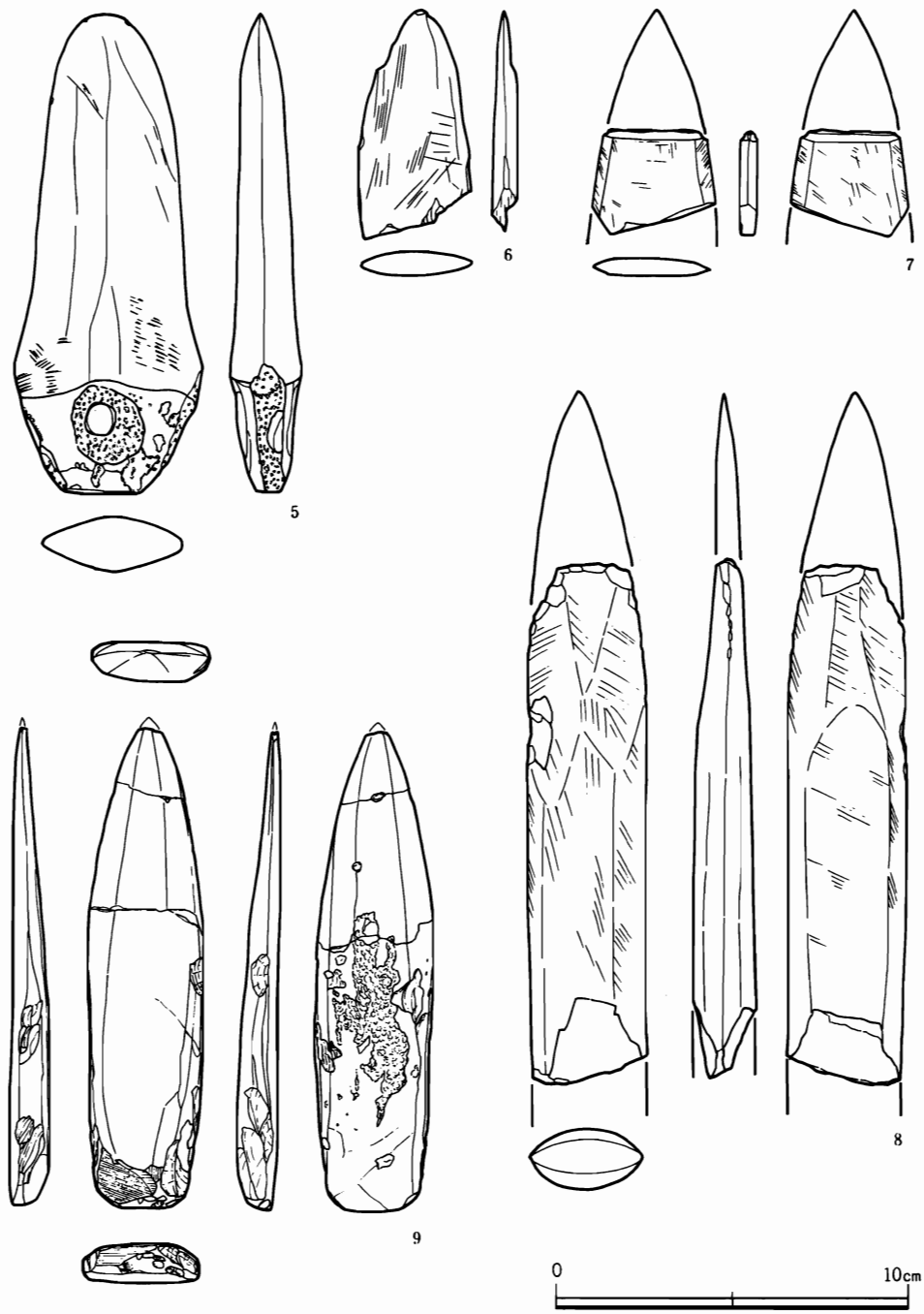


図5 神奈川県出土の磨製石剣

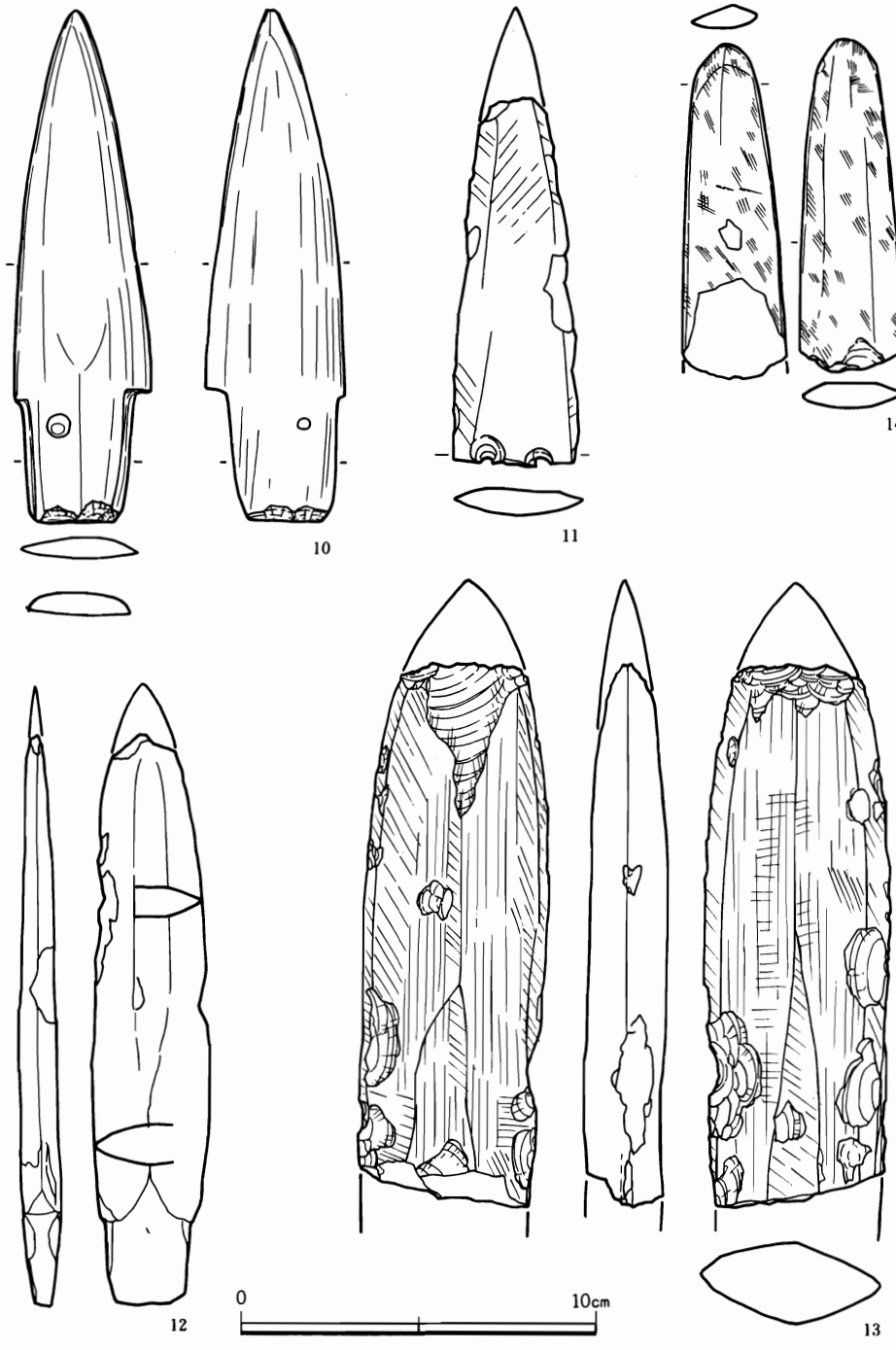


図6　関東各県発見の磨製石剣

(9)横浜市大塚遺跡のＹ49号住居址より発見されたもの。火災にあって焼失した住居で，長軸5.7m，短軸4.67mの規模をもつ。宮ノ台式土器の他に各種の石器を多く出土している。石器の種類は本例の他に，小形柱状片刃石斧，砥石，扁平片刃石斧，石斧未成品がある。現在長は13.7cmあるが先端部の一部が欠損しており，本来は14.0cmほどの長さがあったものと推定されている。幅は3.2cm，厚さは1.2cmである。石材は輝緑凝灰岩である。刃部は切っ先から身部の中位にかけて形成され，それ以下は握り部となる。この部分はしたがって，やや厚みを増している。体部中央は平坦に研ぎだしされ，側縁部は縦方向の研ぎ出しによって刃部を作り出していく。基部は横方向の磨きによってやや丸みをもつ形態に整えられている。断面はレンズ状となっている。

(23)小田原市高田北之前遺跡より，古墳時代後期の竪穴住居覆土から出土したもの。身部下半部を欠損しており，現在長は9.3cm，幅約4.5cm，厚さ2.1cmを計測する。石材はホルンフェルスである。身部中央部表裏には鎬が形成されており，断面は菱形を呈している。切っ先は左右両方向の研ぎ出しがみられるが，全体に丸みをもち再調整された可能性をもつ。刃部は切っ先から数センチのところで平坦に研ぎだされ，その結果側縁部は左右ともに平坦面となる。厚みのある身部の作りおよび鎬の形成などからみて，有孔石剣に類似点をもつ。

神奈川県内ではこの他に，川崎市麻生区や厚木市宮の里遺跡例がある。今のところ麻生区出土とする遺物の存在を，文献例のみでしか確認することは出来ていない。宮の里遺跡例は，宮ノ台式土器を伴う住居址からの発見であり，数点の磨製石器と一緒に検出されたもの。写真で見るかぎりでは宮の里遺跡例の特徴は，偏平な形状と鋭い切っ先そしてそれとは対象的に握り部の幅が広いという点であろう。

千葉県　(10)

現在千葉県で確認されている資料は2例ある。そのうち1例は未報告のものである。ここでは未報告のものを除いた1例について，資料を報告することにする。

(10)清水潤三によって紹介された資料。採集されたもので，時期および遺構との関係は不明である。形態は鋭い三角形の身部をもち，幅広のやや左右非対称の柄をもったもの。柄の左側に偏った位置に一孔を穿っている。特徴的な点は，断面が蒲鉾状となっていることで，表面と裏面との研ぎ出しが異なっている。さらに柄部の孔の穿孔法である。通常磨製石剣にみられる穿孔法は両面からのものが一般的であるが，ここでは表面からの一方向のものであることも注意すべきことと言えよう。全長は14.8cm，柄の長さ3.5cm，関部の幅3.8cm，厚さ6.5mmをはかる。石質は不明。

茨城県　(11)・(12)

茨城県も千葉県同様，資料的には少ない。現在2例が確認されているものの，不明な点もあ

り資料的な面でさらに検討すべきものがある。

(11)旧新治郡出島村男神から採集されたもの。身部の下方に左右二つの穿孔を施している。断面六角形で，側縁に刃部が研ぎだされている。現在長10.1cm，幅3.5cmで穿孔の直径は8㎜ほどである。

(12)1934年，大場磐雄によって紹介されたもの。旧千葉県君津郡の波岡小学校に保管されていたもの。採集地は霞ヶ浦周辺ということで，その保管されるまでの経緯については不明。全長16cm，幅3.4cm，厚さ1.1cmありほぼ完形。石材について大場は，有角石器に類似しているとし，斑糲岩の可能性を示唆している。

群馬県　(13)

群馬県からは三点の採集資料がある。いずれも利根川上流の，鏑川の流域からのものである。しかし，富岡市上北ノ根遺跡および七日市観音前遺跡の2点については，さらに検討を待つ必要があろうかと考えられるものがあり，今回は下仁田町馬山出土の例のみをとりあげることとした。鏑川の流域からは石戈が3点出土しており，また最近甘楽町三ツ俣遺跡より銅戈の破片も出土し，中部高地と群馬を結ぶルートとしこの流域が注目される位置にある。

(13)甘楽郡下仁田町馬山から採集された資料。切っ先および基部を欠損したもの。現在長は15.2cm，幅5.3cm，厚さは2.3cmのもの。石材は，珪質頁岩を用いている。表裏両面に鎬が身部中央にある。研ぎ出しはこの鎬を境に上下にみられさらに側縁部における刃部形成のための研ぎ出しが横方向にみられる。断面は，いびつな菱形を呈している。時期は不明。

福島県　(14)・(15)

福島県の資料は二点あり，いずれも竹島国基の採集品である。

(14)原町市上渋佐・高見町1丁目一帯を桜井遺跡と呼ぶ。本資料はこの遺跡から採集されたもの。現在長9.4cm，幅2.9cm，厚さ0.9cmの身部中央から基部にかけて欠損したもの。断面は三角形に近く，表裏ともに丁寧な研磨が施されている。石材は粘板岩である桜井遺跡からは石包丁をはじめ石斧や石鏃などが多量に採集されている。とりわけ中部高地で「有肩状石器」などと呼ばれる石器がみられることは，かの地との関係を知るうえでも注目すべき資料である。時期は採集品のため不確かであるが，採集された土器群は桜井式を主体としていることから，中期後半に位置付けても誤りではないであろう。

(15)相馬郡鹿島町大字江垂字天神沢より採集されたもの。全長7.6cm，幅1.7cm，厚さ0.8cmを計る完形品である。石材は粘板岩を使用し，表裏ともよく研磨されている。刃部は左右側縁部に鋭く研ぎだされており，柄部は身部の下端を左右から抉りだして形成されている。刃渡り5cmほどであることから，短剣としてもはたして機能したものか躊躇する。天神沢遺跡からは多量の石器および未成品が採集されており，石器の供給地であったと考えられている。とりわ

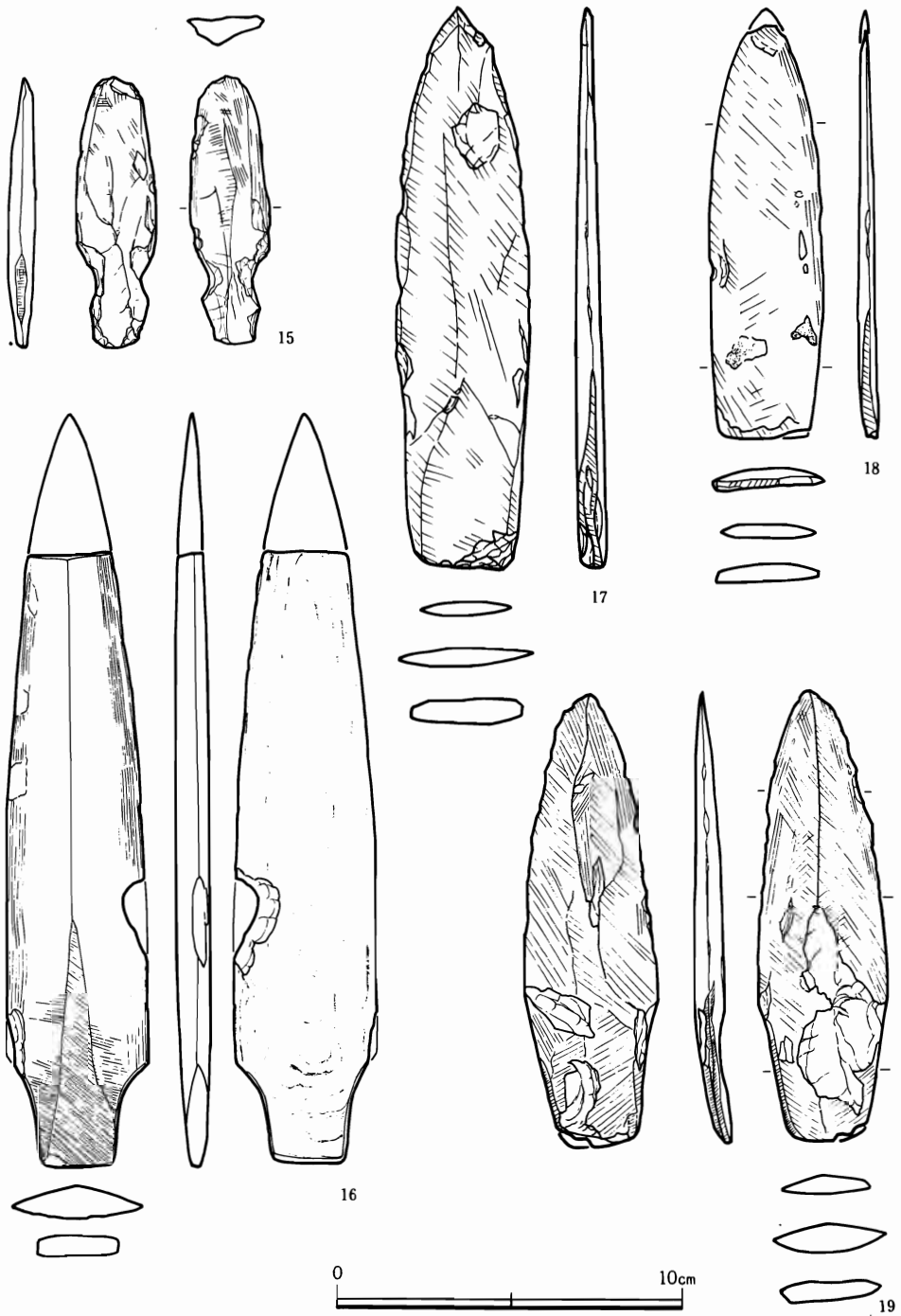


図7　東北および長野県発見の磨製石剣

け多様な石鏃の存在は，中部高地との関連を示唆しており注目すべき遺物といえる。時期は採集された土器群からみて，中期後半に位置付けできよう。

宮城県　(16)

(16)宮城県仙台市丸森町河原囲採集のものである。採集品で共伴する遺物もなく時期は不明。有茎式磨製石剣に属する物で，切っ先を欠損しており現在長は17.9cm，幅4.2cm，厚さ1.0cmを計測する。身部の片面には木目状の縞目模様の節理が文様のように研ぎだされているが，鎬のある片面には縞目の節理を縁近くでわずかに観察出来るほどである。関下には身部幅の2/3程の幅で茎が約2cm作り出されている。側縁部にそって，刃部が関まで鋭く研ぎだされている。刃部の研ぎ出しは縦方向であり，関の上部から茎にかけては斜め方向の研ぎを観察することができる。

長野県　(17)〜(22)

長野県は研究史でも紹介したように，有孔石剣の分布における中心地である。それとともに，比較的多くの鉄剣形石剣を検出している地域でもある。

(17)松本市大字宮渕本村遺跡より採集したもの。この遺跡は弥生中期後半の集落遺跡で，現在までに84軒の住居址が検出されている。石材はチャートといわれ，完形品である。長さ16.2cm，幅3.8cm，厚さ0.7cmを計測する。中央に微かな鎬をもち，基部がやや厚くなる。基部付近で，刃部の刃潰しが認められる。鎬を中心に左右それぞれ斜め方向の研ぎ出しがあるが，断面はレンズ状の形態をもつ。

(18)松本市大字蟻ケ崎遺跡より採集されたもの。したがって時期や遺構との関係は不明である。完形品で長さ11.8cm，幅3.3cm，厚さ0.5cmを計測する。表裏平坦な研ぎ出しで，側縁部に刃部を形成する縦方向の研ぎ出しをみることができる。したがって，断面は六角形を呈する。やはり基部付近に刃部の刃潰しが認められる。石材は千枚岩である。

(19)蟻ケ崎遺跡より採集されたもの。石材は粘板岩。ほぼ完形品で長さ12.9cm，幅3.8cm，厚さ0.8cmである。基部付近で幅を減じ関を形成する。そしてこの付近で刃部の刃潰しが認められ，さらに弱い屈曲をみせる。表裏ともに中央に微かな鎬をみることができ，断面も菱形に近いものとなる。

(20)蟻ケ崎遺跡より採集されたもの。石材は粘板岩。身部下半部を欠損したもの。現在長は7.1cm，幅2.6cm，厚さ0.5cmを計る。刃部は切っ先から側縁部にかけてみられ，身部の中央部は平坦に研ぎだされている。したがって，断面は六角形を呈するものとなる。

(21)松本市大字寿字石行遺跡より，縄文晩期末の土器にまじって出土したもの。石材は千枚岩か。河原囲採集のものに類似し，身部表裏に縞目の節理がみられる。断面はレンズ状となり，刃部は鋭い。

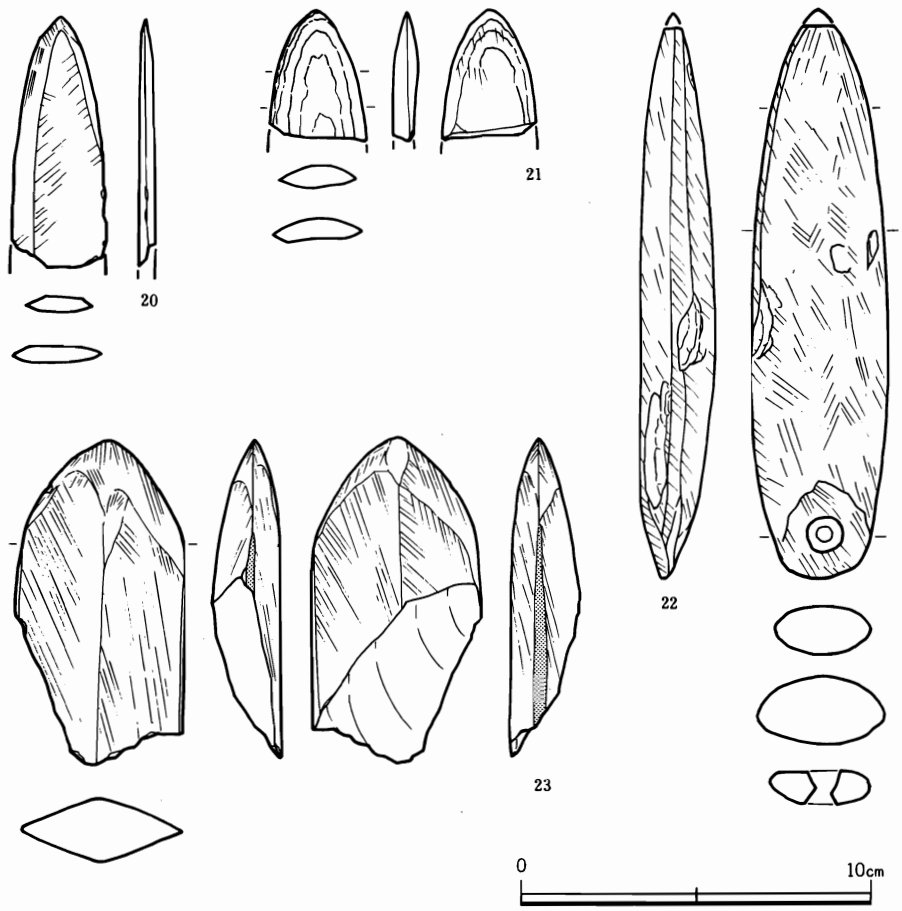


図8 長野県および神奈川県発見の磨製石剣

(22)宮渕本村遺跡より，中期古墳の周溝より出土したもの。有孔石剣に類似する器形であるが，身部と基部との境がなくまた中央に鎬もないなど，所謂有孔石剣とは異なるものがある。砂岩製という材質の面でも，異質である。やや切っ先を欠損しているがほぼ完形品といってもよく，長さ15.8cm，幅約4cm，厚さ2.2cmを計測する。

以上，神奈川県内および関東地方ならびにその近県の資料を概観してきたが，ここで赤坂遺跡での知見とを参考にわずかな例ではあるが，時期・石材・遺構・出土状況の順に若干のまとめをしていく。

1．時期 時期が共伴資料によって明らかになった例としては，(6)・(8)・(9) の3例と宮の里遺跡例があり，計4例がいずれも宮ノ台式土器に伴うものであった。このことは，時期の不明な杉久保遺跡例および高田遺跡例があるものの，県内における磨製石剣の使用時期を弥生時代

中期後半におくことができるといえよう。一方他県の例でいえば状況的には弥生時代中期後半に比定できるものもあるが，長野県石行遺跡例は縄文晩期から弥生時代前期のものといわれており，また身部にみられる木目状節理のあり方が北九州で発見されている有柄式石剣と類似することから，時期的にまた作りの上で九州との関係を指摘する考えもある。さらに同じ長野県穂高町離山遺跡より，遺構外ではあるが3点の石剣が検出されており，時期的に石行遺跡に平行するものといわれている。したがって弥生前期にまでたどれる例としては，長野県が今のところ関東甲信越地方において唯一の場所といえる。そのことは弥生文化の東日本における拡大において，長野県の地理的な位置の重要さを暗示するものといえよう。

一方逗子市池子遺跡例の身部断面の形状は，幅に対し厚みが大きく所謂縄文的な石剣の様相をもつ。このような形状をもつものとして，千葉県常代遺跡群の37•38-45•46Gピット中から出土したものがある。時期的には宮ノ台期に比定されるものであるが，この遺跡から検出された第220号溝の中層からは須和田式土器あるいは宮ノ台式土器の時期にかけての多くの木器類が堆積しており，その中に儀杖や鳥形に混じって剣形のものも発見されていることは，この時期における縄文的な石剣と木製の剣との関係を知る上で貴重な発見といえる。しかし提示した多くの資料はその大半が表採のためその詳細については不明とせざるをえない。したがって関東地方ならびにの近県における磨製石剣の出現の時期は，弥生時代前期から中期後半にかけてのものといえる。

2．石材　赤坂遺跡ではいずれも珪質片岩が用いられていたが，提示した資料の例をみると石材においての共通性を見出だすことはできなかった。しかし，南原B・手広八反目・池子遺跡の例さらには他県の例を加えれば粘板岩や片岩のように，剥離しやすい石材を用いたものが多い。このことは礫から製作したのではなく剥離した板状の材を加工して仕上げたものと考えられ，石材の性質の類似性に共通する要素を見出だすことができる。これに対し有孔石剣に比定される杉久保遺跡例（斑糲岩）や高田遺跡例（ホルンフェルス）のものは，一つの礫から作り上げていったものと思われ，石材の性質の利用法において，二つのタイプの製作技法が存在していたことがわかる。

3．遺構　遺構からの出土例は，南原B・大塚・宮の里遺跡の3例がある。他県の例はいずれも表採であり，その実態は不明なものがある。南原B遺跡の例は土坑からのものであり，この土坑から検出されたイノシシの骨や焼土のあり方は，調査者の指摘したように何らかの祭祀と深く関係するものと思われることは，磨製石剣の性格を知るうえで重要な所見と言えよう。しかし，他の2例および赤坂遺跡の例から住居址からの発見例が県内では一般的なようであり，問題はこの住居址の集落内での位置付けを知ることが肝要と言えよう。そして赤坂遺跡からは1例ではあるが，方形周溝墓の溝からの出土もある。畿内においては方形周溝墓の溝からのものが多くあり，その点でわずか1例ではあるが畿内的な検出例を得たことは，その性格を知る上で貴重な発見といえよう。

表1　長さと幅の関係

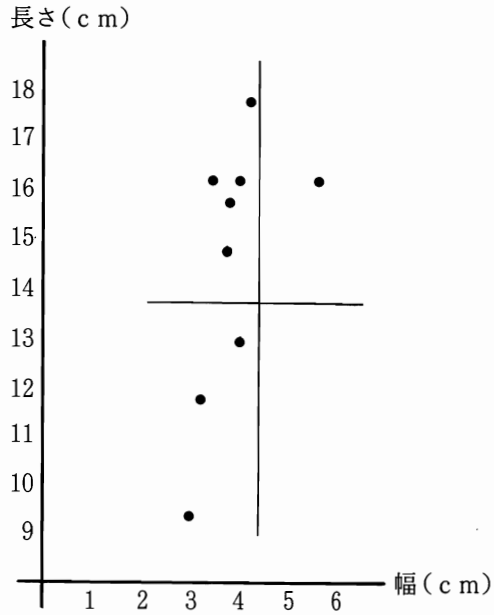
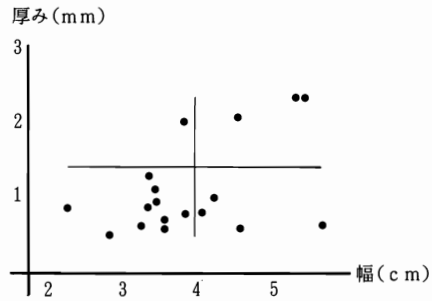


表2　幅と厚みの関係



4．出土状況　出土した例の多くが，赤坂遺跡の場合と同様欠損したものであった。そのうちで杉久保遺跡および大塚遺跡，さらに宮の里遺跡の例は完形品の部類に入るものであるが，大塚遺跡や宮の里遺跡のものも切っ先部が欠けている。この欠損が使用によるものであるかどうかは，磨製石剣の用いられかたを知るうえで忘れてはならないものであろう。そして畿内において発見された磨製石剣の多くも破片であることは，意図的な破壊を想定することもでき，そのことは磨製石剣の用途を理解する上で無視できない問題といえる。

神奈川県内および各地の磨製石剣を概観し，その共通項を導き出した。この結果は赤坂遺跡での指摘とほぼ共通するものとなった。そこで次に大まかではあるが提示した磨製石剣をもとに分類を試み，その共通性と違いについて考究していきたいと考えている。

5．東日本における磨製石剣の分類

かつて東北から関東地方において発見された磨製石剣について，その数の少なさと個性的な形態から，分類するにはいたらない時期が長く続いた。しかし最近の発見例の増加は，ようやくこの地域においても大まかではあるが分類することのできる，幾つかの共通要素を見出だすことができるようになってきた。ここでは，神奈川県を中心として東北から関東地方さらには中部地方に散見する磨製石剣の資料をもとに分類を試みてみる。

分類は（A）剣の大きさ，（B）柄の形態，（C）刃部の形態にわけてそれぞれ細分する。し

かしここで問題となるのは，多くの例が破片であるということと，明確にその機能を断定する付属資料がほとんどないということである。そのため(A)の剣の大きさについては，傾向的なものにならざるを得ない。

（A）剣の大きさ

分類の要素としては，長さ・幅・厚みの三点がある。ここでは長さと幅との関係，さらに幅と厚みとの関係から提示した資料の傾向を読み取っていく。

長さと幅との関係をグラフにしたものが表1で，ここからは四つの傾向をみることが出来る。

Ⅰ類　身の幅が3.0cm～4cmで全長10cm未満

Ⅱ類　身の幅が3.0cm～4cmで全長13cm未満

Ⅲ類　身の幅が3.0cm～4cmで全長13cm以上

Ⅳ類　身の幅が4cm以上で全長13cm以上

この四つの類型をみると，提示した資料で見る限りⅢ類が主体であることがわかる。しかし，傾向としては幅と長さの関係はあまりない。つまり，幅に対し長さの差が著しいからである。その一方Ⅰ類やⅣ類は異質で，幅と長さがいずれもⅡ類と絡む要素をまったく持たないことは，単に小型とか大型ということではなく，機能とも関連するからなのかもしれない。次に幅と厚みとの関係をみてみよう。

幅と厚みとの関係をグラフにしたものが表2である。ここからは4つの類型をみることができる。

Ⅰ類　幅が2.0cm～4.0cmで厚みが1.5cm未満

Ⅱ類　幅が2.0cm～4.0cmで厚みが1.5cm以上

Ⅲ類　幅が4cm以上で厚みが1.5cm未満

Ⅳ類　幅が4cm以上で厚みが1.5cm以上

この四つの類型の主体をなすものは，Ⅰ類である。そしてⅢ類およびⅣ類は他の類型からの差が大きく，したがってⅠ類からみれば異質なグループといえる。

二つのグラフをみれば，幅を中心として厚みと長さが規定されていることがわかる。したがって，主体的な幅から逸脱したものは，ある意味で異形となる。それが機能の差かどうかはさらに検討する必要がある。次に，柄の作りについてみてみよう。

（B）柄の形態

ここで柄と表現するものは，剣先に対して位置する基部の形態という意味である。

Ⅰ類　基部に柄をもつもの。種定淳介の提唱した「有柄式磨製短剣」に一致する。
柄の幅が刃部よりわずかに狭まるもの。a．有孔・b．無孔とがある。

Ⅱ類　所謂有茎式石剣とよばれるもの

Ⅲ類　身部と柄が一体につくりだされているもので，基部付近に刃潰しがみられるもの

Ⅳ類　基部中央に両方向の穿孔があり，基部自体身部に比して薄く作られている所謂有孔石剣にみられる基部であるもの

柄の形態による分類によれば，Ⅰ類aに相当するものとして(1)・(10)がある。Ⅰbとして(12)・(15)が該当する。しかし，Ⅰ類aとした(10)の穿孔位置は基部中央をはずれており，さらにその穿孔法も(1)とは異なることから，その着柄法に違いを持つものと言えよう。とりわけ(1)の基部の幅は約5cmあり，これに何らかの柄を装着した場合，手で握るに不適当な幅といえることから，はたして剣として用いられたのか躊躇する点である。Ⅱ類としては(16)がある。Ⅲ類としては(9)・(17～19)がある。Ⅳ類に相当する資料は(6)・(22)がある。Ⅰ類やⅡ類そしてⅣ類に相当する資料は，きわめて特徴的な形態により容易に分類されるが，Ⅲ類に分類したものは(19)のようにⅠ類的な要素をもつものがある。このⅢ類の作りは村田幸子による畿内における打製石剣の分類で，3類とした「体部と柄が一体につくりだされているもの」に類似することは，機能のみならずその製作技法の系譜を考える上で注目すべき点でもある。

（C）刃部の形態

Ⅰ類　身の中央部表に鎬をもつもの

Ⅱ類　側縁部のみに刃部が形成されるもので，断面が六角形となるもの

Ⅲ類　側縁部のみに刃部が形成されるもので，断面がレンズ状になるもの

Ⅳ類　裏面が平坦に研磨され，その結果断面が蒲鉾ないしは三角形となるもの

刃部の形態は，身部における研ぎ出しと関係をもつ。Ⅰ類の場合は，身部の中軸線にそって左右外側に向けて研ぎだしたもの。Ⅱ類は身部を表裏平坦に研ぎ出し，側沿部を表裏内側に研ぎ出し刃部を形成したもの。Ⅲ類は身部中央から表裏左右になだらかな傾斜をもって研ぎだしたもの。Ⅳ類は裏面を平坦に研ぎ出し，表部分は身部中央から左右それぞれ外側あるいは左右なだらかに傾斜をもって研ぎだしたものである。この結果Ⅰ類に該当するものは，(5)・(13)・(14)・(16)・(17)・(19)の6点がある。Ⅱ類に分類されるものは，(1)・(3)・(7)・(11)・(12)・(20)の6点がある。Ⅲ類のものは，(4)・(6)・(8)・(9)・(17)・(18)・(20)・(21)の8点がある。Ⅳ類には(10)・(15)の2点がある。この結果刃部の形態はⅣ類が少ないものの，他の類型の割合はほぼ同じである。

しかしⅠ類とするもののなかには，表裏の刃部の仕上げに二方向からの研ぎ出しと一方向からのものとがあることに気付く。とりわけ(16)の例は，表裏の研磨が異なっていることをよく示しており，この仕上げの違いはⅠ類にみる鎬の内容に実用的な効果のためと視覚的に剣を意識させるためという二つの意味のあることが理解出来るのである。この表裏の研磨の違いという点でⅣ類の戈(10)も表裏の区別を有しており，この例も視覚的に表面を外に向けて剣を意識させたものといえよう。そして関付近に認められる小孔は，その位置からみて懸下させて用いるためのものであった可能性を示唆しているものといえよう。

一方刃部の技法に，畿内およびその周辺の地域の磨製石剣を分類した寺前直人のものと類似

表3　各遺物の計測値と出土状況

	出土地点	長さ	幅	厚さ	長さと幅	幅と厚さ	柄の形	刃部形	遺構	石材
1	赤坂	16.5	5.5	0.7	Ⅳ類	Ⅲ類	Ⅰa類	Ⅱ類	住居址	珪質片岩
2	赤坂	7.7	3.4	0.75	不明	Ⅰ類	不明	Ⅲ類	住居址	珪質片岩
3	赤坂	6.6	4.2	0.5	不明	Ⅲ類	不明	Ⅱ類	方形周溝墓	珪質片岩
4	赤坂	7.1	3.0	0.6	不明	Ⅰ類	不明	Ⅲ類	住居址	珪質片岩
5	杉久保	13.8	5.4	1.6	Ⅳ類	Ⅳ類	Ⅳ類	Ⅰ類	表採	斑糲岩
6	南原B	6.5	3.1	0.6	不明	Ⅰ類	不明	Ⅲ類	土坑	粘板岩
7	手広八反目	3.0	3.5	0.5	不明	Ⅰ類	不明	Ⅱ類	遺構外	粘板岩
8	池子	14.8	3.8	1.8	不明	Ⅱ類	不明	Ⅲ類	河道	不明
9	大塚	14.0	3.2	1.2	Ⅲ類	Ⅰ類	Ⅲ類	Ⅲ類	住居址	輝緑凝灰岩
10	横芝	14.8	3.5	0.65	Ⅲ類	Ⅰ類	Ⅰa類	Ⅳ類	表採	不明
11	男神	10.1	3.5	0.8	不明	Ⅰ類	不明	Ⅱ類	表採	不明
12	霞ケ浦	16.0	3.4	1.1	Ⅲ類	Ⅰ類	Ⅰb類	Ⅱ類	表採	斑糲岩？
13	馬山	15.2	5.3	2.3	Ⅳ類	Ⅳ類	不明	Ⅰ類	表採	珪質片岩
14	桜井	9.4	2.9	0.9	不明	Ⅰ類	Ⅰb類	Ⅰ類	表採	粘板岩
15	天神沢	7.6	2.3	0.8	Ⅰ類	Ⅰ類	不明	Ⅳ類	表採	粘板岩
16	河原囲	17.9	4.2	1.0	Ⅳ類	Ⅲ類	Ⅱ類	Ⅰ類	表採	粘板岩
17	宮渕本村	16.2	3.8	0.7	Ⅲ類	Ⅰ類	Ⅲ類	Ⅰ類	表採	チャート
18	蟻ケ崎	11.8	3.3	0.5	Ⅱ類	Ⅰ類	Ⅲ類	Ⅲ類	表採	千枚岩
19	蟻ケ崎	12.9	3.8	0.8	Ⅱ類	Ⅰ類	Ⅲ類	Ⅰ類	表採	千枚岩
20	蟻ケ崎	7.1	2.6	0.48	不明	Ⅰ類	不明	Ⅱ類	表採	粘板岩
21	石行	3.6	2.7	0.72	不明	Ⅰ類	不明	Ⅲ類	表採	千枚岩？
22	宮渕本村	15.82	3.95	2.20	Ⅲ類	Ⅱ類	Ⅳ類	Ⅲ類	表採	砂岩
23	高田	9.3	4.5	2.1	不明	Ⅳ類	不明	Ⅰ類	住居址覆土	ホルンフェルス

するものを見ることができる。本論でⅠ類とした技法は寺前のA技法に，Ⅱ類としたものはB技法と呼ばれるもの，Ⅲ類はD技法とするものとそれぞれ類似する。この断面六角形を呈するものは，北九州では前期にみられまた畿内以外では新潟にもその例を見る。したがってこの研ぎだしの技法の伝播をみれば，東日本の磨製石剣の系譜を知る上で西日本との関連を無視できないことを示唆しているといえよう。

分類の結果を整理すれば，ここに提示した資料から読み取ることのできたことは，以下のとおりである。

大きさからみれば，幅にたいして長さの差が著しい。したがって長さが形態を規定していると言える。このことは，長さによる機能的異なり

表4　寺前分類との比較

中　形	Ⅰ・Ⅱ類	15
大　形	Ⅲ類	8・9・10・11・12・14・17・18・19・22
極大形	Ⅳ類	1・5・13

があるのかもしれない。一方厚みを見れば，薄いものを主体として厚みのあるものとに二大別される。そして薄いものは幅が狭く，そのグループが主体となっている。すなわちこれ以外の三つの領域は，各資料が点在化しており，グループとして括ることができない。長さ，幅，厚みの三つの要素を総合すれば，ここで扱った資料でいえば，長さが14～18cm，幅は3～4cm，厚みは0.5～1.5mmのものが平均的な大きさであることがわかる。

柄の形態をみれば，Ⅲ類とする身部と柄の一体型が主体で，「有柄式磨製短剣」や「有孔石剣」あるいは「有茎式石剣」などの定型的石剣の類は少ない。このⅢ類の形態は，畿内における打製石剣に類似し，基部付近に巻き物をして使用する短剣タイプと認めることができる。

刃部の形態はⅠ類・Ⅳ類は少なく，Ⅱ類・Ⅲ類を主体としている。このⅡ類・Ⅲ類の刃部の研ぎ出しの方法は，寺前直人が畿内を中心として分類した研ぎ出しB類・D類の内容に類似する。しかも，寺前のB類・D類に分類されるものは，幅と厚さの関係からみても近似した領域に属する点は，畿内と本地域との関係を考えるうえで注意すべき内容といえよう。刃部の形態で最も注目すべきは，剣を視覚的に演出するものの存在である。このことは，当該地域における磨製石剣の性格を考えるうえで，重要な所見といえよう。

次に分類および遺跡からの出土状況などを参考に，本地域における磨製石剣の性格およびその使用について考えていくことにしよう。

6．機能と用途

関東地方ならびにその近県において発見された磨製石剣は，時期として弥生時代中期後半に概ね該当する。この時期は関東地方では太形蛤刃石斧・抉入石斧・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧・石包丁などの大陸系磨製石器と称される石器群が登場する時期でもある。つまり大陸系磨製石器群の出現が，水稲耕作における生産力を高めていく上で重要な役割を果たしたゆえに製作されたように，磨製石剣もまたなんらかの社会的意義をもつがゆえに製作されたものといえる。したがって磨製石剣の社会的意義は，その機能と用途を知ることにより明らかになるといえる。東日本における磨製石剣は，所謂鉄剣形石剣に分類されるものである。この鉄剣形石剣は後藤守一も指摘しているように，その形状の多様さおよび機能からみてその本来的機能を短剣のみに断定することは不合理な面もある。最近では機能面の限定が困難な点を考慮し，「磨製尖頭器」あるいは「打製尖頭器」として石製武器である石剣・石槍・石戈などを一括する傾向に在る。そこでここでは，畿内における「磨製尖頭器」あるいは「打製尖頭器」の機能的理解を参考に，東日本の「磨製尖頭器」についてその機能および用途について考えていくことにする。

禰宜田佳男は「打製尖頭器」を，長さと幅の関係によって分類した。それによれば，Ⅰ類とする幅2.5cm～5.0cm，全長12.0cm未満のものは，長柄のつく槍の可能性が高いものの短柄のつく短剣としての機能も考慮されるとした。Ⅱ類は幅2.5cm～5.0cm，全長12.0cm以上のもので，

短剣と槍の区別が明確ではないとする。さらにⅢ類は幅5cm以上のもので，戈あるいは槍の機能が考えられるとした。この禰宜田佳男の分類は，「磨製尖頭器」の機能を知るのにもあてはまるとして，寺前直人はⅠ類を中形，Ⅱ類を大形，Ⅲ類を極大形と読み替え，中形を柄を別にもつ短剣ないしは戈とし，大形を短剣あるいは戈，極大形を戈および槍にそれぞれ比定した。この寺前の分類を本論で提示した資料にあてはめれば，以下のようにまとめることができる。

この寺前の分類を本論の分類に照らしてみると，中形としたものはⅠ・Ⅱ類に，大形はⅢ類に，そして極大形としたものはⅣ類にそれぞれ該当する内容である。この結果によれば，短剣あるいは戈と見なされる大形が全体の約7割以上を占めていることがわかる。この大形の中に分類される大塚遺跡例(9)さらに宮渕本村遺跡例(17)や蟻ケ崎遺跡例(18・19)などは，畿内周辺から出土する打製石剣の作りに類似するものがある。畿内の打製石剣をまとめた村田幸子の分類で3類とする「体部と柄が一体につくりだされたもの」で，とりわけ柄としての機能をもつために基部付近で刃部が潰される作りは，先の資料との類似性を示すものと言える。村田はこの3類を「柄を手で持って使用したと思われることから，「短剣」のように刺突具の機能を有していた」と想定している。したがって寺前や村田の見解を支持すれば，この大形に分類される資料を短剣ないし戈として認めていくことができる。一方この大形には，用途的な面での問題もある。横芝例(10)や河原囲遺跡例(16)にみる，表裏面形成における研ぎ出しの違いが，明らかに意図的であるとするならば，それは実用的意味というより視覚的な面での効果を意図したものと考えることが出来るからである。横芝例は資料の発表当初より剣の模倣かあるいは石戈とみなすか，その評価が別れるものがあった。さらにはそれが実用品か非実用品なのかの問題も抱えていた。したがって大形の中には，実用的な面をもつ短剣と視覚的効果を狙った製品もあるということである。したがって横芝例が剣であるか石戈であるかという問題は，製品のもつ機能というよりも用途との関連で考えていかねばならないことといえる。

最も数の少なかった中形に分類された天神沢遺跡例(15)をみれば，柄の部分の長さは1.8cmにすぎず，このことは明らかに別に柄をつけて使用する用いられかたをしたことがわかる。したがって槍先としての機能を優先的に考えることができる。

一方極大形と分類した赤坂遺跡例(1)や馬山遺跡例(13)さらには杉久保遺跡例(5)などは，幅広という点で他の資料と容易に区別されるものの，その他の面での共通性はなくむしろ個性的な面の強いものである。しかし，握りにおけるサイズという点では明らかに手で直接握れる大きさではない。したがって槍としてあるいは戈としての機能を想定しても誤りではないであろう。ただここで問題になるのは，このような大形のものがはたして槍として実際に使用されたものか，はなはだ疑問とする点である。このことは，大形に分類した中でも指摘したように，単に機能という面でなく用途に関係するものといえよう。資料のサイズ的な分類により，中形が槍先として，大形が短剣ないしは石戈とみなし，極大形を槍あるいは石戈と機能的に区分してきたが，大形および極大形の中には単に機能のみでは解決しえない問題のあることもわかった。

そこで次に製品のもつ用途的な面を考えていくことにする。

東日本における武器形石器には，有孔石剣や有角石器などのように西日本にはみられない独特の形をもった石製品がある。そしてこれらの石製品は，いまだにその用途が不明なことでも共通している。最近では有孔石剣や有角石器ともに，石戈からの変形という解釈が多くみられるようになってきた。しかし石戈とこれらの石製品の形態は，決して近似したものとは言えない。そのことは，形態が機能を決定するという観点に立てば，はたして石戈としての機能をもった石器であったかはなはだ心許ないといえるであろう。さらに東日本で発見されている石戈にしても，北九州および大阪湾周辺でのものとは区別される特徴をもっている。それは刃部の矮小化であり，石戈本来の機能を逸していることは明らかである。このように特徴ある東日本の武器形石製品を概観すれば，形態とその本来的な機能とが乖離していることにきづくのである。

このような傾向はなにも東日本だけのことではなく，西日本においても指摘出来るものかもしれない。西口陽一の西日本における磨製石剣の分類をみてみると，鉄剣形石剣においての複雑な要素の抽出は，いかに個性的な傾向をこの種の磨製石剣が持っているかを物語っている。さらに寺前においても，彼の分類する有鎬石剣以外の鉄剣形石剣が，地域性にとんでいることを指摘している。このように，畿内においても基本的な形態をもつものよりも，むしろ各地域あるいは各遺跡によって様々な様相を呈しているのが実態といえるのである。したがって視覚的な演出をもつ磨製石剣は，東西日本に共通して分布していることがわかるのである。

実際的な機能を有する剣や槍あるいは戈ではなく，用途としてそのような形態をもつことの意義はどこにあるのであろうか。「視覚的な演出」とは，不特定な人々が見ても共通するイメージを持つことが前提になければ成立しない。そこで磨製石剣あるいは磨製尖頭器の共通する特徴を揚げてみると，鋭い切っ先と鋭い刃部をもつことである。そしてこの二つの要素から導かれるイメージは，切る行為ないしは突き刺す行為である。この二つのイメージは武器における機能を暗示するものであり，不特定の人々がこの暗示から武器を想像できたとすれば，想像する武器の機能や威力を体験的あるいは知識として学習していたことを知ることができる。したがって用途として人々に切る行為ないしは突き刺す行為を連想させるためのものであるなら，それは何のために使用するというのであろうか。

発見された資料の多くが，破片ないしは欠損品で完形品は少ない。本論でⅢ類としたものは，比較的完形に近いものが多い。このⅢ類は畿内の打製石剣で，村田が3類と呼んだものに類似していることは先に指摘した。この類に似たものが，奈良県唐古・鍵遺跡より発見されている。木製の鞘におさめられていたもので，身部の中央から下には樹皮が巻かれている。従来このような打製の短剣にたいし，実用品として位置付けしていたが，村田は打製の短剣の出土例から儀器としての役割をも想定している。この考えに立てば，機能的であれ用途的なものであれ，さらに打製ないし磨製であれ少なくとも鉄剣形石剣と称される石剣の本質的な意味は，「切る」・「突き刺す」という「武力のシンボル」としての価値に深く根差していたものといえるのである。

7．磨製石剣の性格とその使用

発見されている「磨製尖頭器」あるいは「磨製石剣」の量は，当該時期の遺跡数からみれば極端に少ない。そして発見された多くの資料は，集落内あるいは墓域と思われる地点からのもので，しかも破片として検出される率が高い。西口陽一によれば，畿内地方で発見されている鉄剣形石剣の80％は破片であるという。とすれば「武力のシンボル」であるこれらの石剣は，本来的に使用後の破壊を前提に製作された可能性をもっていたと考えることもできる。そして量自体の希少性は，特定の集落でのみ用いられたもので，この種の石製品が一般的なものではなかったことを示している。それでは磨製石剣とはいかなる場において，使用されたものなのであろうか。次にその使用について考察をしていくことにする。

磨製石剣の性格とその使用については，儀礼的な行為に使用した儀器という解釈がなされている。しかし，それらの解釈も実際のところ幾つかの説がある。

東日本の武器形石製品を考察した新田栄治は，東日本から発見されている武器形石製品の特徴としてその多くが生活址からのものであることから，これらを用いての集落内での戦闘儀礼のあったことを金関　恕の説を引用し想定している。さらに長野県松本平を中心に石製武器について考究した関沢　聡は，「祭祀が行われる契機（＝祭器が製作または入手される契機）が不定期な特別な」理由として，「武器を必要とするような社会的緊張関係」にあるとした。そしてその背景に「水稲可耕地の獲得や，天候不順による凶作」をあげ，これらは弥生時代の社会のメカニズムとして一般的なことであることから，この種の祭祀は他地域でも実施されていたものとした。これに対し村田は，打製石剣と磨製石剣とは本質的な違いをもたないものとの前提で，葬送儀礼に使用された儀器であるとする。その理由として，畿内各所の方形周溝墓の溝から完形の磨製石剣がみられること，さらにわずかな例ではあるが，打製石剣も出土することをあげている。

集落内祭祀のための儀器か，あるいは特定個人にたいする葬送儀礼の副葬品ないしは儀器であったという解釈に対し，寺前はシンボルとしての意義を指摘した。彼は大形の鎬をもつ短剣を有鎬磨製短剣とよび，それが畿内に広範に分布しかつ規格的で携帯可能な点から，「個人に属する武力のシンボル」で携帯する人物の身分を示すものと考えた。このような武器形石製品を「武威器」とよび，「交易時や交通路上など共同体外の人と接触する場」で必要とされたものと解釈した。

寺前の「武威器」という認識は，短剣という小型の武器を祭祀の儀器とした場合，視覚的効果としてのインパクトをはたして演出し得たであろうか，という素朴な疑問に答えるものがある。しかし一方で，その多くが破片であることと集落あるいは墓域での出土例を見た時，彼のいう「交易時や交通路上など共同体外の人と接触する場」がいかなる場所を指しているのかという疑問も指摘できるところである。さらに寺前の分類する極大形との関係，ならびに有鎬磨

製短剣以外の鉄剣形石剣の性格などについての言及はない。したがって，「武威器」としての認識をどの範囲にまで限定しているのか，いささか不明な点も残る。だが寺前の主張する「個人に属する武力のシンボル」で携帯する人物の身分を示すものという概念は，なぜ住居址にその出土例があるのかという問いに答えているものがある。そのことは，埋葬における儀器あるいは副葬品を考える上でも有効なものといえる。

それでは希少な「武威器」を出土する住居址は，他の住居址と比較したときその構造や出土物さらには規模の点で，異なる要素を見出すことができるのであろうか。合計5点の磨製石剣を出土した赤坂遺跡の内容は，規模さらには共伴する遺物の内容からみて，特殊な住居址と呼ぶことができる。とりわけ注目すべきは，イノシシのことである。平塚市南原B遺跡からも，土坑よりやはりイノシシの臼歯や顎骨が検出されている。このような場から検出されるイノシシは，明らかに生け贄としての性格をもつものと推測できよう。さらに赤坂遺跡のような鳥をかたどったミニチュア土器のあり様は，この住人が祭祀的ないしは呪術的な儀式を執り行なう人物であった可能性を示唆している。それとともに大塚遺跡や宮の里遺跡からの例は，赤坂遺跡の第3次調査例や南原B遺跡例のように，複数の磨製石斧あるいは未成品とともに発見されている。したがって，現在東日本で遺構に伴う例においては，共伴する遺物に生産的なものと祭祀的なものとが混在しているのである。したがってこの場合の人物の身分は，生産と祭祀の両面で集落内において特異な位置を持ったものといってよい。このことは数少ない磨製石剣の使用が，特定の集落における特定の住居で，生産と祭祀の両面をもつ儀式の主宰者によって執り行なわれていたことを知ることになるのである。そしてその儀式がきわめて稀なものであったことは，磨製石剣の出土例の少なさが物語ってもいる。したがって弥生時代中期後半という時期に催されたと考えられる数少ない儀式とは，先に記したように大陸系磨製石器群の一定程度の普及から生じる，集落内部における緊張としての生産力と生産手段との矛盾，つまり集落の拡大と可耕地の限界をも視野においた「社会的緊張」状態の回避に対する儀式であったと推論することもできよう。

神奈川県において弥生時代後期とする時期は，集落の爆発的増加という表現が使用される。それこそまさに中期後半に集落内部に蓄積された生産力の高まりが，中期的な限界を脱皮して質的高まりに変化したことでもある。この中期的な集落の矛盾を，慰撫しかつ恫喝しつつ体制維持をはかる目的に使用したものこそ，「武力のシンボル」としての武器形石製品であったと考えるのである。そして極大形にみられる製品の大型化は，携帯から誇示するという一層の権威化の進捗を示すものであり，それを保持する人物の権威の背景に強力な軍事的な指揮権が付与されたものと推測できるのである。したがって，磨製石剣を出土する遺跡の極端に少ないことは，この指揮権が一集落にとどまらず広範囲な地域共同体を統括するものであったことを示しているからでもある。

8．まとめ

東日本とりわけ関東地方とその近県から出土した磨製石剣は，その多くが中期後半に登場し後期には姿を消す。この様相は，同じく大陸系磨製石器群と軌を一にしてもいる。かたや祭祀的な道具とし，もう一方は生産の道具としてお互いの役割は峻別されている。しかしこの両者は，中期的社会の発展とその矛盾を補完しあう意義を有するがゆえに，同時に存在し得たものでもある。この発展と矛盾の構造は，初期水稲耕作の一定程度の発展段階においておこりえたものと理解できる。それは，おそらく北九州から畿内にかけてまず顕在化し，やがて東海から中部に達した後関東および東北南部に及んだのであろう。磨製石剣の形態的不安定さは，おそらくこの社会的不均衡の図式に由来するものと思われる。つまり，弥生時代の中期後半の段階こそ，ある意味で水稲耕作をベースとした等質的な価値観が，広範囲に浸透した時期であったと同時に，地域的な発展の不均衡が顕在化した時期であったと想定できるからである。したがって，一方で畿内的な形態をもつ磨製石剣があり，他方で東日本独自の形態をもつ武器形石製品が同時に見られることは，各地域がおかれている条件の不均衡さと伝統的な価値の濃度差を，遺物自体が反映しているからと思われるからである。

東日本にみられる磨製石剣の意義は，武器型石製品の総合的考察のさらなる深化によって，より明らかなものとなっていくと考えられが，それと並行して各地域における大陸系磨製石器群の在り方をも注目していく必要がある。それは繰り返しになるが，弥生時代においては祭祀と生産との関係は，本来的に分かちがたく緊密に結ばれていたからである。

本稿を亡き岡本　勇先生に捧げる。

謝　辞

本稿作成に際しては，下記の諸氏よりご教示をいだいた。記して感謝申しあげます。

岡本孝之，大塚昌彦，関沢　聡，武井則道，田中　敏，寺前直人，林原利明

引用・参考文献

鳥居龍蔵　1924「諏訪史」第1巻
中谷治宇二郎　1924「東大人類学倉庫より発見されし二個の石器」『人類学雑誌』第39巻7・8・9号
高橋健自　1925「銅鉾銅剣の研究」『日本考古学選集』第9巻（1971・再録）
後藤守一　1930「上古時代に於ける上越地方（1）」『考古学雑誌』第20巻9号
八幡一郎　1933「有孔石剣の新資料」『考古学雑誌』第23巻1号
大場磐雄　1935「石製剣の一新例」『考古学雑誌』第24巻7号
森本六爾　1935「考古学」『歴史教育講座』第2部・資料篇
伊東信雄　1950「東北地方の弥生文化」『文化』第2巻4号
小林行雄　1959『古墳の話』

桐原　健　1963 「信濃出土の磨製石剣について」『信濃』第15巻４号
小林　茂　1963 「秩父出土の有孔石剣」『埼玉考古』復刊１
清水潤三　1967 「千葉県横芝町発見の磨製石剣」『考古学雑誌』第52巻３号
及川　洵　1968 「岩手県大船渡市発見の石剣」『考古学雑誌』第54巻１号
金関　恕　1978 「木製武器解説」『日本原始美術大系』５
明石　新　1980 「海老名市出土の有孔磨製石剣」『自然と文化』３
新田栄治　1980 「東日本の武器形石製品」『鹿児島大学　史学科報告』第29号
福島県立博物館編　1983 『竹島コレクション考古図録』第１集
永井正憲他　1984 『手広八反目遺跡発掘調査報告書』
長沼　孝　1986 「磨製石剣・石戈」『弥生文化の研究』９
禰宜田佳男　1986 「打製短剣・石槍・石戈」『弥生文化の研究』９
西口陽一　1989 「近畿・磨製石剣の研究」『大阪文化財論集』
中村友博　1089 「祭りの造形と心」『古代史復元』５
神奈川県教育委員会編　1990 『神奈川の遺跡』
石川日出志　1992 「Ｎ．Ｇ．マンロー資料中の「有孔石剣」と石庖丁」『考古学雑誌』第78巻１号
福島県立博物館編　1992 『竹島コレクション考古図録』第３集
平井　勝　1992 「弥生時代の石器」『考古学ライブラリー』64
埋蔵文化財研究会　1992 「弥生時代の石器」『第31回埋蔵文化財研究集会』
岡本孝之　1992 「足洗型石器の研究」『考古学雑誌』第84巻３号
関沢　聡　1994 「松本平東部における弥生時代の石製武器について」『中部高地の考古学』Ⅳ
大塚昌彦　1995 「弥生時代のおとしもの」『群馬考古学手帳』５
設楽博己　1995 「木目状縞文様のある磨製石剣」『信濃』第47巻４号
平塚市教育委員会編　1996 「南原Ｂ遺跡」『平塚市埋蔵文化財シリーズ』第29集
伊藤伸久他　1996 『千葉県君津市―常代遺跡群』
寺前直人　1998 「弥生時代の武器形石器」『考古学研究』第45巻２号
村田幸子　1998 「打製石剣」―大形打製尖頭器―の成立をめぐる問題」『みずほ』第25号

横浜考古学事始

― 100年前の歩けオロジスト・小林與三郎のこと ―

岡　本　孝　之

1．はじめに　　3．横浜の遺跡
2．年譜　　4．まとめ

1．はじめに

横浜の考古学の草創期に，市内外を広く踏査して多数の遺跡や貝塚を発見した考古学の歩けオロジスト・小林與三郎について報告したい。

岡本勇先生は神奈川県考古学史をまとめた『神奈川地域史研究』第2号掲載の「明治時代神奈川県下考古学研究の先駆者たち」(岡本1985）に，「小林与三郎は，明治30年代の前半に専ら活躍した人ですが，相模をはじめ伊豆，栃木等かなり広い範囲にわたって動き回ったようです。後に朝鮮の釜山に行ったことはわかっておりますが，現地でどういうことをしていたかという点に関しては不詳です。」と指摘していた。

平塚市の考古学史をまとめた時，東京帝国大学で1898年に編纂された『日本石器時代人民遺物発見地名表』第2版に平塚市土沢，大畑，金目などで土器などを採集した小林與三郎を知った（岡本1999)。小林は横浜市内とその周辺部でも多くの遺跡を発見し，『日本石器時代人民遺物発見地名表』に掲載されている。横浜の遺跡を最も多数報告しているのである。

栃木県での仕事とは，栃木県における弥生文化研究の第1頁を飾る野沢遺跡の出土遺物の紹介であった。1996年に栃木県立なす風土記の丘資料館刊行の第4回企画展『弥生人のくらし』に掲載されている年代順の「栃木県関係弥生時代文献目録」の第一行目にその名が出る。沼田頼輔との共同執筆による報告が『東京人類学会雑誌』に掲載されているのである。

横浜と，弥生と，そして韓国と関心が重なったため『東京人類学会雑誌』と『日本石器時代人民遺物発見地名表』(以下，地名表と略記する）を直接調べてみることにした。

2．年譜（第1表）

小林與三郎の経歴は，第1表のようにまとめられた。『東京人類学会雑誌』に始めて登場するのは第139号（1897(明治30)年10月28日）の雑報で，10月28日の東京人類学会129例会で「横浜近傍ノ石器時代遺跡」を発表し，同日付けで東京人類学会に入会している。住所は「横浜市元町5丁目213番地　斧部方」となっている。

この発表の成果が，翌年5月に刊行された地名表の第2版であると思われるが，注目される

第1表　小林與三郎の経歴

年	月　日	出典・記事
1894(明治27)年	7月～10月	野沢遺跡発掘（小林・沼田1900）
1897(明治30)年	10月 3日	東京人類学会129例会　「横浜近傍ノ石器時代遺跡」を発表
	10月28日	東京人類学会雑誌第13巻第139号刊行　雑報に例会記事 新入会員に「横浜市元町5丁目213番地斧部方　小林與三郎」
	10月28日	東京人類学会雑誌第13巻第139号付録の「明治30年10月調　東京人類学会会員宿所姓名簿」刊行 「横浜市元町5丁目213番地斧部方　小林與三郎」
1898(明治31)年	5月12日	『日本石器時代人民遺物発見地名表』第2版刊行 信濃8・上野1・下野9・陸奥6・伊豆3・武蔵39・相模13・下総2の81遺跡を示す
	9月11日	東京人類学会138例会　「横浜地方の遺跡」を発表
	9月28日	東京人類学会雑誌第13巻第150号刊行　雑報に例会記事
	10月20日	東京人類学会雑誌第14巻第151号付録の　「明治31年10月調　東京人類学会会員宿所姓名簿」刊行 「横浜市元町5丁目214番地木口銀蔵方　小林與三郎」
1899(明治32)年	4月 2日	東京人類学会145例会　「横浜元町の貝塚」を発表
	4月20日	東京人類学会雑誌第14巻第157号刊行　雑報に例会記事
	8月	下野へ帰省（小林・沼田1900）
	10月20日	東京人類学会雑誌第15巻第163号付録の「明治32年10月調　東京人類学会会員宿所姓名簿」刊行 「横浜市中村1521（地蔵坂）　小林與三郎」
	12月 3日	東京人類学会151例会　「下野国野沢発見の遺物」を発表
	12月20日	東京人類学会雑誌第15巻第165号刊行　雑報に例会記事
1900(明治33)年	1月20日	東京人類学会雑誌第15巻第166号　「下野国河内郡野沢発見の土器に就て」を発表（述，沼田頼輔記） 12月に朝鮮国釜山の郵便局に転ずるの記事
	1月20日	東京人類学会雑誌第15巻第166号　雑報に「小林氏の韓国行」記事　昨年暮れに韓国釜山の郵便局に赴任
	2月20日	東京人類学会雑誌第15巻第167号　雑報に「小林氏の韓国通信（1月22日）」記事 「韓国釜山郵便局，小林與三郎」住居所は西山下町
	4月20日	東京人類学会雑誌第15巻第169号　雑報に「小林與三郎，藤井秀，両氏所有の古器物」記事
	10月20日	東京人類学会雑誌第16巻第175号付録の「明治33年10月調　東京人類学会会員宿所姓名簿」刊行 「朝鮮国釜山郵便局　小林與三郎」
	11月20日	東京人類学会雑誌第16巻第176号　雑報に「在釜山小林與三郎氏よりの来書（11月6日発）」記事
	12月20日	東京人類学会雑誌第16巻第177号　八木奘三郎「韓国通信」に記事あり 11月「4日午前8時過小林與三郎君は日曜を幸い余等一行と共に近傍迄同行」
1901(明治34)年	4月15日	『日本石器時代人民遺物発見地名表』第3版刊行 武蔵国で19追加，4遺跡で補足，羽前1・下野4・加賀1・大和1を追加，韓国なし
	5月20日	東京人類学会雑誌第16巻第182号　雑報に「人類学教室への献納品」記事 明治33年9月より本年5月5日迄の献納者氏名に「韓国慶尚南道発見の祝部土器11個　小林與三郎」あり
	8月20日	東京人類学会雑誌第16巻第185号　八木奘三郎「韓国探険報告其一」に小林與三郎への礼辞
1905(明治38)年	7月 1日	逓信大臣官房秘書課『逓信省職員録』にない（明治40・42・43年版には韓国を含まない）
	12月20日	東京人類学会雑誌第21巻第237号　会費納入者にあり
1907(明治40)年	3月20日	東京人類学会雑誌第22巻第252号　会費納入者にあり
1908(明治41)年	1月20日	東京人類学会雑誌第23巻第262号　会費納入者にあり
1910(明治43)年	1月20日	東京人類学会雑誌第25巻第286号　会員転居欄に「韓国釜山南濱町2ノ31　小林與三郎」とあり
	6月20日	東京人類学会雑誌第25巻第291号　会費納入者にあり
	11月 1日	朝鮮総督府通信局『朝鮮総督府通信官署職員録』にない　新居勝三郎あり
1911(明治44)年	2月20日	人類学雑誌第26巻第299号　会費納入者にあり
1912(明治45)年	2月10日	人類学雑誌第28巻第 2号　会費納入者にあり
1914(大正 3)年	12月20日	人類学雑誌第29巻第12号　入会者稲本新臣の紹介者となる
1915(大正 4)年	2月20日	人類学雑誌第30巻第 2号　入会者新居勝三郎の紹介者となる「朝鮮釜山西町1丁目郵便局官舎」
1917(大正 6)年	12月15日	『日本石器時代人民遺物発見地名表』第4版刊行　追加なし　韓国もなし
1918(大正 7)年	4月25日	人類学雑誌第33巻第4号　新居勝三郎「朝鮮慶尚南北道に於ける石器発見一覧表」発表　小林の名でず
1921(大正10)年	12月　日	人類学雑誌第412～416号付録の「東京人類学会会員名簿」にあり「韓国釜山南濱町2丁目31」
1922(大正11)年	12月　日	人類学雑誌第428号付録の「東京人類学会会員名簿」にあり「韓国釜山南濱町2丁目31」
1925(大正14)年	12月　日	人類学雑誌第457号付録の「東京人類学会会員名簿」になし

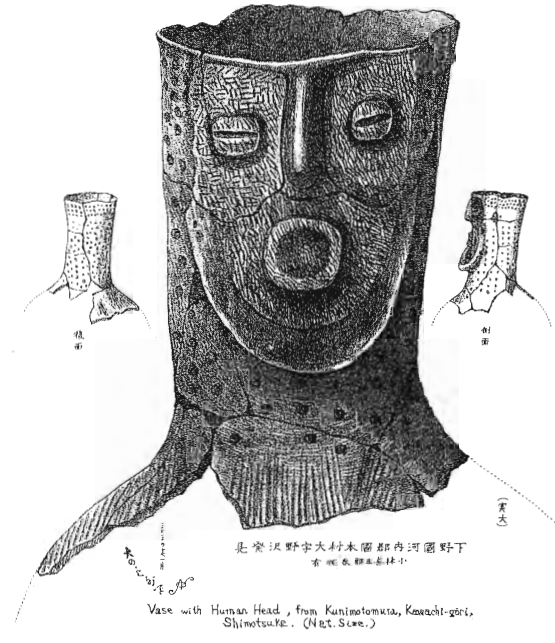
のは横浜市周辺の遺跡だけでなく，信濃8・上野1・下野9・陸奥6(註1)・伊豆3・武蔵（横浜，東京，埼玉を含む）39・相模13・下総2の81遺跡を示していたことである（第1図・第2表）。これは岡本先生の指摘を大きく越えて東日本の広い地域の遺跡を発見しており，そのような行動力の背景には，彼の職業，地位が反映されているものと思われるが，それが判明する記述は見られない。

1898（明治31）年9月11日の東京人類学会138例会で「横浜地方の遺跡」を発表し，同月28日の『東京人類学会雑誌』第150号の雑報に例会記事が掲載される。1901（明治34）年4月15日刊行の『日本石器時代人民遺物発見地名表』第3版には武蔵国で19遺跡を追加し，4遺跡で補足しているので，その分の発表と思われる。鶴見区，神奈川区で新しい踏査を行い，中区，南区でも追加の調査を実施している。

10月20日刊行の『東京人類学会雑誌』第151号付録の「明治31年10月調東京人類学会会員宿所姓名簿」には「横浜市元町5丁目 214番地　木口銀蔵方」とあり，隣接番地に転居していることを示している。214番地は現在は道路（本牧通り）の拡幅で大きく減失しているが，元町商店街入口の裏に位置する。

1899（明治32）年4月2日の東

第1図 小林與三郎発見の県別遺跡数
（地名表第2版＋第3版の数値を示す。ただし横浜市分34＋14を除く）



第2図 野沢遺跡出土人面土器（小林・沼田1900）縮尺3分の1

京人類学会145例会でも「横浜元町の貝塚」を発表し，同月20日の『東京人類学会雑誌』第157号の雑報に例会記事がある。

10月20日刊行の『東京人類学会雑誌』第163号付録の「明治32年10月調　東京人類学会会員宿所姓名簿」には「横浜市中村1521（地蔵坂）」とあり，また転居している。現在の中区山手

第2表　小林與三郎発見遺跡一覧表（神奈川県以外）

国	所在地	遺物	地名表版No.
陸奥国	東津軽郡浜館村	石器，土器	2・3
	同郡　築木館	石器，土器	2・3
	同郡　文栗坂	磨石斧	2・3
	中津軽郡茶臼館	土器玩具，石鏃，土器	2・3
	三戸郡八戸町在石手洗村	土器	2・3
	弘前市内大円寺境内	打石斧	2・3
羽前国	東田川郡新井堀村	石棒	3
上野国	邑楽郡館林茂林寺近傍	土器	2・3
下野国	河内郡豊郷村大字山本	土器	2・3
	同郡　同村　大字関堀	土器	2・3
	同郡　同村　大字岩本	土器	2・3
	同郡　同村　大字田原	土器	2・3
	同郡　同村　大字竹林	土器	2・3
	同郡　国本村大字野沢字石塚	石剣，曲玉，人面付土器	3
	同郡　姿川村小学校付近	石鏃，土器	3
	同郡　清住町外レ	石錐，土器	3
	宇都宮市日野町	石棒	2・3
	那須郡佐久山町字ジンヤ	石鏃，土器	2・3
	塩谷郡阿久津町字ドウパラ	打磨石斧，砥石，凹石，土器，3石鏃	2・3
	同郡　塩原湯　代網ヨリ一里半程手前	土器	2・3
	足利郡足利町畑神山	凹石	3
武蔵国	東京市麻布区笄町笄坂上	土器	2・3
	同市　赤坂区青山墓地貝塚	打磨石斧，土器，凹石，石鏃，糸掛石	3
	荏原郡目黒村火薬庫付近	打石斧，土器	2・3
	同郡　中目黒金比羅神社付傍	打石斧，土器	2・3
	同郡　駒場村農科大学近傍	打石斧，土器	3
	豊多摩郡渋谷村渋谷停車場線ヲ1丁余目黒方面ノ方両側ノ畑中	石鏃，土器	3
	北豊島郡上板橋村	打石斧，土器，砥石	2・3
	同郡　王子村試験場構内貝塚	打磨石斧，土器	3
	南多摩郡七生村字高幡付近	打石斧	2・3
	北足立郡大宮町氷川神社境内	土器	3
下総国	東葛飾郡中山村中山	石器，土器	2・3
	香取郡津ノ宮村近傍	土器	2・3
信濃国	東筑摩郡中山村大字塩原中山（松本ヨリ南方へ一里半）	石鏃	2・3
	同郡　広岡村	打石斧	2・3
	同郡　広岡村桔梗ケ原	打石斧	2・3
	同郡　大村諏訪社内	打石斧	2・3
	同郡　大村玄向寺内	打石斧	2・3
	下高井郡倭村大字柳沢	石鏃，磨石斧，石棒，有穴石器	2・3
	同郡　夜間勢村字伊勢宮付近	石鏃，土器，打磨石斧，3石匕	2・3
	上水内郡長野師範学校内	石鏃	2・3
伊豆国	加茂郡狩野村元立野村	石鏃・砥石・土器	2・3
	同郡　同村　字柏久保	石鏃	2・3
	君澤郡三島町小学校付近	磨石斧・石鏃・土器	2・3
加賀国	金沢市公園地内池ノ付近	石鏃	3
大和国	葛上郡御所町ヨリ金剛山ニ行ク途中	磨石斧	3

3は第3版で追加されたもの

町115番地であり，下宿から戸建に独立したのであろうか。当時の地蔵坂は横浜でも活気ある町であったようだ。115番地は地蔵坂から一寸入った裏手の斜面中段で，一隅に不動尊の小祠があった。

そして，12月３日の東京人類学会151例会では，「下野国野沢発見の遺物」を発表している（第２図）。同月20日の『東京人類学会雑誌』第165号の雑報に例会記事がのり，翌1900（明治33）年１月20日刊行の『東京人類学会雑誌』第15巻166号に「下野国河内郡野沢発見の土器に就て」を発表している。これは小林の発表を沼田頼輔が記録して補記したものである。小林が直接執筆できなかった理由として，小林は12月に朝鮮国釜山の郵便局に転ずるため多忙であるとされている。同号雑報にも「小林氏の韓国行」の記事がある。「昨年暮れに韓国釜山の郵便局に赴任」とあり，横浜でも郵便局に勤めていた可能性があるが確認できない。沼田は，「小林與三郎氏は斯学篤志の人なり」と紹介しているのみである。1901（明治34）年４月15日刊行の『日本石器時代人民遺物発見地名表』第３版には，さらに羽前１・下野４・加賀１・武蔵19・大和１の26遺跡を追加しており，依然として東日本の全域を行動していたことが知られる。発見した遺跡は合計107遺跡となる。この発表で小林は1894（明治27）年７月～10月に野沢遺跡を発掘し，発表の直前の明治32年８月に下野へ帰省したと述べているので，栃木県の出身者であることは間違いないであろう。

さて，小林の韓国行きは日本の韓国併合（1910年）以前であり，日露戦争（1904年）の直前である。1900年２月20日刊行の『東京人類学会雑誌』第167号の雑報に「小林氏の韓国通信（１月22日）」の記事があり，「韓国釜山郵便局，小林與三郎」，住居所は西山下町とある。

４月20日の『東京人類学会雑誌』第169号の雑報には「小林與三郎，藤井秀，両氏所有の古器物」の記事がある。小林が韓国行きに際して自己の採集品を人類学会に寄贈したことを顕彰している。栃木県野沢遺跡の土器はこの後山内清男1932や杉原荘介1936らによって利用されているように現在も東京大学総合博物館に保管されている。横浜市内の採集品も存在する可能性がある。

10月20日の『東京人類学会雑誌』第175号付録の「明治33年10月調　東京人類学会会員宿所姓名簿」には「朝鮮国釜山郵便局　小林與三郎」とある。11月20日の『東京人類学会雑誌』第176号の雑報に「在釜山小林與三郎氏よりの来書（11月６日発）」の記事があり，釜山においても考古学的な活動に意欲のあることを示している。それは12月20日刊行の『東京人類学会雑誌』第177号の八木奘三郎「韓国通信」で確かめることもできる。11月「４日午前８時過小林與三郎君は日曜を幸い余等一行と共に近傍迄同行」とある。この八木の韓国調査は，日本考古学の東亜考古学としての最初期のものであり，それに協力していたのである（岡本1975）。

翌1901（明治34）年５月20日の『東京人類学会雑誌』第16巻182号の雑報に「人類学教室への献納品」の記事があり，明治33年９月より本年５月５日迄の献納者氏名に「韓国慶尚南道発見の祝部土器11個　小林與三郎」とある。８月20日の『東京人類学会雑誌』第185号の八木奘

三郎「韓国探険報告其一」には小林與三郎への礼辞がある。

これ以後，小林與三郎の名は雑報欄から見えなくなる。わずかに転居欄などに「韓国釜山南濱町2ノ31　小林與三郎」と1910（明治43）年1月20日刊行の『東京人類学会雑誌』第25巻286号に認められることと，入会者の紹介者として登場するのみである。他は会費納入者欄に1912（明治45）年2月までを確認したにとどまる。

入会者は稲本新臣と新居勝三郎であるが，新居の住所は「朝鮮釜山西町1丁目郵便局官舎」であり，新居は1917年に『人類学雑誌』第33巻第4号に「朝鮮慶尚南北道に於ける石器発見一覧表」を発表している。だがそこには小林の名は出てこない。

小林は1922（大正11）年までの「東京人類学会会員名簿」に名前を載せているが，1925（大正14）年のそれには無くなっている。1917（大正6）年12月15日刊行の『日本石器時代人民遺物発見地名表』の第4版には小林による新しい追加はなく，韓国でも認められない。考古学的な活動はもう停止していたのであろうか。

韓国釜山郵便局勤務が判明したので，逓信総合博物館において当時の職員録を調べてみたが確認することはできなかった。1886（明治19）年10月31日発行の『駅逓局職員録』になかったのは，小林の成人以前のものと予想させるから当然にしても，1905（明治38）年7月1日発行の逓信大臣官房秘書課『逓信省職員録』にないのはなぜなのだろうか。明治40・42・43年版には韓国を含まないが，明治38年版はまだ朝鮮を含んでいるのである。また，1910（明治43）年11月1日発行の朝鮮総督府通信局『朝鮮総督府通信官署職員録』にも認められなかった。小林は1915（大正4）年頃までは釜山に住んでいたことは確実であるが，郵便局勤務から外れていたのであろうか。逓信関係の仕事も異動の多いものと思われるが，住居を釜山に落着かせているので，公務から離れていたのであろう。転勤直後の釜山の職員録や直前の横浜の職員録をぜひとも確認したい(註2)。

3．横浜の遺跡（第3・4表，第3～5図）

横浜市内では「税関山」遺跡が最初の発見地である。1897（明治30）年の地名表の第1版の頃は，現在の中区，西区の大半だけが横浜市内で，税関山遺跡の人類学教室蔵品の石鏃が示されている。これは今も税関の官舎のある周辺を示し，西区の池の坂貝塚に相当するものである。

横浜の考古学の第1頁を飾るのは富士谷孝雄による中村富士塚貝塚(註3)の紹介であり（富士谷1883），そこには中村八幡付近貝塚の位置も示していた。この富士谷に教示されて坪井正五郎と白井光太郎も中村を訪れ，横穴と貝塚の関連を議論するのである（白井1932）。その後，鳥居龍蔵と井上喜久治も中村（藤塚）貝塚を調査するが（井上・鳥居1893a），当時はまだ久良岐郡中村である。近隣では同郡根岸村（坂ノ台貝塚か）と根岸村近傍マカドヒラダイ（坪井1888）(註4)の土器や石斧などが人類学教室蔵品としてあったにすぎない。鶴見・神奈川区周辺

でも橘樹郡駒岡村貝塚（井上・鳥居1893b ），子安村貝塚，馬場村貝塚，東寺尾貝塚（以上，阿部1893），生見尾村大字鶴見字二見台貝塚（内山1894）などが登録されていたにすぎない。すなわち，現在の鶴見，神奈川，西，中区内では以上の9遺跡だけであったのである。

翌1898（明治31）年発行の『日本石器時代人民遺物発見地名表』第2版には，沼田頼輔，野中完一，大谷木耐三らによる登録遺跡が増加するが，中でもっとも多いのが第3・5表で示したように小林與三郎による発見である。

これらの遺跡は，中区の山手町と根岸町周辺，西区の西戸部町周辺，南区堀ノ内から磯子区杉田周辺，神奈川区子安町から鶴見区東寺尾周辺のグループに区分することができる。子安町から東寺尾への踏査は，第3版の地名表に初めて見えるものなので，1898（明治31）年以後の成果である。これらの多くは現在も遺跡地図（横浜市教育委員会1992）に登載されているが，忘れられている遺跡もある。市内中心部の遺跡は早い都市化によって再確認できず，発見も期待されず，空白の地域が多いので，小林の成果をできるだけ復元する必要があると思う。

貝塚の調査は，松下胤信や石野瑛らによって継続してあり，酒詰仲男による地名表作成にいたる研究がある（酒詰1938・1959・1967）。石野もまた地名表を作成している（石野1927・1938・1953・1963）。赤星直忠と岡本勇先生による神奈川県史（1979），神奈川県教育委員会（1971）や横浜市教育委員会（1992）による遺跡地図がある。これらの考古学的成果と近年の区史，郷土誌などからできるだけ接近してみたい。

（1）中区周辺（第3図）

元町貝塚や山手貝塚は現在の遺跡地図にも搭載されている。谷奥の山手貝塚については，松下胤信の調査記録（松下1933），丘陵先端の元町貝塚については1928年10月6日に発掘の記録があり（栗原1928），石野瑛も1931年に発掘し（石野1953），岡野隆男が貝層から土器片を採集している（岡野1973）。塚田明治の記録（塚田1974）もある。酒詰仲男は両者を一括して山手町貝塚としている（酒詰1938）。小林の報告した金比羅神社は確認できない(註5)が，坂の上の崖面に貝殻の散布が認められた。山手貝塚は現在の貝殻坂周辺に位置し，現在も貝殻の散布を認めるが小林のイジン坂は再確認できていない。貝殻坂をさすのだろうか。

根岸村のうち，オオシバダイ，ツカゴシは現在の大芝台，塚越に相当する。塚越には今，3遺跡が確認されているが，酒詰仲男1934の指摘した坂下塚越と重なる可能性がある。ヒナソは再確認できないが坂の台貝塚の異称であり同一とされる。松下胤信は「横浜に存する多くの先史時代遺跡中，最も優秀な遺物を出す」としている（松下1930）。地名表第1版の根岸町遺跡は本遺跡とされる。アラクは不明。六地蔵坂は『磯子の史話』1978にあり，馬場町と坂下町の境で中区寺久保にあがる坂道で当時は中区内への通勤路としてにぎわった道という。坂の下に六地蔵がある。坂の台貝塚の北西にあたる。ダイバタケも不明だがこれは競馬場の西側ということでほぼ特定できる。酒詰仲男1934に台畑とあり地名ではなく一般名かもしれない。先のアラクも新墾の一般名かもしれない(註6)。旧競馬場西側の馬頭観音付近にて貝の散布をみた。カ

第3表 小林與三郎 神奈川県内発見遺跡一覧表

No.	所在地	貝塚	遺物*	地名表版No.	酒詰仲男1938	石野瑛1953	県No.	市No.
1	横浜市元町1丁目金比羅神社裏	貝塚	3凹石・3土器	2・3・4	山手町	金比羅神社裏	中8	中3
2	横浜市山手外人墓地字イジン坂	貝塚	土器・3打石斧・3貝輪	2・3・4	山手町	異人坂	中7	中2
3	久良岐郡根岸村オオシバダイ		磨石斧・土器	2・3・4				中4
4	久良岐郡根岸村ツカゴシ		土器	2・3・4			中4	中5
5	久良岐郡根岸村ヒナソ	貝塚	土器・石器	2・3・4	坂ノ台	根岸坂ノ台	中6	中8
6	久良岐郡根岸村アラク		磨石斧	2・3・4				
7	久良岐郡根岸村サカノダイ		石棒・石器類	2・3・4	坂ノ台	根岸坂ノ台		中8
8	久良岐郡根岸村字六地蔵坂		打磨石斧	2・3・4				
9	久良岐郡根岸村競馬場ノ西側ダイバタケ		打石斧	2・3・4				
10	久良岐郡根岸村不動堂ノ裏字カゾノダイ		土器	2・3・4				中5
11	横浜市北方天沼キリン麦酒製造所構内		磨石斧・土器	3・4				
12	久良岐郡本牧村二ノ谷入口右方字オヤト	貝塚		3・4	二ノ谷	二ノ谷		
13	久良岐郡中村1187番地和田清兵衛宅及八幡神社近傍	貝塚		2・3・4	中村187番地	八幡神社付近 中村八幡社近傍	南 (1)	
14	横浜市野毛山貯水地西端ノ畑		土器・黒曜石	2・3・4		野毛山貯水池西端	西5?	西14
15	横浜市野毛山大神宮裏手	貝塚	打磨石斧・土器	2・3・4	伊勢山大神宮裏手	伊勢山大神宮本殿	西4	西15
16	横浜市戸部税関官舎付近字池ノ坂		打3磨石斧・土器・砥石・骨器・石鏃	2・3・4	池ノ坂	池ノ坂	西2	西13
17	横浜市戸部監獄署構内ヨリ暗黒坂付近		土器	2・3・4				
18	横浜市戸部字天王山		土器	2・3・4		天王山	西3	西12
19	横浜市戸太町戸部字ヤブシタ	貝塚		2・3・4	藪下町×			
20	横浜市戸太町字古井戸		土器	2・3・4		古井戸		
21	横浜市戸太町戸部109番地		打石斧	3・4				
22	横浜市太田字久保山墓地		土器	2・3・4				
23	横浜市太田ヨリ久保山墓地ニ行ク左方ノ台塚アル近傍		土器	2・3・4				
24	橘樹郡程ケ谷町字岩間村		打磨石斧・土器	2・3				
25	橘樹郡程ケ谷町字岩間ノ大原クヨウ塚近傍		打石斧・土器	2・3・4				
26	久良岐郡堀ノ内村（神奈川県爆発物貯蔵庫近傍）	貝塚		2・3・4		爆発物貯蔵庫跡付近		南51
27	久良岐郡堀ノ内村貝殻畑及女坂			2・3・4	女坂・貝殻畑×	貝殻畑		南51
28	久良岐郡堀ノ内村字柿ケ谷 神奈川県爆発物貯蔵庫ノ前，犬殺ノ家ノ前	貝塚		2・3・4	柿ケ谷			磯 6
29	久良岐郡屏風浦村大字岡根岸監獄裏手		土器	2・3				
30	久良岐郡屏風浦村大字天神宮裏手台		土器・打石斧	2・3・4				磯15
31	久良岐郡屏風浦村大字森字森ノ大塚ノ東南ノ崖		打磨石斧・土器	2・3・4		森大塚付近		
32	久良岐郡屏風ヶ浦村中原		石棒	2・3・4		中原町		
33	久良岐郡杉田村八幡神社付近		土器	2・3・4				
34	久良岐郡大岡村岡村		土器・打石斧	2・3・4				磯 1
35	久良岐郡大岡村大塚ノ傍		打磨石斧・土器	2・3・4				
36	橘樹郡神川町高島山裏手付近		土器・石器	2・3・4				神69
37	橘樹郡三沢町豊顕寺近傍		土器・打石斧・3石鏃	2・3・4	豊顕寺付近			
38	橘樹郡生見尾村大字鶴見字二見台 射的場上ノ畑中電柱ノ下	貝塚		3	馬場？			鶴89
39	橘樹郡同所ヨリ一丁程神奈川ノ方ニ寄タル處電話柱 609号ノ下	貝塚		3	荒立台上			
40	橘樹郡同所付近字東台		打石斧	3	荒立台上	荒立	鶴29	鶴97
41	橘樹郡生見尾村東寺尾字鶴見蛇池ノ上	貝塚		3	三笠園内？			
42	橘樹郡生見尾村東寺尾		石鏃	3・4				
43	橘樹郡生見尾村東寺尾字原 斎藤市五郎所有畑中	貝塚	土器	3	荒立台上			鶴94
44	橘樹郡生見尾村生麦瀧坂不動上 東寺尾字カザハヤ	貝塚	土器・打石斧	3・4	風早台	風早台	鶴34	鶴107
45	橘樹郡子安村字ツクリ松	貝塚	打石斧・土器	3・4	風早台	打越		
46	橘樹郡子安村西寺尾コガイ原焼場ノ前ノ塚近傍		打石斧・土器	3・4		火葬場付近		神33
47	橘樹郡子安村稲荷山	貝塚		3・4	面瀧稲荷山	稲荷山		神77?
48	橘樹郡子安村本覆寺裏山ノ新道		打石斧・石鏃・土器	3・4				
49	足柄下郡前羽村前川近戸神社辺		土器	2・3・4				
50	足柄下郡下曽我村谷津寺前		石棒・石鏃・砥石・土器	2・3・4				
51	足柄上郡中村字井ノ口村		土器・石棒	2・3・4				
52	陶綾郡大磯町虎御石前		土器	2・3・4				
53	大住郡土沢村		土器	2・3・4				
54	大住郡金目村		土器	2・3・4				
55	大住郡関崎村		土器	2・3				
56	大住郡伊勢原町付近		土器	2・3・4				
57	大住郡大畑村		土器	2・3・4				
58	大住郡高部屋村字西富岡		土器	2・3・4				
59	大住郡秦野町小学校前		土器	2・3・4				
60	大住郡西秦野村字渋沢村		土器・石棒	2・3・4				
61	大住郡大槻村大槻天神付近		土器	2・3・4				

＊3は第3版に加えられたもの　×は未確認のもの

第4表　小林與三郎　神奈川県内発見遺跡現所在地・文献一覧表

No.	所在地	遺跡名	時期	文献
1	横浜市　中区元町1丁目（金比羅神社裏）	元町貝塚	加E・堀	栗原清一1928，石野　瑛1938・1953，岡野隆男1973，塚田明治1974
2	山手89～102(外人墓地字イジン坂)	山手貝塚	加E・堀	松下胤信1933，神奈川県史1979
3	大芝台（オオシバダイ）			
4	塚越（ツカゴシ）		関山	石野　瑛1927，酒詰仲男1934
5	寺久保（ヒナソ）	坂ノ台貝塚	堀ノ内	マンロー1908，石野　瑛1927，松下胤信1930，神奈川県史1979
6	（根岸村アラク）			
7	寺久保（サカノダイ）	坂ノ台貝塚	堀ノ内	マンロー1908，石野　瑛1927，松下胤信1930，神奈川県史1979
8	磯子区坂下町・馬場町（六地蔵坂）			
9	中区根岸旭台（競馬場ノ西側ダイバタケ）			
10	滝ノ上（カゾノダイ）	加曽台遺跡	撚糸文	石野　瑛1927，横浜市史1958
11	諏訪町・山手町（天沼）			
12	間門町1丁目（二ノ谷字オヤト）	二ノ谷貝塚		酒詰仲男1935
13	南区八幡町35付近／1付近	中村八幡貝塚		富士谷孝雄1883，酒詰仲男1938・1941
14	横浜市　西区老松町（野毛山貯水地西）			
15	宮崎町（伊勢山皇大神宮裏）	伊勢山貝塚	堀ノ内	神奈川県史1979
16	西戸部町2丁目179・190付近	池ノ坂貝塚	中～晩期	山田　惇1925，松下胤信1929・1930，石野　瑛1927・1938・1953・1955，神奈川県史1979
17	伊勢町3丁目（暗黒坂付近）			
18	西戸部町1丁目（戸部字天王山）	天王山遺跡	勝坂	石野　瑛1953
19	（戸部字ヤブシタ）			
20	藤棚町2丁目（字古井戸）			
21	御所山町か（戸部 109番地）			
22	元久保町（久保山墓地）			
23	南区三春台・庚台か			
24	保土ケ谷区岩井町か（岩間村）			
25	岩井町（岩間大原供養塚）			
26	横浜市　南区堀之内町1丁目（県警堀の内住宅近傍）	貝塚		酒詰仲男1938
27	堀之内町1丁目（貝殻畑・女坂）			酒詰仲男1938
28	磯子区丸山1丁目 （字柿ケ谷，県警堀の内住宅の前）	貝塚		酒詰仲男1938
29	滝頭1丁目か			
30	岡村2丁目（岡村天神裏）			
31	汐見台3丁目（森大塚の東南）			
32	中原1～4丁目	森町貝塚か		西村正衛1954，神奈川県史1979
33	杉田4丁目（八幡神社付近）			
34	岡村4丁目か	三殿台貝塚か		藤田清玖1899，石野　瑛1927，和島誠一1968，神奈川県史1979
35	汐見台3丁目（大岡大塚）	平台遺跡か		神奈川県史1979
36	横浜市神奈川区桐畑か	青木町貝塚か		
37	三ッ沢西町（豊顕寺付近傍）	豊顕寺付近	勝坂・加E	石野　瑛1927・1953
38	鶴見区鶴見2丁目（字二見台）	二見台貝塚か		内山九三郎1894，八幡一郎・甲野　勇1926
39	鶴見2丁目	総持寺内貝塚か	弥生	八幡一郎・甲野　勇1926，酒詰仲男1959（池谷健治教示）
40	東寺尾東台	荒立貝塚	勝坂・加E・堀ノ内	酒詰仲男・竹下次作1934，松岡六郎1937，中川直亮1938，酒詰仲男・芹沢長介1938AB，神奈川県史1979
41	（東寺尾字鶴見蛇池ノ上）	花月園内貝塚か		井上喜代治・鳥居龍蔵1893，石野　瑛1938，酒詰仲男1959
42	（東寺尾）			
43	馬場4丁目	馬場貝塚か		
44	岸谷町2丁目	風早台貝塚	稲荷台・田戸・茅山・諸磯	甲野　勇1924，神奈川県史1979
45	神奈川区子安台1丁目	打越貝塚	黒浜・諸磯	移川子之蔵・橋本増吉1925，石野　瑛1938・1953・1963
46	大口仲町・松見町1丁目か	大口台貝塚か	中期	石野　瑛1958，塚田　光1965，安藤広道・鹿島保宏・鈴木重信1992
47	大口通（面滝）	稲荷山貝塚	諸磯	石野　瑛1953，酒詰仲男1959
48	子安通1丁目（本慶寺山）			
49	小田原市前川（近戸神社辺）			
50	小田原市曽我谷津（寺前）			
51	中井町井ノ口			
52	大磯町虎御石前			
53	平塚市土沢			
54	平塚市（金目村）			
55	（大住郡関崎村）岡崎か			
56	伊勢原市伊勢原付近			
57	平塚市岡崎（大畑）			
58	伊勢原市西富岡			
59	秦野市文京町（本町小学校前）			
60	秦野市渋沢			
61	秦野市上大槻（大槻天神付近）			

第3図 小林與三郎発見遺跡分布図(1)縮尺4万分の1
(横浜市中区・西区・保土ヶ谷区，Aは稲荷山貝塚，bは中台貝塚)

ゾノダイは今の根岸加層台である。不動堂はその西側に位置する。早期の撚糸文土器が知られる（『横浜市史』1958）。この地域の遺跡や貝塚については岡野隆男1973，井上義弘・植木律之1979の再検討がある。岡野の検討は丁寧である。

中村1187番地は八幡貝塚として知られるもので，同番地は現在の八幡町35番地付近である。八幡神社は八幡町１番地にあり，丘陵の北端にあるが，35番地は内側の支丘先端に位置する。２地点に別れると思う。35番地付近（旧中村1187番地）に富士谷孝雄1883は地点を示しており，酒詰仲男は一時疑ったが（酒詰1938），富士谷の報告に基づいて再確認している（酒詰1941）。八幡神社境内で貝の散布を認めたが貝塚に起源するものかどうかは検討したい。

地名表第３版にみえる北方天沼キリン麦酒製造所構内遺跡は，山手の諏訪町北方小学校周辺にあたる。関東大震災で鶴見区へ移転するまでキリンビール工場があったところである。

本牧村二ノ谷入口右方字オヤト貝塚は詳細は不明であるが，二ノ谷は現在の間門町で間門小学校の周辺と思われる。県台帳には掲載されていたが地点は示されていない。酒詰仲男は所在地を検討し（酒詰1935），「化石貝層らし」と疑っている（酒詰1938）。石野の示した地点は岡野の検討があるように別地点である。

（２）西区周辺（第３図）

野毛山貯水地西端ノ畑（土器・黒曜石）は市遺跡地図の西区No.14であろう。野毛山大神宮裏手貝塚（打磨石斧・土器）は，伊勢山貝塚（『神奈川県史』1979）で西区No.15である。

『ものがたり西区の今昔』（西区の今昔編集委員会1973）に遺跡の所在地が検討されている。第１版の税関山と，小林の報告した第２版の戸部税関官舎付近字池ノ坂は同一で，第４版以降は整理されている。戸部監獄署構内ヨリ暗黒坂付近は池ノ坂の斜面下方に位置し，戸部監獄署は現在の神奈川県職員アパートである。地名表第２版にある大谷木耐三による戸部968番地も含まれるかもしれない。天王山は不明であるが，県市遺跡地図などでは西戸部町３丁目付近に位置するとされる。石野瑛は勝坂式土器を採集している（石野1953・1963）。『ものがたり西区の今昔』では字山王山として，池ノ坂貝塚に含ませている。西戸部町１丁目付近である。ヤブシタは藪下とも表記されるが地点不明（酒詰1938）である。これも池ノ坂貝塚に含まれるかもしれない（西区の今昔編集委員会1973）。税関西戸部分庁舎のある１丁目43番地奥と２丁目179番地付近で貝の散布をみた。池ノ坂貝塚は石野瑛が1922年に調査し，1951年に発掘しているが（石野1955），地主の長男の金子登は芸大教授でその妻は金子エリカであるという。東京教育大学で国分直一とともに文化人類学，考古学を教えていた。

古井戸は現在の藤棚町２丁目であり，西側に稲荷台貝塚がある。

久保山墓地は広大で詳細不明。太田より久保山墓地に行く左方の台塚近傍も不明であるが，南区三春台か庚台付近と思われる。

岩間村は保土ケ谷区岩間町から岩井町にかけて広がり詳細不明である。大原クヨウ塚は地点不明であるが大原は現在の岩井町内の字名であり，東海道の南側に位置することから先の岩間

第4図 小林與三郎発見遺跡分布図(2)縮尺4万分の1
(横浜市南区・磯子区)

村も岩井町内の可能性がある。

小林は，地名表第３版で池ノ坂で磨石斧を新たに加え，戸部109番地で打石斧を採集したことを報告した。戸部109番地は現在の御所山町にあり，低い段丘面に位置する。

（３）南区・磯子区周辺（第４図）

堀ノ内村（神奈川県爆発物貯蔵庫近傍）貝塚など周辺３件は，酒詰仲男の検討ではほとんど確認できず，壊滅，壊滅？，貝塚なりしや稍疑はしなどとされ現在は省略されることが多い。神奈川県爆発物貯蔵庫の位置は，現在の県警堀の内住宅であり，南区堀之内町にある。貝殻畑の地名は再確認できていないが，女坂，柿ケ谷は江戸・明治期の字名で古地図で確認できた。女坂は県警堀の内住宅の西側の堀之内町にあり，にあり，柿ケ谷は南側にあって磯子区丸山１丁目にある。犬殺の家は不明だが爆発物貯蔵庫の前に位置する。酒詰は沖積地の石鹸工場跡にて貝類と土製品・陶磁器を採集しているが塵溜に近いとする（酒詰1959）。市遺跡地図では，磯子区No.６遺跡（丸山１丁目23付近）で「破壊，（小貝塚も存在した？）」と備考に記している。また石野瑛は，その地名表に爆発物倉庫跡付近と貝殻畑をあげているが（石野1953・1963），前者はその北側にある「睦町か」としている。女坂の北側にて貝の散布を見た。

屏風浦村大字岡根岸監獄裏手は，現在の磯子区丸山２丁目にあたり，岡村３丁目から滝頭１丁目付近と思われる。天神宮裏手台は岡村２丁目の岡村天満宮の裏手の岡村公園付近であろう。磯子区No.15遺跡付近か。大字森字森の大塚の東南の崖はまだ未確認であるが後述の大岡村大塚と関連するものと思われる。

屏風ヶ浦村中原は，現在の磯子区中原であるが現在の周知の遺跡はない。３・４丁目は台地上だが，１・２丁目は低地である。北側に森貝塚があり，その可能性がある。南側に杉田貝塚がある。杉田村八幡神社付近は，杉田４丁目の杉田八幡宮を指すものと思われるが，ここも周知の遺跡はない。北側に東漸寺貝塚があり，低地の遺跡として広がりがあったのだろうか。石野は森大塚付近と中原町を地名表にあげている。

大岡村岡村であるが，大岡村には岡村はない。岡村は屏風ヶ浦村にあり，大岡村と屏風ヶ浦村との境界にある三殿台貝塚の可能性が強い。三殿台貝塚は，医者の藤田清玖1899によって発見されたとされるが同一遺跡の可能性があろう。

大岡村大塚ノ傍は現在の磯子区汐見台３丁目の汐見台団地内に位置する。『神奈川県史』1979の平台遺跡に相当するものと思われ，丘陵の最高位置にあり古墳の可能性もある。森村と隣接し，森の大塚とも関連するかもしれない。

（４）神奈川区・鶴見区周辺（第５図）

現在の三ッ沢西町の豊顕寺の裏手には市民の森や慰霊塔があって石器時代の遺跡もあってよい地形がある。石野瑛も豊顕寺付近や西南方で遺跡を確認しているが，三沢貝塚の可能性はないだろうか。神川町は神奈川町の誤りで高島山裏手付近は高島台付近であろう。桐畑の青木町貝塚の可能性もあるかもしれない。小林は地名表の第３版で豊顕寺近傍に石鏃を補足している

第5図 小林與三郎発見遺跡分布図(3)縮尺4万分の1
(横浜市神奈川区・鶴見区，Cは三ッ沢貝塚)

ので，継続的に来訪していたのであろう。

子安村から生見尾村の遺跡は第3版に登場するので，新しく確認した遺跡である。鳥居以来，多くの人が遺跡を発見していて重複もあるようである。

子安村本慶寺裏山ノ新道は，現在の遺跡地図には登録されていないし，子安通3丁目の本慶寺の裏には東海道線が走るのみで山はない。しかし，『神奈川区誌』1977によれば本慶寺の裏に現在の浅野山からつづく本慶寺山があり，初期の海岸埋め立てによって削られたという。遺跡は早くに失われており，貴重な記録であったというべきであろう。

子安村稲荷山貝塚は，石野瑛や酒詰仲男らは，面瀧稲荷山貝塚ともいい，実査して諸磯式土器を出す貝塚が確認されている。しかし現在の遺跡地図にはない。1928（昭和3）年の地図に大口駅付近に面瀧の地名があり，大口台遺跡から東南にのびる尾根の北側斜面にあった貝塚と思われる。考古学史で著名な大口貝塚も実は遺跡地図に掲載されていない。『神奈川県史』1979では大口台遺跡の東南にあったとあり，大口台遺跡からの道が坂となる大口駅に近い位置にあったものと思われる(註7)。

子安村西寺尾コガイ原焼場ノ前ノ塚近傍は，現在の松見町2丁目にある西寺尾火葬場を指すものと思われる。コガイ原，塚は未確認であるが大口台遺跡（No.33）の可能性があると思う。石野瑛は芋久保遺跡として1954年に発掘調査している（石野1958）。大口台遺跡はさらに岡本先生や塚田光によって発掘され（塚田1965），横浜市埋蔵文化財センターによって発掘されている（安藤・鹿島・鈴木1992）。石野1953では別遺跡を火葬場付近遺跡として弥生土器と磨石斧を確認している。これは神奈川区No.32遺跡をさすのであろう。

子安村ツクリ松貝塚は，鶴見区風早台貝塚と同一とみる酒詰仲男の見方もあるが，小林と石野瑛は別のものとしている。石野は子安町打越つくり松に所在する打越貝塚とし，「横浜市神奈川区子安町打越つくり松の浅野学園の運動場の西側につづく松林の中の貝塚のへりである。そこに仰臥した人骨があって，その耳のところに二枚貝をより少さなものを中にして五重ぐらいにかさねておいてあった。」と述べている（石野1963）。

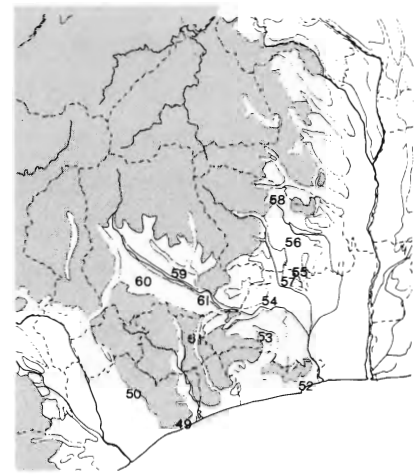
生見尾村は生麦村と鶴見村，東寺尾村が合併して1889年に成立したものである。

生麦の瀧坂不動上で東寺尾の字カザハヤで貝塚を確認している。風早台貝塚で甲野勇が1924年に山内清男と八幡一郎らとともに発掘している（甲野1924）。甲野は大里雄吉1924の発見とするが小林によるものである。また移川子之蔵と橋本増吉も子安池谷貝塚として発掘している（移川・橋本1925）が，これを石野は打越ツクリ松貝塚としている。石野瑛は打越ツクリ松貝塚は，浅野学園の西方にあるとすることから別遺跡とも考えたが，甲野勇と移川子之蔵らの報告からは酒詰仲男1938・1959がまとめられているように同一遺跡である。現在は北側（鶴見区）は生麦中学校となり，南側（神奈川区）は子安台公園となっている。中学校の周囲と公園内に広い貝塚の散布を認めることができる。甲野の調査地点は中学校の講堂となってしまったが，丘陵の縁には貝塚が広く存在する。滝坂不動は今はなかった。

第5図 横浜市とその周辺の遺跡数

（　）内は小林発見遺跡数

地名表版・年	横浜市	久良岐郡	橘樹郡	都筑郡
第1版・1897	1	3	16	3
第2版・1898	12 (11)	22 (19)	35 (4)	9
第3版・1901	14 (13)	24 (20)	49 (15)	10
第4版・1917	39 (33)	7 (3)	46 (5)	16



第6図 小林與三郎発見分布図(4)
（神奈川県相模地域）

東寺尾字原の斎藤市五郎の所有する畑中に貝塚を確認している。東寺尾村の字原は確認できない。これを酒詰は荒立（台上）貝塚と同一視しているが，昭和5年頃の横浜市土地宝典によれば斎藤市五郎の所有する畑は馬場4丁目の宝蔵院の周辺に多く集中し，鶴見区No.94遺跡の周辺と思われる。ただ地名との関連を検討する必要がある。

大字鶴見字二見台射的場上ノ畑中電柱ノ下貝塚は，酒詰仲男は馬場（北）貝塚にあてているが地点は確認できなかったようである。遺跡地図にもないが，鶴見字二見台，現在の鶴見2丁目付近に考えたい。馬場町には帝国猟友会射的場があったようだ。同所ヨリ一丁程神奈川ノ方ニ寄タル處電話柱 609号ノ下貝塚については，酒詰は荒立（台上）貝塚にあてているが，二見台から100m以上あり違うものと思われる。

荒立貝塚は東寺尾東台に位置する。小林の指摘した同所付近字東台は荒立貝塚の一部と思われる。第二国道建設によって破壊されたが，その直前に多くの人が発掘している。中川直亮1938，酒詰仲男・芹沢長介1938らが発掘し，松岡六郎1937の東寺尾貝塚も本貝塚である。

東寺尾字鶴見蛇池ノ上貝塚も難しい。東寺尾と鶴見は大字が異なり，その境界付近と思われるが蛇池が見つからない。酒詰は鶴見町東台と生麦町岸との境の鶴見三笠園内貝塚と推定したようであるが，貝塚本体を確認したのではない（註8）。三笠園内には房野池があったという。蛇池は『鶴見区史』1982の明治15年の農業用水溜池分布図にもない。現在の鶴見総持寺境内に含まれた成願寺三ッ池か，東福寺仁王門の奥にあった小池の可能性が強い。小池は花月園内のスワン池となった。総持寺の背後には貝塚があったという（八幡・甲野1926）。石野瑛は花月園内にも貝塚があったとするが詳細は不明である（石野1938）（註9）。酒詰仲男はこれを検討したが再確認できなかったようである（酒詰1959）。小林は東寺尾で石鏃を採集しているが，これは手がかりが少なく地点は不明である。地名表の第4版では，鶴見区関係の小林の発見した遺跡の多くは整理され，抹消されているができるだけ復元したいものである。

地名表の第1版から第4版までの横浜市とその周辺の遺跡数は第5表のようにまとまった。初期における小林與三郎の役割は重要であった。

4．まとめ

小林與三郎の人物像は，まだ解らないことだらけである。沼田頼輔のいう「斯学篤志の人」，「釜山郵便局」に勤めたことが判明した。恐らく同僚後輩の新居勝三郎を人類学会に紹介して本人は退会してしまったものと思われる。故郷に錦を飾ることもなく，韓国の地に没したのかもしれない。

しかし，1897年から99年にかけての3年間の活躍は眼に余るものがある。横浜だけでなく，神奈川県西部も平塚，伊勢原，秦野，小田原，中井，大磯の4市2町にて遺跡を発見している（第2表，第6図）。東京にもたびたび出掛けているようであり，全国に出張して奈良・石川・長野・静岡・埼玉・千葉・山形・青森の10都県で百余りの遺跡を発見しているのである。その行動力の源はなんだったのであろうか。大学，おそらくは東大出の逓信関係の官僚であったのだろうか。

年令も没年もまだ確認できない。栃木県での発見遺跡は宇都宮市北郊に集中しているので，その周辺（旧豊郷村か）の人であったと思われる。日清戦争の始まった1894年に4ケ月もかけて栃木県野沢遺跡の発掘を行なっていることは，好奇心溢れる若者を想起させる。しかし，1897年から1899年の3年間に4回も人類学会で研究発表を行なっているのは，やや年長者であると思われる。自分で論文をまとめることはなかったが，土器や石器など遺跡を見つけることは得意であったようだ。杉田八幡宮，豊顕寺，岡村天満宮などは当時の名勝地，行楽地であり，行楽の途次に遺跡を見つけたことも多かったに違いない。

その斯学篤志の人も韓国に移っては，行動力をほとんど示さなかったが，八木奘三郎の探険を助け，後輩を育てていた。このことは日本考古学史の重要なひとこまである。日本考古学，日本国の歴史において韓国，アジアを明確に対象化して位置づけておくことは今の世の中において欠くべかざるものであるが，郵便史の研究において見るものがあることを発見したのは今回の収穫であった（水原1993，藪内2000）。

小林與三郎の発見した48遺跡は，横浜の考古学の基礎となった。これ以後マンローの調査や，1920年代以後の石野瑛や谷川（大場）磐雄らの武相考古会（『武相研究』刊行）や，1930年代の池田健夫，斎藤房太郎，松下胤信，池谷健治らの横浜考古学研究会（『丘の上』刊行）らの調査研究が積み上げられていく。しかし，現在の横浜の考古学においてこれらの認識はきわめて弱いものでしかない。岡本勇先生の考古学史研究をさらに発展させたい。 100年の考古学史をその最初期にさかのぼって追体験することによって，赤星直忠の生誕 100周年となる2002年を「神奈川考古学赤星年」とする事業に備えたい。

神奈川県下の貝塚については，岡本勇先生のもとに参集した貝塚研究グループによる再確認の調査が進んでいると聞いていたが，その成果はまだ公表されていない。しかし，今再び，川口徳治朗氏を中心とする「神奈川の貝塚に学ぶ会」によって県下の貝塚の再調査，巡検が進ん

でいる。酒詰仲男の仕事，和島誠一，岡本勇先生らの『横浜市史』に見るように，考古学は歩かねばならない，歩けオロジーといわれる由縁である。

註

(1) 陸奥のうちに東津軽郡文栗坂がある。これは野内村久栗坂と第4版にて訂正される。私は大学生の時，1967年9月に江坂先生の発掘に参加した。大森（縄文）時代後期の甕棺再葬墓の遺跡として著名であり（喜田1934），石棺墓群を発掘した。

喜田貞吉　1934　「青森県出土の洗骨入土器」『歴史地理』63-6

江坂輝彌　1967　「青森県久栗坂山野峠遺跡」『考古学ジャーナル』13

(2) 1910（明治43）年11月1日の『朝鮮総督府通信官署職員録』に新居勝三郎の名を見いだすことができた。京城郵便局（京畿道京城本町1丁目）工務掛，龍山駐在　通信技手4級　新居勝三郎とあり，京城桜田町1丁目の龍山郵便局においても同様の記載があった。

(3) 稲荷山貝塚は，富士塚，藤塚貝塚とも呼ばれ，1883（明治16）年9月の『学芸志林』 に富士谷孝雄（東京大学助教授）よる「中村穴居考」に初めて示され，著者不明の1886の『東京人類学会報告』の記事に引用される。坪井正五郎と白井光太郎は富士谷に教授されて，中村の横穴や貝塚を調査した（白井1932)。この後，井上・鳥居の調査記録となり（井上・鳥居1893)，池田健夫らの横浜考古学研究会によって発掘された（池田他1935)。戦後は米軍接収地となったため所在が確認できなかったが，大雨によって崖面が崩落して所在が判明し，かながわ考古学財団が2000年に発掘調査し，見学することができた。感謝申し上げます。『南区の歴史』1976でも藤塚の位置を確認できる。

なお，富士谷以前の横浜の考古学調査として，Ｊ．ミルンの採集と博物局の大橋某による確認があったことを白井は指摘している。1879（明治12）年のことである。ミルンは坪井のコロボックル説に対してアイヌ説を述べて学史に登場する。大橋による採集品は，今も東京国立博物館に保管されている（東京国立博物館　1956 『収蔵品目録（考古，土俗他』)。

(4) 酒詰仲男1935は，「オヤトは，マカド（間門）の誤植であろう」とするが，出典を坪井正五郎1888とすることにおいて間違っていた。小林の地名表記事が原典である。平台貝塚は岡野隆男らによって1965年に発掘され（岡野1973)，1985年に横浜市埋蔵文化財調査委員会（平子・橋本1986)，1992年に神奈川県立埋蔵文化財センターによって発掘されている（伊丹1993)。

(5) 1932年に刊行された『横浜市史稿』神社・教会編では，市内の金刀比羅神社は中区真金町1丁目3番地と，中区新山下町3丁目5番地の5に所在する。本牧町天徳寺708番地には琴平神社がある。真金町の金刀比羅神社は安政6年に金毘羅大権現として港崎町に祀られ，以後吉原町，高島町に移転し，真金町に明治15年に移転したという。新山下町の金刀比羅神社は弘化4年に堺町の南の方に祀られ，太田町6丁目，尾上町2丁目（旧緑町)，伊勢山（宮崎町63番地）に移転し，昭和3年に新山下町に移転したという。また外人墓地の隣接地にあった増徳院の境内隣接地にも神社があったが，これは弁天様であった。今，平楽の丘陵上に移転した増徳院のご住職，藤井義章氏から教示を受けた。感謝申し上げます。

1860（万延元）年3月に五雲亭貞秀の描いた「東海道名所之内　横浜風景」に増徳院に隣接して弁財天，金毘羅が描かれている（本牧のあゆみ研究会　1986　『本牧のあゆみ』所収)。川口徳治朗氏は，以前において金比羅神社を確認している。ご教示感謝いたします。

(6) 白井光太郎は，坪井正五郎とともに1883（明治16）年8月に中村字道場の横穴を調査しているが，富

士塚（稲荷山）貝塚も確認し，さらに「字馬場に開墾地あり」，石斧を得たという（白井1932)。これは磯子区馬場町にかかわる開墾地が台地上にあったことを示している。

(7) 学史上著名な大口坂貝塚の位置については，『横浜市文化財地図』1992にも掲載されていないが，安藤ら1992の『大口台遺跡』にはその西南に位置を示してある。これは酒詰仲男1938や石野瑛1953・1963のいう「大口920番地」に基づくのかもしれない。しかし酒詰仲男1959では，920番地は大口仲町貝塚としており，大口坂貝塚とは別としているので違うものと思われる。地形的にも一致しない。

(8) 岸谷公園の谷の東側斜面にある階段道の北側で貝の散布をみた。石野•酒詰の三笠園内貝塚と思われる。

(9) 井上・鳥居1893に東福寺仁王門付近に貝殻の散布していることを指摘している。

文献

阿部正功　1893 「貝塚土器塚。横穴。所在地名表」『東京人類学会雑誌』90

池田健夫・斎藤房太郎・佐藤陽之助　1935 「神奈川県横浜市中区中村町稲荷山貝塚発掘調査概報」『史前学雑誌』7-1

石野　瑛　1927 『横浜近郊文化史』

石野　瑛　1938 『武相史蹟名勝総覧　横浜市』

石野　瑛　1953 『神奈川県大観』１横浜・川崎

石野　瑛　1955 「神奈川県横浜市池ノ坂貝塚」『日本考古学年報』３

石野　瑛　1958 「神奈川県横浜市芋久保貝塚」『日本考古学年報』７

石野　瑛　1963 『神奈川県史概説』始原より平安時代

伊丹　徹　1993 『平台貝塚』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告28

井上喜久治・鳥居龍蔵　1893 「梅沢，横浜，貝塚探見記」『東京人類学会雑誌』83

井上喜久治・鳥居龍蔵　1893 「鶴見川沿岸貝塚探見の記」『東京人類学会雑誌』88

井上義弘・植木律之　1979 「埋蔵文化財」『新本牧地区文化財等事前調査報告書』中区郷土研究会

内山九三郎　1894 「玉川沿岸の貝塚（摘要)」『東京人類学会雑誌』94

移川子之蔵・橋本増吉　1925 「子安池谷貝塚発掘及び人骨出土状態概報」『史学』4-4

大里雄吉　1924 「東京市及び其付近に於ける石器時代遺物新発見地名表（東大地名表補遺)」『歴史地理』43-2

岡野隆男　1973 『平台貝塚』

岡本　勇　1985 「明治時代神奈川県下考古学研究の先駆者たち」『神奈川地域史研究』２

岡本　勇　1992 「かながわの考古学をきずいた人たち」『考古論叢神奈河』１

岡本孝之　1975 「日本＝東亜（朝鮮）考古学批判（１)」『異貌』３

岡本孝之　1999 「考古学研究のあゆみ」『平塚市史』11上　別編考古(1)

栗原清一　1928 『横浜の史蹟と名勝』横浜叢書第一編

甲野　勇　1924 「武蔵国橘樹郡生見尾村貝塚発掘報告」『人類学雑誌』39-4・5・6

小林與三郎・沼田頼輔　1900 「下野国河内郡野沢発見の土器に就て」『東京人類学会雑誌』15-166

斎藤　忠　1977 「栃木県考古学史の一断面－明治時代の考古学」『栃木県史研究』14

斎藤　忠　1990 『日本考古学史の展開』日本考古学研究３

斎藤　忠　2000 『郷土の好古家・考古学者たち（東日本編)』

酒詰仲男　1934 「横浜市根岸町競馬場付近発見の貝紋土器片」『史前学雑誌』6-4

酒詰（土岐）仲男・竹下次作　1934 「神奈川県鶴見付近の諸貝塚」『史前学雑誌』6-5

酒詰（土岐）仲男　1935 「神奈川県下に於ける性質不明の二貝塚(?) に就いて」『史前学雑誌』7-6
酒詰仲男　1938 「神奈川県下貝塚調査概報(1)～(3)－「貝塚遺跡による古代集落の研究」の一部」『人類学雑誌』53-1・2・3
酒詰仲男・芹沢長介　1938 「横浜市鶴見区荒立台上貝塚に於ける住居跡の発掘」『考古学雑誌』28-1
酒詰仲男・芹沢長介　1938 「横浜市鶴見区荒立（台上）貝塚発見文化遺物に就いて」『考古学雑誌』28-2
酒詰仲男　1941 「横浜市中村八幡社近傍貝塚の再発見」『民族文化』2-7
酒詰仲男　1959 『日本貝塚地名表』
酒詰仲男　1967 『貝塚に学ぶ』
白井光太郎　1932 「武蔵国久良郡石川中村穴居記」『ドルメン』6（9月号）
杉原荘介　1936 「下野・野沢遺跡及び陸前・桝形囲貝塚出土の弥生式土器の位置に就いて」『考古学』7-8
坪井正五郎　1888 「貝塚とは何で有るか」『東京人類学会雑誌』29
塚田明治　1974 「横浜市中区元町貝塚の現状調査」『横須賀考古学会年報』17
中川直亮　1938 「横浜市鶴見区荒立に於ける遺跡」『史前学雑誌』10-1
西村正衛　1954 「横浜市屏風ケ浦森町貝塚」『日本考古学年報』2
藤田清玑　1899 「武蔵国久良岐郡屏風ヶ浦岡村貝塚発見報告」『東京人類学会雑誌』14-158
富士谷孝雄　1883 「中村穴居考」『学芸志林』13
松岡六郎　1937 「武蔵東寺尾貝塚」『考古学雑誌』27-12
松下胤信　1929 「帷子渓谷の石器時代遺物発見地名表」『史前学雑誌』1-5
松下胤信　1930 「横浜市中区根岸町ヒナソ貝塚出土の土偶と曲玉」『史前学雑誌』2-5
松下胤信　1930 「武蔵大岡・帷子両渓谷に於ける二三の貝塚」『人類学雑誌』45-12
松下胤信　1933 「横浜市中区山手貝塚調査概報」『史前学雑誌』5-2
水原明窓　1993 『朝鮮近代郵便史1884-1905』財団法人日本郵趣協会
八幡一郎・甲野　勇　1926 「武蔵国鶴見町二見台の遺跡に就て」『人類学雑誌』41-1
藪内吉彦　2000 『日本郵便発達史』
山田　惇　1925 「横浜市池ノ谷貝塚追想記」『武相研究』2-1 （未見）
山内清男　1932 「下野国河内郡国本村野沢の土器」『史前学雑誌』4-1
吉田文俊　1905 「石器時代遺物発見地名表（続き）」『東京人類学会雑誌』229
著者不明　1886 「横浜富士塚貝塚」『東京人類学会報告』10
磯子区制50周年記念事業委員会　1978 『磯子の史話』
神奈川区誌編さん刊行実行委員会　1977 『神奈川区誌』
神奈川県（赤星直忠・岡本　勇）　1979 『神奈川県史』資料編20考古資料
神奈川県教育委員会　1971 『神奈川県埋蔵文化財遺跡地図』第2版
鶴見区史編集委員会　1982 『鶴見区史』
中区制50周年記念事業実行委員会　1985 『横浜　中区史』
西区の今昔編集委員会　1973 『ものがたり西区の今昔』
南区の歴史発刊実行委員会　1976 『南区の歴史』
横浜市（和島誠一・岡本　勇）　1958 『横浜市史』1
横浜市教育委員会　1992 『横浜市文化財地図』
横浜西区史編集委員会　1995 『横浜西区史』

執筆者紹介　江　坂　輝　彌　（慶応義塾大学名誉教授）
武　井　則　道　（財団法人　横浜市ふるさと歴史財団）
野　内　秀　明　（横須賀市教育委員会）
中　村　　勉　（赤坂遺跡調査団）
岡　本　孝　之　（慶応義塾大学SFC研究所）

目次英訳　近　藤　英　夫　（東海大学文学部教授）

特別編集委員　武井則道・野内秀明

編　　集　大塚眞弘・岡本孝之・川口徳治朗・鈴木重信

考古論叢　神奈河　第9集

平成13年2月26日　印刷
平成13年2月28日　発行
編集・発行　神奈川県考古学会
事　務　局　東海大学文学部考古学研究室内
〒259-1207　平塚市北金目1117
郵便振替　00240—9—71208
神奈川県考古学会
印　　刷　文昭堂印刷株式会社
〒212-0016　川崎市幸区南幸町3-20
電話　044—533—2121（代表）

KOKO-RONSO KANAGAWA

vol.9

Memorial Number of Isamu OKAMOTO

CONTENTS

Teruya ESAKA — Reminiscence of Isamu Okamoto, contribution to archaeology

Memories Isamu OKAMOTO
- Life history
- Bibliography
- List of lectures
- List of archaeological researches

Selected Articles of Isamu OKAMOTO
- Tools and implements of Jomon culture
- On Jomon settlements
- Burial patterns and customs of Jomon culture

Norimichi TAKEI OKAMOTO sensei's Research work on Jomon culture

Articles

Hideaki YANAI — On the variability of late Jokonmon pottery—Kayama-kasou type and Kayama-joso type and other surrounding types—

Tutomu NAKAMURA — Implication and importance of Polished stone dagger of Eastern part of Japan ; examples from Akasaka site, Miura-city

Takayuki OKAMOTO — Dawn of Yokohama Archaeology—Yosaburo Kobayashi, grass-root archaeologist of hundred years ago

2001.2